

Title	ブラジルに帰国した人々の教育戦略とその帰結に関する研究：トランスナショナルな社会空間を生きる親と子どもの生活史から
Author(s)	山本, 晃輔
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56024
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

博士論文

ブラジルに帰国した人々の教育戦略とその帰結に関する研究
—トランスナショナルな社会空間を生きる親と子どもの生活史から—

教育文化学研究室

山本 晃輔

序章.....	1
1. 問題意識	1
2. 本研究の構成	4
1章 国際移動と日系ブラジル人の教育に関する研究	7
1. はじめに	7
2. 国際的な人々の移動とトランスナショナリズム	7
3. 日本における在日外国人と教育社会学研究の動向	12
4. 我が国における日系ブラジル人と教育研究	15
5. 本研究の課題	18
(1) 移民2世という視点	18
(2) 日系ブラジル人の親の教育戦略を再考する視点	20
(3) 往還する人々という視点	23
(4) 本研究の課題	26
(5) 本研究で扱うデータと研究手法	28
2章 日本とブラジルを往還する人々の歴史	34
1. はじめに	34
2. 日本からブラジルへの移動—日系ブラジル人の前史（1908年～1970年）	34
3. ブラジルから日本への移動—移動システムの史的変遷（1970年～2008年）	41
(1) 入管法改正以前（1970年～88年）	41
(2) 入管法改正後（1989年～2003年）	43
(3) 労働者派遣法改正と定住化（2004年～2008年）	44
4. 再びブラジルへ—リーマン・ショック以後（2009年～）	45
5. おわりに	49
3章 日本からブラジルへの移動を支える教育—ブラジル人学校の事例から	51
1. はじめに	51
2. ブラジル人学校の位置づけとその役割	52
(1) 定住化とブラジル人学校	52
(2) 流動性とブラジル人学校	53
3. 日本におけるブラジル人学校の位置づけ	54
4. EAS 浜松校の概要	56
(1) 沿革	56
(2) 受け入れの現状とカリキュラム	57
5. 日本にブラジル人のための「学校」をつくる	58
6. 「移動」に対応するための幅広く質のよい教育の提供	60

7. 「移動」を見据えた進路指導	64
8. おわりに	67
4章 帰国した日系ブラジル人と家族の教育戦略	68
1. はじめに	68
2. ブラジルに帰国した日系ブラジル人家族の基本的性格—経済的要因と再出発の物語	69
3. 日系ブラジル人家族の教育戦略の特徴	72
(1)家庭での母語使用・文化伝達—積極的な母語使用・文化伝達	73
(2)学校観・学校との関わり—帰国を念頭に学校を選択する	76
(3)帰国のための環境整備と親族ネットワークの利用	77
4. デカセギ型の親はなぜ計画性を必要とするのか—不安定な社会的地位と戦略	78
5. おわりに	86
5章 帰国した子どもたちの生活	88
1. はじめに	88
2. 不適應の連鎖	89
3. 帰国後の適應の難しさ	91
4. 帰国がもたらした進学	95
5. ブラジル帰国後の高い教育達成	97
6. おわりに—ブラジルにおける生活を意味づける子どもたち	102
6章 帰国した子どもたちの進路選択とその要因	107
1.はじめに	107
2 ブラジルへ渡った子どもたちの進路選択	107
3. 日本との「切断」の語り	109
4. 日本との「接続」の語り	112
5. 移動をめぐる2つの物語と子どもたちの生存戦術	115
6. おわりに	121
7章 日本と「接続」する子どもたちのトランスナショナルな生存戦術	123
1. はじめに	123
2. ブラジルの片田舎での生活	124
3. 日本との繋がりを維持する意味	128
4. トランスナショナルな空間での繋がりと子どもたち	132
(1) サブカルチャーの同時的受容	133
(2) ネットワーク上の空間を通じた「居場所」づくり	137
5.変わりゆく移動の物語	142
6. おわりに	145

終章.....	149
参考文献.....	160

序章

本研究は、日本からブラジルに帰国した親の教育戦略と子どもたちの教育達成を明らかにすることが目的である。具体的には、人類学や社会学で蓄積されているトランスナショナルリズム研究を援用することから、グローバリゼーションを背景とし、急速に拡大する人々の「国際移動と教育」の今日的な課題に迫りたい。

本研究ではブラジルで収集した生活史データを検討の材料とする。人々の生活史を分析の対象とするのは、国際移動が親と子どもの生活に全面的な影響を与えるからである。特に、学齢期を日本とブラジルで生活することになった子どもたちを分析の対象とすることで、ブラジル帰国後の生活や進学上の課題を検討する。その狙いは、国際移動が生じさせる様々な課題を子どもたちがどのように受け止め、いかに乗り越えようとしているかを明らかにすることである。

1. 問題意識

我が国の教育行政において「グローバル」を枕詞とする施策が導入されつつある。インターナショナル・バカロレアに代表される国際的なディプロマの模索、小学校段階からの英語教育の導入、大学生の海外留学を推奨する文科省の「トビタテ！留学 JAPAN」プログラムなど、いわゆる「グローバル化教育」が推し進められている。その是非はともかく、これらの政策は、教育を自国のものだけでなく諸外国との結びつきのなかで考える必要性の高まりを示唆している。

他方で、日本国内の「外国人」を対象とする教育は様々な課題が山積している。とりわけ、日本のナショナルカリキュラムが、日本人教師による日本人児童・生徒のみを対象としたものであること、すなわち「国民国家」を前提にカリキュラム編成されていることは、激しく批判されている。そして、それは戦後の在日コリアン教育においても、1989年の入管法改正以降の「ニューカマー外国人」を対象にした教育研究においても議論され続けてきた。様々な国と地域にルーツをもつ人々を対象とする教育研究は、自明視されがちな「日本人を対象とする日本の教育」という単一民族主義的な教育観・教育行政を批判してきたのである。

ところが、日本における批判的教育研究は、半世紀以上の蓄積があるにも関わらず「自国に定住する外国人研究」に留まっている。グローバリゼーションを念頭とする教育政策においても、「自国民の海外進出」や「外国人留学生・人材の受け入れ」という点に注目が集まっているように、わが国においてグローバリゼーションとは「送り出し」か「受け入れ」といった単線的なものとして捉えられがちである。もちろん、受け入れた人々への処遇が国内問題として浮かび上がるのも自然なことであろう。こうした研究の重要性は言うまでもないことであるが、グローバリゼーションという社会変動を前にした時、「定住論」だけではない論点も浮かび上がる。「定住論」では捉えきれない問題、すなわち人々の国際的な往来である。

すでに2億人以上の人々が出身国以外で生活しているとされ、例えばOECD諸国への移民流入数は1960年頃に比べて3倍を数え、昨今の世界的な経済不況にあっても移民は世界中でみられる(キーリー 2010)。国際企業の躍進や航空網の整備、労働力の国際的な拡散などを背景とし、これまで以上に複雑で多岐にわたる人々の移動がみられるようになった。移民の流出入に関わる政策整備と権利保障は世界共通の課題となり、国連は2003年に「国際移動問題に関する世界委員会(GCIM)」を設置し、その啓発を進めてきた(GCIM 2005)。

世界的な動向に応答し、日本においても移民についての議論されるようになった。1997年に国立社会保障・人口問題研究所の人口推計を背景とし、1999年には経済企画庁で移民労働力の更なる受け入れが議論され、2001年には日経連がこれを追従した報告を行った。最近では、2008年、経団連が発表した「人口減少に対応した経済社会のあり方」では、今後の少子高齢化社会における労働力確保のために、移民政策の導入が必要であると明記されている¹。

こうした移民政策に関する議論は、日本においては古くからある問題である。我が国においても、本研究で取り上げる日系ブラジル人は、ブラジルに渡った日本移民をルーツとしている。1908年に日本からブラジルへと渡った日本移民は、生活の糧を求めた「出稼ぎ」である。そして、ブラジル日本移民は日本国内の不景気を背景とした政治主導の官製移民であった。日本移民らは、ブラジルで農業労働をおこなった後に、日本へ帰国、「故郷に錦を飾る」ことを目的としていた。ブラジル日本移民は日本国内の「人口問題」解消のための手立てであり、経済的成功を求めた「経済移民」でもある。

第二次世界大戦を挟み、多くの日本移民がブラジルでの永住を選択するようになる。永住を決めたことで、その子どもたちはブラジル国籍を取得し、ブラジルの教育をうけるようになった。そして日本移民の2世、3世は日本人と呼ばれるのではなく、日系ブラジル人(Nikkei)と呼ばれるようになる。戦後日本では国際協力機構(JICA)の前身となる海外移住事業団が1963年に設置されているが、主要な事業のひとつに戦後日本の人口過剰問題の解消のための南米向け移民の送り出しがあった。

その後、1980年頃からブラジルの不況と日本の好景気をうけ、今度はブラジルから日本人・ブラジル人・日系ブラジル人が「デカセギ」として日本へ渡った。1989年に改正された入管法は「定住ビザ」を新設した。日本移民の末裔であれば、ほぼ無制限に就労ができるなど特例的な処遇が設定されているが、これは官製移民失敗を反省し南米の日本移民への便宜を図る目的というよりも、日本におけるブルーカラー労働者の代替労働力の受容の高まりから設定されたものである。こうして振り返ると、日本における移民政策は新しい問題というよりも、古くから議論され続けてきた課題である。

それでも日本における移民問題は、移民を受け入れ続けてきた欧米諸国に比べれば、サブテーマに過ぎなかった。欧米では移民問題が与えるインパクトは日増しに大きなものとなっており、近年目まぐるしい動きをみせているのが移民の「政治問題化」である。例えば、フ

¹ 2章で扱うように、日本における移民政策は常に「人口問題」と隣合わせであった。戦前は人口過剰が課題となり、いわゆる外地への移民送り出しが課題であった。そして近年では、人

ランスでのイスラム系住民によるテロ行為とその反動は、移民の社会的統合の難しさを鮮明なものとした（宮島 2008）。オーストラリアやカナダに代表される多文化主義政策が注目される一方で、移民を取り巻く厳しい状況は、多文化主義への「バックラッシュ」を引き起こしているという指摘もある（Vertvec and Wessendorf 2010）。

多様なバックグラウンドを有する人々を受け入れることの難しさとその重要性が「多文化主義」という思想や政治的な潮流を形作ってきた歴史がある一方で（例えば テイラー他 1996）、最近では経済的な失調やテロリズムへの恐怖が、各国で保守政党の躍進を後押しする状況にある。これは他国だけの問題ではなく、日本においても「ヘイトスピーチ」など外国人の排斥が「運動化」するに至っている。移民をめぐる政治的な動きが活発化するのには、移民が国家の枠組みや人々の生活を揺さぶるインパクトを有しているからであるが、欧米はもとより日本でも移民の社会的なインパクトは大きなものとなっている。

もちろん、我が国におけるニューカマー外国人としての「日系ブラジル人」の流入とその帰国は、旧来の日本移民と同じ枠組みで捉えることはできない。オールドカマー外国人の処遇は戦後一貫して課題となってきた。ニューカマー外国人もその延長線上で「定住外国人」として位置づけられてきた（例えば 駒井編 1995）。実際、90年代を通して在留外国人は増加し続けてきたことも外国人の定住論の重要性を際立たせている。ここに歴史的な観点やグローバリゼーションを背景とする人々の移動を踏まえたとき、日本とブラジル間における日本人・日系人・ブラジル人の移動は100年にわたり続いてきたことが浮かび上がる。移民とは歴史的な研究対象であるとともに、現代的な視点をもって分析する必要があるとすれば、日本とブラジル間での人々の往来は、日本における国家間移動の重要なモデルケースとして捉えることも出来よう。

そして、本研究が注目するのは人々の国家間の往来と次世代への教育である。ブラジルの日本移民がそうであったように、見知らぬ新しい土地において移民は生きていくためになんらかの努力を行う。人類学者の前山（1982）は、ブラジルにおける日本移民の研究を通じて「虐げられた存在」として捉えられがちな移民らが、折々の状況にあわせて多彩な「ストラテジー（戦略）」を構想し、苦難を乗り越えようとする姿を描いている。これは、移民を歴史的・政治的・経済的な状況によって規定される人々として描きがちな「プッシュアップ理論」などの移民理論を相対化する視点を提供するものである。移民らは移住国で無策のまま生活・定住するわけでもなければ、無策に国家間を移動するわけではない。こうした観点から現代の移民の生活に目を向けたとき、その有用性や有効性はともかく、移民らは国境や文化圏を跨ぐことの困難になんらかの「戦略」を用意するものである。とりわけ、次世代の教育においては、定住する人々とおなじくあるいはそれ以上に、移動する人々はなんらかの戦略を必要とする。

そこで本研究では、ブラジルに帰国した日系ブラジル人の親と子に注目し、将来の生活や苦難に対峙する際に行使される「戦略」や「戦術」を析出する。日系ブラジル人の社会状況や政治性・歴史性に目配りをしながら、「国際移動と教育」の困難だけを浮き彫りにする

のではなく、困難を生きぬく親や子どもの主体的な生き様を描き出したい。前山の議論が移民研究を相対化するものとすれば、本研究は日本のニューカマー研究や移民と教育研究を相対化するための視座を提示する²。

2. 本研究の構成

ここで、本研究の構成に触れておく。全体像に関しては図 1-1 に表した。1 章では、本研究の課題を明らかにする。そのために、欧米を中心とするグローバリゼーション論やトランスナショナリズム研究を概観することで、現代的な移民の特徴について探る。また、我が国において、「移動と教育」研究の必要性を考えるために日本の外国人と教育研究についても整理する。併せて、日系ブラジル人と教育研究についても概観する。

2 章では、日系ブラジル人がどのような理由で日本へと渡り、ブラジルへと戻ることになったのかを、ブラジル日本移民の歴史をたどることから検討する。出発点をブラジル日本移民としたのも、世代を超えて日本からブラジル、ブラジルから日本、そして再びブラジルへ人々が移動していることが浮かび上がる。こうした歴史を振り返ることから、ニューカマー外国人を「ニューカマー外国人」「定住外国人」というだけでなく、流動的な人々、移動する人々として捉える必要性を明らかにする。

3 章では日本からブラジルへの移動を支える教育機関として「ブラジル人学校」に注目する。これまで、日系ブラジル人に関する研究の多くは日本の公立学校に関する研究が多かった。ブラジル人学校を扱った研究も、日本での役割を問うものが多い。しかし本研究を通じて検討するように、ブラジル人学校は日本で生活するだけでなくブラジルに帰国するための教育を提供している。それは拝野（2010）が指摘するような、日系ブラジル人の「移動」を支える教育である。ここでいう「移動」とはブラジルへの移動もあれば、本格的に日本社会へ参入するという意味でもある。そこで本研究では、浜松にあるブラジル人学校での調査データをもとに、「移動と教育」がどのように行われているのかを検討したい。こうした議論を行うのも、4 章以降では日系ブラジル人の親が「移動」を念頭に構築する教育戦略がブラジル人学校によって支えられているからである。

4 章では、帰国した日系ブラジル人の家族の教育戦略を明らかにする。志水・清水（2001）

² なお本研究では日本からブラジルへの「帰国」という言葉を主に使用している。ここにはいくつかの例外も存在する。例えば日本生まれの子どもたちからすれば、日本からブラジルへの移動は「帰国」とは言えないことがある。ただし、親の帰国に合わせてブラジルに渡ることを、子どもたちは「帰国」と表現することもある。「帰国」という言葉が持つ象徴的な意味は様々で、そもそも論を持ち出すならば日系ブラジル人の日本へのデカセギも「帰国」と呼べるものかもしれない。これをデカセギと呼ぶのはあくまで渡日が短期的な取り組みであると想定されていたからであろう。逆に、「帰国」というのは生活拠点全体の移動である。様々な事例が想定されるが、基本的には日本からブラジルへの「帰国」と表現し、こうした特段の意味や情感を排するときには「移動」を使用する。また子どもたちが日本からブラジルへの移動することを「帰国」と表現するときには「日本への帰国」と記述した。

の研究は、日本の公立学校に通わせる親を対象に、その教育戦略を明らかにした。先述したように、こうした初期ニューカマー研究は外国人の「定住」を基本的な研究課題においている。しかし実際の日系ブラジル人は流動性の高い人々であり、日本とブラジルの間を移動しながら生活する人々である。だとすれば、「定住」を念頭としない教育戦略も存在するはずである。、ブラジルに帰国した人々のデータを分析することを通じて、日系ブラジル人の親が「移動を念頭とする教育」を行っていることを明らかにしたい。

5章では、帰国した子どもたちの生活史データを記載することで、ブラジルでの生活世界に迫りたい。「移動することによって苦勞する子どもたち」というだけでなく、親から与えられた資源を援用しながら、ブラジルでの生活を物語化することで意味付け、生き抜こうとする子どもたちの姿を描く。こうした議論が必要となるのも、親が「移動を念頭とする教育」を行ったとしても、ブラジルへの移動を意味づけられない子どもたちにとっては、ブラジルでの生活が苦悩に満ちたものとして語られがちだからである。他方で、日本での生活が苦しかったと語る子どもたちにとっては、ブラジル文化への馴染みのなさやポルトガル語といった文化的な障壁があるとしても、ブラジルでの生活に積極的な意味を見出していくことがある。一般的に、移民の文化適応の成否は言語的能力やハビトゥスが課題であると語られているが、本章では言語能力やハビトゥスを通じて子どもたちが形成する「移動の物語」も移民の文化適応の成否を左右する要素であることを示す。

6章では、5章で検討した、子どもたちの「移動の物語」を分析することから帰国後の進路選択とその要因について検討する。ここでいう「進路選択」とはブラジルでの学校進学だけでなく、日本への再移動と就職といった幅広い子どもたちの選択を内包する。昨今の技術革新を背景とし、子どもたちはブラジルにいながら日本の情報を得ることができる。さらに子どもたちは「望めば日本に行ける」状況にある。したがって「移動の物語」は日本に繋がった「接続」の物語と、ブラジルで生活することを念頭とする「切断」の物語に分化していく。こうした物語の分化に決定的な影響をあたえるのが子どもたちの「進路選択」である。ブラジルへの「移動の物語」に大きな影響を与えていることを検討する。

7章では、パラナ州アサイ町という小さな田舎町に帰国した子どもたちを事例に、日本と繋がりが続ける子どもたちの「トランスナショナルな生存戦略」を示す。6章で検討したように、一部の子どもたちは自身の「進路選択」が明確になるにつれ、日本との繋がりを「切断」していく。しかし日本と「接続」し続ける子どもたちはインターネットを通じて、Kpop や漫画、FaceBook といった日本の若者文化を積極的に受容している。こうした「接続」は、旧来は文化的な不適応として語られる傾向にあった。他方で、長期間のインタビューを通じて見えてきたのは、子どもたちがブラジルで日本と「同時的」に消費することで、ブラジルでの生活を乗り切ろうとする姿であった。終章では、本研究を改めて再整理し、知見のまとめをおこなう。

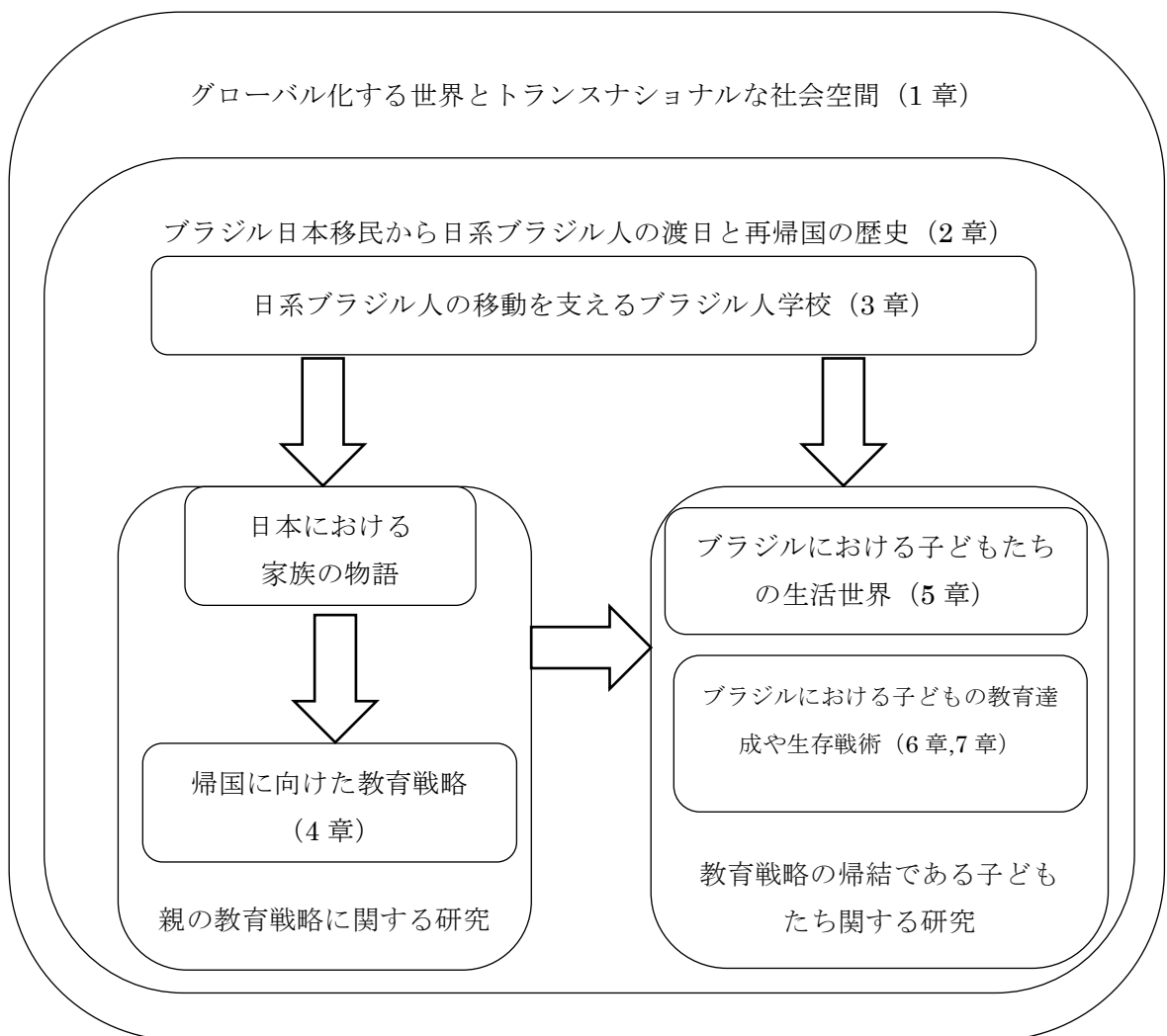


図 0-1 本研究の構成

1 章 国際移動と日系ブラジル人の教育に関する研究

1. はじめに

人々は移動とともにその生活を営んできた。それはより良い土地を求めることであり、時に争いの種にもなった。国境線が引かれ、国家によって人々の移動や生活が規定されるようになった現在においても、国境の正当性を巡る闘争は続いている。日本とブラジルの地理的な距離は過去と変わらないが、技術発展によって人の移動は加速化している。数世代かけたアジアから南米への人々の移動は、半年の船旅となり、現在では 24 時間のフライトまで短縮された。そればかりか、ICT 技術の発展により、日本とブラジルで瞬時にコミュニケーションをとることができるようになった。

本研究で扱う日系ブラジル人は、いまから 100 年前のブラジル日本移民に端緒をなす。当時、日本は明治政府でありブラジルは建国したばかりであった。第二次世界大戦や冷戦を挟んで、世界情勢は大きく変化し、両国の関係や人々の移動形態も変容している。こうした変容を検討するためには、その背景となる現代社会の社会変動と移動に関する研究を整理しなければならない。

そこで本章では、2 節においてグローバリゼーションとトランスナショナリズムに関する研究を概観することから、現代的な移民の現状を検討したい。続いて 3 節では日本におけるニューカマーと教育研究の現状と、日系ブラジル人研究の動向を明らかにする。そのうえで 4 節では本研究の意義と研究の方法を示す。

2. 国際的な人々の移動とトランスナショナリズム

今日の社会変動を表す言葉にグローバリゼーションがある。本研究が注目する「人の国際間移動」も、グローバリゼーションを背景として質・量ともに大きく変容した (Held & McGrew & Goldblatt & Perraton 2006)。経済圏は単独の国家のみで取り扱われるものではなく、国際交通網の発達、国際関係の柔軟化、EU をはじめとした領域レベルでの国際連合の拡大によって、国際的な人口移動は「加速化」し、これまでにない規模と特徴をもつようになったのである (Castles & Miller 2011)。

一般的にグローバリゼーションは「ヒト・モノ・カネ」の国際的な往来を意味する概念として使用されるが、その定義は難しいとされ、グローバリゼーションを現代的な社会変動と見なすこともあれば、植民地主義以降の経済的な繋がり深化が生じさせた社会変動全般を指す場合もある (Ellwood 2003)。グローバリゼーションが、とりわけ現代社会において大きな議論を引き起こしているのも、いわゆるウェストファリア体制以降の「国家」の枠組みを、グローバリゼーションが大きなインパクトを有しているからである (木村 2013)。「仕事、お金、信条、そして貿易、通信、金融から地球環境は言うに及ばず、日常生活そのものが我々をさまざまな形で、ますます強く結びつけている (Held, 2007, p.2)」ことも重要であろう。

社会学においても「過去 20 年ほどの間に世界規模で生じた経済的・社会的・技術的与件の大きな変化」を受けてグローバリゼーションが現代的な特質として現れてきたのである（宮島 2012）。ベックはグローバリゼーションの広まりから 1970 年代に社会学理論もその変化に対応する必要が出てきたとしている（Beck 2005）。例えば、グローバリゼーションを念頭に「世界システム論」を議論したウォーラステイン（Wallerstein 1997）は、資本主義システムの世界的な広まりが、世界を牽引するシステムの基盤であるとした。Held（2007）らに代表される研究者らは、EC から EU への展開、国際連盟や世界銀行といった国家を超えた領域的な繋がりや国際機関の役割を強調するだけでなく、逆に国家がそれぞれの権益を守る必要性が高まるとして、国家の役割が強調されるようになるとした。ロバートソン（1997）やアパデュライ（2010）は、文化変容とグローバリゼーションを議論するなかで、グローバリゼーションがいわゆる世界の「アメリカ化」や「マクドナルド化」を進行させるだけでなく、ローカルな文化との激しい衝突を生じさせることを指摘した。

こうした研究をふまえ、ベックはグローバリゼーションを、物質的な世界の広まりだけでなく「グローバル化とは、その内容についても、その帰結の多様さについても、高度に矛盾をはらんだ過程（Beck 2005 p.66）」として位置づけている。そして、グローバル化によって国家の「リスク」を外在化することが可能となり、様々な「リスク」が貧困層に集中するような状況を生じさせている。「技術による時間/空間的な距離の無効化は人間の条件を均質にするのではなく、むしろそれを分極化する傾向にある（Bauman 2010 p.26）」。

こうしたグローバリゼーションに関する社会学研究の潮流がある一方で、移民研究は社会学分野において古典に位置している。移民研究が社会学の一角を形成してきたのも、マイノリティ集団の社会統合やエスニシティの変容が当該社会に大きなインパクトを与えていたからである。そして、移民研究もグローバリゼーションの深化と連動して多様化の様相をみせている。多様化傾向にあるのも、現代の国際移民が「より良い機会を求めて移動することを決断して、先祖の地との関係を断ち、出身地を引き払い、すぐに新しい国に同化していくという、単純な個人行動を意味するものではない（Castles & Miller 2011 p.25）」ものとなったからである。

移民研究といっても、入管政策を扱うものから移民の適応・同化研究までさまざまである。ポルテスとバッシュは旧来の移民研究を類型化し、(1)労働力移動を誘発する要因の研究(2)移動の持続性(3)移民労働力の充足(4)移住地における社会移動の決定要因(5)移民の社会的・文化的な適応といった 5 つの問題領域を設定している（Portes & Bash 1985）。そして、ポルテスらはこの問題領域に対応する研究群を主流派と非主流派に分けて細分化しているが、その多くが労働力の国際移動と要因に注視しているため、現代的な移民の特質を整理しきれていない³。

³ ブレットとホリフィールドによる“Migration Theory”によると、今日の移民研究は人類学、人口学、経済学、地理学、歴史学、法学、政治学、社会学で一定の研究がおこなわれており、扱われるテーマは理論的枠組みや対象を異にしながらも拡散傾向にあるという（Brettell &

それでは現代的な移民の特質とはどのような要素からなるのだろうか。ここで、移民研究の概要を整理するために、樋口（2005a）による整理を手がかりとしたい（表 1-1）。

表 1-1 樋口による移民研究の整理

		伝統的パラダイム	非伝統的パラダイム			
		国民国家モデル			脱国民国家モデル	
移動側面	国家＝入国管理		利益集団論 Freeman(1992)	規制レジーム論 Hollifield(1992)	制限的主権モデル Joppke(1998)	国際人権レジーム論 Sassen(1996)
	市場＝労働力受容	プッシュプル理論 Harris and Todaro(1970)	二重労働市場論 Piore(1970)			歴史構造論 Portes and Walton(1981)
	移民ネットワーク		移住システム論 Massey et al. (1987)			
居住側面	国家＝統合政策		多文化主義	包摂レジーム論 Soysal(1994)	市民権論 Hammar(1990) Soysal(1994)	トランスナショナリズム Jones-Correa(1998)
	市場＝労働市場への包摂	人的資本論 Borjas(1999)	二重労働市場論 Portes(1995)			
	移民ネットワーク	同化理論 Gordon(1964)	文化的分業論 Hechter(1978)	エスニック・エンクレイブ論 Portes and Bach (1985)	社会的資本論 Portes(1995)	トランスナショナリズム Basch et al.(1994)

樋口(2005a,p.15)より作成

移民研究には伝統的であろうと非伝統的であろうと、大きく「移動側面」と「居住側面」の2つの研究領域があり、それぞれ「国家の統制」「市場への関与」「移民ネットワーク」の3つの次元が存在している。そして、研究が「国民国家」を前提とするかしないかでさらに2つの研究に分類できる。本研究が関心を寄せる「国際移動と教育」も、樋口が大別するように、移民研究におけるX軸としての「移動側面」と「居住側面」を念頭に、Y軸としての「国民国家モデル」と「脱国民国家モデル」という2つのモデルから事例を分析することが重要となる。本研究においても「移動と教育」の現代的な様相を捉えようとしたとき、「国民国家モデル」と「脱国民国家モデル」から考える必要がある。なぜなら、近代教育は「国民国家」的要素を否応なく内在しているが、他方で人々の生活は「脱国民国家」的要素が散見されるからである⁴。

2つのモデルのうち「脱国民国家」的要素については、特にトランスナショナリズム研究が取り組んできた領域である。トランスナショナリズム研究は、国家を行き交う人びとの新しい生活様式を明らかにするだけでなく、国家を行き交うことなく「受入国」のエスニック・コミュニティのなかで、「出身国」と変わらぬ生活をおこなう人々の出現にその端緒があ

Hollifield 2007)。こうした拡散傾向は、移民が経済的理由や政治的理由のみで移動するだけでなく、さらに出身国から受入国といった単線的な人生を送るだけではなくなったからである。⁴ グローバリゼーションと教育という観点からの研究は数多くあるが、これまで「新自由主義の影響」や「カリキュラムの変容」といった観点から分析されがちであった。人々の国際移動、国際的な往還と、ある国「固有の教育」をめぐる相剋に関する議論は基本的に「A国にやってきた外国人に対する教育と葛藤」といった形で議論されている。

る (Portes 1997)。「移民が国家を超えて出身地と移住地にまたがる重層的な社会関係を維持し続けること (Basch & Glick Schiller & Szanton-Blanc 1994)」を分析するために作られたのが「トランスナショナリズム」という視点である⁵。ポルテス (1997) の定義によれば、トランスナショナリズムには 2 つの役割があるという。

トランスナショナリズムのコンセプトは 2 つの役割を果たす。それは世界システムの構造を明らかにする際の理論的な道具であり、目下研究が進んでいる、日常的なネットワークや社会関係のパターンを分析する際の中範囲理論としての役割である (Portes 1997 p.3)

このようにポルテスらが注目するのは、今日的な人々の国際移動における国家のかかわりと、人々の生活レベルにおける国家を超えた「トランスナショナルな社会空間 (transnational social field)」を分析することにある (Levitt 2001)。そして「二つの生活を生きていくことができる人々が、時にバイリンガルとして、異なる文化のあいだを容易に移動し、二つの国を故郷とし、二つの国の両方において経済的、政治的、文化的な関心を追求する人々が増加」している現状を捉え、「どちらかの国」だけでなく「どちらの国でも」あるいは「どちらでもない場所」で生きる人々を検討の対象とした (Portes 1997)。「トランスナショナルな社会空間」に関しては様々な研究が行われてきたが、バートベック (2015) によると以下の 5 点に整理できる。

- (1) ディアスポラや国家間を越えるネットワークやトランスナショナルなコミュニティに注目した社会形態学的研究
- (2) ディアスポラや移民のルーツとルート、トランスナショナルな想像力に注目した「意識」に関する研究
- (3) クレオール化、混合主義、ブリコラージュ、文化翻訳、ハイブリティティといった移民の文化的再生産に関する研究
- (4) トランスナショナルな企業による幅広い経済活動と権力の再編を扱った資本経路に関する研究
- (5) 科学技術を背景とし、さまざまな情報が国家間を行き交うことに注目し、非政府組織の活動や社会運動の変遷、市民権の再編を扱った政治的研究

特に、(1)や(2)、(3)の研究をみたとき、国家の移民政策や国際労働移民を捉えようとする旧

⁵ 当時の研究は、例えばアメリカと中米といった陸続きの移民らの交流が主な研究対象であった。その後、安価な航空券の出現や、携帯電話の普及。インターネットの広まりは移民の送出国と受入国といったわかりやすい構図を変えていくことになる。ただヘルドらの研究では、グローバリゼーションとトランスナショナリズムの結びつきを、現代的な社会変動とみるか、人類史的な規模で捉えるかに議論がある (ヘルド他 2006)。

来のマクロな移民研究に対して、トランスナショナリズム研究は移民のミクロな行為にまで焦点を当てようとしていることがわかる。「移民の要因」や「移民の同化」を説明する際に、これまでの移民研究は経済的理由や政治的理由に論理的な支柱を置いてきたわけだが、それだけでは説明しきれない状況が生じてきたからである。

ここでトランスナショナリズム研究への批判にも目を向けておきたい。ガルニゾ と スミスはトランスナショナリズム研究の特徴は「上からのグローバリズム (Globalization from above)」に対抗する「下からのトランスナショナリズム (transnationalism from below)」にあるという。旧来の移民研究が国家や経済の論理に翻弄される移民を描きがちである一方で、移民らは「上からの枠組み」に対して独自に「抵抗」しようとしてきた。ただし、下からの抵抗は必ずしも国家の弱体化を意味するわけではなく、国家に翻弄されながらの抵抗であるという点に注意が必要である (Guarnizo and Smith 1998)。

現代の移民の生活がトランスナショナルな社会空間を形成していくという観点は、本研究のように移民の生活世界を検討する場合有益な視点である。そして、トランスナショナルな人々の移動や生活が受入国に大きなインパクトを与える。カースルス とミラー(訳書 2011)は「国際移民の 2 つの挑戦」という表現でトランスナショナルな社会空間を生きる移民の課題を示している。第 1 に、国際移民は「国家の能力へ挑戦」しているという。例えば、工場の海外移転によって安価な労働力を求める一方で、当該国からの移民を受け入れないという姿勢は国際的な人権団体からの批判を免れない。他方で、移民の積極的に受け入れるような政策は、国内保守層からの批判を高めることになる。国際移民の増加は、「移民による権利保障」の訴えを生じさせるだけでなく、逆説的に「移民の規制強化」「国境の強化」を生じさせることにもなる。

第 2 に、移民のグローバルな展開によって「トランスナショナルな社会空間」が生じていることである。グローバル化によって移民が政治・経済・社会・文化的関係を継続的に維持することができるようになってきている。インターネットによるメールや SNS の利用やエスニックビジネスの広まりがその代表例であろう。移民らにとって、「トランスナショナルな空間」を通じて故郷との紐帯が密になることは、家族の呼び寄せや、母国の情報を得るための利点がある。他方で、受入国にとっては社会統合が進まないエスニック・グループであり、コストの掛かる存在として位置づけられがちである。

こうした国際移民の挑戦は移民理論のなかでもっともポピュラーな社会統合や同化に関する議論を刷新しつつある。キビストとファイスト (2009) は「トランスナショナルな社会空間」が出現することで、移民らの「同化」に関しても新しい側面が生じているという。

同化とトランスナショナリズムは競合する概念として解釈すべきで、その理由は明確である。同化とは、受け入れ社会における移民統合の形式であるが、一方でトランスナショナリズムにはそうした形式がない。むしろ、国家間あるいは国家を越えた繋がり形式であり、一つ以上の社会的な生活のアリーナにおいて作り上げられた家族、宗教、経済、政治、文化など国境を

越えた接続の形式である。このことが、2つの世界において移動する人々とその場で生活する人々との間に、弁証法的な関係を生じさせるのである。(Kivisto & Faist 2009,p.150)

以上のように、国際的な人の移動が加速することが、逆に国家による人の移動の統制をうむ。出身国と受入国の繋がりが維持されることが、逆に受入国での社会統合を難しくし、場合によっては強固な同化政策を生むことにも繋がる。トランスナショナルな社会空間に注目することは、人々の生活世界の国境を超えた姿を描き出すだけでなく、国境の強固さをも再認識させることになる。

本研究があつかう日系ブラジル人もまた、日本とブラジルの間を往来する人々である。両国には入国管理という大きな法制度の壁がある。そして日本は「日本の教育」をおこなうし、ブラジルは「ブラジルの教育」をおこなう。他方で、旧来に比べれば互いの状況を知ることが容易なものとなっている。安価な航空券やインターネット、両国をつなぐブローカーの存在は人々の社会空間を接続させている。日系ブラジル人は現代的な移民の特質を有する人々であるとするれば、かれらの「教育」と諸問題を検討することを通じて、我が国における移民と教育研究を再検討することができると思われる。それでは、我が国における移民と教育研究はどのような状況にあるのだろうか。次節では、我が国における移民と教育社会学研究を概観しようと思う。我が国の研究状況を整理することを通じて、トランスマイグラントとしての日系ブラジル人を扱う意義を浮かび上がらせよう。

3. 日本における在日外国人と教育社会学研究の動向

戦後日本における外国人住人は1990年の入管法改正以降急増し、2013年末では約203万人、総人口比は1.6%となった。こうした数字を世界的な動向と照らしあわせて多いと見るか少ないと見るかはともかく、在日外国人が教育現場に与えたインパクトは極めて大きく、積極的な研究の発展を促してきた。

よく知られている通り、在日外国人は人口動態によって2つのグループに分類することができる。1910年の朝鮮半島併合以降、様々な理由で日本に滞在することになった在日韓国・朝鮮人。そして、1990年の入管法の公示を前後に増加が目立つようになった外国人である。後者がニューカマー外国人と呼ばれたことで、前者はオールドカマー外国人と呼ばれる。

人口動態と在日外国人の教育研究は連動しており、ここでは教育研究を3つの時期に分類して整理をしたい。第1期は、戦後のオールドカマーを対象とした研究である。第2期は90年を前後してみられるようになったニューカマーを対象とした研究である。そして第3期がこの10年で見られるようになった在日外国人の批判的な発展である。それでは順を追って研究史を概観しよう。

在日外国人の教育研究の第1期は、在日韓国・朝鮮人の教育研究によって先鞭がつけられた。戦後日本に残る在日韓国・朝鮮人の教育問題は、帝国主義からの脱却を目指す戦後日本

の教育界が向き合うべき課題であった。しかしそのはじまりは当事者自らの運動による（小沢 1967,小沢 1973）。そしてそれは、民族教育・民族学校運動として結実していくが、日本の教育課題とはなり得ず、あくまでも「外国人の課題」であった。

初期に行われた研究として、在日韓国・朝鮮人の子どもたちの貧困の実態や朝鮮学校をはじめとする民族教育の処遇に関する歴史的研究がある（伊ヶ崎 1972,朴 1979,朴 1984）。実態の把握という点では、小沢らが解放教育と連動する形で行った在日韓国・朝鮮人の教育達成に関する実態調査研究がある（小沢 1986）。

この時代の在日韓国・朝鮮人教育研究の集大成として位置づけられる小沢（1973）によれば、当時の在日韓国・朝鮮人教育は、日本国民のアメリカへの従属性を念頭に、自らの加害性を認識することからはじまったとされる。とりわけ、日本の公立学校に入学した子どもたちは、それぞれの文化的な特徴を尊重されることはなく、日本社会への「同化」が強要されていた。また、日本の国民教育運動の高まりは「同化教育」への批判を強めることとなる。日本民族だけでなく朝鮮民族の文化を維持・継承する必要性を訴えることは、国民教育運動の論理を考えれば当然の帰結であった。

しかし尹（1987）によれば、国民教育論は自民族中心主義的な日本の教育を変えることに寄与することはなく、むしろ日本民族と外国民族、ひいては国民＝国家といった図式を定着させる一因にもなった。そしてこうした尹の議論は在日韓国・朝鮮人の問題だけでなく日本の教育を相対化する視点を有するが、教育学領域において充分検討されてこなかった。この時代の研究は、日本の同化教育への批判という点で共通した視点を有する。しかし在日外国人の教育問題を日本社会の課題として捉える研究者はあまりに少なかった。

在日外国人の教育研究の第2期は1990年の入管法の改正を前後してみられるようになったニューカマー研究である。膨大な量の研究がこの時期に花開くが、ここではニューカマー受け入れ期の研究とニューカマー定住期の研究の2つのにわけて検討する

まず受け入れ期は、教育社会学の研究者の多くは学校文化研究を背景としていたこともあり、ニューカマー外国人を対象とする研究は学校現場における子どもたちの苦闘にフォーカスが集まった（阿久澤 1995,恒吉 1996,太田 1999,太田 2000,宮島 1999,志水 2003 など）。例えば、日本の教室を支配する「一斉共同主義（恒吉 1996）」の存在や同化主義的な「奪文化化教育（太田 2000）」が指摘された。日本のカリキュラムの不整備（太田 1996,宮島 1999）に関する研究などは、自民族中心主義的な日本の学校文化を浮き彫りにしていった。

その他にも、子どもたちと直接関わることになる教師に注目が集まった（金井 2001,児島 2001a,児島 2001b,額賀 2003 など）。金井（2001）は教師がニューカマーの子どもたち受け入れ時に設定するボーダー形成と調整過程を描き出した。児島（2001b）は日本語教師のストラテジーという観点から、ニューカマー生徒の対応に苦慮する教師の積極性を導こうとした。額賀（2003）は、日本の教師が暗黙の前提とする「関係を重視する授業観」が、個々の差異を均質化してしまい、ニューカマー生徒が有する特別なニーズの把握を難しくしていることを明らかにした。それぞれの知見は日本の教員文化が内在する課題に踏み込んだ研究と

なっている。

ニューカマーの教育研究は、当初から志水・清水（2001）、小内・酒井（2001）など総合的な研究がみられた。志水・清水（2001）はニューカマー外国人の家族を対象とする聞き取り調査から、親の教育戦略を析出するとともにエスニシティ間の比較を行っている。小内・酒井（2001）は日系ブラジル人が多数居住する群馬県大田区を舞台に、システム共生と生活共生という二本の柱を立て、日系ブラジル人の定住過程を外国人だけでなく日本人側の受け入れ意識を含めて明らかにしようとした。両研究グループは、在日外国人の教育問題を日本社会・日本の教育システムを含めて総合的に検討しようとした点に特徴がある。これらの研究はニューカマー教育研究の方向性を定めることになった。

ニューカマー外国人が5年、10年と定着した2000年代半は、ニューカマーの受け入れ段階の研究から、定住期の課題（アイデンティティ形成、不就学、進路・就労選択）に研究の焦点が向けられた。エスニック・アイデンティティ研究では、移動世代の経験の違いによる親と子の確執がテーマとなってきた（山ノ内 2001、関口 2002、清水 2006、森田 2007、三浦 2012）。なかでも、清水（2006）や三浦（2012）は肯定的なエスニック・アイデンティティを獲得する場所の存在が、ニューカマーの子どもたちのエスニック・アイデンティティの保持・継承や学力向上に大きな影響を与えていることを明らかにしている。

同時期には、南米日系人を中心としたニューカマーの子どもたちの不就学に関する研究がおこなわれた（小島・中村・横尾 2004、小島 2006、宮島・太田 2005、佐久間 2006）。これまでの教育行政は、ニューカマーの子どもたちが日本の学校に通うことを暗黙の前提にしてきた。そして、日本の学校に通わない通えない子どもたちは、支援の対象範囲から外してきた。不就学研究は、外国人の子どもへの教育を恩寵としか考えていない教育施策の矛盾を明るみに出した。

また、定住期の研究として、ニューカマーの子どもたちの教育達成が注目されるようになった。例えば、中国出身者の高校進学とその後の動向を分析した研究（鍛冶 2000、鍛冶 2007、趙 2010）。インドシナ難民の高校進学に関する乾（2007）の研究。そして、大阪府下の高校における子どもたちの就学・進学支援の実態を描いた研究（志水編 2008）などがある。

違った角度からの研究として、学校外の学習会におけるニューカマーの子どもたちと学習支援者の関係を描いた広崎（2007）の研究や、教育社会学者の積極的な介入によって、ニューカマーの子どもたちに寄り添う学校文化の形成を促そうとした清水（2004）や清水・児島（2005）の研究がある。最近では、進学から就労を視野に入れた研究もみられるようになった（清水 2006、児島 2008、児島 2010）。

以上のように、ニューカマー研究は、ニューカマーの学校での受け入れから地域へと広がりを見せつつ研究が発展していく。そして総じていえば幅広く日本の学校文化の問い直しが行われた時代である。他方で、在日外国人の教育研究は、ニューカマーとオールドカマーといった研究分野の壁は維持されたままで、相互の研究の比較や理論の共有も充分行われてきたわけではない。在日外国人の教育研究という観点では未整備な点が数多く存在していた

のである。

在日外国人と教育研究の第3期は、2010年頃からみられるようになった。ここでは本研究に特に関係する、新しい視点からの研究に関して整理しておこう。

これまでの在日外国人の教育研究は「日本人」と「外国人」といった二項対立を前提にしがちであったが、近年のグローバル化の進展によって「日本人」と「外国人」といった基本的な構図は変動している（岸田 2005）。例えば、近年蓄積が著しい分野として、国際結婚研究がある（嘉本 2001, 佐竹 2006, 渋谷 2014 など）。

国際結婚家庭が珍しくないものとなるなかで、子育てにおける「日本人」「外国人」という前提が曖昧なものとなりつつある（渋谷 2014）。外国人の夫と日本人の妻の家庭における文化・言語をめぐるコンフリクトをめぐる研究（敷田 2013）がある。

ナショナルな枠組みに囚われることなく生活・移動をおこなう人々を対象とする教育研究もみられるようになってきている（小内編 2008, 児島 2011, 志水編 2013, 山本 2014）。本誌でも志水（2000）や山本（2014）がブラジルへと帰国した日系人の子どもたちの追跡調査を行っている。日本は外国人を「受け入れる」というだけでなく「送り出す」という視点は、今後のグローバルな人口移動と教育を考えるための研究課題となりつつある。旧来の研究が「日本での教育研究」であったことに対し、その枠組自体を相対化するような研究が見られるようになったのである⁶。

在日コリアンを対象とする研究から、ニューカマー外国人を対象とする研究という流れのなかで、教育社会学的研究は日本の教育の様々な課題を浮かび上がらせてきた。それは日本の教育における外国人問題だけでなく、日本の教師や学校システムを批判するような研究としての広がりを見せている。教育社会学的な研究は外国人の定住化論と結びつくことで議論を深めていく一方、日本と他国を往来する子どもたちについてはあまり注目されてこなかったのである。こうした課題意識のもと、本研究は日本からブラジルへと渡った家族を研究の対象とすることから、日本の教育の課題を浮かびがらせることがひとつの課題となろう。

4. 我が国における日系ブラジル人と教育研究

前節でみたように日系ブラジル人の教育に関する研究は、「定住化」というキーワードと共に90年代後半からみられるようになる（例えば 渡辺 1995, 広田 1995, 太田 2000, 志水・清水 2001）。前節で検討したように、日系ブラジル人の教育研究は日本の学校文化が外国人を受け入れる際に生じるコンフリクトを描き出す研究（恒吉 1998, 太田 2000）の延長線上にあった。他方で、子どもたちは日本の学校で漫然と生きているわけではない。日本の学校において子どもたちが様々な戦略を主体的に駆使し、日本の学校文化への「抵抗」を描き出すような研究もみられるようになった（例えば 山ノ内 1999, 児島 2006）。

⁶ ただし後述するように、トランスナショナリズム研究は教育社会学領域においては最近の流行と言えるかもしれないが、近接領域である異文化間教育学や教育人類学領域では90年代にはトランスナショナリズムを念頭とする研究が進められてきた。

日系ブラジル人の教育研究はニューカマー教育研究の一角を成していたわけだが、中国帰国者やインドシナ難民を事例とする研究にはみられない2つの特色を有していく。第1に、彼らの「母国」であるブラジルでの研究が当初から企図されてきた点である。ブラジルにおける日系ブラジル人の子どもたちの教育に関する研究は、ブラジルにおける文化的適応に関する研究を中心として試みられてきた（村田 2000, 光長・田淵 2002, 中島・根川 2005, 熊崎・天野 2007）。例えば、光長・田淵（2002）による研究では、帰国した子どもたちが日本人としてのアイデンティティをもつのか、ブラジル人としてのアイデンティティをもつのか、それともバイカルチュラルなアイデンティティをもつのか、様々な事例からこれを検討している。あくまで「ブラジルでの子どもたちの教育問題」という研究視角においては、日本のそれと変わらないが、ブラジルでの研究は本研究が扱う「国際移動と教育」に先鞭をつけるものであると言えよう。

第2に、当初より日系ブラジル人研究では親世代の就労が扱われてきたこともあり、他の研究対象以上に、親と就労形態と教育に関心が払われてきたことである。例えば、関口（2003）は、日系ブラジル人の親たちが、フレキシブルな労働力として働かなければならない状況にあるため、家族の関係構築に難しさがあるという。日本の学校で生活する子どもたちは日常的な日本語を身につけていくが、昼夜を問わず働く親は日本語を覚える機会もない。すれ違う生活時間のなかで、家族のコミュニケーションに困難が生じる。こうした状況にある日系ブラジル人の子どもたちの社会適応を段階的に捉え、世代間の文化変容の不協和が子どもの学校不適応を生み、脱学校化、周辺化・疎外化されたアイデンティティが形成されるとした（関口 2003 p.325）。日系ブラジル人家族らの日本における困難さとは、家族の問題だけでなく、社会的な課題をふまえたうえで検討する必要があることを示す。とりわけ、日系ブラジル人の場合は、日本における極めて厳しい就労形態がその生活上の制限になっていることが示唆されている。

日系ブラジル人研究が他のニューカマー研究にない特色を帯びるようになったのも、(1)ブラジル日本移民研究を土台としたブラジルでの研究が容易だったことや(2)デカセギによる日本流入という他のニューカマー外国人とは違った日本への移動形態が見られたことによる。移民の移動や就労を考える際には、いかなる「条件」によって当該国に滞在しているかが重要となる。自由な就労や帰国が許されているのか、それとも就労になんらかの制限があるのかは、移民らの生活の基本的な枠組みを規定する。日系ブラジル人の日本での在留資格は「定住者」であり、入国はもちろん就労についての制限が「興行ビザ」や「技能ビザ」といった在留資格と比較しても圧倒的に自由であった。

そして、日本移民を通じて日本とブラジル間は常に人の流れが存在していたことも日系ブラジル人の特色を鮮明なものとする。渡日するための複雑な諸手続きや渡日後の就労や生活を支えたのが、日本とブラジルを繋ぐ旅行会社とその発展形であるデカセギビジネスである。日本とブラジルを繋ぐエスニックブローカーは、労働市場とバランスをとりながら日本に向けて安定した労働力の供給を目指す。日系ブラジル人らは、ブローカーを利用すること

で、見知らぬ海外で仕事を探すというリスクを低減させることができる。この両国を繋ぐデカセギビジネスは、買い手の要求によって構築されている点が重要である。要するに、日経ブラジル人らは、他の外国人に比べて低いリスクでの渡日と就労が可能となる。日系ブラジル人の「流動性」は、ある意味で歴史的・政治的に形作られていった。

ただし、多くの外国人と同様、あるいはそれ以上に、日系ブラジル人の雇用は日本の経済状況に左右される不安定なものであり、「雇用の調節弁」としての役割を担うことになった（梶田ら 2005 pp.259-284,丹野 2007）。こうした親世代の就労状況の不安定さは、2008年のサブプライムショックで顕著なかたちで明らかとなった。そして、サブプライムショックでは、日本定住を決めていた人々も含め、多くの日系ブラジル人らがブラジルへと帰国することになった。

フレキシブルな就労が求められる日系ブラジル人にとって、「子どもの教育が滞日意識や実際の行動に影響を及ぼしている比率は決して高くなく」「親の生産活動のいわば従属変数であった、企業や工場が変わるのに伴って教育も移動することを強えられる」（梶田ら 2005 p.282）状況にあるのだから、具体的な外国人の統合政策を打ち出さなくては日本社会において2世、3世の子どもたちの生活が危ういものになるというのは、自然な議論であったといえよう。宮島は日系南米人がデカセギというライフスタイルを改めることなく、子どもの教育に資源を配分せず不就学を放置し「子どもがぶつかる困難についても、暫定的態度で臨み、その解決を先送りする傾向がある」とした（宮島 2003,p.192）。また、小内らの研究グループは、東海地方における調査の結果、ブラジル人学校に通うことで日本社会との接点を失うこととなり、日本社会からのセグリゲーションを誘発しかねないことを指摘している（小内編 2009）。

以上のような日系ブラジル人の就労状況と子世代への関わりに関する分析は「日本における」日系ブラジル人の実情を十分に踏まえたものではあるが、他方で日系ブラジル人を一枚岩のように捉えてきた側面も否めない。特に教育研究が自明なものとして位置づけてきた日系ブラジル人の「定住」は、論理上の問題点を内包させている。すなわち、日本定住を前提として調査する限りにおいて、日系ブラジル人たちの「いつか帰国するためにポルトガル語だけで教育している」という語りは、「事なかれ主義」「暫定的態度」として把握されてしまうからである。

これらの議論をふまえると、志水・清水（2001）による研究は日系ブラジル人家族を考えるうえでヒントを与えてくれる。志水らの議論の骨子は、「日系ブラジル人家族の多くは『デカセギ』として日本へとやってきた。したがって、当初の目標が達成されれば『帰国する』というストーリーをもつ」という。志水らはこれを「一時的回帰の物語」と表現した。日系ブラジル人の親はデカセギゆえ「将来ブラジルに帰るかもしれない」と考えている。日本の公立学校に子どもを通わせる日系ブラジル人の親が「日本文化を学んで欲しい」と子どもたちに期待するのも、日本での滞在が「一時的」だからである。

志水らの議論で興味深いのは、日系ブラジル人の滞在の長期化をふまえた議論を展開して

いる点である。「安全で安定した生活」「収入の良さ」等の理由から、日本での滞在が長期化することで、家族の「一時的回帰の物語」が揺らいでいく。「日本でこのまま住んだほうがいいのではないか」といった親の将来展望は、その後の家族のライフスタイルに大きな影響を与える。結果として、日本への定住を志向する「永住型」、居心地の良い日本での生活に身を任せる「根無し草型」、日本とブラジルを行き来する「リピーター型」に家族の生活類型が分岐し、それにもなって家族の教育戦略が変化するのである。

このように、志水らの議論の特徴は「時間軸」にあるわけだが、それならば「一時的回帰の物語」のストーリー通り帰国した家族も存在しているはずである。上記した三類型とは別の、文字通りの「デカセギ型」の教育である。デカセギ型家族はブラジル帰国を志向するため、日本定住を前提とする研究においては悲観的に評価されがちであった。ときに彼らのライフスタイルは先述したような「暫定的態度」として、否定的に評価される可能性を内包してしまう。こうした指摘について、筆者も賛同するところではあるが、はたして「一時的回帰の物語」を有した家族がブラジルに帰国した場合、以上のような「暫定的態度」とされた家族の行為が無駄となるか疑問が残る。また、日系ブラジル人家族が自らの「流動性」を考慮しないという点についても検討の余地がある。

ブラジル日本移民研究者である森（2011）は、日本移民研究の今日的な研究対象として、「トランスナショナルな動向」を指摘している。ブラジルで生まれ育った日系ブラジル人が、日本でブラジル人の子どもを産み、その子どもたちが日本の教育をうけ、ブラジルへと帰国する。しかし、それはブラジル日本移民のように「生活の全てを賭けて移民する」「生涯を居住地で全うする」といった移民・移動とは違った様相をみせており、「両国」をまたにかけた生活を志向しているという。こうした議論をふまえれば、日本のニューカマー教育研究が自明視しがちな外国人の「定住」の再考に取り組まなくてはならないのである。

5. 本研究の課題

ここまで見てきたように、わが国における在日外国人と教育研究は、主に日本の教育課題を浮かび上がらせてきた。しかしながら、その研究視角が「受け入れ」のみに偏っていたことは否めない。1990年以降、急速に広まったニューカマーと教育研究においても「定住」を念頭にした研究が中心であった。本研究が扱う日系ブラジル人は、1990年を前後して日本へやってきた。その後、日本での「定住」を選択した人もいれば、ブラジルへの「帰国」を選択した人もいる。本研究が注目するブラジルへ帰国した人々を考えたとき、かれらの「移動」を捉えうる視点が必要となろう。

(1) 移民2世という視点

移民の教育を扱う最も大規模な調査・研究として OECD の PISA 調査がある。PISA 調査では、移民の子どもの学力が重要な検討課題とされ、2003 年には “Where Immigrant

Students Succeed: A Comparative Review of Performance and Engagement in PISA2003” を出版,これを発展的に継承し,OECD 加盟国の移民政策と教育政策を包括的に研究する調査をおこない,2010年に“Closing the Gap for Immigrant Students:Practice and Performance” という最終報告書を出版している。この報告書の主張は,移民の子どもに質の高い教育を提供することは,基本的な権利保障を遂行するというだけでなく,移民の社会統合を進めるために必要不可欠であるということである。

そこで移民と教育を検討するうえで参考になるのが,2世代目研究である。ポルテスらアメリカの研究グループは,実に 2,442 人のパネルデータをもとに,移民する人びとの「家族」「子ども」に焦点をあて,移民2世の適応の動態を明らかにしようとしてきた。そしていくつかの移民グループを比較したうえで,旧来の同化理論が,移民らの同化を単線的に描いてきたことを批判し,世代交代のなかで「分節化された同化(Segmented Assimilation)」をみせるとした (Portes 1997,Portes & Rumbaut 2001, Alba & Waters 2011)。

こうした議論は,2節でみたような移民の多様化とも関係がある。過去の移民研究は,エスニック・グループごとの研究が中心で,その世代の繋がりに関心が払われてこなかった。とりわけ,マクロな政策研究においては,エスニック・グループは集団としてひとくくりにされる傾向さえあった。しかし,グローバリゼーションは,移民の多様化を招いている。移民にも旧来のように移動先国において高度人材として受け入れられる場合もあれば,3K 労働など不足しがちな労働力の代替として受け入れられる場合もある。そして,ある種の移民は積極的に受け入れられ,ある種の移民は消極的・排他的に受け入れられることで,移民グループごとの同化パターンは違った様相を見せる。さらに,「トランスナショナルな社会空間」が広がることで移動先国の情報が共有され,移民らは事前に当該国の情報を得ることができる。

その他にも,エスニック料理店に代表されるエスニックビジネスは,移民らの受け皿にもなり得る。こうしたエスニック・コミュニティの力は絶大で,新入移民の当該国での生活をソフトランディングさせる効果がある (Portes & Zhou1993)。ポルテスらは移民らの同化が分節化する要因として

- (1) 移民1世の歴史
- (2) 移民の親と子の文化変容の早さと,親と子の規範意識の違い
- (3) 移民2世の若者がホスト社会にうまく適応しようと試みる際に直面する文化的・経済的障害
- (4) 家族やコミュニティの資源量

こうした4つの要素が,エスニック・グループごとの同化に違いをもたらす要因であるとした (Portes & Rumbaut 2014)。また,「政府,社会,そしてコミュニティという移民受け入れのこれら3つのレベル (p.105)」が作り出す移民グループの編入様式 (mode of incorporation) が重要となる。そして,編入様式は移民2世の当該社会への適応や文化変容

を規定する。(1)不協和型文化変容は、例えば子どもが先に英語を学ぶなど、言語力や適応状況への違いから、親と子のコンフリクトが生じるパターンである。(2)協和型文化変容は、2世が母国語と母語の文化を徐々に捨て去るパターンである。そして(3)選択型文化変容は、移民家族の母国文化がエスニック・コミュニティによって維持されることで、移民2世がバイリンガルになるなど、文化を「選択できる」パターンである。

以上のポルテスらの知見のからは3つのポイントを押さえておきたい。まず、(1)当該国における移民の社会適応が一枚岩的ではないということである。そして、(2)2世が、社会的な地位上昇的を伴った同化を見せるのか、もしくは下降的な同化を見せるかは、子どもたちの心的状況だけではなく、親世代の就労や生活環境による階層分化や、ホスト社会の人種問題のありよう、就労構造、そして下位文化の状況によって、当該国での社会適応が水路づけられていくことを明らかにした。(3)さらに、当該国でのエスニック・コミュニティの存在が、移民らの同化に影響を与えているのである (Portes and Rumbaut 2014, pp.55-69)。

アメリカの移民2世の研究は、定住しつつある移民2世にフォーカスが当てられているので、両国を経験した日系ブラジル人の子どもたちの事例にそのまま適用することは難しい。しかしながら、移民の世代への注目と編入様式の違い、そしてホスト社会における移民の受け入れ態勢や、就労構造、下位文化の構造といったものが子どもたちの同化に影響を与えるというコンセプトは有用であると思われる。こうしたコンセプトの有用性を強調するのも、移民の移動後の生活や適応が、旧来のプッシュ・プル理論のように「経済的要因」や「移住形態」といったマクロレベルの社会的要因だけでなく、エスニック・コミュニティや家族関係といったミドルレベル・ミクロレベルの社会的要因にも強く規定されることを示唆しているからである。

(2) 日系ブラジル人の親の教育戦略を再考する視点

ポルテスらの研究がアメリカの移民2世と教育研究の金字塔とするならば、その同じ年度に発表された志水・清水(2001)による『ニューカマーと教育』は、日本における移民と教育研究の到達点の一つである。前者が移民の「同化論」を検討していることに比べ、後者が「学校適応」に注目しているが、移民2世の同化や適応にはエスニック・グループごとの違いが見いだせるといった点や、移民の編入様式や家族関係の影響があることを検討した点は共通している。調査対象者に違いはあるにしても、現代移民の教育を問う問題意識や分析結果に共通点が多い。

先述したように、ニューカマーと教育研究は日本の学校文化研究の延長線上にあった。そのため、志水らの研究も基本的には日本の学校文化研究を意識したものとなっている。志水らは東京近郊で生活するニューカマー外国人を分析の対象とし、エスニシティごとの教育達成の違いを検討した。その研究の狙いは、親の教育意識や子どもの学校適応にエスニシティごとの違いを検討することにある。その際の分析の枠組みが、「家族の教育戦略」である。

ブルデューによれば教育戦略とは「個人や家庭は無意図的にせよ意図的にせよ、現象的に

極めて異なる多様な慣習行動を通して自分の資産を保持しあるいは増大」させようとする行為を意味する。そして教育戦略は「客観的機会がどれくらいあるか」によって左右される。客観的機会とは、第1に、教育戦略を行使するために動員できる資本と、第2に、教育戦略を行使する社会システム（法や労働市場、学校制度など）の状況による（Bourdieu 1990 pp.199-258）。

志水らはブルデューの議論を援用しながら、家族の教育戦略を5つのレベルから規定している。レベル1~2はアメリカのマイノリティ集団の「学校適応・教育達成」が、ホスト社会の参入形態によるというアメリカの文化人類学者 Ogbu の研究を背景としている（Ogbu 1978, Ogbu & Simons 1998）。レベル3の「生活の組織化」とはに関してはウォルマン（1996）の議論を背景とし、移民家族が動員できる「資源」を検討の材料としている。レベル4の「家族の物語」とは各エスニック・グループにおいて典型的に見られる「不安定な法的地位や厳しい経済的条件がかならずしも直接的にかれらの生活を規定しているわけではなく」「かれら自身が自分たちの日本での生活を意味づけているのか」が重要であるとした。そして、この「家族の物語」に影響を受けながら、「家族の教育戦略」が析出される。ブルデューに倣えばここでの教育戦略は再生産のための意図的・無意図的行為となるが、志水らはニューカマー外国人の教育戦略を析出するための枠組みを（1）家庭での言語使用・文化伝達（2）学校観・学校との関わり（3）子どもの進路への親の希望・展望の三要素から定義している。

それでは先述した日系ブラジル人家族が有する「一時的回帰の物語」はいかなる教育戦略を析出するのだろうか。志水らは日系ブラジル人の教育戦略を分析し「積極的な母語・母文化伝承」「日本文化伝達の間として学校観」「市場価値のある言語の取得の期待」という三要素を見出している。そして、こうした三要素はデカセギから日本定住を見据えるなかで生じていると結論づけている。筆者も「日本で生活する場合」において、これらの分析は的確であると考えている。

しかし前節でみたように、志水らの研究はあくまでも日本での学校適応を念頭に分析された点に注意しなければならない。図1-1でみると、志水らの研究はモデル1から1aへの変化に重点が置かれている。しかし、「一時回帰」の字義通り帰国したとすれば、1bのように帰国に向けた人々の研究も可能であると思われる。実際のところ、「デカセギ型」の親の場合はすでに「帰国」しており、日本で研究する限りは調査の対象とさえなっていない場合も想定できる。

近年では、これまでの日系ブラジル人に関する教育研究を「ブラジル」から見直そうという機運が高まっている（例えば、ハヤシザキ・山ノ内・山本 2013）。ハヤシザキら（2013）によれば、日本における日系ブラジル人の社会的な位置づけは相対的に低位なものであり、それゆえ十分な経済資源の分配を行うことができないのだから、必然的に親は帰国に向けての準備を戦略的に行うようになるという知見もある。すなわち、日本において無意味な「戦略」であっても、ブラジルにおいては有意義な「戦略」となりうるケースも想定できる。

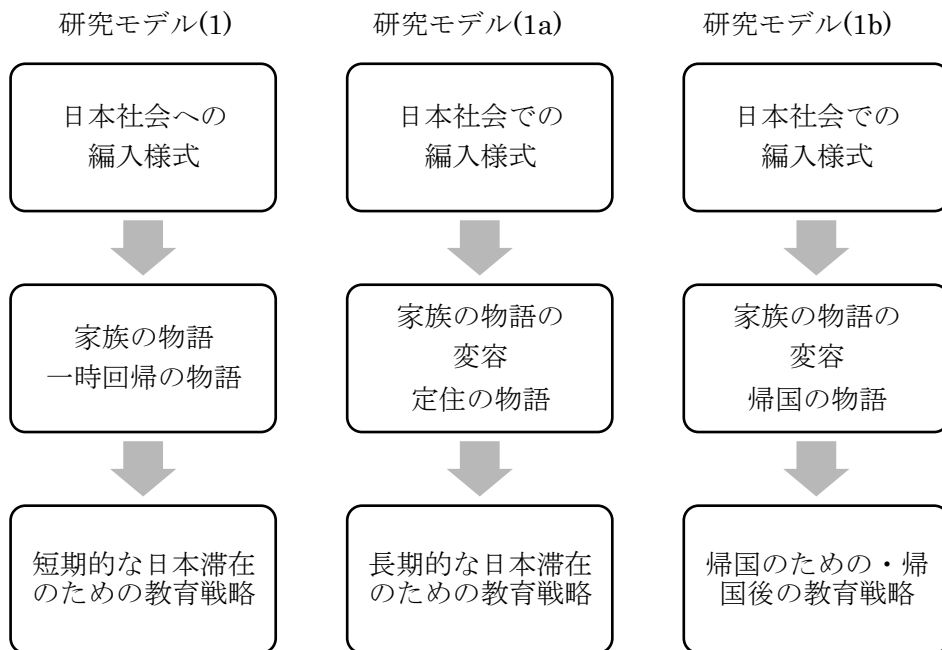


図 1-1 先行研究と本研究の着眼点の違い

さらに、これまでの教育戦略研究は「家族（＝親）の戦略」のみを扱い、それを受けて子どもがその後どのような選択を行うのか、どのような親の取り組みにインセンティブを感じ、自らの学習・進路意識を加熱・冷却させているか検討されていない。志水らが議論した「家族の物語」はあくまでも家族の物語である。そして「家族の物語」の議論は、家族の物語から析出される教育戦略によって「子どもの学業達成が規定されていく」というシンプルな再生産論の枠組みに支えられている。

そこで、注目したいのがハージ (Hage 2005) の「存在論的移動(Existential Movement)」という概念である。ハージの指摘はシンプルである。それはすべての「移動」が質的に同じものではなく、個々の存在にとっての意義に違いがみられるというスタンスである。例えば、国際間移動になんら障壁を感じない人もいれば、一生に一度のものとして移動する人もいる。同様に、同じ飛行機でブラジルから日本にやってきた親と子どもは同じ「移動」を経験するが、その個々の存在において移動経験は異なる。

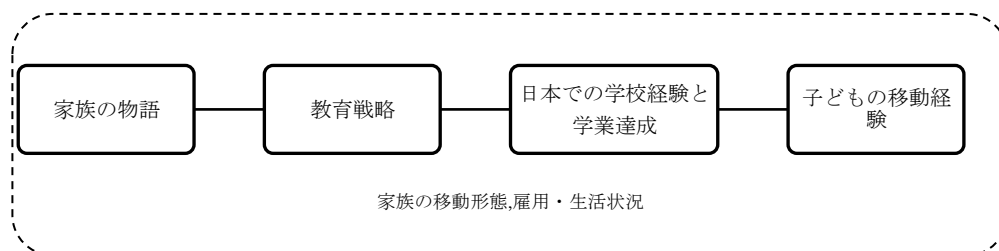


図 1-2 家族の物語と子どもの移動経験の関係

移動の存在論は、移動の質的な多様性に注視することを要求する。こうした視点を本研究において導入する最大のメリットは、国際移動における個々人の「移動経験」について何らかの意味付けが考慮できるという点である（図 1-2）。そして、こうした視点によって導き出したいのは、親が行使する長期的な「戦略」をうけた、子どもたちの局地的な「生存戦術」である。この子どもたちの「戦術」を見出すことは客体化されがちな子どもたちの主体性を描き出すだすことに加えて、移動する人々に対する教育の課題を浮き彫りにすることができるとも考える。

(3) 往還する人々という視点

先行研究でも概観したように、グローバル化を背景とする国際移動の多様化とトランスナショナルな社会空間の出現は、生活上の変化を移民にもたらした。より具体的に言えば、インターネットをはじめとする情報通信網の整備や E メールや Skype といったコミュニケーションツール、安価な航空券や世界政治の安定化といった要素によって、人々の国際移動の敷居は旧来と比べて容易なものとなった。

そして、現代の移民に共通するのが「潜在的な移動可能性を常に抱えながら生活している」ことである。「二つまたはそれ以上の国において、またその間で、不確かで予測不可能な状況に適応し、そのような状況下でリスクを管理することを学び、リスクと共に生活することを学び、文化資本と社会資本を蓄積し、高い取引コストを支払っている」人びとであるが、他方で「彼ら／彼女らの人生設計は固定的ではなく長期的でもなく、連続的で『機会を利用する』ごとに焦点づけられている」という（プライズ、2008,p.77）。

本章でみたように、教育社会学領域において「外国人と教育」研究が「日本における外国人に対する教育」という前提が支配的であった一方で、教育人類学や異文化間教育学の研究では 80 年代後半からグローバリゼーションやトランスナショナリズム研究を受容し、トランスカルチュラルリズム研究が目指されてきた⁷。江淵によればトランスナショナルな移動を行う人々はしばしば、ホスト国でトランスナショナル・コミュニティを形成する。「トランスナショナルコミュニティの形成は、異文化の“移植過程”であると同時にまた、しばしば現地文化との交流・相互作用による新しい文化の生成過程でもある。こうした文化的過程ないし

⁷ 例えば移動する人々という観点では帰国子女研究もそのひとつであったように思われる。小島（1997）によれば帰国子女研究のはじまりは桐朋教育研究所（1965）の研究である。その後、海外での日本人児童生徒の適応研究があり、続いて日本に帰国した子どもたち、いわゆる帰国子女の「カルチャーショック」が研究課題となっていく（例えば星野 1983）。小島（1997）は今後の研究課題として、海外日本人学校に関する研究の深化や駐在員以外の日本人と外国人の国際結婚研究の重要性を指摘している（小島 1997pp.62-63）。ただし異文化間教育がの研究潮流は日本語教育や異文化コミュニケーションに移行したという指摘もある（小島 2011）。日本人学校や帰国子女研究、トランスカルチュラルリズム研究は本研究とも近接したものであるが、とりわけ江淵や佐藤の議論は先駆的で、教育社会学領域での研究が後追いしたと見てよいだろう。

状況をここでは、『トランスカルチュラリズム (transculturalism)』と呼ぶ(江淵 1998 p.24)。

江淵はトランスカルチュラリズムの例として、アルゼンチンのタンゴがヨーロッパや日本で流行することや、日本人の和洋両用の生活様式などを提示している。興味深いのは、江淵が議論するトランスカルチュラリズムは「trans」の対象が、国境だけを示すものを狭義のトランスナショナリズムであるとし、相互の文化変容を視座にいった広義の意味で使用されている点であろう。

とはいえ江淵はトランスナショナリズムと国家の関係を楽観視しているわけではない。「トランスナショナリズムの進行によって、国民国家の主権が縮小し権力が相対的に減退することは避けられないであろう。しかしながら、その結果、国家の存在理由と基盤が動揺するようになったとしても、教育、雇用、福祉、人権、健康・生命の安全といった人間の生存にかかわる基本的条件の保障責任を、国家に替わって担うことのできる代替組織が他に可能かとなると、現段階ではそれは非常に難しいといわなければならないであろう(江淵 1998 pp.70-71)。」こうした江淵の指摘は、前節でみたようなトランスナショナリズム研究とも重なりあうものである。すなわち、人々の国際移動が加速化することは、必ずしも国家の解体を生むのではなく、逆説的に国家の統制を強める場合もある。また、国民国家の屋台骨となる教育が、すぐさま国家の枠組みを取り払うわけではない。むしろ、国民国家による教育と移動する人々は様々なコンフリクトを生じさせると捉えるほうが自然であろう。

関口(2010)は、トランスナショナルな社会空間を生きる子どもたちを対象とし、流動的で脱領域的な社会空間に育つ子どもたちの言語とアイデンティティを考える際には(1)客観的・主観的な「居場所」を巡る社会統合と帰属の問題をベースに(2)誰もがハイブリティティ・バイリンガル・バイカルチュラルにはなれないという、人的資本・社会関係資本の世代間・世代内格差に配慮しなければならないという。さらに(3)欧米言語が有力で非欧米言語の価値が認められない言語選択の「市場化」原理といった、さまざまな研究視角が必要であるという。どちらの研究も、現代移民が「流動的」であるがゆえに生じた新しい課題を捉える必要性を提起している。

それでは、100年に渡る日本とブラジル間での人々の移動をどのように、位置づければよいのだろうか。移民研究では、移民のタイプによって「永住移民(permanent migrants)」「帰還移民(return migrants)」「一時的移民(temporary migrants)」「一時的滞在者(sojourners)」といった分類(Bash, Schiller and Szanton-Blanc 1993)やEU諸国で見られる「循環移民(circular migration)」などが近年みられるような移民形態である(Vertovec 2009)。志水(2008)は「往還する人々」という造語を作り出すことで、国境を越えた人々の移動の「連なり」の重要性を指摘している。「往還」とは必ずしも「身体的移動」が伴うわけではなく、精神的な「移動」をも含まれる。これは「移動」や「移民」といった単線的な言葉では表現できない、「継続性」や「連続性」「つながり」を表現しうる。

これまでもしばしば言及してきたことであるが、日系ブラジル人とは、ブラジル日本移民を先祖としている。そしてブラジル日本移民もまた、当初からブラジルで「錦を飾り」日本

へ帰国しようとした「出稼ぎ移民」であった。前山（1982）は、日本移民にブラジルにおける生活戦略の変化を、大きく3つに分類している。それは（1）「労働者としての短期的・長期的出稼ぎストラテジー」が徐々に（2）「永住ストラテジー」へと変化し、最終的には（3）ブラジルでの「社会上昇ストラテジー」へと変化していったという（前山 1982 pp.30-32）。こうした変化は、日本移民の多くが日本で「土地」をもたない「非相続者」であったことや、第二次世界大戦を挟んで、日本へと帰国できなくなったことで、なし崩し的にブラジルで生きていかななくてはならなかったこととも関係している。

森（森 1999, 森 2011）は前山の議論を発展的に継承し、日系ブラジル人の日本流入も基本的には日本移民の枠組みで捉えることができるとしたうえで、日系ブラジル人は旧来の「社会上昇ストラテジー」に加えて、日本移民の末裔という立場を最大限活かした「トランスナショナル・ストラテジー」の存在を指摘している。それは日本への「デカセギ」ということもあれば、ブラジルへの日本企業の誘致など「日系」であることを最大限活用した生活戦略なのである。

それでは、帰国した日系ブラジル人は将来の「移動」と「教育」の関係をどのように乗り越えようとしているのだろうか。児島(2011)は、ブラジルへ帰国した青年を帰国理由の違いから三つのグループに分類し、その現状を親の教育戦略や資源分配から説明している。不景気や失職など外在的要因から帰国した「還流型」は、帰国後の方針が定まらない場合が多く、親の教育戦略も首尾一貫しない。帰国の現実を受け止めて頑張ろうとする「挽回型」は、日本において達成できなかった進学をブラジルで達成しようとする。わかりやすいのが、明確な意思を持って帰国した「達成型」である。達成型の多くは明確な大学進学への意思をもつ。それは親たちが帰国後の学校への入学や編入ができるような配慮をおこなうことから達成されるという。すなわち、移動を念頭に「親の配慮」が行われるとき、帰国後の子どもたちの教育達成が相対的に高くなる可能性がある。したがって、親の教育戦略がどの「程度」子どもたちに伝達・了解されているか、さらには進路形成を支える諸資源が、教育戦略の実効性を規定するかを明らかにしなければならないという。

また、将来の移住に向けた「親の配慮」は、日本での教育機関によっても支えられる。拝野（2010）はブラジル人学校の子どもたちの学びとは、「越境」を目的に構成されていることに注目した。ここでいう「越境」とは日本とブラジルだけでなく、日本国内における日本人コミュニティとブラジル人コミュニティや日本の公立学校とブラジル人学校といった様々な障壁を意味する。そして「越境」のための教育は「いつかはブラジルに帰国するかもしれない」という人々の生活上のリスクを軽減するものとなる。

以上のように、日本移民・日系ブラジル人とは、移動するしないを問わず日本とブラジルを「往還」しながら生きてきたエスニック・グループなのである。この「往還する人々」という特質は、ブラジルに帰国した日系ブラジル人の教育研究においても有用な視点である。日系ブラジル人の親は将来の「移動」とその後の「教育」になんらかの展望をもち「戦略」を企図する。そして、子どもたちは親の長期的な「期待」や「戦略」それをうけて、ブラジル

で生活し、その後の人生を模索していくのである。

(4)本研究の課題

本研究の具体的な枠組みを図 1-3 で示した。まず日本とブラジルでは実態のある「ヒト・モノ・カネ」の交流がおこなわれてきた。そして近年では ICT 技術の発展を背景とし、トランスナショナルな社会空間が形成されている。こうしたなかで、日本における日系ブラジル人家族はデカセギゆえの「一時滞在」から「定住」へと生活のスタイルを変容させていった。

他方で、本研究の対象となる人々は「一時滞在」からなんらかの理由で「帰国」した人々がいる。帰国が予定通り行われたものであるか、あるいは偶発的に行われたものであるかはともかく、子どもの帰国を見据えた人々は、日本滞在時から子どもたちに「帰国に向けた教育」をおこない、ブラジル帰国後は「帰国後の教育」に取り組んでいる。そして親の教育をうけ、子どもたちはブラジル社会での生活を構築していく。以上のような研究視点を設定することで、ブラジルに帰国した日系ブラジル人家族を対象に研究するための課題が浮かびあがる。

第 1 に、帰国した日系ブラジル人の親世代の教育戦略を「移動」という視点から再検討することである。日系ブラジル人の「流動性」はこれまでも度々指摘されてきた（例えば 梶田・丹野・樋口 2005）。そして、親の教育戦略もこの流動性とは無関係というわけではない。本研究が念頭とするのは、日本国内で日系ブラジル人の教育動向を明らかにしようとした志水・清水（2001）の議論を発展させることにある。志水らはあくまで日本国内で生活する日系人を対象に研究を進めた。その結果、ブラジルに帰国した人々の「教育戦略」が抜け落ちることになった。この空白をうめることは、日系ブラジル人の親の「戦略性」を明らかにするためにも重要である。そこで本研究では帰国した親の語りを分析することから国際移動という荒波を乗り越え、人々の帰国に向けた「教育戦略」を明らかにする。

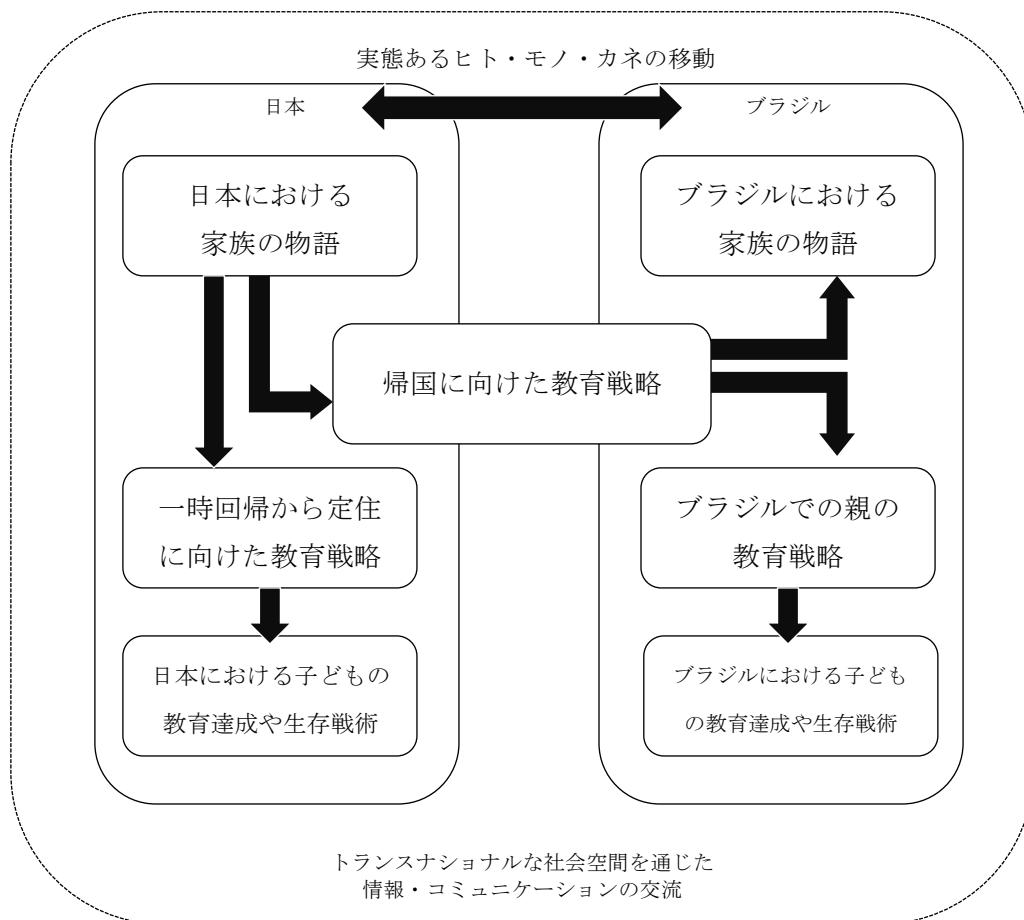


図 1-3 本研究の研究枠組み

第 2 に,親世代の戦略の「帰結」,すなわち 2 世代目の教育達成や地位達成について明らかにしなければならない。志水・清水 (2001) らは,子どもの学業達成が親の教育戦略に強く規定されるとした。そうした側面が,国際移動する子どもたちにとっても言えるのだろうか。別の国に移動することは子どもたちにとって適応の難しさや言語的な困難を生じさせることから,基本的には移動後の子どもたちは厳しい状況にあると考えられる。この仮説を検証するために,ブラジルに帰国した子どもたちがどのような生活をしているのか,そしてどのような将来展望を描くのか,教育的にいかなる達成を遂げたのか明らかにしたい。具体的には,本研究では主に小中高校生時代を日本で生活し,その後ブラジルに帰国した子どもたちを扱う関係から,大学進学と就職に焦点を絞り,子どもたちの将来展望の様相やその論理を検討する。

第 3 に,親が長期的な展望に基づく「戦略」を企図するとしても,子どもたちは「戦略」に従属的に生きていくわけではない。移民の子どもたちは親の移動や戦略に「従属的」とであるとみなされがちである。しかし,大局的な「戦略」が,個別の局面における「戦術」を要求するように,子どもたちも折々の局面において「自らの人生」を選びとる必要がある。これ

をセルトーが指摘するところの「戦術」として捉え、分析の対象としたい。日系ブラジル人の子どもたちは、グローバル社会を自在に移動するビジネスマンの子どもたちと比べれば、自らが活用できる資源は限られている。そのため、限られた資源をうまく活用するためには、いっそうの努力や工夫が必要となる。そこで、本研究ではブラジルにおいて自らの人生を模索する子どもたちの姿を描くことから、「トランスナショナルな社会空間」における、子どもたちの「生存戦術」を明らかにし、その特色や内在する論理を検討したい。

以上の3つの課題を明らかにすることを通じて、日本におけるニューカマー教育研究が見落としてきた側面を再検討するとともに、トランスナショナルな社会空間を生きる人々を対象とする教育研究のうち、厳しい状況を工夫や努力によって生き抜く人々のケーススタディーに取り組みたい。

(5)本研究で扱うデータと研究手法

本研究で使用するデータは、日本での生活を経てブラジルへ移動した日系ブラジル人のインタビューデータである。インタビューデータは、ブラジルにおいて日系団体に所属しながら約1年間（2008年～2009年）のフィールドワーク中に収集した。以降2012年までは毎年1ヶ月程度、ブラジルと日本でフォロー調査を実施した。日本が調査地となったのは後述するようにブラジルから再渡日した子どもたちがいるからである。

本研究では「トランスナショナルな社会空間」を生きる家族を捉えつつ、「親の教育戦略」と子どもの「戦術」を明らかにしなければならない。そのため、本調査では対象者の人生を幅広く聞き取り、個々の「生活史」を作成した。インタビューも、家族の経歴や教育歴だけでなく親戚関係や宗教、文化といった項目を設定し、可能な限りインタビュー対象のブラジルでの生活の全体像を聞き取るようにした。

中野(2003)は「個人と全体（全体社会）とは直接に相互媒介するのが人間の存在構造である。社会関係は、そのように文化的・社会的な全体と相互規定する人間個人相互の間で成立し、かつまた、そのような全体の中に位置を占めているから社会関係と全体社会との間でも相互規定が見いだせる（p.26）」としてモノグラフ的な研究を通じての「全体社会への接近の方法」の重要性を指摘している。谷（2002）はライフコース研究のひとつとして「世代間生活史法」を構想し、そのねらいを「家族・親族のメンバーである個人の生活史を、縦に祖父母・親・子・孫と、おじ・おば＝甥・姪関係、横に夫婦・きょうだい・おとこ関係—これら血縁・婚姻関係の中に位置づけることにより、長いタイムスパンで民族関係、文化継承、および職業移動などの移動過程を追求する（p.39）」こととした。そして生活史研究の最大のメリットが「社会関係と文化体系の相互連関の変動過程」と「家族を準拠集団の『原型』としつつ、その基点とする集団参加の多様な展開過程を明らかにできる」ことである。

移民研究においては、しばしば生活史を一次資料とする研究がおこなわれてきた（有末2012）。我が国においても、在日コリアンの定住過程に光を当てた谷（2002）の研究やハワイの日本移民に関する中野（2003）の研究がある。ブラジル日本移民に関しても、前山（1981）

や半田（1970）によって残されている。近年では沖縄から大阪への国内移住においても岸（2010,2015）の研究が注目されている。これらの研究が生活史を分析の対象とするのには、大きく2つの理由による。

第1に、国際移動が人々の生活を激変させる行為だからである。したがって、その分析には生活全般への目配りが必要となる。第2に、人々の移民経験は時間的な経過によってその意味を変えていくことになる。移住初期の語りは、5年、10年と生活を続けていくなかで変化していく。こうした時間と人々の語りや生活の変容を捉えるには、できるだけ幅広く人々の経験を把握する必要がある。そして本研究が生活史研究を研究手法としたのも、「教育戦略」や「生存戦術」がインタビュー対象者の「過去・現在・未来」に関わる長期的な展望やさまざまな資源を活用して生き抜く姿を描かなければならないからである。そして、移動経験を個々がどのように意味付けていくのかが研究課題となろう。

人々が自らの経験を語ることは、例えば「1990年に日本に渡った」というような客観的な語りだけでなく、否応なく「物語」が生じる。「語る」という行為には、自己の経験や感情を捉えなおし、他者に向かって整合的に語る必要が生まれる。本研究が対象とする「自己の物語」の基盤にあるのは社会構成主義の考え方である。野口（2001）によれば社会構成主義の基本的な考え方は三つある。第一に「現実社会的に構成される」ということである。第二に「現実言語によって構成される」こと。第三に「言語は物語によって組織化される」ということである。自己という存在は「他者との関わりのなかで、他者が私に対して思い描くイメージとぶつかりあい、すり合わされるなかで、現実の私が形づくられていく」。（野口 2001 p.51）

こうして生まれるさまざまなイメージを、われわれは言語によってその経験を共有することが出来る。さらに、言語が物語となることで、一定のまとまりや一貫性を付与していく。社会構成主義の論者であるガーゲン（2004）は論理実証主義を批判するかたちで生成的な理論の重要性を説いた。われわれは、自らの現状や伝統や関係を語ることで世界を構成していくが、それを振り返ることを繰り返しながら、新たな意味や行為の世界を開いていくのだ。したがって「物語」を理解するためには、既存の理論を当てはめていくのではなく、人々が語り構成する世界に沿った理論が求められる。

そのためにも、ガーゲンは人々の語りによってどのような世界が構成されるのかを注意深く観察せよという。なぜならば「事象は、語りによって『始まり』『どん底』『クライマックス』『終わり』などの意味を与えられ、現実となる。人々は語りを通して事象を体験し、まさに語りを通して他者とともに事象を整序している」のであって「物語は、人生の現実を作り上げる手段となる」からである（ガーゲン 2004 p.248）。

本研究に引き寄せて考えれば、「家族の物語」をいかに子どもたちが脱構築していくかが課題となる。「人生にとって決定的に大きな喪失に直面したとき、私たちは、過去の人生の意味を問い返し、人生を再編し、新たに生き出さなければ」ならなくなる。「喪失のほかにも、人生の転機、不測の出来事など、自分自身の今までの生き方が問われ、新しい自己の建て直しが

ひつようになったとき」にもまた,出来事を意味づけ納得するような心の仕組みが必要となる(やまだ 2006 pp.15-26)。

そこで本研究では,ブラジル移動後の生活全般を聞き取り,生活史を描くだけでなく,個々の「自己の物語」についてもその研究の対象にしなければならない。そのため,インタビューはフェイスシートによる聞き取りと,日本とブラジルでの生活を比較的自由に聞き取る半構造化インタビュー形式で実施した。インタビューは通訳を必要とした場合もあれば,日本語とポルトガル語をミックスしたインタビューが含まれる。子どもたちのブラジル移動後の生活と進路選択を把握するためにワンショットインタビューだけでなく可能な限り複数回の聞き取りを実施した。

そこで本研究ではインタビューの際に教育経験だけでなく,生育歴や渡航歴など生活全般に関わる質問もあわせて行った。一部のインタビュー対象者には,作成した生活史を通読したうえで再インタビューを実施した。海外調査では「聞きやすい」人々がインタビュー対象者となり,対象者の偏りが想定される。そこで,現地の教育委員会の協力を得て公立学校に在籍する日本から移動した日系ブラジル人を探した。

こうした手続きのもと選ばれた調査対象者をまとめれば,以下のように要約できる。親世代は 1950 年代後半から 1970 年代にサンパウロ州やパラナ州奥地の農村部で生まれた。学歴は一部の例外を除いて中卒もしくは高卒である。1980 年代以降のブラジルでの不景気を受けて,両親(日本移民 1 世や 2 世)が失職し,本人にも仕事が見つからない場合があった。そして,親や親戚,結婚していれば家族と共に日本へ「デカセギ」した。子どもたちの場合は,ブラジルと日本生まれの別に加えて,移動年齢によって教育経験が異なる。共通しているのは,日本で何らかの教育機関に通っていたが,親の都合によってブラジルへと移動することになったことである。

表 1-2 デカセギ型家族の一覧

番号	名前	インタビュー時 年齢	本人の最終学歴	移動歴	子どもの日本での進 学先	子どものブラ ジル移動後の 進学先	ブラジル移動後の子ども 進路希望
1	ダートン	49	高卒	ブラジル生まれ。1990年に日本へ。2009年にブラジルへ。	公立	私立	大学進学希望
2	ノエミ	42	高卒	ブラジル生まれ。1994年から2000年まで日本。2000年にブラジルへ。2005年に日本へ。2009年にブラジルへ。	ブラジル	公立	大学進学希望
3	マルシア	45	高卒	ブラジル生まれ。2000年に日本へ。2009年にブラジルへ。	ブラジル	私立	大学進学
4	ナターリア	NA	大卒	ハンガリー生まれ。ハンガリーから2001年に日本へ。2008年にブラジルへ。	ブラジル	私立	大学進学
5,6	ヘナト(父)・マルセラ(母)	40,40	高卒/大卒	ブラジル生まれ。1992年に日本へ。2007年にブラジルへ。	ブラジル	私立	大学進学(28)
7	アケミ	46	高卒	ブラジル生まれ。1992年に日本へ。2007年にブラジルへ。	公立	私立	大学進学
8	ユウキ	45	中卒	ブラジル生まれ。1992年に日本へ。2001年にブラジルへ。2002年に日本へ。2008年にブラジルへ。	公立	私立	再渡日
9	サツキ	46	大卒	ブラジル生まれ。1990年に日本へ。2006年ブラジルへ。	ブラジル	私立	再渡日(37)
10	フェリペ	42	中卒	ブラジル生まれ。1995年に日本へ。2009年ブラジルへ。	ブラジル	公立	大学進学
11	パトリシア	46	高卒	ブラジル生まれ。1995年に日本へ。2005年ブラジルへ。	ブラジル	私立	大学進学希望
12,13	リカルド(父)・アカネ(母)	52,44	中卒/中卒	ブラジル生まれ。1997年に日本へ。2009年ブラジルへ。	ブラジル	私立	大学進学希望
14	ダニエル	50	中卒	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2008年ブラジルへ。	ブラジル	私立	大学進学
15	ミランダ	45	高卒	ブラジル生まれ。1990年に日本へ。2007年ブラジルへ。	ブラジル	私立	大学進学希望
16	アナスタシア	48	中卒	ブラジル生まれ。1991年に日本へ。2010年ブラジルへ。	ブラジル	公立	ブラジルで就職(31)
17	ミナコ	NA	中卒	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2008年ブラジルへ。	ブラジル	私立	大学進学(24)
18	バーバラ	NA	高卒	ブラジル生まれ。1997年日本へ。2000年にブラジルへ。2003年に日本へ。2005年ブラジルへ。	ブラジル	公立	大学進学
19	サド	46	中卒	ブラジル生まれ。1995年日本へ。2006年ブラジルへ。	ブラジル	私立	ブラジルで就職
20	コウジ	40	高卒	ブラジル生まれ。1999年日本へ。2008年ブラジルへ。	公立	公立	大学進学(39)
21	ユリ	37	大卒	ブラジル生まれ。1994年日本へ。2006年ブラジルへ。	公立	私立	大学進学希望

* ブラジル帰国後の子ども進路の「」内の数字は「子どもデータ」の整理番号

デカセギ型家族は1990年代前半に日本へと渡り、2008年の経済危機を前後してブラジルへと移動している。本研究では、ブラジルの日系人協会や日本人を通じてインフォーマントを探したが、インタビューに応じてくれた人は26家族に留まった。多くの親は日本の頃と変わらず昼夜を問わずに働いていたことが、インタビュー対象者を探すことに苦戦した主たる理由である。

さて親インタビュー(26家族)のうち「明確な移動意思」「計画的な移動」「移動後に向けた準備」を語った親を「デカセギ型(19家族)」と分類し、分析の対象とした。最も分類が難しいと思われるのが経済危機の影響で移動した家族である。例えば「経済危機によって移動することになったが、それは予定されていたことで、時期が早まっただけ」と語った親についても分析対象に加えた。その他のインタビューは、経済危機を要因として帰国して「生活の再建」にインタビューが集中してしまうことや語りが散逸的で、「デカセギ型」と分類できなかった事例が2家族。育てた子供が、幼児期ということで本研究のような学齢期を対象とする研究において扱うことが不適當であると判断した4家族。そして、全く唐突の帰国であったため「明確な移動意思」や「移動後に向けての準備」が語られなかったことが1家族である。

扱った事例にしても扱わなかった事例にしても、限られた時間内でのインタビューであったことや、教育戦略は必ずしも本人が意識するものだけではない。その意味で「語られた教育戦略」を本研究では扱うという意味での限界が存在しているが、逆に「語るほど意識的な教育戦略」を扱うとも言える。

つぎに「デカセギ型家族の子どもインタビュー(57名)」に関しては、ブラジルでの進路

が定まる時期である中等教育在籍中もしくは卒業した「子どもデータ (39名)」を分析の対象とした。ただし調査上の限界から、親と子どものインタビュー対象者は5組を除いて継続的ではない。こうした結果は第一にインタビューデータを現地の支援団体や教育委員会などを通じて収集したことに起因する。そのためインタビューの多くが学校で行われることになるが、親世代へのインタビューが多忙や予定調整の難しさから行えなかった。そこでこうした不足した親世代との関係を補うために、本研究では子どもたちや周辺の教師や日系団体からも情報を収集し、出来る限り子どもたちと家族の関係を把握することに務めた。さらに調査地域をサンパウロ大都市部ではなく、ブラジル日本移民に由来する「地方部」に限定し、家族の出自やその後の生活状況が基本的には近似した子どもたちをインタビュー対象にしている。

表 1-3 ブラジルへと移動した子どもたちの概要

整理 番号	名前	性別	インタビュー 時年齢	移動歴	日本とブラジル での進学先		進路 希望を 含む)	移動の物語	使用言語
					日本	ブラ ジル			
1	サムエル	男性	16	ブラジル生まれ。1997年に日本へ。2004年にブラジルへ。	公立	私立	ブラジルで大学進学希望	切断	ポ
2	ジルベルト	男性	17	ブラジル生まれ。1994年に日本へ。2000年にブラジルへ。2005年に日本へ。2009年にブラジルへ	公立→ブラジル	公立	ブラジルで大学進学	切断	日
3	リジア	女性	17	ブラジル生まれ。1995年に渡日へ。2007年にブラジルへ。2010年に日本へ。	公立	私立	日本で大学進学	接続	日
4	ミサキ	女性	16	日本生まれ。2005年にブラジルへ。	公立	私立	日本で就労	接続	日
5	アヤ	女性	18	ブラジル生まれ。1992年に日本へ。2006年にブラジルへ。	公立	私立	ブラジルで大学進学	切断	日
6	サチ	女性	19	ブラジル生まれ。1995年日本へ。2007年にブラジルへ。	ブラジル	私立	ブラジルで大学進学	切断	ポ
7	ミナミ	女性	18	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2009年にブラジルへ。2012年に日本へ。	公立→ブラジル	公立	日本で大学進学	接続	日/ポ
8	ヴァニア	女性	18	ブラジル生まれ。1997年日本へ。2006年ブラジルへ	ブラジル	公立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ
9	カツヤ	男性	20	日本生まれ。2006年に年ブラジルへ。2010年に日本へ。	公立→ブラジル	公立	日本で就労	接続	日
10	マイラ	女性	24	ブラジル生まれ。1994年に日本へ。2007年にブラジルへ。	公立→ブラジル	私立	日本で大学進学	接続	日/ポ
11	ルアナ	女性	19	ブラジル生まれ。1994年に日本へ。2007年にブラジルへ。	公立	私立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ
12	リナ	女性	22	ブラジル生まれ。1994年に日本へ。2009年にブラジルへ。	公立	私立	日本で大学進学	接続	日/ポ
13	ユカ	女性	18	ブラジル生まれ。1997年に日本へ。2003年にブラジルへ。2010年日本へ	公立→ブラジル	公立	日本で就労	接続	ポ
14	レアンドル	男性	18	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2006年にブラジルへ。	公立→ブラジル	私立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ
15	アキコ	女性	16	ブラジル生まれ。2005年に日本へ。2009年4月にブラジルへ。	ブラジル	私立	ブラジルで不本意進学	接続	ポ
16	ミシェル	女性	15	日本生まれ。2009年にブラジルへ。	ブラジル	公立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ
17	マサキ	男性	19	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2000年にブラジルへ。	公立	私立	ブラジルで大学進学	切断	ポ
18	ソニア	女性	NA	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2008年にブラジルへ。	公立	公立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ
19	セルジオ	男性	20	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2008年にブラジルへ。2011年に日本へ。	公立	NA	日本で大学進学	接続	日/ポ
20	リカ	女性	22	ブラジル生まれ。1991年に日本へ。1994年にブラジルへ。	公立	私立	ブラジルで大学進学	接続	日/ポ

整理番号	名前	性別	インタビュー時年齢	移動歴	日本とブラジルでの進学先			移動の物語	使用言語
					日本	ブラジル	進路 希望を含む)		
21	ヨシ	男性	NA	ブラジル生まれ。2007年に渡日。2009年にブラジルへ。	公立	公立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ
22	カミラ	女性	NA	ブラジル生まれ。2005年に渡日。2009年にブラジルへ。	公立	公立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ
23	トモ	男性	17	ブラジル生まれ。2005年に渡日。2009年にブラジルへ。	公立	公立	ブラジルで不本意進学	接続	日/ポ
24	アドリアナ	女性	25	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2008年にブラジルへ。	ブラジル	私立	ブラジルで大学進学	切断	ポ
25	ツバサ	男性	17	ブラジル生まれ。1997年に日本へ。2006年にブラジルへ。	公立	私立	ブラジルで不本意就労	接続	日/ポ
26	リラ	女性	18	ブラジル生まれ。1994年に日本へ。2010年にブラジルへ。2012年日本へ。	公立	私立	日本で就労	接続	日/ポ
27	マルセロ	男性	18	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2009年にブラジルへ。2012年日本へ。	公立	私立	日本で就労	接続	日
28	ファビオ	男性	19	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2007年にブラジルへ。	公立	私立	ブラジルで大学進学	切断	日
29	アケミ	女性	23	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2008年にブラジルへ。	公立	公立	ブラジルで就労	切断	日
30	ヘジナルド	男性	22	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2008年にブラジルへ。	ブラジル	—	ブラジルで就労	切断	ポ
31	タカシ	男性	17	ブラジル生まれ。1996年に日本へ。2010年にブラジルへ。	ブラジル	—	ブラジルで就労	切断	ポ
32	チカ	女性	20	ブラジル生まれ。1996年日本へ。2007年にブラジルへ。	公立	公立	ブラジルで就労	切断	日
33	ルーカス	男性	24	ブラジル生まれ。1990年日本へ。2007年にブラジルへ。2011年に日本へ。	公立	公立	日本で就労	接続	日
34	レイナ	女性	22	ブラジル生まれ。1991年日本へ。2008年にブラジルへ。	ブラジル	私立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ
35	リカルド	男性	23	1996年日本へ。2009年にブラジルへ。	公立	私立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ
36	チェミ	女性	24	ブラジル生まれ。1993年日本へ。2005年にブラジルへ。2009年に日本へ。	公立	私立	日本で就労	接続	日/ポ
37	ヨシキ	男性	22	ブラジル生まれ。1995年日本へ。2006年にブラジルへ。2008年に日本へ。	公立	私立	日本で大学進学	接続	日/ポ
38	ユウヤ	男性	22	ブラジル生まれ。1993年日本へ。2008年にブラジルへ。	公立→ブラジル	公立	ブラジルで不本意進学	接続	日/ポ
39	テレジア	女性	20	ブラジル生まれ。1999年日本へ。2008年ブラジルへ。	公立→ブラジル	私立	ブラジルで大学進学	切断	日/ポ

* 日本とブラジルでの進学先では、日本の公立学校を「公立」、ブラジル人学校を「ブラジル」とした

* 年齢は初回インタビュー時 使用言語は「日本語で生活できますか?」「ポルトガル語で生活できますか?」「家族との会話」などを加味して振

以上の「親データ」「子どもデータ」をメインとする。その他にも、フィールド期間中に得た各種日系諸機関やブラジル諸機関へのインタビューデータや日本での教育機関への聞きとりデータ、そして2009年から2014年の長期間にわたって聞きとりを続けてきたロンドリーナ州アサイでのデータも活用した。ロンドリーナ州でのデータは同一人物を5年かけて追いかけることができた。またそれぞれ累計すれば5時間から20時間近くのインタビューデータを収集した。これらのサブデータについては、それぞれの該当箇所においてその詳細を明示する。

2章 日本とブラジルを往還する人々の歴史

1. はじめに

先行研究を通じて概観してきたように、移民の移動先国での生活は、当該社会における移民施策やエスニック・コミュニティの存在によってその大枠が形成される。本研究が対象とする日系ブラジル人は日本移民をその祖先とする。1908年にはじまる日本からブラジルへの移動。1990年以降急速に増加したブラジルからの日系人の移動。そして2008年の世界的な経済危機の煽りを受けた日系ブラジル人のブラジルへの移動。このように実に100年、3世代に渡って日本とブラジルの間には人の流れがあった。したがって、本研究も日系ブラジル人のブラジルへの移動を単線的に捉えるのではなく、100年の移動の歴史において位置づける必要がある。

こうした作業を通じて、日系ブラジル人が政策・経済・教育においてどのように受け入れられたのか、その編入様式を教育に関する課題と併せて明らかにしたい。2節では、やや丁寧にブラジル日本移民の前史とも言える、戦前のブラジル日本移民について示す。本研究が調査地としたロンドリーナ、バストス、アサイといった町は、サンパウロ州やパラナ州の奥地に位置している。日系ブラジル人は、こうした奥地から日本へと渡り、奥地へと帰っていったのである。3節では、1970年前後から見られるようになったブラジルから日本への移動を検討する。ここでは特に、日系ブラジル人の日本での編入様式の要となった「デカセギ」に注目したい。そして4節では、2009年前後からブラジルへと「帰国」した日系ブラジル人を取り巻く状況を示す。

2. 日本からブラジルへの移動—日系ブラジル人の前史（1908年～1970年）

ブラジルが植民地時代を経て独立した時代、日本もまた欧米各国に認知され国際舞台に登場するようになった。幕府の権力失墜に並行して鎖国制度は崩壊し、1854年に日米和親条約が結ばれ日本も開国を余儀なくされた。日米修好条約は明らかな不平等条約であったにもかかわらず、幕府にはこれを是正する力はなかった。幕府の力が弱体化し、1866年には渡航差許しの触達によって鎖国が解除され、留学や商用ならば日本から海外へと渡ることが許された（若槻・鈴木 1975）。

日本からの組織的移民は、1868年のグアム島とハワイ島へ渡った195人がはじまりである。明治政府発足直後ということもあり「元年者」と呼ばれた。この「元年者」たちは、後ろ盾のないハワイでの生活において大きな苦難の道をたどる。ハワイ移民と雇用主の間での契約が守られず、待ち受けていたのは苛酷な労働環境であった。ハワイ移民は明治政府に嘆願書を送り、事態の打開を求めたことで労働環境が正常化していくが、一連の出来事は、移民の難しさを明治政府に知らしめることとなり、政府は移民に消極的な立場をとるようになった

た。それでもなお、明治政府は移民政策を推し進め無くてはならない国内的な事情を抱えていた。明治政府が直面していた最大の課題は、都市部と農村部の格差の拡大であり、経済不況である。その解決策のひとつが、海外の「土地」に人々を送り出すことであった。明治政府は海外への版図拡大政策は、国内問題の解決のために行われたものである。以降、日本は韓国併合など帝国主義的な政策をおこなうが、これは「更なる発展は諸外国での権益獲得」であるという発想に基づくものであった。こうした帝国主義的思想のなかに移民政策も組み込まれていったのである。

日本とブラジルの関係は、1880年の日伯間の国交樹立にむけての外交交渉にその始まりがある。日本にとっては(1)国内不況の解決策として移民を送り出す必要性があり、(2)外交的には欧米各国との不平等条約を改正するために、ひとつでも多くの平等条約締結が急務であった。他方で、1888年、ブラジルは奴隷解放をおこなったが、労働力不足が慢性化しており、安価な労働力としての移民獲得が急務であった。1892年に一応の形として中国と日本からの移民がブラジルにおいて認可されることとなる。1905年杉村濤が三代目公使に着任すると、精力的にブラジル調査に乗り出した。アメリカでの東洋人排斥運動の高まりがあっただけに、「ブラジル移民事情」や「サンパウロ州移民状況」といった杉村の報告書は、新たな移住地の発見として広く日本でもとりあげられた⁸。

表 2-1 ブラジル日本移民の時代区分と移民者数

	移民数	備考
第一期(1908-23年)	32,590	試験的/コロノ/短期的戦略
サンパウロ州政府補助金時の終了→日本の補助金へ		
第二期(1824-40年)	152,091	植民地・移住地/国策移民/中・長期的戦略
ブラジルナショナリズムの高揚・第二次世界大戦へ		
第三期(1941-45年)	1,591	空白期/

ブラジル日系人実態調査委員会(1964 p.225)より作成

1907年11月に結ばれた移民契約は以後三年間のうちに日本移民を3000名受け入れるというものであった。政府間で取り交わした移民枠を充当したのは一般の移民街者であった。高知出身の水野龍を社長とする皇国殖民合資会社は、781名の移民希望者を集め、1908年神戸港からブラジルへと出発した⁹。表 2-1 は戦前日本からブラジルへと渡った移民の人数で

⁸ 日本移民五十年祭委員会(1958)によれば大阪朝日新聞に内容が発表され、東京では集会在催されるなど、大きな注目をうけた。

⁹ 当時は民間の移民会社が移民の手続きや輸送を行った。政府は1983年に移民保護規則を制定し、移民会社の業務を明確にし、移民会社は移民の募集と輸送を主な任務としたが法的拘束力はなく、不透明な移民会社も多数設立され、移民会社の競争が加熱すると移民保護法を犯す会社も増えた。

ある。日本からの移民に移民に対しては、まず試験的に使ってみるという試みがなされた。したがって、この試験時代にやってきた移民らは、ブラジル側の期待にこたえられたかという意味では、さまざまな問題を抱えていた。

例えば、耕地に分かれた移民らが最初におこなうのは、自分達が住む家や家具を調達することであった。2家族から3家族につき1棟の住宅が与えられたが、家具は自分達で作るといった有様だった。ベッドや食卓なども、利用できる木材を農場主から与えられ、切り出すところからはじまった。なかには、土間に枯れ草を積んで一晩を過ごしたという移民もいる。そして、日常生活で必要となる消耗品は農場の売店で買うことになった。この売店は移民らに、生活必需品を法外な値段で売りつける搾取機構としての側面をもっていた。そうしたことから農場の中には、この売店の制度に憤り、自ら近隣の町に買い付けに行く移動者らもでた。このように、「移民たちにとって、農場生活はすでに最初の晩からある種の幻滅をもたらすものであった」（半田 1970 p.41）。日本移民の多くが、当時その影響が色濃く残っていた「奴隷」の代替労働力としてみなされがちであったからである¹⁰。その結果、多くの移民らは配置された耕地から退去していくようになる。

表 2-2 笠戸丸移民の農場退去率

配置先農場	配置人数 (1908年7月)	1908年 12月残留者	1909年 9月末残留者	出身県
カナン	161	139	23	沖縄
フロレスタ	170	61	?	沖縄
グアタバラ	90	64	34	鹿児島
サン・マルティニョ	98	56	27	鹿児島
ソブラード	62	39	?	山口, 愛媛
デュモント	201	0	?	熊本, 広島, 福島, 宮城, 東京
計	782	359	84	

齋藤(1960 p.190)から作成

¹⁰移民らが日本での斡旋所で聞いていたのは、1人が1日3~5俵の収穫が見込めるというものであった。さらに、家族移民であることから、人家族の労働力を3人と考えれば1日9~15俵になる。1俵が当時の通貨で500レース(30銭)の収入が見込め、1日で最大4円50銭。1か月ならば135円になるという。当時日本における収入を記したのものによれば、大工の賃金が1日40銭であり、百姓の日雇いが20銭、小学校の女性教員が月8円、巡査が10円と比べれば、135円という数字は莫大な金額であった。しかし、実際のところは1家族で日産3俵や4俵であり、酷いところでは1日1俵というところもあった(青柳 1941 pp.275-27, 日本移民五十年祭委員会 1958 p.17)

戦前にブラジルへ渡った移民は、契約農としてコーヒー園に配耕されたが、その大半は 2～3 年でコーヒー労働者から独立し、独立農を目指した。そして、ブラジル各地に植民地が開かれ、日本移民らは独自の生活を形成していった。最初期に配耕された旧地帯から徐々に移動をはじめ、自らが雇用主となって財産を作るといった選択をはじめたのである¹¹。

移民らによる移動のひとつのパターンとして、小集団が分散し居住地をもとめたものがある。第 1 回移民らなどは自営農開拓が難しかったこともあり、国外への再移動や、当時各地おこなわれた鉄道敷設をおこなうものもいた（青柳 1941 p.285）。こうして日本移民らは、サントスやサンパウロといった沿岸部から、奥地の未開の地へと移動していくことになる。

さらに、新移住地の開拓は日本政府や日本企業の事業対象となっていく。1913 年に青柳が開いたイグアペ植民地をはじめとして、1923 年には信濃海外協会がアリアンサ移住地を建設した。海外協会は日本各地でつくられ、各県ごとから移民を排出している。1927 年になると海外移動組合法が交付され、新潟、栃木、宮崎以外全ての県に移動組合が設立した。この組合の連合組織が海外移動組合連合である。海外移動組合連合は、ブラジルでの実務機関である有限責任ブラジル拓殖組合（以下ブラ拓）を設立する。ブラ拓はブラジル各地の土地を選定し、バストス、チエテ、アサイといった地域の土地を購入、1930 年代にはアリアンサ移住地も管理下においた。

各地の移住地には日本人会の傘下で男女青年会や婦人会も結成され、そこには会則がつくられ議事録が残された。運動会やクラブ活動も盛んになると、スポーツ会が結成され、地域をまたいだ競技会などがとりおこなわれた。1930 年には初の陸上競技大会がプロミッソンでおこなわれている。冠婚葬祭は日本人会を中心に催され、正月や天長節を必ず祝うこととなっていた。天長節では日本人会宛に領事館から「御真影」が送付され、高所に掲げて式典をおこなった。

都市部では、農業従事者だけでなく、医学者、薬剤師、理髪業者、写真館など生活に関係したさまざまなサービス業に従事するものも現れた。また、ブラ拓や海興によって開発された移住地では、これらの企業に所属する社員らが指導的立場についていった。また、移民のなかには芸術活動をおこなうものもいた。邦字新聞の投書欄には文壇のコーナーが設けられ、詩歌が募集された。選者をつけて公募される本格的なものであった。サンパウロでは俳句集などが編纂されるなど、日系移民発の書籍も出版された。また、1931 年にはサンパウロ市内の日本人会で公募美術展がおこなわれ、大小百点近い作品が応募された。このように、日本移民のなかには日々の忙しさのなかで、芸術を志すものもいたのである（香山編 1949）。日本が国策として移民排出に乗り出し、日本資本による移住地が形成されていく。そして、日本移民らの生活世界としての植民地は、日本での生活に似たものとして再構築されていった（前山

¹¹ こうした 1910 年代以降よりはじまる日本移民らの植民地の形成について、『80 年史』によれば五つの型に分けることができる。それは①自然発生した植民地、②奥地開発の植民地、③日本の民間資本による開発植民地、④ブラジル連邦・州政府主導型の植民地、⑤一時的借地型である。

1996 pp.122-124)。

こうした情勢が一変したのが、1929年の世界恐慌である。世界恐慌はブラジルにも大きな影響を与えるが、特にコーヒー園は壊滅的な被害を受け、各地で大規模な失業問題が生じた。1930年に大統領に就任したバルガスは、強力なリーダーシップによって各種の課題に取り組んでいく。バルガス政策の骨子が、州ごとに分断されたブラジルを中央集権的な国家としてつくりなおすというものであった。そのなかで外国人移民をブラジル国民へと統合することも必要とされた。バルガスは州政府の権限を大きく剥奪し、人種保護という名目で全ての移民に対し割り当て制を導入した。日本移民はその全盛期にあったが、これが制限されるとたちまち日本移民の渡伯数は減少する。1937年になると、バルガスは軍部を掌握しクーデターを成功させる。エスタノーボ（新国家体制）という国家作りを掲げ、移民を制限するだけでなく、いかにブラジルへと同化させるかという問題に着手した。そして、各州政府に任されていた移民導入の権限を連邦政府が掌握した（三田 1995）。

一連のバルガスの改革は、日本人会や、日本語学校を展開してきた日本移民らに大きな打撃を与えた。まず、日本語学校は閉鎖され、ポルトガル語による授業でなくてはならないとした。外国語新聞も発行制限が加えられた。とくに1940年以降は政府の検閲がはげしく、41年になると、記事にポルトガル語をつけることが義務付けられた。そして、ついに邦字新聞は発行禁止となってしまった。発行者が日本人である場合は、ポルトガル語の新聞であっても禁止されることになった。農村部では最低30%はブラジル人でなければならないとしたが、日本人移住地の多くは日本人で構成されていたため大混乱を招く。こうして外国人移民を締付けるだけでなく、外国人をブラジル社会に同化させることで、人種を「ブラジル人」として統合しようとしたのである。

その後、日米開戦を経て、1942年にブラジルは日本との国交を断絶する。当然ながら領事館や公使館など公的機関は全て閉鎖。日本移民らは国内旅行の自由がなくなるばかりか、街中で日本語を使用することや、三人以上であつまることさえ禁止された。また、家庭内での日本語の使用も禁止された。また日本人が集住した移住地などでは、その指導者層が交換船で帰国することになった。

日本人移民の大半は、情勢を見守りながらも、その多くがブラジルに留まることを選択した。ブラジルのナショナリズムが加熱するなかで、「同化しないもの」として名指しされた一方で、戦時中の日本の様子は伝わってこなかったという。さらには、日本語の使用を禁止され、集会や組織形成まで禁止されると、日本移民らは「中・長期滞在を経て故郷に錦を飾る」といった生存戦略を修正せざるを得なくなったのである。

前山（1982）は戦前移民の生存戦術の変化を、「移動ストラテジーの変容」という概念によって説明している。日本移民の主体は例えば農家の次男、三男は長男に家督を相続する日本社会においては「非相続者」だった。そして日露戦争以降の大不況から、農家の次男三男は日本の「非相続者」としてブラジルに渡る。それでもなお、未開の新天地で財を築き故郷に「錦を飾る」ことが日本移民のブラジル渡航における基本的な目的であった。ブラジル

において日本移民は小作人であり、市民権をもたない「客人」でしかない。前山は日本移民がブラジルで「客人」に甘んじたのも、一攫千金して祖国に戻ることを「短期的な出稼ぎストラテジー」を有していたからだという。そして、財を築けずブラジルでの生活が長期化することで「短期的な出稼ぎストラテジー」は「長期的な出稼ぎストラテジー」へと変化する。

先ほどの歴史的背景から言えば、世界恐慌やコーヒー作付けの制限政策を背景に日本移民らのブラジルでの滞在期間は長期化し、自らのブラジルでの生存戦略の変更を余儀なくされた。この「出稼ぎストラテジー」は、第二次世界大戦による日本との分断から「永住ストラテジー」へと移り変わる。日本に帰ることは叶わず、手元にはブラジルで築いた人間関係と土地がある。前山はブラジルで永住することを選択した日本移民らをブラジルの「養子」になったとみる。さらに、ブラジルでは「客人」であり、日本では「非相続者」という行き場のなさから、ブラジルのほうが「よりました」と考える人々が増加した。実家（日本）に迷惑をかけず、養家（ブラジル）で苦勞に耐え忍んで生きていくことを選択することは「非相続者」で「客人」である移民らがたどり着いた自らのアイデンティティの置きどころであった。

それでは移民2世らはどうか。ブラジルの都市化、家族の永住、日本語教育の禁止などあって、ブラジルで教育を受けた二世は、相対的に移民らよりも高い学歴を取得していく。それは同時にブラジル生活の安定と、当地での将来展望が主となり、日本は従のものとなる。とりわけ、当時の日本移民の二世、三世らが「二世にとって日本は『祖国』であり、ブラジルは『母国』であるという解釈（前山 1982 p.40）」を有していることを指摘している点が興味深い。2世は「不完全な日本人」であり、取りうる選択は完全なブラジル人になるほかない。

もちろん戦時下にあっては「日本人」であることは認められないが、ブラジル人としての「2世」ならば許容されたという経緯もある。「日本は遠く血でつながる『祖国』であり、敬うべき存在であるが、ブラジルは自分を生み、育成してくれた『祖国』であり、母を愛するように愛すべき存在であるという。そしてこの両者の間に立ち、その媒介者・調停者・止揚者として両者を結びつける絆となるのが二世である、とするのである（前山 1982 p.41）」。こうした移民らの心性は戦後南米において広まった民族主義の影響下で強化されていくことになる。例えばそれは、1世、2世間での互いの呼称や認識枠組みの強く影響していく。

表 2-3 日系人をめぐるアイデンティティとカテゴリー

		分類者 (Categorizer)		
		日本生まれの 日本人	ブラジル生まれの 日系人	非日系 ブラジル人
被分類者 (Categorized)	日本生まれの 日本人	ニッポンジン (イッセイ)	ジャポネース (イッセイ)	ジャポネース
	ブラジル生まれの 日系人	ニセイ (サンセイ) ニッケイジン	ニセイ ブラジレイロ ニホンジン	ジャポネース
	非日系 ブラジル人	ガイジン (ブラジルジン)	ガイジン (ブラジレイロ他)	ブラジレイロ (その他種々)

前山 (1996 p.238) より

前山 (1996) は日本人・日系人・ブラジル人のアイデンティティを表 2-3 のようにまとめている。ここでいうカテゴリーとは、分類者側が被分類者側をどのように「呼称」し「認識しているか」によって分類されている。ここで注目したいのが、日本生まれは自らのことを「ニホンジン」と呼称するが、ブラジル生まれの日系人が自らを「ニホンジン」と積極的には規定していないことである。永住を決めたにもかかわらず 1 世が「日本」へのこだわりを見せる一方で、2 世らは急速に「ブラジル」への愛着をみせるようになった。「ブラジル二世がジャポネースであることを拒むのには、ブラジルの国家観が強く作用している。ブラジルは文化的にプルラリズムを志向しておらず、国民国家を志向している。アメリカ合衆国で、ジャパニーズと二世を呼ぶことは少しも反発を招かないが、ブラジルではそれ自体が誹謗になりかねない。ジャポネースは主として日本生まれの一世を指し、それに付随して national identity が予想されることが多く、そのことがポルトガル語のシンボル体系のなかでかなり強い意味をもつので、代わりに「ニホンジン」というアイデンティティが選択され、「人種」的側面が表面に押し出され、強調された (前山 1996 pp.237-238)」。こうして、日本移民のエスニック・アイデンティティが日本人から日系ブラジル人へと変化していくなかで、2 世の急速なブラジルへの適応・統合が進んでいったのである。

第 2 次世界大戦以降、ブラジルでの永住を推し進めていった日本移民らは、ブラジルでの成功をその子ども世代に託すようになる。他方で、戦後の日本は国内の不況だけでなく海外からの引揚者を受け入れることから、再度「余剰人口」を海外に移住させる必要が生まれた。戦後日本を統治していた連合軍の目をくぐりながら、1947 年には海外移住協会、1948 年には日伯経済文化協会が結成されている。国会でも「人口問題に関する決議案 (1949)」が可決されその解決策として余剰人口の海外移住が位置づけられたのである (若槻・鈴木 1975)。

ブラジルもアマゾン地方の開拓のための移民受け入れを進めており、1953 年には日本人移民を受け入れるようになる。1961 年には日伯間での移住協定が結ばれ、以降 1988 年まで

53,000 人も戦後移民がブラジルへと渡る。ブラジルは 1968 年から 73 年にかけて「ブラジルの奇跡」と呼ばれる GDP 成長率 11%の急成長を果たす。戦後の日本移民や日本から 500 社以上も企業が進出し、日伯連合の巨大プロジェクトも実施されるなど、戦後のブラジルでは日本との結びつきが強まった（ブラジル日本移民 80 年史 1991）。

そして、経済的な結びつきは、戦前の日本移民が日本企業を受け入れるための「地ならし」をした側面を見過ごす訳にはいかない。サンパウロ人文科学研究所はブラジルの最高学府であるサンパウロ州立大学の入学者の一覧から、日系人の入学者数を調べている。1949 年には 3.4%、その後 1978 年には約 12%、1990 年の段階になると約 17%前後と、非常に高い水準で推移している。『コネ』のない社会の中で社会上昇して行くには、高学歴を身に付けることである」といった意識はブラジルの学歴社会化の浸透とともに強まっていった（宮尾 2002 pp.250-251）。少なくともブラジルにおける日系人の社会上昇は進んでおり、ブラジルでも一大勢力を築くようになっていた。ここに戦後日本移民や日本企業が進出することで、ブラジルでの「日系社会」が強固なものとなっていったのである。

3. ブラジルから日本への移動—移動システムの史的変遷（1970 年～2008 年）

前節では、ニューカマー日系ブラジル人の前史である、ブラジル日本移民を概観した。それは、ブラジル日本移民（日本人）が徐々に日系人（ブラジル人）となっていく歴史でもある。本節で検討するのは日系ブラジル人の日本への移動である。特に、日系ブラジル人のブラジルへの移動を特徴づけるのは、市場媒介型の移動であったことである。この議論は、日系ブラジル人の日本への移動が、徹底的に市場の動向に依拠していたことを説明するものであり、日本における日系ブラジル人の状況を説明することができる。

日系ブラジル人による日本への移動過程を振り返る際に、2 つのターニングポイントを設定することができる。その 1 つは、1989 年に改正され 1990 年に公示された出入国管理法である。もう 1 つは、2008 年末のリーマン・ショックを端緒とする経済不況とその煽りをうけた大量帰国者の発生である。そこで以下では、日系ブラジル人の日本への移動を、これら 2 つのターニングポイントの前後、すなわち日系ブラジル人の大量流入の前史である入管法改正前と改正後、そして日系ブラジル人が安定して仕事を得るようになり、定住化が進んだとされる労働者派遣法改正後、そしてリーマン・ショック以後の 4 つの時期にわけてみていこう。

(1) 入管法改正以前（1970 年～88 年）

日本政府は、戦前の日本移民と同じく戦後不況の打開策のひとつに海外移動を位置づけ、コチア青年移民や産業開発青年隊といったブラジルへの計画入植者や、日本海外協会連合会や日本海外移動振興株式会社などからの営農指導者を移民としてブラジルへと送っている。ところが、戦後のブラジル日本移民の多くはブラジルでの経済的な成功を夢見ていたが、移住地の劣悪な環境や文化的なギャップなどを理由に日本へ帰国することがあった。あるいは、後述するようにブラジルの不安定な経済状況から、散発的に日本へと帰国することがあ

った。日本人移民1世の帰国は日本人としておこなわれたため、統計上、把握することが難しく、かれらは日本・ブラジルどちらにとっても不可視で隠れた存在であった（梶田1998）。

こうした不可視で隠れた存在が、ブラジルで顕在化していくのが1985年以降である。森（1995 p.505）によると、ブラジルの日系新聞にデカセギ求人広告が掲載されたのが1985年である。1985年以降、日系新聞には多数のデカセギ求人広告が掲載されるが、最初期に求人広告を出したのは神奈川のS旅行社とされる。このS旅行社は、ブラジルでの生活経験をもつ日本移民1世に白羽の矢を立て、ブラジルに支所を開設させる。S社は日本で求人を集め、サンパウロ支社が日系新聞に広告を出し渡航者を集めた。渡航に関わる業務については旅行業者に外注する形式をとった（樋口2005b p.144）。

1987年には日本から新たな人材派遣会社が進出し、デカセギ募集が本格化していく。新聞広告のみならず、斡旋業者のブローカーが日本移民の集住地を訪問し、デカセギの説明会をおこないリクルートするようになる（森1995 p.506）。当初ブローカー役はブラジルと日本での生活経験をもつ一世がおこなっていたが、後に2世や3世が参入しブラジル全土で拡大していく（樋口2005b p.147）。以上のように、80年代中頃の日本へのデカセギ募集の本格化には、ブラジルの経済不況というプッシュ要因と日本のバブル景気と労働力不足といったプル要因を見出すことができる。

前節でみたように、ブラジルは第2次世界大戦後、資源国として1960年～70年を通じ「奇跡のブラジル」と呼ばれるほど経済成長を遂げた。しかし、1980年代には対外債務が累積したことでハイパー・インフレを招く。1987年のモラトリアムを宣言によって、ブラジルの対外的な信頼は失墜する。1989年から1990年にかけてはインフレ率が1000%を超え、1999年には通貨危機を経験するなど不安定な経済状況が続いてきた。当時の日本移民の多くは、都市部においては商業・サービス業、近郊・奥地においては農業に従事していた。経済不安とインフレはかれらの家計を直撃した。その結果、戦前戦後を通じて比較的安定した生活を送っていた2世、3世のなかにも渡日希望者が生じることになった（ブラジル日本移民80年史1991）。もちろんこうした2世、3世は前節でみたようにブラジルに適応・統合されていた人々であったこともあり、日本においては「ブラジル人」として受け入れられることになった。

ブラジルが経済不況下にあったころ、日本は1980年代後半から1990年にかけてのバブル景気に湧いていた。とりわけ平成元年を前後して、建設業、小売業、製造業の労働不足感が顕著であった（労働省1990）。以上のようなプッシュ・プル要因は、デカセギ希望者を増加させ、ブラジルにおける旅行社や斡旋組織の設立と組織化に拍車をかけることになる。1987年には高額だった渡航費用を旅行社が建て替えるようになり、渡日するための敷居が一段と低くなる（森1995 p.507）。デカセギ希望者のリクルートも、サンパウロ州だけでなくパラナ州へと広がり、アルゼンチン、パラグアイへと広がっていく（樋口2001,2005b）。労働力不足に喘いでいた日本企業にとって、日系ブラジル人の存在は、日本人に替わる魅力的な「労働力の貯蓄源」であり、そしてそれはファックス一枚をブラジルに送信するだけで、日本へと供給さ

れるデカセギ労働者を増加させることになった（樋口 2005b p.144）。

(2) 入管法改正後（1989年～2003年）

ブラジルにおける経済不況と日本における労働力不足、さらには前述した渡日希望者の送り出し・受け入れネットワークが事業化されていくことで、ブラジルから日本へのデカセギ移動者が徐々に増加していく。これに拍車をかけたのが、1989年に改正、1990年に公示された出入国管理法である。入管法は出入国をコントロールするとともに入国後の生活を規定する。次節で入管法の影響については詳述するが、改正入管法の焦点のひとつが、「定住者」ビザの創設であった。「定住者」ビザは日本移民3世までの入国と就労を許容する。それは1908年にはじまったブラジル日本移民とその子孫の大半をカバーするものであった。そのため、「日本人である」日本移民1世、「日本人の配偶者等」のビザで渡日していた2世、「定住者」要件によって渡日できるようになった3世が、比較的容易にブラジルから日本へ渡航し就労することが可能になった。

さらに、上述した渡日を支えるシステムが80年代中頃から組織化したことで、ブラジルでさまざまな生活状況にある人々が渡日した。デカセギは貯蓄やブラジルへの仕送り、ブラジルでの住宅や耐久財の購入を目的としておこなわれた¹²。仲介料や手数料を考えれば、デカセギ希望者の負担は少なくないが、それでも航空券の手配、ビザの取得、就職先の確保を代行する業者の存在により、デカセギは「手軽」なものとなった。デカセギの目的も徐々に変容し、生活状況の改善というだけでなく、より良い生活や趣味のため渡日するケースも見られるようになる（森 1993）。

ただし日系ブラジル人の日本における扱いは、1991年のバブル崩壊と経済不況を経て大きく変化していくことになる。そもそも、日系ブラジル人は日本人の代替労働力であったが、安価な労働力として位置づけられていくことになる。具体的には、経済不況の影響により、多大な影響をうけた製造業界においては、時間あたりの単価は高額だが、コストカット目的の間接雇用が中心となり雇用状況は不安定性を増していく（丹野 2007）。

日系ブラジル人の就労先は経済不況の影響を受けにくい食品加工業などへと広がりを見せていくが、製造業に比べて時間あたりの単価が低い食品産業への職業移動は、経済的な不安定さを助長することになり、残業時間の増加や家族共働きが当たり前になっていった。また、デカセギが日系ブラジル人1世から2世、3世へとシフトしていったことはすでに述べたが、2世、3世は日本での生活経験をもたず、ポルトガル語環境で生活してきた場合が多く日本語能力も低い。そのため日系ブラジル人の渡日は、いっそう旅行社や斡旋業者への依存を高めることになる。デカセギとして日本へと渡った多くの日系ブラジル人は、廉価なアパート

¹² 森（1995）によれば、3万ドルのアパート購入のため、当時1ドル約145円のレートであれば1ヶ月1,000ドルの貯蓄で自宅を購入することができた。また、ブラジルでは高価な自動車を購入することもデカセギをすれば可能となった。そのため当初のデカセギは自宅購入などを目的とする青年層の移民が多かった（森 1995 p.500）。

や公営団地,場合によっては就職先が借り上げたマンションなどに集住した。急増した日系ブラジル人の多くは,地域の生活ルールを知らず生活することになる。そのため,日系ブラジル人と日本人住民との摩擦や確執が課題視されるようになった(都築 1995)。

(3) 労働者派遣法改正と定住化(2004年~2008年)

2000年代も中頃になると,時間あたりの単価の低下による滞在の長期化,デカセギの量的拡大を背景として,日系ブラジル人の日本滞在を「定住化」と表現する潮流がうまれた。日系ブラジル人集住地域における社会問題や教育問題は,日本社会との軋轢を生じさせるが,その軋轢こそが,日系ブラジル人が長期間にわたって滞在し,今後も生活していくことになる証左であるとされた(例えば 駒井編 1995)。

地方自治体では,日系ブラジル人を対象とした施策を整備するようになる。それは,充分ではないにしても,日系ブラジル人を「住民」として包摂するための交渉過程であったともいえる。とりわけ,日本有数の日系ブラジル人集住地域である浜松市が呼びかけた「集住都市会議」は,今日に至るまで地方行政から国政への意見提言の機関として機能している。

ただし,日系ブラジル人に定住傾向があったとしても,彼らの生活状況が改善したわけではない。先述の通り,バブル崩壊後の経済不況により,企業の雇用能力が低下していくことは,日系ブラジル人にとっても就労機会の減少を意味した。したがって,就職先を確保するため,専門の派遣業者や斡旋業者への依存を高めることになった。そしてそれは,コスト削減のための安価な労働力として利用され,経済状況によって真っ先に切り捨てられることを意味する。

2004年に労働者派遣法が改正され,製造業への労働派遣が解禁される。不景気下においては,日本人にしてもブラジル人にしてもコストだけが問題となる。そして,そもそもの労働力需要が減少したことで,ブラジル人から日本人へと労働力の切り替えが行われていくことになった(丹野 2007)。そして流動的な労働力需要に対応できる存在として日系ブラジル人は位置づくことになる。「正規雇用から非正規雇用への切り替えが産業全体で進むなか,非正規雇用に伴う不安定性という十字架を,ブラジル人は集団全体で背負わされた格好(樋口 2005a p.9)」になった。

それでもなお,仕事を必要とする日系ブラジル人は,居住地を換え,職種を換え,就業時間を増やして収入を確保してきた。フレキシブルな労働力として流動性を増した日系ブラジル人にあわせて,雇用主や派遣会社も労働力の呼び込みに注力するようになる。

例えば,筆者の調査した関西の大手派遣業者は,アパートや場合によっては臨時の運搬用コンテナを住居に改装し,ブラジル人を契約期間中生活させるという方法をとった。厳しい環境ではあるが,派遣業者は一時的に労働力を預かるといい,ブラジル人側は賃料が安くあがり,より良い仕事があればすぐに出て行いけるのでかまわないという。中小食品加工業者は90年代後半からコンビニ弁当の需要増加を背景にブラジル人を雇うようになった。提携業者のマンションを借りあげて,ブラジル人を居住させている。ブラジルの旅行業者を通じ

で日本で長期滞在する家族と短期滞在の若者を集めている。家族滞在者には 1LDK の部屋を、短期滞在者は 3 名から 6 名のシェアタイプに居住する。

ブラジル人派遣を取り扱う企業は、ブラジル人の便益に加えて、契約先企業と提携し通訳を派遣する。それは流動的な日系ブラジル人の就労状況に即したものであるが、「労働者たちは短期的な手取額の最大化を選択することによって、就労のみならず、自らの日本滞在における社会的な側面をも請負業者に依存することにより、生活の全てが就労問題に取り込まれてしまう（丹野 2005 p.203）」。

定住化の論拠として議論されたブラジル人商店や自治体などがブラジル人向けサービスの提供は、ブラジル人コミュニティの誕生を示唆する研究はあるが、あくまでも一部の日系ブラジル人の動向を指し示すものでしかなく、その他多くのブラジル人はブラジル商店や自治体サービスを享受・消費して「見えない」まま日本で生活していたのである。大多数の日系ブラジル人は、一定期間就労しブラジルへと帰国する。より良い仕事を見つけるために居住地を変える場合もある。このような状況では、移動者コミュニティの形成や子どもたちの教育に弊害があるのは明らかであった。しかし次節で見るように、こうした状況を抜本的に是正するような施策はとられなかった。

4. 再びブラジルへーリーマン・ショック以後（2009 年～）

日本政府が具体的な移民政策を施行することができぬまま迎えた 2008 年。リーマン・ショックとそれに伴う経済不況は、日系ブラジル人労働力のさらなる搾取を生んだ。先述しているように、バブル崩壊以降の経済不振は、自動車に代表される製造業界に多大なる影響を与えてきたが、日系ブラジル人に関しては雇用の更なる不安定化をもたらした。コスト面で差がなければ、企業は日系ブラジル人から日本人へと労働力を切り替えていく。

リーマン・ショック以降、その傾向はいつそう顕著なものとなり、日系ブラジル人はこれまで以上に人件費圧縮のための調節弁となっていく。他方で、バブル崩壊以降の雇用の流動化により、賃金が多少安くとも中小企業に直接雇用されていた人々や景気の影響を受けにくい食品業に従事する人々は、製造業界で間接雇用されていたブラジル人に比べれば経済危機の影響が少なかったとされる（樋口 2010）。経済危機により日系ブラジル人が日本人と同様「派遣切り」されたことは、各種メディアにおいて大きく報道された。行政はもちろん労働組合なども日系ブラジル人の雇用喪失には敏感に反応している。こうした状況から、すでに日系ブラジル人は「見えない」存在というより「見える」存在になったという指摘もある（浅川 2009）

筆者の知りうる事例では、日系ブラジル人の労働問題は 2011 年頃から再び「見えなくなった」ように思われる。先ほど取り上げた食品加工工場は変わらずブラジルから労働力を呼び寄せている。また関連企業は諸経費を低く抑えられる都市部から山間部へ工場を移転し、いつそう日系ブラジル人は再び「見えない」存在となっている。「仕事がなくなったから帰国した」というのは、日本からブラジルへと渡った人々が語る代表的な帰国理由である。

こうした語りは、サンパウロ州やパラナ州奥地の地方都市へと帰国した人々に聞かれた。

ここで日本におけるブラジル人の外国人登録者数を確認しておこう。1989年に14,528人であったのが、2008年の316,967人と急増している。その後経済危機を経て2011年に210,032人と減少した。2011年における幼児から19歳の外国人登録者数は、46,010人である。経済危機を経て徐々に人数は減少しているも10万人以上ものブラジル人が日本で生活している。このことがブラジル人の定住化を意味するのか、あるいは減少傾向を維持するのかは今後の経過を待たなくてはならない。いずれにしても、本研究との関係からいえば、ブラジル人の急増と急減がわずか20年足らずのあいだにおきたことを確認しておきたい

表 2-4 日本におけるブラジル「国籍」の在留者数

年次	在留外国人数	ブラジル国籍者数
1989	984,455	14,528
1990	1,075,317	56,429
1991	1,218,891	119,333
1992	1,281,644	147,803
1993	1,320,748	154,650
1994	1,354,011	159,619
1995	1,362,371	176,440
1996	1,415,136	201,795
1997	1,482,707	233,254
1998	1,512,116	222,217
1999	1,556,113	224,299
2000	1,686,444	254,394
2001	1,778,462	265,962
2002	1,851,758	268,332
2003	1,915,030	274,700
2004	1,973,747	286,557
2005	2,011,555	302,080
2006	2,084,919	312,979
2007	2,152,973	316,967
2008	2,217,426	312,582
2009	2,186,121	267,456
2010	2,134,151	230,552
2011	2,078,508	210,032
2012	2,033,656	190,609
2013	2,066,445	181,317
2014	2,121,831	175,410

法務省「在留外国人統計（旧登録外国人統計）」各年次版より

失職したブラジル人への政府対応は、これまでに比べれば素早い対応であった。特に2009

年初頭に厚生省が主導したブラジルなど母国への帰国希望者に対する「日系人離職者に対する帰国支援事業」は「手切れ金」政策として大きな話題となった。いわゆる帰国費用の一部負担を打ち出したのである。内閣府が2009年3月末、「日系定住外国人施策推進会議」を開催し、国内定住者にたいしては、地方自治体を中心に求職支援などがおこなわれた。文部科学省は、同日に初等中等教育局長通知「定住外国人の子どもに対する緊急支援について」を発出。そして4月には国際教育交流政策懇談会が「定住外国人の子どもの就学支援に関する緊急提言」を提出したことがきっかけとなり、国政においてブラジル人学校の窮状が議論されるようになった。その結果打ち出されたのが、以下の二つの政策である。

まず、定住外国人の子どもに対する緊急支援措置として、2009年度補正予算で文部科学省に約37億円が措置され、文部科学省は、国際移動機関(IOM)に拠出して、3年間の予定で「定住外国人の子どもの就学支援事業」(通称「虹の架け橋教室」事業)を実施した。また、ブラジル人学校の経営を安定化させるために各種学校設置認可の弾力化が進められ、2009年末に文科省はさらなる認可基準の緩和を各都道府県に求めるようになる。この各種学校認可の弾力化によって、認可のハードルが下げられ2012年時点では12校が各種学校として認可されることになった。

そして、2011年には内閣府から「日系定住外国人政策に関する行動計画」が公表される。同計画には「ブラジル人学校等の各種学校・準学校法人化の促進等の支援、ブラジル本国政府などへの要請等」の項目が含まれており、同計画にそって、翌年には「外国人学校の各種学校設置・準学校法人設立の認可等に関する調査委員会」が設置され、各種学校設置・準学校法人設立の認可のさらなる弾力化が模索されるようになった。

それでは受け入れ側となったブラジルの状況はどのようなものであったのだろうか。ブラジルは、80年代のブラジルは経済不安を抑えることができず、危機的な状況を招いたことで日系ブラジル人の「デカセギ」を生じさせた。窮地に陥ったブラジルは、その解決を世界銀行やIMFといった国際機関に求め、構造調整政策(Structural Adjustment Program)を受け容れる。

周知のように、世界銀行やIMFが主導する構造調整は、経済システムだけでなく、行政システムの抜本的な変革を求める。こうして、国際的な経済競争力向上のため、保守的な経済政策を見直し、徹底的なコストカットが実施された(Kempner and Jurema, 2002)。これらの新自由主義の影響が色濃い改革は、ブラジル経済を立て直すだけでなく、劇的な経済成長をもたらした。そしてブラジルの政策に、これまでみられなかった連邦政府主導のアウトプット評価や数値管理を持ち込むことになった。

教育政策をみたとき、連邦政府は地方分権化による権限委譲を推し進める一方で、ナショナルカリキュラムを策定し、全国的な基準設定と到達目標による管理統制を強めていった。ここでいう基準とは、ブラジルが独自に定めた国内基準だけでなく、OECDをはじめとした国際機関が提示する開発目標や先進各国の平均値などを参照した国際基準でもある。国際基準へ到達するためには、客観的な基準を設定し、これに基づいて測定・評価されなくてはな

らない。また対外的に説得力を持った現状評価を提示できなければ、いつまでも「経済だけが発展した国」として評価されてしまう。こうした国際基準を意識した目標設定は、先進諸国に追いつこうとするブラジルにとって避けられないものだったのだ。

さらに国際的な地位向上のために、ブラジルには乗り越えなくてはならない大きな国内問題が存在している。再三にわたり UNESCO や世界銀行から指摘されてきた、国内に根強く残る民族差別や経済格差の是正である。これまでも国際人権規約に則った基礎教育の充実や中等教育機関の門戸開放が要求されてきたが、十分な対応をとることができていなかった。

経済の立て直しを課題としていたブラジルにとって、教育問題や民族問題は優先度が低いテーマであった。しかし、2003年に労働組合出身のルーラ大統領が就任すると、経済成長を維持しながら国内の貧困問題に立ち向かうことを宣言し、政策の軸に貧困問題の解決と、子どもたちの教育が位置づけられることとなった。ここに、教育と福祉も世界的なスタンダードに近づけることが目標とされたのである。

以降、ブラジルの行政文章には、UNESCO のサマランカ宣言（1994）、世界教育サミットのダカール目標（2000）、ミレニアムサミットでのミレニアム開発目標（2000）などが散見されるようになる。こうした宣言や目標で目指された「万人のための教育（Education for all）」は、全国的な先住民、黒人差別などの民族問題、都市部と農村部の格差是正に取り組むための論拠となった。例えば、2000年代に入ると、教育省主導の下、各地で先住民教育に関する国内会議が開催された。そこで改めて国内の民族差別や地方教育格差が指摘されたことを受け、連邦政府は2004年に「継続・識字・多様性教育局（Ministério da Educação, Secretaria de Educação Continuada, Alfabetização e Diversidade Diretoria de Educação para a Diversidade）」を教育省内に新設した。これまで教育から疎外されてきた人々に焦点を当て、より厳しい状況にある人々へ支援が行き届く制度を設計することがその目的である（MEC 2004）。

注意が必要なのは、ブラジルにとって不平等是正の教育といったとき日系ブラジル人がその範疇に入りにくいということにある。筆者によるブラジルの聞き取りにおいても、日系ブラジル人の「再入国」に戸惑う声が聞かれた。

「日系人の問題は把握しているが、どのように対処していいかわからない。（政府教育局）」

「ブラジルの公教育では「日系人」よりも優先度の高い課題を抱えている。（ブラジリア多様性教育担当）」

「実数の概要は把握しているが、現状はわからない。現場の先生に聞いてくれ（ロンドリーナ教育局）」

「州立学校、市立学校へ入学した場合人数は把握できる。しかし、地方への帰国者が多く対応ができない。子どもたちの学力、言語能力が違いすぎる。学校での問題もあるが、子どもたちの文化的な適応の問題も認識している。ブラジル文化になじめず非行にはしる子どもたちにどのように対応すればいいか（トッパン市公立学校校長）」

以上のように、ブラジル政府は日系ブラジル人の問題を「日本政府の問題」もしくは「優先度の低い問題」とした。他方で、日本政府は日系ブラジル人の問題を「ブラジル人の問題」と考えたからである。その狭間にあつて、日系ブラジル人家族はブラジルでの生活の立て直しを行うことになったのである。

5. おわりに

本章では、「日系ブラジル人」の歴史に注目することから、その変遷を概観してきた。戦前は日本の不況の打開策として身一つで送り出され、日本でデカセギ労働力が必要とされれば労働力の調節弁とされてきた。こうした日系ブラジル人の不安定性は、市場媒介型移動システムを背景とする日本へのデカセギに当初から内包されていたものであり、それゆえに政治・市場の論理によって日本・ブラジルでの生活が大きく左右されることとなった。

2 節で戦前移民の歴史を概観してきたように、日本からブラジルへの人の移動は「人口問題」と「経済問題」の解決策としてである。そしてブラジルにおいては「奴隷の代替労働力」として受け入れられてきた。その後、ブラジルから日本への日系ブラジル人の移動は、「日本人の代替当動力」であり都合の良い「雇用の調節弁」として利用されている。そして、経済危機以降のは安価な労働力への切り替えが進み雇い止めされていった。

それでは法的状況はどうか。戦前の人々の移動は、日伯間で設定された「移民枠内での移動」であり、日本人移住地の設定などは国家レベルでの「事業」であった。他方でブラジルの政治状況によって、日本移民は制限・抑圧されることにもなった。1990 年を前後するニューカマー外国人としての「日系ブラジル人」の移動も、経済的理由に後押しされた「入管法改正」が背景にあり、「定住者ビザ」による自由な就労と移動が保障された。しかし、経済危機以降は日系人の「再渡日の禁止」といった一方的な打ち切り策が行われている。

このように、ブラジル日本移民と日系ブラジル人を取り巻く国際移動は「法制度の整備と後ろ立てによる流動性の高さ」と「経済的論理による都合の良い労働力」という点に特徴がある。そして、「流動性の高さ」は経済的要因と法的要因によって促進されることもあれば抑制されることもあった。ポジティブな要素を挙げるとすれば、流動性の結果、常に日本とブラジルの間に人の移動が生じており、ブラジルにおいても日本人移民や日系コミュニティが存続してきたことである。そして、日本の情報は様々な形でブラジルに届けられ、日系ブラジル人コミュニティにおいても、日本就労の厳しさや日本での子育ての難しさが共有されてきた。

それでは、日本にやってきた日系ブラジル人が、「日本定住」を進めてきたにも関わらず、雇用喪失による「帰国」をどのように捉えればよいのだろうか。まずは雇用を喪失した結果、「帰国」をしなければならぬほど、日系ブラジル人の就労状況や生活状況が不安定だったことが理由となろう。それでも、一部の日系ブラジル人は平時の就労時から生活が不安定だったこともあり、ある程度の蓄えを持っていた。蓄えが尽きた人から帰国する場合もあれ

ば、働き手だけを残して帰国する場合もある。それでも、今回の大量帰国帰国が生じたのは、日本へ見切りをつける人が帰国したからである。したがってブラジルにおいて親世代にインタビューしたとき、様々な帰国に向けての「準備」が語られることになる。もちろん、こうした「準備」を行っていた多くの親は、帰国に向けた教育戦略を行使してきたのである。

3章 日本からブラジルへの移動を支える教育—ブラジル人学校の事例から

1. はじめに

短期的なデカセギを目的に日本へ移動した日系ブラジル人にとって、子どもたちを日本の公立学校に通わせることは消極的な選択であった（小内・酒井 2001）。日本の学校においては教師にとっても、子どもたちにとっても様々なコンフリクトが生じていた。したがって、ニューカマー外国人の流入と日系ブラジル人に関する教育研究は、主に公立学校での事例研究が多かった（例えば 児島 2006, 森田 2007）。いわば日本の教育と日系ブラジル人のカルチャーショックの大きさが教育社会学の課題として浮かび上がったからである。

こうしたなか、ブラジルへの日本移民と同じように、自助的な教育組織も日本各地で作られていった。ブラジル人学校は、1990年代に日系ブラジル人とその配偶者（以下、両者をあわせて日系ブラジル人とする）が大量渡日したことをきっかけとして、各地に子どもたちを預かる自助的な託児所や私塾的な学校が設立されたことに由来する。

校舎を構え、カリキュラムを設定し、教師が常駐するいわゆる「学校」としては、1995年に創設された大泉日伯学園が第一号といわれる。以来、ブラジル人学校は、他の外国人学校に比べて歴史は浅いものの、学校数は最多で90校を超え、日本で最大規模の数をほこる外国人学校となった。急速に日本で広まりを見せたのはニーズが存在したからである。

しかしながら、ブラジル人学校は日本の外国人教育問題のなかでも目立たない存在であった。それは、各学校の規模が小さいことや、日本社会との接点をほとんどもっていなかったことによる。また、単なる帰国準備の学校として表面的にしか理解されていなかったため、日本社会の問題というよりブラジル人社会の問題とされてきた。こうしたなかで、2008年末の経済危機以降、ブラジル人学校は一躍注目をあつめることになった。

経済危機の影響によって製造業を中心に業績が悪化し、多くのブラジル人が職を失った。その結果、日系ブラジル人家族は転居や帰国を余儀なくされ、子どもたちは通っていた学校をやめざるをえなくなる。日本に留まったとしても、親が失職したため学費を支払えず、帰国した人びととおなじく学校に通えないケースも各地でみられるようになる。こうして、各地のブラジル人学校は生徒を失い、廃校・休校せざるをえない状況となった。

こうした苦境にありながらも、ブラジル人学校が果たしてきた役割は大きいと筆者は考える。特に、本研究が対象とする「ブラジルに帰国した人々」が日本での教育を考えたとき、もっとも有力な選択肢が「ブラジルの教育を行うブラジル人学校」である。そして、ブラジル人学校は以下でみていくように、日本で定住する人にとっていかなる意義を有するかといった議論と、ブラジルに帰る人にとっていかなる意義を有するかという2つの議論が行われてきた。もちろん、「定住」と「移動」といった日系ブラジル人のライフスタイルに関しては、当該のブラジル人学校も充分認識している課題である。次章では日系ブラジル人の親の教育戦略を検討していくが、教育戦略の柱となるのが学校選択であり、ブラジルに帰国する

人々に取ってはブラジル人学校に子どもを通わせることが最もポピュラーで効果的な教育戦略となる。そこで本章では浜松にあるブラジル人学校を事例とし、いかなる教育が行われているのか、そしてそれがどのような教育理念によって行われているのかを検討していく。

2. ブラジル人学校の位置づけとその役割

(1) 定住化とブラジル人学校

これまでのブラジル人学校に関する研究で多くを占めてきたのは、ブラジル人学校に通う日系ブラジル人の家族や子どもに注目した研究であった（イシカワ 2005,佐久間 2006,小内編 2003,小内編 2009 など）。佐久間（2006）は「もともとブラジル人学校は、保育園活動の延長から始まった」とし、「創設の経緯からみても、一時的に滞在する子どもの仮あずかり所としての性格が強い」（佐久間 2006,p.108）のものであるとしている。ブラジル人学校の自助的な成り立ちと、親の就労形態に影響を受けた「一時的滞在」「帰国後を見据えた教育」といった視点は多くの研究に共有されているところである。

こうした研究において描かれたブラジル人学校像を要約すれば以下のようなになるだろうか。ブラジル人の多くは「デカセギ」目的で渡日する。一時的に就労し、貯金を成してブラジルへ「帰国する」といった将来展望をもつ。そこでブラジル人の親のなかから自助的組織として、子どもを預かるサークルや組織が立ち上がる。しかしブラジルの不景気も相まって、日本での滞在が長期化し、託児以上の義務教育段階を備えた「学校」が必要とされる。そこで就学前教育から、義務教育へと学校段階が拡充されるとともに、学校が組織化されていく。

日本におけるブラジル人の長期滞在がみられるようになると、ブラジル人学校が抱える課題についても指摘されるようになった。例えば、イシカワは（2003）「帰国した場合、日本でブラジル人学校に通ったメリットはあるといえるが、しかし帰国をする者が多数派であるとはいえない。今後、日本に永住する場合、日本語の読み書きができない状態にある子どもが、どのような仕事につけるかが問題になる。かれ・彼女らは日本語が十分に使えず、日本に生きる知識、訓練も不十分なまま社会に出ることになる。おそらく、親と同じような非熟練労働者になる可能性は否定出来ないだろう」（イシカワ 2003,p.92）と指摘している。

また、東海地方でブラジル人学校に子どもを通わせる保護者の学校選択や将来展望に関する調査を精力的におこなってきた小内（2009）らは、経年的な調査の結果からブラジル人学校の意義を認めながらも、結果的に日本社会からの「セグリゲーション」を引き起こしているのではないかという。

ブラジル人学校の生徒の親の多くは日本で長期間生活しており、実質的な生活拠点を日本にもつ。「こうした動きに対して、これまでのブラジル人学校自身が歯止めをかける役割を果たしてきてしまったと言えるのではないだろうか。ブラジル人学校は、ブラジルの教育との接続を「売り」にしており、親たちも、それを期待してブラジル人学校に子どもを通わせてきた。しかしながら、ブラジルでの進学が実現する生徒の割合は、きわめて低いと言わざるをえ

ない」(小内編 2009,p.63)。

このように、ブラジル人学校が「ブラジルへの帰国をめざす人びとのためのものである」と語られる一方で、ブラジル人学校に通うことで、日本語を話すことができない、日本社会に馴染みがないブラジル人の子どもたちが生まれていく。「定住化」しつつある人びとによる「ブラジル人学校」という選択は、日本社会からの離脱を結果的に生じさせるという点は重要な指摘であろう。

(2) 流動性とブラジル人学校

「定住化」を背景としたブラジル人学校研究がおこなわれる一方で、それとは対照的な観点であるブラジル人の「移動性」「流動性」に着目した研究もおこなわれるようになった。経済危機以降の動きを見るまでもなく、日系ブラジル人の就労は保障されたものではない。少しの経済変動がかれらの生活基盤を奪い去り、国内・国外移動を誘発してきたことからすれば、日系ブラジル人については定住論の立場から議論するよりも、流動性の高い人びととして議論する必要もある(樋口 2010, ハヤシザキ・山ノ内・山本 2012)。

こうした立場からみれば、ブラジル人学校が果たす意義はまた違ったものとしてみえてくるだろう。すなわち、流動性を前提とした生活を支える1つの拠点としてブラジル人学校を考えた場合、ブラジル人学校は「子どもたちの日本社会への送り出しの最前線」(藤原 2008,p.104)とも位置づけうる。拝野(2011)が指摘するような「日本に定住するならば日本の学校へ、ブラジル人学校は帰国する子どもたちのための学校という二項対立的『境界』設定ではみえてこない、子どもたちが望む『生きる場所』」(p.287)としての存在意義もみえてくるからである。

ただし、ブラジル人学校の役割をめぐるこのようなさまざまな解釈は、ブラジル人学校の現実においては必ずしも排他的なものではなく、それぞれのブラジル人学校によっても異なる。とりわけ、経済危機以降のきびしい状況において、新たに生まれたブラジル人の教育に関するニーズを前に、自校の存続をかけた存在意義の問い直しがそれぞれの学校に迫られているといえよう。そもそも数十万人規模のエスニック・グループを「定住」「移動」のいずれかの観点から捉えることにも問題がある。したがって、それぞれの学校が「帰国(流動)する子どもたち」「日本に残る子どもたち」にたいして、いかなる教育理念を打ちたて、日々の教育に向きあっているのかを明らかにすることが必要となる。ブラジル人学校に注目することは、それが日本社会において果たしてきた役割のみならず、子どもの「生きる場所」の多様な保障のありようについて考えることでもある。

ここで注目したいのが、ブラジル人学校が蓄積してきた時間である。1995年をブラジル人学校が初めて設立された年とするならば(ハタノ 2005),それからすでに15年以上が経過したことになる。時間の経過による子どもの成長と社会情勢の変化を考慮するならば、ブラジル人学校を従来強調されてきた「仮あずかり所」(佐久間 2006,p.108)や「日本の学校に適応できなかった子どもたちの受け皿」(拝野 2011,p.142)といった観点だけではない議論

も可能であろう。なにより、経済危機以降に生起した新しいブラジル人のニーズにたいして、各々のブラジル人学校は自らのあり方を問い返し、変容させているのである。

3. 日本におけるブラジル人学校の位置づけ

ここで、日本におけるブラジル人学校を取り巻く状況について簡単に触れておく。日本でニューカマー外国人の教育問題が認知されはじめたのは90年代にはいつてからのことである。ニューカマー外国人の増加をうけ、当時の文部省は1991年にはじめて「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」をおこなった。

それとともに、外国人に対しても就学通知を発行するようになる。時を同じくして、各地にブラジル人学校が設置されていく。1999年には、日本のブラジル人学校長の声がブラジル本国にも届くようになり、ブラジルの教育省が日本におけるブラジル人学校の学校認可をおこなうようになった。2000年代にはいると、ブラジル人学校に関して組織的なうごきがみられるようになる。2001年にブラジル人学校連盟（Associação das Escolas Brasileiras no Japão 以下 AEBJ）が結成される。AEBJは2011年に法人格を取得して日本での確固たる地位を得る。ブラジル人学校の意見を集約し、日本政府ならびにブラジル政府への提言を担うようになった。

また地方自治体を中心にブラジル人への支援も取り組まれるようになった。2002年には、ブラジル人集住都市のひとつである浜松において、13の自治体が集まった第一回「外国人集住都市会議」が開催される。その後「外国人集住都市会議」は、加盟自治体が増え、2013年には、29都市が加盟している。地方自治体から国政へ意見を提言する主要な組織となっていく。地方自治体においては、県、市町村において外国人学校への支援がおこなわれるようになった。

2000年代初期は経済界を筆頭にインターナショナル・スクールへの支援拡充がうたわれた時期であるが、その流れを受けて文部科学省は2003年に学校教育法告示を改正し、外国人学校の取り扱いを本国準拠とした。2004年になるとブラジルからの認可を前提とし、ブラジル人学校19校について日本での高等学校卒業認定をおこなうことになった。2005年に岐阜県が各種学校認可の基準を緩和したことで、ブラジル人学校としては全国で初めてHIRO学園が各種学校として認可されることになった。これまでブラジル人学校の多くは「私塾」として扱われていたため、明確な法的位置づけがなされていなかった。

各種学校として認可されることで、教育基本法上の位置づけを得ることになり、行政からの補助金が支出されるようになった。各種学校の認可を受けるためには、運営団体の資金、校地および校舎の所有、設備の充実など高いハードルが各都道府県で設定されてきたため、ブラジル人学校が各種学校化するのは難しいとされていた。にもかかわらず後述するように、岐阜県を皮切りに各種学校の認可基準の弾力化は各地にひろがっていく。このように90年代から2000年代にはいり、徐々にではあるがブラジル人学校を取り巻く状況が整いはじめていった。

その後、ブラジル人学校の情勢を大きく揺り動かしたのは 2008 年の経済危機である。2008 年はブラジル日本移民 100 周年を迎え、日本でも日本移民、ブラジル人、日系ブラジル人について話題になることが多かった。とりわけ、日本における日系ブラジル人の存在について広く認知されるようになった時期である。しかし、2008 年末に起きたサブプライムショックを発端とする世界的な経済危機は、ブラジル日本移民 100 周年の祝賀ムードのなかでブラジル人の生活に壊滅的なダメージを与えることになった。

政府による失職したブラジル人への対応は、これまでに比べれば素早いものであった。特に 2009 年初頭に厚生省が主導したブラジルなど母国への帰国希望者に対する「日系人離職者に対する帰国支援事業」は大きな話題となった。特に、帰国支援金は「手切れ金」と批判されることもあったが、逼迫した状況において藁をも掴む気持ちで帰国を選択した家族は多い。国内定住者にたいしては、地方自治体を中心に求職支援などがおこなわれている。

ブラジル人学校に関しては、2009 年ブラジル人学校の教育に関するワーキング・グループが設置され、ブラジル人学校の状況把握がおこなわれた。文科省が実施した「ブラジル人学校等の実態調査研究」によると、2008 年 12 月時点で確認された 90 校のブラジル人学校は、2009 年 2 月になると 86 校に減少している。就学前教育機関をあわせて 6,373 人いたブラジル人児童生徒数は、3,881 人に減少している。

一方、内閣府が 2009 年 3 月末、「日系定住外国人施策推進会議」を開催し、文部科学省は、同日に初等中等教育局長通知「定住外国人の子どもに対する緊急支援について」（20 文科初第 8083 号）を発出。そして 4 月には国際教育交流政策懇談会が「定住外国人の子どもの就学支援に関する緊急提言」を提出したことがきっかけとなり、国政においてブラジル人学校の窮状が議論されるようになった。その結果打ち出されたのが、以下の二つの政策である。

まず、定住外国人の子どもに対する緊急支援措置として、2009 年度補正予算で文部科学省に約 37 億円が措置され、文部科学省は、国際移動機関 (IOM) に拠出して、3 年間の予定で「定住外国人の子どもの就学支援事業」（通称「虹の架け橋教室」事業）を実施した（2009 年は 34 団体、2010 年からは 39 団体で実施）¹³。

次に、各種学校設置認可の弾力化が進められてきたが、経済危機を鑑み、2009 年末に文科省はさらなる認可基準の緩和を各都道府県に求めるようになる。この各種学校認可の弾力化によって認可のハードルが下げられ、12 校が各種学校として認可されることになった。

2011 年には内閣府から「日系定住外国人政策に関する行動計画」が公表される。この行動計画では「ブラジル人学校等の経営を安定させ、充実した教育を提供できるよう、各種学校・準学校法人化を促進するとともに、さまざまな機会において、ブラジル本国政府など関係各国に対し、ブラジル人等の子どもへの支援を要請する。また、ブラジル人学校等に在籍する子どもの公立学校への円滑な受入れを引き続き促進するとともに、日本語教育の機会の充実を図るため、3 年間の期限付とされている「虹の架け橋教室」事業について、事業終了後の継続を検討する」とある。この計画にそって「外国人学校の各種学校設置・準学校法人設立

¹³ 2014 年度まで継続された

の認可等に関する調査委員会」が設置され、各種学校設置・準学校法人設立の認可のさらなる弾力化が模索されるようになった。

以上のように、日本におけるブラジル人学校はようやく行政的な位置づけを獲得してきたところである。そして、日本における日系ブラジル人の位置づけや人口動態に関連しながら、その役割が再考されるに至っている。以降では、浜松にあるブラジル人学校を紹介することから、ブラジル人学校の変容に迫りたい。

ここで明らかにするのは第 1 に、ブラジル人学校が「ブラジルから日本への移動時の受け皿」として機能したことに加えて、「日本からブラジルへの移動時の送り出し機関」としての性質を有していたことである。第 2 に、ブラジル人学校がトランスナショナルな社会空間創出の要石としての役割を果たすことは、欧米の移民研究においてあまり検討されてこなかったことでもある。それは、日本の公立学校が外国人に排他的であったことや日系ブラジル人家族が「デカセギ」労働者であり帰国を念頭に子どもたちの教育を考えていたことと無関係ではない。そこで以下では、国内で最も大規模校であり、ブラジル人学校の典型例である *Escola Alegria de Saber* 浜松校（以下 EAS）を取り上げる。

4. EAS 浜松校の概要

浜松市中心部から車で約 20 分の住宅街の一角に *Escola Alegria de Saber* 浜松校（以下 EAS 浜松校）がある。校舎内に入るとカラフルなポスターが目に入る。受付のカウンターテーブルには、保護者や来客者向けだろうポルトガル語の各種チラシが置かれている。校舎前の駐車場には、小型と中型のスクールバスが並ぶ。このスクールバスは、近隣市町村から通学する児童生徒を送り迎えするためにある。児童生徒数は幼児部から高等部までをあわせて 297 名。「手狭な校舎」ではあるが「肩を寄せあいながら勉強する」アットホームな空気が漂う学び舎である。

(1) 沿革

浜松市は人口約 80 万人。人口・面積ともに静岡県を中心都市である。2005 年に近隣 12 市町村と合併、2007 年には政令指定都市となった。全国有数の農業地帯であるとともに、ヤマハ、スズキといった大企業の城下町でもある。東京、大阪の中間に位置する地理的条件と恵まれた産業基盤を背景に成長を続けてきた。

静岡県はもともと韓国・朝鮮人が 1 万人程度居住していた地域である。それが 90 年代を境にブラジル人が急増する。外国人登録者数をみると、1990 年に県内 23,086 人のうちブラジル人は 8,964 人だったが、97 年には 45,875 人のうち 25,012 人、2000 年には 68,207 人のうち 35,959 人と急増している。2007 年には 138,047 人のうち 71,375 人と最盛期を迎えるが、2008 年末のサブプライムショックをうけ県内ブラジル人の人口は減少し、2011 年は 46,010 人である。この間のブラジル人の外国人登録者数は浜松が最も多く、2007 年に 19,932 人、2011 年でも 12,298 人となっている。

EAS 浜松校は EAS グループの一角をなす。EAS はブラジル人の教育状況を憂いた初代経営者が 1995 年愛知県豊田市で開校した。2001 年に浜松校を開校、東海地方を中心に 5 校を展開する全国有数のブラジル人学校へと成長する。しかし EAS は 2006 年経営難に陥る。

いざなぎ景気とも称される 2000 年代はじめの好景気は、製造業を中心とする雇用拡大を後押ししてきた。東海地方の製造業界もこの好調期にブラジル人雇用を拡大、これをうけて EAS を含めて各地にブラジル人学校がつくられていった。しかし 2000 年代後半になると徐々に不況の影が忍びより、製造業も業績不振にあえぐようになった。親が雇い止めにあえば、子どもの学費を払うことはできない。授業料が払えずブラジル人学校を退学、ブラジルへ帰国する子どもたちや自宅待機（不就学）状態となる子どもたちが急増する。すると必然的にブラジル人学校の経営も難しくなっていく。

こうした状況において、2007 年に私塾が EAS の経営権を取得、予備校経営のノウハウを活用し経営を安定化させた。現在の EAS は、各地のブラジル人学校を統合し、豊田校、豊橋校、碧南校、鈴鹿校、浜松校、太田校を運営、生徒総数約 1,800 名と最大規模のブラジル人学校グループとなった。そして私塾が EAS の運営に乗り出したのは「さまざまな子どもに学びの場を提供したい」という思いからだ。ブラジル人学校を運営することが経営的に厳しいことは明らかであったが、5 校 1,000 名以上が通う学校を廃校させるわけにはいかなかった。

(2) 受け入れの現状とカリキュラム

EAS 浜松校には、浜松市、磐田市など近隣の市町村から子どもたちが通っている。2008 年の経済危機によって 400 名程度いた児童生徒数は一時半減した。その後、経済危機の影響で周辺のブラジル人学校が廃校、通学先を失った子どもたちが転校してきたため 2008 年には 300 人台に回復、2013 年の調査時点では 297 名となっている。すべてのブラジル帰国を見据えて EAS へと転校してきた。生徒らはポルトガル語の習熟度や学力を鑑みて適切な学年に編入する。

表 3-1 2013 年の児童・生徒数

1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	7 年	8 年	9 年	高 1	高 2	高 3
19	15	16	24	12	23	31	26	23	35	36	32

幼児部から高等部をブラジル本国と同じく半日授業で、一日の授業数は約 4 時間弱となっている（時間割の一例は表 3-2 を参照）。クラスは学年ごとに 15 人程度で編成され少人数指導をおこなう。教室はやや手狭であるが、コンピュータールームや図書室など教育環境は整備されている。2 階にはラウンジがあり卓球台が設置されている。休み時間のラウンジは子どもたちのしゃべり声につつまれる。ブラジル人の学校らしく自由を重んじるが、一方で規律正しい側面も見られる。例えばすべての学生の携帯電話は学校の受付で預けなくてはならない。もちろんゲーム機の使用も禁止されている。

教職員数は21名。全員がブラジルでの教師資格をもつ。EAS 浜松校はブラジル教育省の認可校であり、カリキュラムはブラジルに準拠している。カリキュラムの根幹を担う教育システムにはCOC（コッキ）を使用している。近年は英語教育に力を入れており、専用の教材を提携の語学学校より取り寄せて活用している。最近ではアメリカの大学進学を希望する生徒もみられるようになった。直近では、日米学術センターを通じアメリカの大学へ留学した事例もある。EAS 浜松校の卒業生の多くはブラジルへ帰国し、高校や大学へ進学することを希望している。他方で、様々な事情から卒業後も日本に滞在する子どもたちもいる。場合によっては永住を希望することもある。2012年に卒業した高等部3年生のうち、ブラジルでの進学者が6名、日本で就職した生徒が6名となっている。帰国したすべての学生の状況を把握しているわけではないとのことだが、最も優秀な学生はブラジルで最難関とされるサンパウロ大学へ進学している。目下の課題としては就職希望者への対応である。最近の取り組みとしては、ブラジル人の雇用を希望する日本企業を招いての説明会が実施された。その他にもハローワークと連携して就職のための説明会を開催、生徒らに幅広く就業のための情報を提供している。多様な子どもたちの学びを保障するとともに、ブラジル・日本を問わず子どもたちの進路を保障するのがEAS 浜松校の方針である。

表 3-2 中学校3年生の時間割

月	火	水	木	金
歴史	ポルトガル語	数学	芸術	英語
歴史	スペイン語	数学	情報	ポルトガル語
数学	英語	ポルトガル語	歴史	社会学
ポルトガル語	地理	日本語	化学	数学
ポルトガル語	地理	地理	化学	数学

他のブラジル人学校と違った特徴の一つに、EAS グループを活かし、統一した定期試験を導入、生徒らの学力をモニタリングしているという点がある。試験結果は保護者にも配布される。さらに年次試験の成績優秀者には奨学金を給付している。

日本語教育は主に小学校段階に力が入れている。日本語の授業は小学校2年生から5年生までが1コマ40分で週4日。小学校1年生と小学校6年生から高校3年生までが1コマ45分で週1日となっている。日本語の授業は日本語専従の日本人教師が教えている。

5. 日本にブラジル人のための「学校」をつくる

浜松校のサンドラ校長は、2003年に開校したEAS 豊橋校で校長を務めた後、2007年にEAS 浜松校へと赴任した。サンドラ校長は私塾参入前を知る数少ない教師の一人である。家族の都合で渡日したとき、ブラジル人の子どもたちの劣悪な教育環境に心を痛めたという。最近ではブラジルの生活を懐かしいと思うこともあるというが、日本に残るブラジル人の子

もたちのことを思い、教鞭をとり続けてきた。私塾参入は EAS にいかなる変化をもたらしたのだろうか。サンドラ校長によると、私塾参入後、EAS には安心して子どもたちに教育できる体制が整うようになったという。設立当初の EAS 浜松校には図書室やパソコン室が設置されておらず、日々の教材作成も苦勞するほどだった。

昔はたいへんなときは本とかも仕入れるのに苦勞もしたんですけど、今はもうそれは解決して。ようやく授業に集中できるようになりました。

当時の EAS は、地方自治体から教科書購入補助など行政支援を一部うけていたが、学校の運営を考えれば微々たる支援であった。必然的に授業料に依存した学校経営がおこなわれるようになるが、それでは生徒数が減少することで学校の経営が立ち行かなくなってしまう。ブラジル人の多くは、不安定な雇用状況にあり、雇用主の経営状況によって簡単に解雇されてしまう。仕事を解雇されると、ブラジルに帰国するか仕事を求めて転職・転居することになり、子どもたちも帰国・転校してしまう。したがって、授業料収入に依存した学校経営はリスクが大きいわけだが、ブラジル人を中心とする経営陣は不安定な状況を打開することができないでいた。

こうした EAS の教育環境を整備し学校経営を安定させるための舵取りを担ったのが、2007 年から EAS の運営を担ってきた理事長である。EAS にとって最も大きな挑戦となったのが、グループの学校法人化と各校の各種学校化である。学校法人格の取得や各種学校認定には、行政文章を揃えるだけでなく、学校を運営するうえでの安定した財源や学校環境の整備が条件となる。カリキュラムの整備に加え、校舎や校庭など必要項目は多岐にわたる。そしてすべての書類を日本語で揃えなくてはならない。そのため、ブラジル人学校が各種学校化するのは極めて難しいとされてきた。それでも EAS を学校法人化し各種学校認定をうけるために努力する意義があるという。なぜなら、第一に各種学校への補助金を受領することによって経営が安定するためであり、第二に日本の法制度に則ることで学校の社会的位置づけが明確になるためであるという。各種学校化を目指すことについて、理事長は学校を安定して経営するためだと説明している。

長くやるためには地道にこつこつと、ですかね。うーんだからあんまり利潤はあんまり追求してないですよ。利潤を追求しないというとあれですけどね、お金ないいろんなことできないですから。

その後、EAS は 2010 年 4 月に日本の各種学校として認可される。行政（静岡県と浜松市）からの補助金による助成対象となることで若干ながら経営が安定していく。また、学校法人化されたことで高校無償化の対象となり、高等部の生徒は学費が約月 1 万円減額されることとなる。こうして EAS は経済的にも生徒が通いやすい学校となった。社会的な位置づけも私

塾参入によって明確になっていった。以前の EAS は、日本社会との接点がほとんどなかった。「日本とブラジル人学校は別の場所だった」とサンドラ校長はいう。

前までは、家から学校まで行って、学校でおしえて、家にもどって。ずっとブラジルにいるような感じでした。全部ポルトガル語でやってて、週末だけどこかにいくときだけは、外国にいるなと思いました

サンドラ校長によると、EAS は良くも悪くも「日本にある」ブラジルの学校であり、まるで「ブラジルにいるような感じ」だった。子どもたちにとっても、教員にとっても「ブラジルの学校」は日本社会に関わる際の「障壁」を感じさせないものであった。

しかし一方で、「いつ学校がなくなるかわからない」状況にあり、廃校の不安が常につきまとった。「日本にありながらブラジルの学校というのは不思議な状況だった」とサンドラ校長は当時を振り返っている。ブラジル人学校としての自治を維持しながら、長期的に安定した経営をおこなうために日本社会との接点をつくる。それは私塾が参入しなければ難しかったことである。こうした学校を安定化させる「経営努力」はいかなる論理を背景にしているのだろうか。

理事長によると、学校法人化はできるだけ多くのブラジル人に教育機会を与えるためのチャレンジだったという。EAS は「学校」である。「学校」が廃校するかもしれないという不安定な状況で、子どもたちは安心して勉強を続けることができない。

そうですね。子どもにとっていい未来を与えてあげる、子どもにとって快適な環境を与えてあげる。そういう子どもたちが大きくなって遊びに来るっていいのはいいですよ。そういうふうにして学校ってのは広がっていく。知名度も、信頼度も高まっていくし、学校法人の実績を積み重ねていくことで、業績のほうも上向いていくものですから、小手先の授業料改定とか、なんていうんですか、新しいプロジェクトをぼんとだしても一時的な効果でしかない。

その後、理事長は EAS の経営を安定させ、日本社会との接合によって安心して通える「日本のブラジル人のための学校」をつくりあげていった。理事長やサンドラ校長の教育理念はとてもシンプルである。日本で教育を必要としているブラジルの子どもたちに、できるだけ幅広く教育を提供するというものである。サンドラ校長によれば、学校が安定することで学費の問題はあるにしても「基本的に全ての入学希望者を受け入れる」ことができるようになったという。その意義は極めて重要であるように思われる。

6. 「移動」に対応するための幅広く質のよい教育の提供する

東海地方には様々なブラジル人学校がある。保護者らにとって選択肢は多い。保護者の

なかには、よい教育が受けられると聞きつけ、子どもを EAS へ転校させる場合もある。なぜ保護者らは EAS 浜松校を選ぶのだろうか。サンドラ校長によると、多くの保護者が EAS 浜松校を選ぶのには、2 つの理由がある。第一に、豊富な経験と実力を備えた教師による「質のよい教育」。第二に、学習環境が充実していることである。

ここで筆者の印象に残るロナルド先生の授業を紹介しよう。中学校 1 年生の授業の冒頭。いわゆる「つかみ」の時間である。生徒らの集中力は散漫である。ロナルド先生はブラジル本国の先住民や黒人の生活を話題にした。ロナルド先生はブラジルの地図を使いながら、自身のブラジルでの経験を生徒らに語りかける。学生らはロナルド先生の語りに耳を傾けているが難しそうな顔をしている。ロナルド先生は生徒らの反応について「生徒たちはブラジルでの生活経験が少ない。場合によってはほとんど知らない。日系人だけが特別じゃない。白人、黒人、先住民、いろんな人がいるのがブラジル。でも日本の生徒たちは実感がない。ブラジルの地理だって知らないので実感が伴わないからだ」と説明してくれた。

そこで、ロナルド先生は生徒らの出身地を訪ねていく。サンパウロ近郊だけでなく、各地から日本へやってきたことが浮かびあがっていく。すかさずロナルド先生は生徒らに出身地の特徴を話してもらおう。ドイツ系、イタリア系が住んでいたこと。先住民らが民族衣装を着ているのに中国料理を食べていたこと。さまざまなストーリーをロナルド先生は引き出していく。

なかでもサンパウロ市内でのバール（飲食店）のコジネイロ（調理師）が北部からきた黒人ばかりだという話を引き出すと、ロナルド先生はブラジル北部の話に切り替えていく。なぜ北部に黒人が多いのか。生徒らの知識を確認しながら、ブラジルの北部開拓とアフリカとの関係を説明する。生徒らも「なるほど」という顔をみせる。手元のブラジルだけの地図ではなく、世界地図を広げブラジルとアフリカ、そしてヨーロッパの地理関係を確認する。

最後にロナルド先生は生徒らに「みんな同じ顔をしているかい？」という。それぞれが周囲の顔を確認する。顔つきはさまざまだ。そこから、さまざまな歴史を背景として、みなが日本へ居ることを確認し、再びロナルド先生が授業をはじめ。生徒らは先ほどと打って変わって集中した表情を向けるようになった。

ロナルド先生によれば「さまざまな生徒がここで勉強している。日本しか知らない生徒もいる。ブラジルのことを教えることは難しい」という。先生らはさまざまな工夫を凝らしながら授業をおこなっているのだ。EAS 浜松校で 7 年間教師を務めているマルシア先生は、以前務めていた他のブラジル人学校での経験と比較して次のように語っている。

優れた教師がこの学校にいる（中略）当たり前のことに思えるかもしれないが、学年ごとにクラスがわけてあって、教科ごとに教師がいる。いい教材をブラジルから取り寄せて研修も行っている

ブラジル人学校の多くは小規模校である。教室も教師も少ない状況では、ひとつの教室で

学年がばらばらの子どもを受けもつほかない。マルシア先生も前任校では学年と教科がひとつの教室で入り乱れたなかで指導していたという。EAS 浜松校の教師は基本的に専門教科のみを担当し、教師の適正に合わせて初等部担当、高等部担当に分かれている。マルシア先生によれば「子どもたちの教育はもちろん、教師も教えやすい環境がある」というのが EAS の特徴である。よりよい教育を提供するためには、教師の教育環境を整えることも重要なのだ。さらに、学校経営に私塾が培ってきた技術が取り入れられるようになったという。その目的は「質のよい教育」を保障することで、ブラジル帰国後に子どもたちが困らないようにするためである。

一例をあげてみよう。クラ・ゼミ参入前の EAS では、子どもの実態を具体的に把握していなかった。子どもたちがいかなる生活背景にあるのか、学力上の課題を抱えているのか誰も把握していなかった。そこでクラ・ゼミのノウハウを導入し、子どもの情報をデータ化し共有するシステムを整えていった。さらに、EAS 全校で定期的な一斉テストが実施されている。試験結果をもとに子どもたちの習熟度をデータ化することで、子どもたち一人ひとりの学力向上に役立っている。

サンドラ校長によれば「子どもたちの成績を把握することで適切な教育をおこなうことができるようになった。正確なデータはないが、以前より成績は向上したと思う」という。マルシア先生も同じく「子どもたちはいつブラジルへ帰るかわからない。だから子どもたちに教える機会も限られている。子どもたちのことを知り教育することはとても重要だと思う」と語っている。また、個々の生徒の成績を把握し、成績表を保護者に渡す習慣も生まれた。日本の学校においては当たり前に見られる光景にサンドラ校長はとても驚いたという。

ブラジルでは学校が子どもたちに進路指導をすることがあまりない。でも日本では違う。仕事は増えるけれど、ブラジルに帰る場合もあれば日本に残る場合もある。そんな子どもたちのことを思えば必要なことかもしれない（中略）ここは子どもたちのことを考えているから、保護者や生徒とも仲がよいですよ。お互い信頼されていると思う

子どもたちのブラジルへの帰国を見据えつつ、可能な限り学習環境を整えてよりよい教育を提供する。こうした努力の積み重ねが、保護者・生徒らの信頼を得ることに繋がっている。「しかし問題がないわけではない」とサンドラ校長はいう。とりわけ目下の課題は「優秀な教師の獲得」と「教師の育成」である。日本でブラジル人教師を採用することは難しく、ブラジルでの教育経験をもっている教師を見つけることは更に困難だからである。サンドラ校長によると、これまでの EAS 浜松校には教師志望者が多数履歴書を送付してきていた。そして履歴書の厚い束のなかから優秀な人材を採用することができたという。しかし、現在はリーマン・ショックや震災により教師のなり手の多くが帰国してしまった。

（2008 年の）経済危機で子どもたちが帰国した。それは学校にとって打撃だったが、最も

大きかったのが「よい教師が帰国」してしまうことでした。多くの人が帰国してしまったから、年々教師を採用することが難しくなっています

家族の失業によって、家計が経済的に苦しくなり帰国するケースや、震災の不安から帰国するケースが重なり退職する教師が続出したのである。サンドラ校長が「問題はそれだけではないのです」と強調するのが、ブラジルで教育経験を持っていたとしても、その技能を日本で活かせるかは未知数であるという点である。

資格があるだけで（教師）経験のない先生が教壇にたつことは、子どもたちにとって良くない（中略）ブラジルで教えていても、それはブラジルで、ブラジルの子たちのこと。ここの子どもたちは日本で生活している

ロナルド先生をはじめ、多くのブラジル人教師にとって日本で教えることは、ブラジルで教えることとは違う難しさがある。そこでよい教師を探しつつ日本で教えられるように育成していかなければ「質のよい教育」を維持することができない。そのための取り組みとして、日常的に管理職と教師の面談や打ち合わせをしている。こうした取り組みは、ブラジルではあまりみられない光景である。

自分たち（教職員）で積極的に会議とかを開いたりして、生徒のことだったり話し合っている。（中略）私たちも教えることに不安がある。日本で教えたことはない。子どもたちはさまざま。私たちの技術がどれだけ通用するかわからない。

また、教師らが抱く不安は、指導上の不安だけではない。例えば、多くの教師は将来ブラジルへと帰国するつもりでいる。ある教師は「景気が悪くなれば解雇されるのでは」といった不安を抱きながら子どもたちを教えるのがストレスだという。以上のような指導面での文化的な違いや感情面での不安があるにしても、多くの教師が共通して語るのは「EAS 浜松校は少なくとも私たちが大切にあってくれようとしていることはわかる」「やりがいのある学校」というものである。そしてブラジル帰国後の自身のキャリアのためにも「腕を磨く」教師らが切磋琢磨しているという。なかには、EAS 浜松校の教育水準の高さと教育環境の良さを聞き、他のブラジル人学校から転任した教師もいる。理事長は「先生が安心して教えられることも重要」だという。子どもを守ることはもちろんだが、学校にとって教師を守ることは同じくらい重要なのだ。

（サブプライムショックで生徒数が半減したとしても）先生は半分にできないですからね。それ以外の部分は半分以下にしましたけれど、補助的な作業の方々はね。その代わり先生は何とか残そうという感じですかね。

2008年の経済危機,2011年の東日本大震災の影響によって子どもたちが帰国した。EAS 浜松校では,子どもたちの減少だけでなく,長年教育に携わってきた優秀な教師の帰国も大きな打撃となった。教師のなり手も減少し,新規採用も難しくなった。EAS 浜松校も一時的に生徒数が減少したが,現在のところ生徒数は回復している。その理由は,閉校した他校から生徒が転向してきたからである。生徒数の増加は学校の経営にとって良いことかもしれないが,サンドラ校長はそのペースが早過ぎるという。

学校の再編が進んでいます。いくつかのブラジル人学校が閉校したので,生徒を受け入れていますが,受け入れられる人数は限られています。親の仕事も不安定になって引っ越しをせざるを得ない子どもも増えています。

そのため,受け入れきれない生徒も出てきているという。また仕事を失い学校に通えない子どもたちもいる。2012年頃になると学校も落ち着きを取り戻したというが,それは行き場を失った子どもたちの多くがブラジルに帰国したからである。サンドラ校長は「帰らざるを得ない子どもたちも,ブラジルで困ることのないようにしてあげたい」という。次節で見るように,「移動」を見据えた教育を行うのも,子どもたちの流動性の高さに対応するためだからである。

7. 「移動」を見据えた進路指導

サンドラ校長によると EAS 浜松校に通う子どもたちの多くは,ブラジルへの帰国を念頭に入学してくる。そして卒業生の多くはブラジルでの進学を希望している。したがって EAS 浜松校は教育内容をブラジル並に充実させることで,帰国した子どもたちが困らないようにすることを重視してきた。筆者がブラジルでインタビューした EAS の卒業生は,日本におけるブラジル人学校の教育を以下のように語っている。

* : ブラジル帰国後に勉強で困ったことはありますか？

ありません。なにも問題ない。

* : でも長い間日本で生活してたんだよね？

不安はあったけど。勉強してましたから。ブラジルのほうが(授業進度が)遅い。

ブラジル人学校出身者のインタビューにおいて,定型句のように聞かれるのが「帰国後に困ったことはない」「学習上の問題はない」というものである。経済危機以降,ブラジルに帰国した子どもたちの「困難」がクローズアップされるなか,「困らない」という語りに筆者は随分戸惑うことになった。なかには「再び日本のブラジル人学校へ行きたい」と語る場合もあった。

別の生徒は「(EASは)勉強が大変だったから辛かった。なんで周りのブラジル人は遊んでるのに勉強しなくちゃいけないのかわからなかった(中略)帰国後の勉強にはあまり困っていない。(ブラジルの)勉強は簡単ですよ」と語り、現在はサンパウロで医学部進学を目指して勉強を続けている。筆者の調査では、「ブラジルへの教育接続」という観点において、多くの日本のブラジル人学校が一定の役割を果たしていることを確認した。

ではこれまでのブラジル人学校が「進路指導」に力を入れていたかといえば、必ずしもそうではない。サンドラ校長によると、EAS 浜松校が子どもたちの「進路」に向き合いはじめたのは最近のことである。「進学」以外を選択する子どもたちが増えたことで「進路指導」がいつそう注目されるようになった。

学期に一回は全体で職員会議をします。計画的にブラジルへ帰る子どもたちは問題ないのですが、突然帰る子どももいます。特に 2008 年以降、さまざまな問題が噴出しました。日本に残っても将来どうなるかわからないという不安が出てきたのです。不安が蔓延することで、生活が安定しないから離婚するとか、母親と子どもだけが日本に残るなどいろんなケースが見られるようになりました。これまでにない家族の問題がみられるようになったのです。

ブラジルに帰国するのか、それとも日本に残るのか、保護者も常に将来の生活に不安を抱いている。サンドラ校長が知るかぎり、将来に不安を抱く保護者は以前よりも増加している。保護者の不安は必然的に子どもたちにも伝わっていく。こうした不安を緩和し、将来展望を豊かなものとするのが「進路指導」の意義である。EAS 浜松校で多くの卒業生を送りだしてきたフェルナンド先生は、進路指導の意義を次のように語っている。

子どもたちは日本で生活している。だから将来の進路やブラジルの大学についてしっかりとしたイメージを持っていないことがある。また、ブラジル人だからといってブラジルのことがわかるわけではない。この 10 年のブラジルの変化はとても大きいものだからです。

フェルナンド先生は「それでも」と前置きしたうえで「子どもたちの成功体験やモデルケースが必要。将来を考える材料が少ない」という。同様にサンドラ校長は「モデルになる事例があまりに少ない。子どもたちの周囲には、ブラジルに帰る以外の選択肢が『工場働く』しかない」「ブラジル、日本にいてもたくさんの可能性をあたえたい」と課題を指摘している。

進路指導するにしても、子どもたちが将来の夢をもたなければならない。しかしモデルケースの不在から、子どもたちは自らの可能性を限定的なものとして捉えてしまう。とりわけ課題とされるのが、日本に残る子どもたちである。

ブラジルへ帰るつもりだったが、様々な事情から「帰れない」保護者。ブラジルに帰れる

と思いながら、日本に残るしかない子どもたち。日本に残るにしても、子どもたちにとって模範となるブラジル人の大人の多くが「工場」で働いている。こうした現実を前に、子どもたちは自ずと将来展望を限定的なものとしていく。

将来を限定的なものとして捉える子どもたちの学習意欲を加熱することは難しい。ブラジル人学校での教育が日本社会で役に立つかを考えたとき、そこにはシビアな現実が待ち受けているからである。例えば、日本ではポルトガル語が英語のように扱われることはなく、受験に際して有利にならない。近隣の公立大学に通う EAS 浜松校の卒業生によると「日本語を猛勉強することは当たり前。そのうえで日本の教科の勉強をしなくてはいけない」「昼は EAS。夜は私塾」に通いながら勉強を続けた。受験勉強は家族の全面的なサポートがあったからできたことだという。

サンドラ校長は「多くの子どもたちは勉強することを諦めてしまう」という。子どもたちは、学業達成を目指すというよりも、中学校、高校卒業後は、家族と同じように派遣労働者として工場などで働くことが当たり前だと考えているからだ。

EAS 浜松校は日本政府からの資金を活用するなどして、日本語教室を拡充させてきた。近隣の学校との交流会や日本語支援のボランティアを一部受け入れるようになった。体験型学習にも取り組むようになった。モデルケースとなりうる人材を招聘し講演会を開くこともある。高学年を担当するエジソン先生は「学校としては日本に残る子どもにも教育しなければならないと考えている。しかしどちらもおこなうことはとても難しい」という。

バイリンガルを育てるにはまだ時間がかかるし、子どもたちにとっても負担が大きい。帰国するつもりの子どもたちにとって日本語の勉強は負担でしかない。だからいまは過渡期なんじゃないかな（中略）ブラジル人学校から、日本の大学に進学することは難しい。英語で試験を受けることができても、ポルトガル語で受けることはできない。子どもたちは卒業していく。ほっておけば自分の人生を選ぶこともできない。せめてすこしでもよい将来をみつめて欲しい。

こうした現実をすぐさま変えることは難しい。サンドラ校長は「就職するならば、よりよい職について欲しい」という。「ブラジルに帰国して大学進学してほしいが、それを選べる状況にある子ばかりではない」からである。

最近では、高等部では進学説明会に併せて、就職説明会を行うようになった。ハローワークと連携して就職説明会を開催することもある。ブラジル人の子どもたちの将来について、エジソン先生は「(ブラジルでの) 進学だけが人生ではない」という。

日本に残る子どもたちもいることを忘れてません。現状では大学に進めなくても、よい就職先をみつめてほしいと思います。そして大事なのは、どんな進路を選択しても子どもたちが「よりよい生活」ができることだと考えています。進学も就職もそのためのものだと思う

のです。

このように、EAS 浜松校では「ブラジルでの大学進学を前提とする」というだけでなく、日本とブラジル「どちらの国でもより良く生きていける子どもたち」を育てることも目指されるようになった。

8. おわりに

本章で取り上げた EAS 浜松校は、日本で最大規模のブラジル人学校グループの 1 校である。学校運営者が、日本で予備校を運営する企業であるというのが際立った特徴であろう。EAS 浜松校は日本人経営者の参入やリーマン・ショック、東日本大震災での大きな変化を乗り越えながら、ブラジルの学校文化と日本の学校文化をうまく折衷してきた。そして今後はブラジルと日本という枠も越え、どの国で暮らすこととなっても活躍できる子どもを育てたいという。

EAS の学校運営は、ひとつの理念に貫かれている。それは「日本で生活するブラジル人に質のよい教育を提供したい」というものである。その目標に向けた EAS の取り組みはシンプルである。まずは学校の経営を安定化させ学校設備を充実させる。長期的に学校を運営できるような体制を整えることで、多数の子どもたちを受け入れることを目指す。そして、質のよい教育をおこなうために、カリキュラムを充実させ教師の待遇を改善する。それぞれが協力しあう教師集団づくりをすすめるとともに、教師の成長もうながす。保護者と子どもたちのニーズに即した進路指導に取り組む。ブラジル帰国だけが道ではないとなれば、日本でもよりよい進路選択ができる方法を考える。そして EAS の最終的な狙いは、以下のサンドラ校長の語りに集約されているように思われる。

生徒に求めるのはやっぱりブラジルでもその、他のブラジルにいる子どもたちと一緒に同じように学んでいくというか、ついていくことで、自分の目標を叶えられる教育をしていくことと、もし、日本に留まるならば、日本の生活で生活していけるような生徒をつくりあげたい。ブラジルでも日本でも成功できるような子どもたちを育てたい。

「ブラジルでも日本でも」といった展望は学校での取り組みに反映されているが、他方でブラジル人学校に子どもを通わせる親はこうした教育をどのように「活用」しているのだろうか。そもそもブラジル人学校に通わせるためには経済的な「コスト」が必要となる。それは経済的な要因で「デカセギ」する人々にとって、余分な「コスト」となるのではないか。次章では、ブラジルに帰国した親の「教育戦略」を析出することで、ブラジル人学校に「なぜ」通わせていたのかといった課題に迫っていきたい。

4章 帰国した日系ブラジル人と家族の教育戦略

1. はじめに

従来の日系ブラジル人の研究では、ブラジルから日本へデカセギとして渡り、その後定住化していった人々を主な対象としてきたが、本章ではブラジルから日本へ渡り、そして再びブラジルへと帰国した家族を扱う。その際、2章で検討したような、日系ブラジル人が置かれた経済的苦境、そしてそれをカバーする3章で扱ったようなブラジル人学校の存在に注意をはらいながら検討したい。

分析対象となった全ての親（19家族21名）は、経済的理由によって日本とブラジルを移動している。最初の移動はブラジルから日本への移動である。先行研究においては、日系ブラジル人は短期的な就労目的のみで渡日し、日系ブラジル人の保護者や子どもたちの将来見通しが「不透明」であるという議論は「日本国内」においては支配的であった。本研究も当初は「定住できずに帰国せざるを得なかった親は、苦勞を語るはずである」という仮説のもとに調査を行った¹⁴。しかし、結論から言えば、本調査を通じて収集したデータを整理したところ、当初の仮説とは異なるインタビューを収集することになった。

サツキ¹⁵は渡日当時を「ブラジルは不況だったから出て行くほかなかった」「田舎は経済的に大変でした。子どもが生まれてどうしようかと考えていた」と振り返り「思い切って知り合いを頼って日本へ行きました」「でも息子が中学校に進学するころには貯金をためて帰国するつもりだった」と語っている。最も計画的に渡日したのがノエミ¹⁶の事例である。「帰る時期も決まっているのでブラジル人学校にいかせたいと考えていた。そうすればブラジルに戻っても学校を続けられる」と前置きしたうえで「私の最優先は子どもたちの学校でした。学校のためだけに働いても良かった。私が工場で働くと2人の子どもの学費を払える」と語っている。ブラジルで子育てをすることは経済的に難しく日本へ渡るほかなかった。だからこそブラジル移動に向けての計画を必要としたというのである。

このように日系ブラジル人の親の多くは、経済的な理由によって渡日しているが、それゆえに自らの立場に自覚的なのである。したがって、本研究は早々に自らの仮説を修正することになった。すなわちそれは、日系ブラジル人は短期的な就労目的のみで渡日し、日系ブラジル人の保護者や子どもたちの将来見通しが「不透明」であるという議論は「日本国内」に残らざるをえない家族に対してインタビューしたからであり、「計画性」を有する家族はその計画にそって帰国したのであり、そうした家族は子どもの教育においても将来を見据えた戦力を講じているのではないかというものである。こうした仮説を検討するにあたり、まずは親の語りから「家族の物語」を析出してみよう。

14 特に本調査は2009年から2010年に調査を行った。サブプライムショックによる日系ブラジル人の大量帰国が社会的な課題となっていたことから、本研究も「当初」は厳しい苦境のなか帰国した人々を対象とする予定であった。

15 サツキ、女性、46歳、ブラジルで大卒、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

16 ノエミ、女性、42歳、ブラジルで高卒、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

2. ブラジルに帰国した日系ブラジル人家族の基本的性格—経済的要因と再出発の物語

日本とブラジルにおける人々の移動は 100 年にわたって続いてきた。その端初は、1908 年にはじまるブラジル日本移民である。当時のブラジルは、サンパウロ州をはじめ南部地域の開拓に着手しており労働力の確保が急務であった。一方、日本は日露戦争以後の経済の冷え込みが著しく、ハワイをはじめ各地に移民を送出していた。ブラジルもまた移民の送り出し先のひとつであった。ブラジルへと渡った日本移民の多くは、サンパウロ州を中心に契約労働者として厳しい農作業に従事した。多くの日本移民は「出稼ぎ」として働き、「故郷に錦を飾る」ことを目的としていた。なかには契約労働者では十分な収入が得られないとし、ブラジル各地に日本人植民地をつくるなど自立していった場合もある。本研究の調査地となったのは、第二次世界大戦以前につくられた日本人入植地である。

2 章で概観したように、ブラジル日本移民の歴史には、大きく 2 つの転換点がある。第 1 の転換点は、第二次世界大戦である。太平洋戦争によって日本と分断された移民の多くは、敗戦国である日本への帰国を断念し、ブラジル永住を選択する。その後、日本移民らは農作業に従事しながら子どもたちを近郊都市部の学校に進学させた。そして、日本移民の 2 世、3 世は、日系ブラジル人として社会的上昇を遂げていく¹⁷。第 2 の転換点は、1980 年代にの南米を襲ったインフレである。南米の経済不況は、日系ブラジル人らの生活に甚大な影響を与えた。一方で、バブル景気に湧いていた日本は、国内ブルーカラー労働者の不足問題を抱えていた。そこでブルーカラー労働力の代替を日系ブラジル人に求めたのである。

南米の不況と生活苦。日本の好況と労働者不足。それぞれの事情と思惑が合致し、89 年の入管法改正と 90 年の定住者告示によって日系ブラジル人の日本在留資格が定められ、以降急速に日系ブラジル人が日本に流入することとなった。それから約 20 年が経過し、デカセギの人々の中には在留資格を永住者に変更する者が増える一方、2008 年のサブプライムショックで大量帰国が生じた。こうした経緯のもとに、日本とブラジルの間では、日本人・日系ブラジル人・ブラジル人の往還が 100 年にわたって続いてきたのである。

それでは、日系ブラジル人家族はいかなる理由で日本へと渡ることになったのだろうか。本研究で扱う事例も、これまで日系ブラジル人家族について語られてきたことと同じく「経済資本」の獲得を理由に渡日したと語っている。日本滞在時における家族の物語の基本的なパターンは、日本での貯蓄を増やし帰国したブラジルで「より良い生活をめざす」ことである。

コ¹⁸：毎日物の値段がかわる。なんだっけ。えっと…

*：インフレ？

コ：そうそう。びっくりするぐらい。どうしようもなかった。

¹⁷ 前山 (1996) や宮尾 (2002)。

¹⁸ コウジ、男性、40 歳、ブラジルで高卒、日本語とポルトガル語でインタビュー

*：そうなんですか

コ：生活なんて無理。良くなるかなと思ってもちっとも良くならない。娘も学校に行かせられない。だから日本へ行った。

*：じゃあそのまま日本で生活すると考えてましたか？

コ：それはない。長く日本で生活したけど、いつかは帰るって決めてた。(ブラジルが)安定したらね。(家族)みんなにも帰るって。じゃないと、どうしていいかわからなくなる。将来とかね。

コウジの話によれば、「貯金がたまり」「ブラジル経済が安定」すれば帰国するつもりだった。家族にも帰国のための心づもりをするよう話してきた。「経済資本」の貯蓄と「一時的滞在」の語りは、本調査で対象となったすべての保護者に共通する。

それでは、ブラジルに帰国した家族はその後どのような状況にあり、家族の物語はいかなる変化を遂げたのであろうか。ブラジルは90年代まで続いたインフレと経済不況を乗り越え、2000年代に入り好景気に転じた。多くの家族は好景気に沸くブラジルに帰国している。しかし、ブラジル社会の変容は家族にとって予想以上だった。コウジさんの言葉を借りれば「景気が良くて安定しているけど、別の国に帰ってきたと思うくらい」ブラジルは様変わりしていた。

ヘナト¹⁹は、デカセギ以前はブラジルで高校を卒業し、郵便局員をしていたが、経済不況の影響から経済的な負債を抱えたため、家族を連れて日本へと渡った。その後、一定の貯蓄を作り、子どもたちの大学進学を前にブラジルへと帰国した。

*：ブラジルに帰国してから…仕事はどうされていますか？

ヘ：ありません。17年間ブラジルと離れたのでいろいろ変わりました。いま仕事を探そうとしても資格が必要。日本でも溶接の仕事をしていましたが、ブラジルでは(ブラジルの)資格が必要。コースを受けて。運転手とかはできるけど、資格がないからブラジルでは通じない。そういうことが残念。大学を卒業しても長い間日本にいて、ブラジルにもどっても知識が古くなっていて、就職できない状況です。

ブラジルでの空白期間が長く、帰国後すぐに希望の職に就職することは難しいという。日本で学んだ技術的な資格も通用しない。大学を卒業していても、経歴の空白期間があり、以前のようなホワイトカラーにはなれない。そこで、貯金を切り崩して生活しながら、ブラジルの親類や友人、知人を頼って仕事を探している。さきほど取り上げたコウジ、そしてサトミ²⁰も帰国後の就職に苦勞を語っている。

¹⁹ ヘナト、男性、40歳、ブラジルで高卒、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

²⁰ サトミ、女性、46歳、ブラジルで大卒、日本語とポルトガル語でインタビュー

*：帰国後仕事はどうされているんですか？

コ：日本にいる人に機械を送ってもらってね、それで仕事をはじめました。こっち（ブラジル）で仕事に就くのはいま難しいからね。知り合いに声をかけて、いろいろ教えてもらいました。

*：仕事はうまくいきそうですか？

コ：まだこれからかな。でも頑張らないと。子どもたちを大学に行かせたいし。

サ：（日本での）仕事の不安定さからブラジルへと渡った。日本では老後の生活がどうなるかわからなかった。戻るならいましかないと思った。

*：ブラジルでの生活の見通しはあったのですか？

サ：ブラジルで成功するかはわからない。仕事を探しています。いまは貯金があるから大丈夫ですが…家族が安定しているとは言いがたい状態にある。仕事は知り合いを頼って探しています。いまは子どもが小さい。これからどんどん大きくなっていく。だから子どもたちが生活しやすい環境をつくってあげたい。

コウジやサトミのように、帰国した家族は、ブラジル帰国後の環境の変化を乗り越え「もう2度と日本へデカセギしなくてもよい」よう生活の立て直しを進めていく。以上のような親の語りにも共通して見られるのが、ブラジルでの生活を安定させ「再出発」という家族の物語である。

「再出発」のために、一部の家族は日本滞在時から帰国後を見据えた準備をしている。次にみるフェリペ²¹やミナコ²²は、日本滞在時から帰国後を見据えて情報収集をおこない、帰国後の生活が円滑に進むよう備えをしていると語る。

フ：帰国してから仕事を始めました。日本で生活していたので、ブラジルの生活に慣れるか心配でしたが、いまは元気にやっています。田舎に引っ越してきたのが良かったのかもしれない。

*：どうして田舎に？

フ：向こう（日本）で生活していたときから、ブラジルに帰った子どもたちの話はきいていたので。だから（息子が）高校進学前に戻らないといけないなど。

*：家族で話してたんですか？

フ：ええ。みんな帰るのが嫌だった。でも先のこと考えたらしかたがない。

ミ：帰ってきたときは親が住んでいるところ、アサイに帰ってきました。小さな町で、私の子どもと同じ状況の子どもがいるところ、アサイが良いと思った。薬剤師としてはあまりいい

²¹ フェリペ、男性、42歳、ブラジルで中卒、日本語でインタビュー

²² ミナコ、女性、NA、NA、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

街ではなかった。子どもたちにとっては、一番いい街だと思った。私は子どもにいいところを考えて、(アサイに) 帰ってきた。昼間仕事をしている間は、おじいちゃん、おばあちゃんがなんとかしてくれる。自分としては子どものことを一生懸命考えてやってきた。

ミナコは薬剤師の資格をもっていたので、ブラジル帰国後は薬剤師として働くことが出来る都市部で生活をしようと考えていたが、子どもたちの生活を考え田舎へ帰ることにした。日本語を話せる両親や日本から帰国した子どもたちが多く生活しているので、子どもたちが生活しやすいと考えたためである。

ブラジルへと帰国した家族の語りには、「子どもたちの将来」への配慮が節々で見られる。デカセギは「経済資本」獲得のために行われるが、だからといって子どもたちの教育がおざなりにされてきたわけではない。ミナコのように「子どもたちに悪いことをした…」とデカセギを総括し、ブラジル帰国後は子どもたちに対してより良い教育を与えようとする場合もある。

デカセギはブラジル帰国後の「より良い生活」のために行われるが、その「より良い生活」には子どもたちにとっての「より良い生活・教育」も含まれている。そして、帰国した後の生活の「再建」を円滑にすすめるため、日本滞在時から計画的な準備がおこなわれる場合がある。それでは保護者は日本滞在時、そして帰国後の生活にどのような計画・戦略をたてていたのだろうか。

3. 日系ブラジル人家族の教育戦略の特徴

日本へとやってきた移民は限られた資源を駆使することから子どもへの教育の戦略を企図する。1章で触れたように、志水・清水(2001)はブルデューらの議論を援用することで、日本で生活するニューカマー外国人の「親の教育戦略」を分析した。教育戦略は(1)家庭での言語使用・文化伝達(2)学校観・学校との関わり(3)子どもの進路への親の希望・展望の3要素からなるとされる。志水らの議論の特徴は、移民らの教育戦略を一枚岩的に描くのではなく、エスニシティごとの違いに焦点を当てたことである。移民らは当該国への編入様式と歴史的・文化的な背景に違いがある。そして、エスニシティごとに一定の特徴をもった「家族の物語」を形成していく。この家族の物語を枠組みとしてユニークな「親の教育戦略」が析出されていくのである。

例えば、日本へ渡ったデカセギ日系ブラジル人らの家族の物語は、デカセギゆえの「一時的回帰の物語」に特徴があるという。経済的理由によって日本にやってきた人々は、基本的には経済的な目的が達成されれば帰国する。加えて、日系ブラジル人は日本移民という歴史的な背景を有する。この「一時性」と「回帰」が日系ブラジル人らの家族の物語の特徴である。そしてこの家族の物語から析出される教育戦略とは、祖国における母語・母文化の習得が奨励する一方で(一時性)、祖国における日本文化・日本語の習得を期待する(回帰)。そのため学校では学力よりも日本文化の伝達を期待するという。そして、日本文化を身につけ

て将来はブラジルで生活することを願うという。

他方で、安全で便利な日本での生活が続くなかで、ブラジルへ帰国するのではなく日本で生活することを模索する人もみられるようになる。「一時的回帰の物語」がゆらぐことで、将来の居住地が定まらず、進学先を決定することが困難になっていく。日本への滞在歴が長くなるほど家族の物語だけでなく親の教育戦略も変容していく。そして日系ブラジル人は日本定住を模索するようになる。

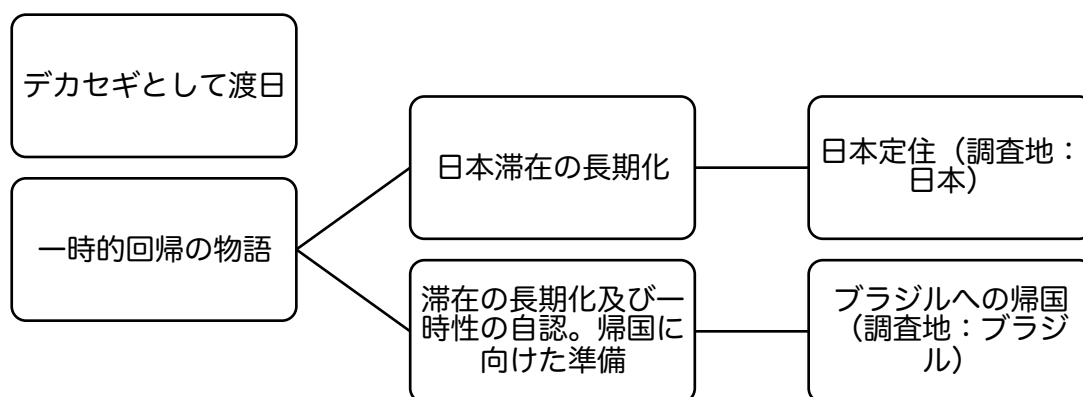


図 4-1 先行研究と研究対象の違い

しかしながら、この議論が前提としているのはあくまでも日本で「定住」する人々の変容である。志水らの理論によれば、親は自らの「一時性」を認識しているのだから、その論理のまま帰国する場合も検討することも想定できる。そして、一時性を認識する人々は実際にブラジルへと帰国しているのだから、ブラジルにおいて調査しなければ、「一時的回帰の物語」のもうひとつの側面を検討することはできない。そこで本節からは、志水らの枠組みに準拠しながら、「ブラジルに帰国した親の教育戦略」を検討する。以下でみていくように、日本で「定住」する人々にくらべ、前節でみた「ブラジルに帰国した親」は、日本滞在時から帰国を念頭に生活していることから、特有の教育戦略を行使していることが浮かび上がる。

(1) 家庭での母語使用・文化伝達—積極的な母語使用・文化伝達

母語使用・文化伝達に関わる保護者の語りを見通したとき、ほぼすべての家族が家庭内でポルトガル語を使用し、その保持に努めている。さらに、ブラジルのテレビ番組の DVD や雑誌・漫画を取り寄せ、子どもたちに与えるといった工夫をする家族もみられる。

ユ²³：日本にいるところから子どもたちにはポルトガル語を教えてきました。家でもポルトガル語で話しかけました

*：子どもたちは話せるようになりましたか？

²³ ユリ、女性、37 歳、ブラジルで大卒、日本語でインタビュー

ユ：生活には困らない程度です。だから心配で帰国前と帰国直後には家庭教師をつけました

*：家庭教師？

ユ：日本の先生から家で話すだけではダメと聞いていたので。

ユリは子どもたちを日本の公立学校に通わせていた。日本で生活しているのだから、日本の文化にも触れて欲しかったため、通わせていたという。公立学校の教育に満足していたが、学校の教師から帰国後を見据えてポルトガル語の勉強をするよう何度も指導された。しかし、ユリも夫も仕事が忙しかったので、自分たちだけではポルトガル語を教えられないと判断し家庭教師を雇った。

*：日本でポルトガル語を教えるのは大変だったでしょう？

バ²⁴：ブラジルのテレビとかDVDをみせたりしましたよ

*：どうやって手に入れたんです？

バ：いまは通販があるからね。Monicaとか読ませましたよ。テレビはインターネットがあるし。

家庭教師を雇う場合もあれば、バーバラのように家庭内で努力する場合もある。日本で手に入るポルトガル語教材だけでなく、絵本や漫画を子どもに買い与えポルトガル語の保持に努めたという。DVDやポルトガル語の雑誌はブラジルで取り寄せるだけでなく、日本国内での流通に頼ったという。また、パトリシア²⁵のように帰国を前に一年だけでも子どもたちを日本のブラジル人学校に通わせる場合もある。

パ：三女の場合は最初からブラジル人学校に通わせました。帰国も迫っていたので。

(パトリシア(母・日系))

パトリシアによれば、ブラジル人学校の学費は高額だったが、帰国後の子どもたちのことを考えれば「必要な出費」だったという。帰国後の子どもたちの生活を考え、ポルトガル語やブラジル文化に触れさせる保護者は多い。こうしたブラジルで効果を発揮する「文化資本」は、日本の公立学校や日常生活では獲得できない。そこで多くの保護者は、「必要な出費」を投じることで子どもたちにブラジル教育を与えようとする。

日本滞在時から帰国後を見据えて教育投資をする場合もあれば、ミランダ²⁶やユウジのように帰国後にポルトガル語教育をおこなう場合もある。ミランダの場合、塾でポルトガル語

²⁴ バーバラ、女性、NA、ブラジルで高卒、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

²⁵ パトリシア、女性、46歳、ブラジルで高卒、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

²⁶ ミランダ、女性、45歳、ブラジルで高卒、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

を勉強させながら、学校で娘の通訳をしているという。

*（学校で）娘さんの通訳をされていますよね

ミ：そうですね。私、何度も相談に行きましたね。「うちの子、（ポルトガル語できないで）こういう悩みを抱えて、ちょっと困ってるんですよ。」って。で、何度も何度も電話を入れる、さあまた電話を入れる。って相談に乗ってもらいたいんですけどって。やっところ、会議を開いていただいて。でも「教育委員会の方では特にそういうサポートできない。そういうブ口がない。できれば誰か学校に付いてくる人がいれば・・・。」と言われたので。じゃあ私が通訳することにしました。

[中略]

ミ：もちろんポルトガル語塾にも通わせたりもね。まあすぐには話せないし。難しくても、ちょっとでも勉強してほしい。

ユ：（子どもたちの）ポルトガル語は心配です。気がついたら娘たち同士は日本語で話しているの。だから僕から話しかけるときはポルトガル語にしています。日本語も忘れてほしくないから、カロリネたちが日本のものに触れることについてはなにも言いませんが。

*：それだけで話せるようになりましたか？

ユ：近くでポルトガル語を教えてくれる人がいるので、そこに通わせたりもしています。

ポルトガル語塾だけでなく、日本語・日本文化保持を求めている。こうした日本語保持についても多くの保護者が語ることであり、先ほど取り上げた事例のように日本語を保持して欲しいという語りは多々見られる。とりわけ、ユリやバーバラの両家は日本滞在時にポルトガル語教育に苦心していたが、ブラジル帰国後は子どもたちの日本文化保持に努めている。

ユ：日本語を話せる先生がいるので、（日系学校）こっちにきました。とても強い文化的ショックがありませんでしたので、助かりました。やっぱり私がポルトガル語を教えても彼女の母語は日本語でした。ここで徐々にブラジルでの生活に慣れて欲しいとおもっています。

[中略] 子どもたちに日本語を忘れてほしくない。日本語が子どもたちを安心させることもあります。

バ：娘は日本語を話すことができる。せっかく日本で勉強したことを無駄にしてほしくない。娘にとって日本語はきっと将来役に立つと思う。だからいまは日本語を忘れさせないように家で日本語を使うようにもしています。

日本で長く生活してきた子どもにとっての母語・母文化は、日本語・日本文化になる場合もある。親世代と子ども世代の生活経験の違いによって、家族のなかでも母語・母文化に違

いが生じる。保護者は、ポルトガル語教育、日本語教育、いずれにしても必要であると判断すれば子どもたちに教育投資をおこなっているのである。

(2)学校観・学校との関わり―帰国を念頭に学校を選択する

日本滞在時、日系ブラジル人家族は、子どもたちをブラジル人学校、もしくは日本の公立学校に通わせている。ブラジル人学校の学費は高額だが、前項でとりあげた事例のように、帰国後の生活適応や教育接続を考えて通学させている家族もみられる。ノエミの場合は、帰国を見越して日本の公立学校からブラジル人学校へ転校させている。最終的には子どもたちの学費捻出のために日本で働いていたという。

ノ：帰る時期も決まってるのでブラジル人学校にいかせたいと考えていた。そうすればブラジルに戻っても学校を続けられる。当初息子は日本の学校に行きたがったので、それに反対しなかったが、その後は帰国もあるのでブラジル人学校に転校した。[中略] 帰国するのに日本の学校に通うのは複雑である。残るか、帰国するかを決めなくてはいけないと思った。私は帰国すると決めたので、子どもたちがより勉強できる場所を考え（ブラジル人学校を）選びました。

[中略]

私の最優先は子どもたちの学校でした。学校のためだけに働いても良かった。私は工場で働くと二人の子どもたちの学費を払える。

また、ブラジル帰国後の学校選択も計画的に行なわれる場合が多い。公立学校を避け、私立学校に進学させる事例や、日系人が経営する学校に子どもたちを進学させる事例がみられた。

マ：（息子のために）最初に選んだのは、7人から12人の少人数の学校で、（帰国して間もない）ファビオのためになると思い選んだ。高校は親戚が学長だったので、ファビオのことをわかってるだろうし、従兄もいたので高校を選んだ。それに、全然知らない人だとサポートしにくい、相談しにくいと考えていたので。

ア：ブラジルの公立学校の状況はよくわかってるので…子どもが小さいといっても安心できないです。だから、日系人がやっている学校にいれました。もちろん学費が高くてここなら時々日本語を使うこともできるので。

*：生活していくのが大変そうですが。

ア：生活費とか考えたらずいぶん高いですよ。日本で貯金したから。学費を払うことができます。

マルセラやアカネ²⁷の場合、帰国後も子どもたちを通わせる学校を吟味したうえで私立学校を選択している。アカネによればブラジルの公立学校は「ひどいんです。授業の質もそうだし暴力とか」の問題があるという。アカネと同じく、ほぼ全ての保護者がブラジルの公立学校の現状に対して厳しい評価を下し、「私立学校」に通わせたいと語っている。次にみるバーバラの場合はより計画的である。

バ：レベルの高すぎる学校に入れると娘は苦勞すると思いました。だから私立学校でもなくて。かといってレベルが低い市立学校にも入れませんでした。ちょうど間くらい州立学校にいらして様子を見ています。それでこの家にしたのもちょうど学校に近いからです。

*：それはすごいですね…どうしてそれほど学校を中心に。

バ：それは子どもたちのためですよ。ブラジルは日本のように安全ではないです。そして教育だって良くない。後悔しないために、子どもの教育は頑張りたい。

教育レベルが高すぎる私立学校を避けつつも、教育レベルの低い一般公立学校ではなく、ちょうど中間程度の教育レベルの州立学校に子どもを通わせている。そして進学先を決めた後に家族の居住地を決めている。比較的余裕をもって居住地や学校を選ぶことができるのも、日本で「頑張って働いたから」であるという。

(3)帰国のための環境整備と親族ネットワークの利用

「日本のブラジル人学校」「ブラジルの私立学校」に通わせるためには高額な学費が必要となる。保護者は子どもたちの将来のため、場合によっては貯蓄を切り崩してでも子どもたちを私立学校に通わせることもある。こうした保護者に共通しているのが「将来大学に進学してほしい」という子どもの進路への希望であり「自分たちのようにデカセギして欲しくない」という強い願いである。アケミ²⁸はブラジルで生まれ小学生の頃に渡日、以降日本で生活してきた。その後日系ブラジル人男性と結婚、長女を出産した。そして、子どもの将来を夫と相談しブラジル帰国を決めた。

*：ブラジルでの生活経験がほとんどないですよ？

ア：ええ。だから帰国は不安でした。でも家族が向こうに住んでるから。

[中略]

*：それでもブラジルで育てたい？

ア：はい。そんな気持ちが大きかったかな。子どもはブラジルで育てたい。自分と違う将来をみてほしかった。自分と違う教育を子どもにあげたかった。ちゃんとしたブラジル人として育てたかった。

²⁷ アカネ、女性、44歳、ブラジルで中卒、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

²⁸ アケミ、女性、46歳、ブラジルで高卒、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

アケミは、子どもたちに自分と同じように工場で働いてほしくなかった。日本人でもブラジル人でもない「中途半端な人」にもなってほしくなかった。そこで、住み慣れた日本を離れてブラジルに帰国したのである。

ノ：私の願いは自分の生き方をみつけること。子どもたち勉強して、勉強を終えて、いい仕事を見つめることが願いです。最低大学に進学し、子どもたち願いによって、大学院に行くかは決めたらいい。でも、大学までは行って欲しい。エンジニアにならないといけないとは思っていない。自分たちで選ぶとおもう。大学だけで成功するといは限らない。安心して生活してほしい…

マ：自分の期待は息子がなにをしなければならぬではなく、自分が何をしたいのか何になりたいのかで決めてほしい。自分で車関係のエンジニアになりたいと思っていればそれでいい。学校から悪いことは何も言われなく問題はなかった。ほかの人に迷惑をかけたり、ドラッグを使わなければ、自分のしたいことをしてほしい。

*：大学に行ってほしいとかは？

マ：彼は絶対大学に行くと考えています。私は大学に行ってほしいという期待はないが、大学に行くだろうと考えている。ブラジルでは昼の授業に行かなくてもよくても、自発的に勉強に行く。自分で勉強したいと思うだろうと考えている。

ノエミとマルセラのように、子どもの教育を重視する保護者の語りには、子どもの「大学進学」への強い希望がみられる。前述したように、現在のブラジルでは大学を卒業しなければ良い職業に就くことは難しい。子どもたちの生活の安定を考えれば、大学進学が最初の目標となる。実際にマルセラの長男など、4家庭の子どもたちが大学に進学している。さらには、子どもたちは大学院進学を目指すなど、高い学歴取得を目指す場合もある。

とはいえ、ノエミの語りのように、親は大学進学だけを願っているわけではない。「大学進学」が最終の目的ではなく、ブラジルで「安定した生活」のための「大学進学」が目的であり、それはなにより「自分たちのようにデカセギになって欲しくない」ためだと語られている。だからこそ、場合によっては過剰とも思えるほどの教育投資をおこなうことがある。ノエミは「日本で子どもたちに苦勞をかけてきた」という。そのぶん子どもには自分の「やりたいことをやってほしい」という。ノエミのように、保護者は「デカセギ」によって、子どもたちが必要以上の苦勞をしたと総括することがほとんどである。だからこそ、苦勞をかけたぶんより良い教育を与えたいと語るのである。

4. デカセギ型の親はなぜ計画性を必要とするのか—不安定な社会的地位と戦略

多くの親は日本において「家庭内でのしつけ」「私塾に通わせる」「家庭教師をつける」

といった教育を行ったという。ただしこれらは並列的に扱えるものではない。とりわけ児島（2010）が指摘するように、ブラジル移動後の教育接続を考えれば日本の公立学校を選択するより、ブラジル人学校を選択するほうが有利だからである。日本で子どもをブラジル人学校に通わせようと思うと、居住地が限定されることや学費といったコストが生じる。それは「デカセギ」という本来の渡日目的とは相反するものであるが、ノエミのように具体的な将来展望をもつ親は、ブラジル人学校に子どもを通わせることを「必要経費」と語っている。さて、ここまでの語りを整理すると、ブラジルに帰国した親の教育戦略は大きく4つ語られている。それは「帰国のための環境整備戦略」「私的な教育投資戦略」「言語の戦略」「親族ネットワークの活用戦略」である。それらの細目を図示（図4-1）した。

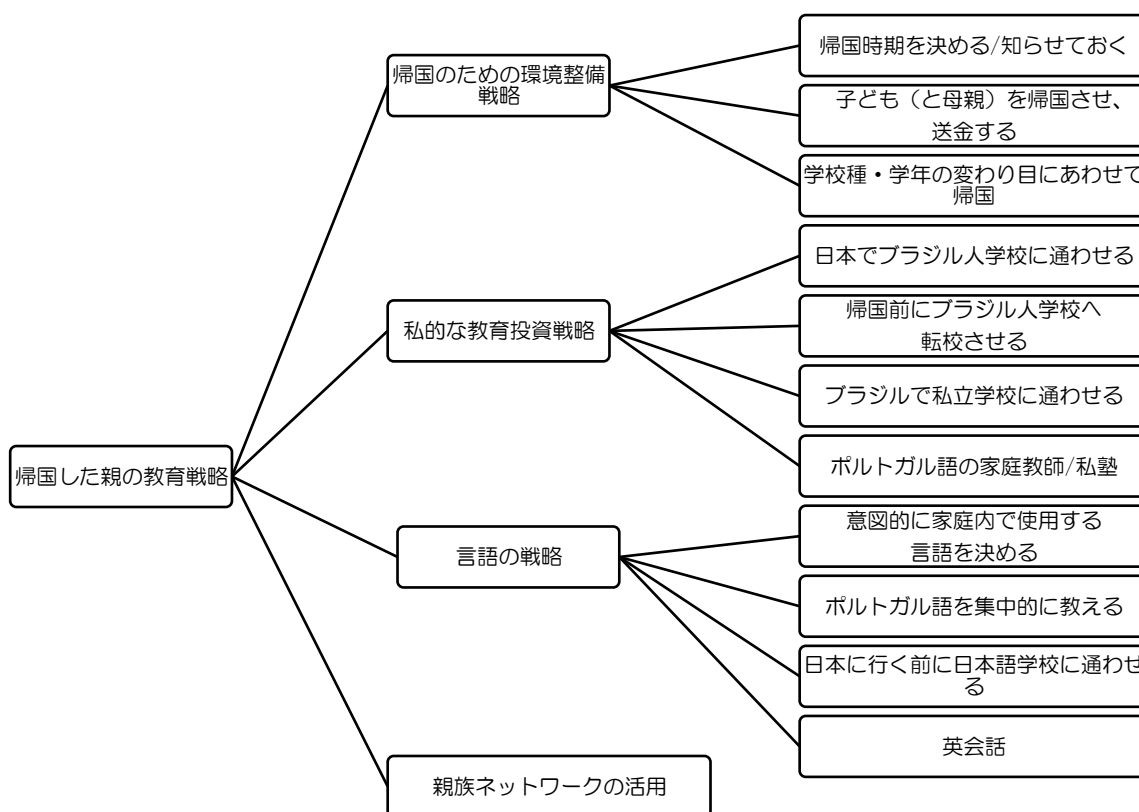


図 4-2 帰国のため・帰国後の親の教育戦略

この図 4-2 を枠組みとして、調査対象の「親が帰国を見据えてどのような教育をおこなったか」「子どもに対して帰国を見据えた教育をおこなったか」という質問に対する答えを一覧にしたものである（表 4-1）。親データが少ないことから、子どもデータをふまえて全ての事例から析出できたものを一覧にした。一見してわかることだが、ほぼすべての事例におい

てなんらかの「帰国を見据えた教育」がおこなわれていたことがわかる。

表 4-1 帰国のための教育戦略

	帰国のための環境整備戦略			私的な教育投資戦略				言語の戦略			親族ネットワークの活用戦略		
	帰国時期を決める/知らせておく	子ども(と母親)を帰国させ、送金	学校種・学年の変わり目にそって帰国	ブラジル人学校(日本)	帰国前にブラジル人学校へ転校	私立学校(ブラジル)	ポルトガル語の家庭教師/塾	意図的な家庭言語	ポルトガル語の家庭教師	ポルトガル語を親が教える		日本語学校に通わせる	英会話
サムエル	○					○			○			○	
ジルベルト				○	○	○							
ラリーサ				○	○	○							
ミサキ						○						○	○
アヤ	○		○			○	○		○		○		○
サチ			○					○		○			○
ミナミ			○	○									○
ヴァニア	○	○	○	○									○
ホジェーリオ	○	○	○					○		○			
マイラ	○												○
ルアナ	○												○
アケミ	○		○										○
ユカ		○		○	○			○				○	
レアンドル	○	○	○	○	○	○					○		○
アキコ	○			○									
ミシェル	○			○									
ラケル												○	
ソニア								○		○			
セルージュオ													○
リカ	○		○	○		○							
ユウキ			○			○	○						
カロリネ			○			○	○						
フェリベ			○			○	○						
アドリアナ			○					○					
ツバサ			○										○
リラ						○							
マルセロ						○				○			
ファビオ	○	○				○				○			○
アケミ	○								○				
ヘジナルド									○				
タカシ	○												○
チカ									○				○
ルーカス	○												
レイナ	○			○		○				○		○	
リカルド	○	○		○		○						○	
チエミ										○			
ヨシキ		○	○		○					○			
ユウヤ	○									○			
テレジア	○					○							○

これまでの日系ブラジル人研究では、「不就学」や「親の不明確な将来展望」ばかりに注目が集まってきたが、「デカセギ型」をふまえて議論されるべきなのは、日本に滞在する日系ブラジル人の「将来ブラジルに帰るかもしれないという希望的な観測」の質的な違いであり、「将来展望の具体性」や「計画性」であろう。

分析対象者のうちブラジル人学校に子どもを通わせた家族は12家族である。ブラジル人

学校を選択した理由として語られたのが「将来ブラジルに移動するから」である。ある意味でわかりきった理由かもしれないが、多くの親は当たり前を語っている。学費を負担したとしても、子どもたちの将来を考えブラジル人学校に進学させる親は少なくない。また「周囲の話」とあるように、移動後の子どもたちの教育問題はすでに広く日系ブラジル人家族に知られている。マルセラのように移動後のリスクを予見したうえでブラジル人学校を選択している場合もある。マルセラはブラジル移動後の子どもの教育について、すでにブラジルへ移動した家族と連絡を取り、情報を集めたうえでブラジル人学校へ子どもを通わせた。「私たちは一生日本で働くことはできない（マルセラ）」「仕事がなくなれば子どもたちが勉強できない。それが一番怖かった。できるうちに（学校へ）やらないと（マルシア）」というように、日本社会での就労が不安定だからこそ、移動を見越して子どもたちにより良い教育を与えようと考えたのである。

上述したサツキの事例は、子どものブラジルでの大学進学資金を見据え、日本に長期滞在できるよう計画を立てている。マルセラと同様に「日本の滞在が長期化すると帰国後の問題が大きくなる」ことを「友人に聞いて知っていた」ため、子どもをブラジル人学校に通わせていた。そして、子どもが中学校へ進学するタイミングで移動している。こうした綿密な配慮は「自分たちと同じようになってほしくない。ブラジルで生きてほしい」との思いからである。

では日本の公立学校を選択した7家族はどうだろうか。ブラジル移動を念頭に日本での生活を組み立てるならば、日本の公立学校に通わせることはブラジル移動後の教育接続のリスクを高めることになる。それでも日本の公立学校に通わせた理由を7家族の親は「家族関係の維持」「授業料」「日本文化の習得」によるという。

ユウキのように、調査対象者の多くは3交替、あるいは残業を含めた2交替の製造工場で働くケースが多い。ユウキの場合は、子どもたちと関わる時間を持つために、なるべく「近く」の公立学校に通わせた。日本の治安がブラジルほど悪くないと知っているが、子どもになにかあればすぐに対応できるようにした。アケミの事例では、ブラジル移動後の教育接続よりも「バイリンガル」「マルチカルチュラル」な子どもを育てることを重視して日本の公立学校を選択した場合もある。子どもを公立学校に進学させた事例では、移動後の教育接続を心配しポルトガル語の家庭教師をつけることや、移動の1年前にブラジル人学校へ転校させるなどのフォローが行われている。

ユウキやアケミは、日本での生活を語る際、将来展望とともに不安も語っている。ユウキは「私たちはいつクビになるかわからない」だけに、仕事を優先することが結果的に家族の「安定」につながると考えていた。アケミの場合は「日本の学校が良い（教育をする）ことは知っていた」というが「仕事がいつなくなるかわからない」という不安から日本の公立学校に通わせた。そして、ブラジル移動後、「私に仕事があるかわからない」からこそ「日本でも生活できるようになって欲しい」とも考えていたという。日本での生活上の不安を感じるからこそ、将来の計画を立てる必要があったのである。デカセギ型の親の多くが「日本で

の生活は一時的である」と考え、日本滞在時からブラジル移動後の教育を見据えている。とりわけ本節で強調した学校選択において、親の計画性は明確に理由付けられて語られる。

以上が、子どもの教育に関する親の教育戦略の析出理由である。親の多くが日本滞在中から、子どもの教育上のリスクを予見し、なんらかの形での改善策を講じようとしていることがわかる。そして、これらの教育戦略が日本とブラジルいずれにおいても社会的地位が安定しないこともその必要性を後押ししていることも浮かび上がる。

日系ブラジル人の親は、日本においては雇用の調節弁的な立場に位置づけられており、安定的な社会的地位にはなかった。そしてブラジル帰国後も、望むような仕事を得られるわけではない。「日本でも仕事がなかったが、ブラジルに戻ってきても仕事がみつかるわけじゃない（マルセラ）」や「ブラジルを見てください。日本のように工場がたくさんあるわけではありません（ユウキ）」というように、ブラジルでより良い仕事を見つけることは実のところ難しい。ユリによれば、ブラジルで経済的な支えがある人はそもそもデカセギを行わなかったという。デカセギの貯蓄を元手とし起業を目指す人もいるが、多くは経済的な困窮がデカセギ理由であるという。

ユ：ブラジルで生活が安定するわけではありません。多くは、ブラジルで仕事を探すのに苦労しています。もちろん日本とは違って言葉ができるので、自分でお店を持つ人もいます。でも実際は、経営のノウハウを知っているわけではない。

*：経営は難しいと

ユ：そうです。日本での生活のように誰かが仕事を見つけてくるというのに慣れてしまうと、自分で仕事を見つけるというのも大変で。夫は特に苦労しています。

本調査は2008年～12年のデータを使用しているため、ブラジル帰国後数年の方々を対象としている。それでも仕事をみつけないかったのは、ヘナトとマルセラ夫婦だけである。サンパウロで活動する就労支援組織でのインタビューでは、以下の様な語もある²⁹。

少なくともサンパウロで仕事が見つからないという人はほとんどいません。それは日本とは違ってブラジルでの就労がそもそも不安定であるということもあるかもしれませんが。それにいわゆる最低賃金的な仕事の担い手は数多くいます。そうした仕事につくわけでもありません。ただサンパウロで事務作業をするといった仕事に就くことは難しいですね。大学出身じゃなくてはならないとか、空白期間があるとか。（中略）ええ。そうです。日本にいる間に手に職をつけた人も多いですよ。例えば溶接とか。ですが、こうした仕事も最近のブラジルでは資格が必要なんです。そうした資格をとるために学校に通う方も多いです。

²⁹ サンパウロには帰国後の就労支援グループがある。ここで引用するグループはブラジル日本文化協会でも活動している大手のグループで、数百人規模の就労支援、仕事の斡旋をしている。

明確な賃金についてはインタビューすることはできなかったが、おおよそ「ドイス・サラリオ」程度が相場であるという。「ドイス」は「2」という意味で、「サラリオ」は最低賃金を意味する³⁰。生活することはできるが、高い給料を獲得できているわけではない。したがって、日本では不安定だった生活状況がブラジルにおいて好転するわけではないが、日本における不安定な状況よりかは若干改善されているとみてよいだろう。それでも生活が安定したとは言いがたく「子どもだけではなく親の支援も必要で、そうした団体を作ろうと思う（マルセラ）」といった状況にある。エジソンさんはブラジルで工務店を開いたが、その経営は多難であるという。

*：日本より稼ぎは少ないわけですか

エ：日本においては高い給料。ブラジルでは安定した給料。これはどちらも難しいね。（中略）でも、生活を続けるためには住み続けなくちゃね。

こうしたエジソンさんの語りに象徴されるように、ブラジルに帰国した日系ブラジル人の親世代の多くはブラジルでの永住を望んでいる。そのため日本での生活のように「給料が高ければ夜勤が続いても良い」といった就労形態から安定した生活を目指す。ただし日本に渡った空白期間を有する親にとって、安定した仕事をみつけることは容易ではない。もちろん、安定を求める親にとって、子どもにいかにして「より良い教育」を行うかは計画性を必要とする事柄なのである。

ところで、すべての親が計画性を語ることなどありえるのだろうか。そもそもデカセギ型とは、筆者が「日本滞在時の計画性を語った親」と定義した操作的なカテゴリーである³¹。また、本研究のインタビューはブラジルで行われたので、親が日本での生活を振り返り「積極的に意味づけているにすぎない」という見方もできる。親の計画性を「甘く」捉えすぎという批判はあるだろう。こうした論点は今後より検討しなければならないところである。

ここで、扱った事例の限りにおいて、親が明確な計画を必要とした理由の語りを整理しておきたい。第1に、ブラジルへ移動した子どもたちにより良い教育を与え「困らないように」したかったからである。困らないというのも「大学に進学して欲しい」「いい仕事を見つけて欲しい」「安定した生活をして欲しい」というものである。第2に「自分たちのようなデカセギになって欲しくない」というものである。そして第3に、親の計画性は将来への「期待」によって語られるだけでなく、「不安」を背景に語られている。ここでいう「不安」とは、日本での就労の不安定さであり、ブラジル移動後の不明確な見通しによる。そして「不安」

³⁰ 2009年頃のでいえば約1300ヘアル。日本円では10万円前後である。ブラジルでの感覚で言えば、少なくともは多くもないといったところであろう。

³¹ 本研究にあたっては26家族を対象とし、19家族をデカセギ型とした。残りの家族は日本での永住を念頭に生活設計を行っていたが、「失職」や「家族の事情」「離婚」といった理由で帰国した家族である。

の解消のため、親は将来の生活計画を可能な限り明確にしようとする。第4に、親にとってはデカセギ期間が空白の時間となっている。そのぶん親は安定した仕事を探しだそうとするが、これに併せて明確な教育戦略が必要となる。

明確な教育戦略を強調した場合、旧来の教育社会学的な観点からは、親学歴や文化会層の高さが「将来展望の明確化」や「高い教育期待」につながったのではないかという疑問も生じる。この点については本研究の事例だけでは議論することが難しいが、その範囲内に限って議論しておきたい。

21事例中4名が大卒で、残りの17事例が中卒、もしくは高卒である。もちろん当時のブラジルの社会情勢を考えれば大卒の希少価値が高く、高卒であっても相対的にはブラジルの中間層を占めていた。それでは大卒者に特有の教育戦略があるかといえ、そうした戦略を見出すことは難しかった。日本に渡った時点でブラジルでの教育歴はリセットされ、その多くが工場勤務になるため「自分のようにデカセギ」になってほしくないというある種の危機感が、子どもへの高い教育期待になったと思われる。「自分のようにデカセギとして働けば良い」という語りをするならば、わざわざブラジルに戻る必要はないからである³²。

日系ブラジル人の親世代が、移民2世であるにもかかわらず、ブラジル社会における中間層に至ったことについても説明が必要であろう。2章でみたように、日本移民はブラジルでの永住を決めたことで、ブラジルでの高い教育達成を目指すようになったとされる(宮尾2002など)。人文研(1993)の調査からは、当初のデカセギの目的のそのほとんどが自動車や自宅の購入といった生活上の購入目的のために行われてきたことを明らかにしている。だとすればこうした消費財や不動産をすでに所有している、購入できる人々にとって、デカセギのメリットは少ない。

宮尾(2002)をはじめブラジル日本移民80年史(1991)など、当時の日系社会の知識人らは、デカセギの影響を日系社会の空洞化を招いていると指摘しつつも、デカセギから帰国した人々が、日本文化を持ち帰ることによる日系社会へのポジティブな影響に期待を寄せている³³。実際、本調査をアテンドしてくれたすべての方々はデカセギ未経験者であり、その多くがブラジル社会で一定の地位を築いていた。ある程度の社会階層の人々にとってはインフレをブラジルで耐えしのぐ一方で、日本に行くことで生活上の困難さの打開を図った人々がいたことが浮かび上がる。

³² こうした語りの背景には、ブラジルに帰国した人々をブラジルでインタビューしたのだから、場当たりの発言がされにくいといった事情も強く影響している。いずれにしても、日本が日系ブラジル人を高待遇で迎え入れたら。あるいは日系ブラジル人にとって過ごしやすい環境があるとすれば、親はさほどの「計画性」を必要としないかもしれない。親の計画性や戦略性は、日本社会で相対的に低い社会階層に位置づけられればられるほど、より必要とされるのではないだろうか。

³³ 例えば「多くの青年たちの不在のため、団体活動に支障をきたし、諸行事が実施困難になっている現状も、やがて彼らが帰国し、身につけてきた日本的なものを持って再び団体に参加し中核となって活動してくれれば、新しい気運を吹き込んでくれることによって、会はさらに発展し地域社会も活性化するものと期待される(宮尾2002)」

また、日本へデカセギすることを選択した人々はブラジル社会における地方農村部の人々である。前山(1997)は日本移民の教育戦略とその帰結を「黒い兄姉」と「白い弟妹」という卓越した比喻によって表現している。移民労働力として雇われの身である移民にとって、たとえ独立したとしても社会的な地位上昇が望めるわけではない。こうした移民にとって社会上昇するチャンスとなるのが「教育」である。しかし、多くの家庭において、全ての子どもたちに教育を行う経済的余裕はない。そこで、兄姉は親とともに移住地で肉体労働をおこない、弟妹を都市部の大学に進学させた結果、日本語しか話せない日に焼けた兄と姉、ブラジルでポルトガル語教育を受け、大学まで進学した弟と妹と二分していった。もちろんこの比喻が指摘しているのは、少ない資源を集中的に投資することによる、移民家族の処世術のことである³⁴。

森(1995)は前山の議論を背景に「2世層からの最初の出稼ぎの主体は、景気変動を直接に受ける農業や自営業に従事する兄や姉たちであった(p.520)」とし、ポルトガル語で生活し、ホワイトカラー層に位置づいた「弟や妹」にとっては、肉体労働的な日本へのデカセギには強い抵抗感があつた(森1995 p.521)と指摘している。さらに、2つの意味で、当時の日系人の社会上昇戦略を変化させたことが2世のデカセギにつながつたという。それは第1に「経済的安定を達成したうえで子弟に高学歴を取得させようとしてきた日系人の『家族』経営体が、安定した経済基盤を維持し得なくなつてきた」ことであり、第2に「大学卒業という資格をもつ重要性が、経済停滞による就職難や、社会的威信の高い職業やキャリアと給与体系とが必ずしも対応しない」ことである(森1995 p.536)。その結果、不況のただ中にあるブラジルで生活するよりも、日本に渡るほうが良いと考える層がデカセギすることとなつたのである。これら当時のブラジル情勢のリアリティは、本調査対象者からも度々語られてきたことである。

そして、以上の議論をふまえたうえで、高い計画性や教育期待に特徴づけられるデカセギ型家族の教育戦略の析出理由についてまとめておきたい。まず、日本移民に引き継がれてきた「家高い教育達成と地位達成」という教育戦略は、日系ブラジル人にとってはスタンダードな戦略である。そしてそれは日本社会から排斥されればされるほど、厳しい社会を生き抜くための生存戦略として、子どもへの教育期待へと繋がつたのではないか。

「弟や妹」のデカセギは早急にデカセギを切り上げ帰国することを目指しただろうし、「兄と姉」のデカセギはブラジルでの生活への失望から日本で生活するか、それでもブラジルに帰るかを決めねばならなかつた。もちろん本論に関係するのは後者である。「兄と妹」のように、80年代から90年代のブラジルにおける教育達成や地位達成への諦観から日本へ渡つた人々にとっては、子どもたちを改めてブラジルに連れて帰るには様々な葛藤が生じたはずである。

³⁴ 2章で見たように、ブラジル日本移民家族での移民が義務付けられていたことも、こうした家族の教育戦略に結びついたのである。また、「兄姉」や「弟妹」はあくまで比喻である。

本研究で扱った事例の多くは、諦観とまでは言わなくとも、ブラジルでの生活上の困難から、日本への渡航を選択している。そして、日本が日系ブラジル人を優遇して受け入れたわけではないのだから、ブラジルへの帰国を見据えた生活を講じる必要が生じる。ブラジルへの帰国を念頭とするならば、変動するブラジル情勢に応じた教育が必要となる。したがって、親は熱心にブラジルの情報を集め「親族ネットワーク」を活用するのである。また、帰国後のブラジルにおける自身の社会的地位の低さが想定されるほど、帰国以前からの「計画性」や「言語教育」「私的投資」によって子どもたちへの教育を補う必要が生まれるのである。

そもそも、国家間を移動する人々の教育戦略と生まれてから子育てまで同一国で生活する人々の教育戦略の「析出理由」がそもそも同じか、という議論があろう。デカセギ型家族の高い計画性や教育期待を検討した時に見えてくるのは、かれらの教育戦略が「親学歴の差」や「文化階層」に影響されて析出されたというだけでなく、移民が位置づけられた境遇や社会階層における生存戦略としても生じているといった観点が必要となるはずである。

5. おわりに

日系ブラジル人は「デカセギ」のため日本へとやってきた。その目的は、帰国後の「より良い生活」のために「経済資本」を獲得することであるとされる。本節で取り上げた家族もまた、日本滞在を「一時的」なものとして捉え、帰国後の「より良い生活」を念頭に日本で生活してきたと語っている。実際のところ目的額の貯蓄を達成して帰国した人もいれば、予定していた以上に長期滞在した家族もいるが、必ずブラジルへ帰国するつもりで滞在していたという点では共通している。

そして、帰国後は日本で獲得した「経済資本」を元手に、家族の生活を再建し、ブラジルで「再出発」を目指すというのが基本的な語りのパターンである。日本滞りが「一時的」であるのだから「帰国後」を考慮するという一貫したストーリーは、多くの保護者が語るころであった。ここでいう「帰国後」や「より良い生活」も単身でデカセギする日系ブラジル人ならば、不動産の購入や事業資金の捻出といったものになるかもしれない。

一方で、教育期の子どもをもつ保護者が語る「より良い生活」とは、帰国後の家族の生活安定させることであり、子どもによりよい教育を与えることである。語りをみる限り、ほとんどの保護者は帰国後の「より良い生活」に、子どもたちの「より良い教育」を位置づけている。したがって、デカセギで獲得した「経済資本」を子どもたちの教育に投資することは、家族の「より良い生活」のため自然なこととして語られている。

保護者の語りをみたところ、「経済資本」の有力な投資先は、日本ではブラジル人学校であり、ブラジルでは私立学校である。いずれも高額な学費が必要だが、子どもたちの将来を見据えれば必要な出費であるとされる。ノエミは、子どもの成長とともにデカセギの主要な目的が学費調達になっていったという。それもまた、帰国後の「より良い生活」のためである。なかには、子どもを日本の公立学校に通わせる保護者もいるが、その場合はポルトガル語の家庭教師をつけるなど別の形で教育投資がおこなわれている。全てはブラジル帰国後の

子どもの生活のためであり、一連の教育投資は保護者にとって当たり前の帰結なのである。

帰国後の保護者は、子どもの進路への希望として「大学進学」を語っている。ブラジルでは、急速な経済発展を背景に大学が大衆化しつつある。大学進学が主要な就職条件となっているため、質の良い教育を与えるためには私立学校に通わせるほかない。ブラジル人学校や私立学校を媒介として、保護者の「経済資本」が子どもの「文化資本」へ転換される過程を見出すことができた。こうした教育投資の結果、実際に子どもたちが大学進学を果たしていくところをみると、保護者の計画・戦略には一定の成果があったと判断して良いだろう。

他方で、ブラジルでの学業達成や生活に支障がなかったとしても、5章や6章で扱うように、日本に帰りたいと語る子どもたちもいる。保護者の期待や投資とは裏腹に、長期間日本で滞在してきた子どもたちにとって、ルーツと呼べる場所は日本だからである。子ども世代にしてみれば、インターネットを使えばブラジルと連絡を取ることは容易である。さらに、現在はこれまでより安価な航空券が販売されるようになっており、日本に移動することはそれほど難しいことではない。こうしたグローバル化が子どもたちの日本への移動を後押ししているのである。子どもたちは単身日本へ渡りそれぞれ希望の進路に進んでいく場合さえある。子どもたちによる日本への再移動は、一部の家族で見られたことであるのも、親世代にとって帰国はデカセギの終わりを意味するかもしれないが、子どもにとって再渡日の道は開かれているからである。

5章 帰国した子どもたちの生活

1. はじめに

先行研究で概観したように、日本で生活する日系ブラジル人は、将来の展望をもたず無計画で非合理的な教育をおこなっていると語られることが多かった。さらに、これまでの研究において、国家間の移動は、子どもたちの生活環境を激変させるため、その後の生活適応の大きな障壁になると語られてきた。しかし、前章でみたように、一部の日系ブラジル人の親は、子どもたちの生活環境の変化に対応するため、積極的な教育を施していることがわかった。そしてブラジルへ帰国したすべての子どもが適応に失敗しているわけではなく、以下でみるように、ブラジルでの生活に適応している子どもたちも同程度いることが分かった。では親の教育戦略をうけ、子どもたちは帰国後どのような生活状況にあるのだろうか。

ここで問題になるのが、親の教育戦略と子どもたちの生活の因果関係である。例えば、ユカ³⁵の事例では、親がブラジルへの帰国を見越してポルトガル語教育や私的教育への投資をおこなっている。しかし、ユカはブラジル帰国後の生活になじめなかったと語り、再渡日している。一方、ジルベルト³⁶の事例では、ブラジル帰国を見据えた教育を家族あまり与えられなかったと語っているが、帰国後の生活に適応していると語る。さらにはセルージュオのように初回インタビューにはブラジルでの生活に馴染めず「親の責任」を声高に語ったものの、後年のインタビューでは「親や親族にも配慮してもらった」と語り直す場合もある。

親の教育戦略がどのような帰結を導くかは、子どもたちの生活状況や帰国時期によって様々である。また、教育戦略は教育に限らず子どもたちの生活全般に影響をあたえるが、帰国後の生活適応や学校適応を決定づけるのは親の教育戦略だけではなく、ブラジル帰国後の家族の生活状況やブラジルの社会制度など様々な要素が関連する³⁷。そして、子どもたちは、幼少の頃のブラジルでの生活経験や日本での生活経験を土台とし、ブラジルでの日常生活や学

³⁵ ユカ、女性、18歳、ブラジル生まれ、日本の公立、ブラジル人学校を経て、ブラジルの私立高校へ、日本語でインタビュー

³⁶ ジルベルト、男性、17歳、ブラジル生まれ、日本の公立、ブラジル人学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

³⁷ 表4-1ではほぼ全ての子どもたちが「帰国に向けての教育」を親から受けたと分類した。ジルベルトの事例では「帰国前にブラジル人学校に転入」や「ブラジルで私立学校入学」など親が様々な配慮を行っている。しかし、ジルベルト本人は特段の教育を受けたわけではないと語っている。こうして見ていくと、まさに個々の事例それぞれとしか言いようが無い現状がある。また、子どものインタビューにしても、親のインタビューにしても「語り」を対象としている以上、自分自身にとって有意味になっていることしか語られない。親が熱心に塾に通わせ、家庭教師をつけたとしても、大学進学 of 全てが成功するわけではない。進学に成功しなければ、子どもたちが親の教育や配慮に対して積極的な評価をすることは難しくなる。教育戦略の有無と子どもの教育達成の因果関係は、必ずしも直線的になるわけではない。したがって、本研究では教育戦略と子どもたちの生活や教育達成を因果関係として結ぶのではなく、個々の生活状況から「移動と教育」に関して検討することにした。

校生活を意味付けながら生活している。そこで、本章では子どもたちのインタビューデータから、かれらの生活状況を再構成していくことを通じて、子どもたちが「移動の物語」を形成していく姿を描き出す。

ここでは2008~2010年までに収集したインタビューの対象者である子どもたち39名を、帰国前の日本と帰国後のブラジルでの生活実態を問う「日本・ブラジルでの暮らし向について評価してください」という質問と、学業達成に関する「日本・ブラジルでの学校の成績/学校選択について教えてください」という2つの質問への回答をもとに4つのタイプに分類した。第1に、日本でもブラジルでもうまくいかなかったと語る4ケース。第2に日本ではうまくいっていたが、ブラジルで学校になじめなかったと語る9ケース。第3に日本ではうまくいかなかったが、ブラジルにきて成功したと語る8ケース。第4に日本とブラジルでもうまくやっていたと語る17ケースである。このように分類すると、移動を単に障壁と捉える過去の研究が強調してきた第1と第2のケースよりも、インタビューしたなかでは、第3と第4のケースを多数見いだすこととなった。

2. 不適應の連鎖

はじめに、日本での生活に馴染めず、ブラジルでの生活にも馴染めなかった事例をみていこう。国家間の移動が、子どもたちの適応に大きなインパクトを与えるという先行研究の知見から考えれば、日本でもブラジルでも不適應が生じる事例が多くなると想定される。しかし、本研究で扱う事例において、日本でもブラジルでも不適應であると分類できる子どもたちを見いだすことは難しく、4事例に留まる。事例数の少なさについては後ほど検討することとし、ここでは4事例のなかからブラジル生まれのユカをみてみよう。親の教育投資やポルトガル語教育を受けたにもかかわらず、帰国後のブラジル社会への適応が難しかった事例である。

ユカの生活史から³⁸

ブラジルで生まれたユカは、保育園から小学校2年生まで日本の公立学校で過ごした。ポルトガル語を忘れかけていたことを両親が心配し、日本のブラジル人学校へ転校させた。しかし、ブラジル人学校ではポルトガル語を理解できなかったことで、授業についていけず学校に行くのが嫌になり休みがちになった。家族は帰国するための準備を進めていたので、自分がいつか帰国せざるをえないということはわかっていた。父はしばしばブラジルへ里帰りしており、ユカは父親に伴って何度か帰国していた。父が帰国すると、多くの父親の友人が出迎え歓迎してくれた。

ユ：(一時帰国を経験し) ブラジルでの生活も悪くないと思いました。(中略) 日本でもあ

³⁸ ユカ、女性、18歳、ブラジル生まれ、日本の公立、ブラジル人学校を経て、ブラジルの私立高校へ、日本語でインタビュー

まり勉強出来なかったし、それくらいならブラジルで・・・

こうして、ブラジルでの生活も悪くないと考え、中学校卒業を前に父と帰国した。家族もユカが日本に馴染めなかったこともあり、ブラジルで心機一転する方が良いと考えた。兄姉は学校に通っていたため、母と共に日本に残っている。家族が離れて生活することが不安であったが、むしろブラジル行きを楽しみにしていたという。

帰国後、現地の公立学校に入学した。帰国後の生活は、ユカの想像していたものとは違った。まず、日系人が多い町といっても、日本語をしゃべれるのは高齢者ばかりであった。日本語を話せる同年代の子どもはほとんどいなかった。ブラジルの公立学校の勉強は簡単だと聞いていたが、日本で勉強していなかったこともあって授業についていくことができなくなった。ユカによると、授業についていけないことで登校が嫌になることもあったが、勉強がわからないことは大きな問題だと思わなかったという。「勉強が出来ないのは日本でも同じようなもの」だからである。したがって、ユカにとって同年代と友人関係を築けないことが問題だった。同年代のブラジル人は恋愛や恋人のことを話題にする傾向にあるが、ユカが興味を持っているのは日本の漫画やアニメである。

ユ：自分は漫画、アニメなどが好きだし、日本語で話すほうが好き。それにアニメや漫画は日本語だし安心する

ユカの唯一の楽しみは、二カ月に一回程度、高速バスで片道八時間かけてサンパウロまで足を運び、日本の漫画やアニメなどを購入することであった。インターネットで情報を熱心に集め、イラストを描いてファンサイトに投稿したり、原作に基づいたサイドストーリーを書いている。日本にいた頃の友人との連絡は途絶えてしまったが、インターネット上のアニメサイトで、日本語でチャットをするのが楽しみだという。サイトに集う知り合いが一番の仲間であり理解者である。

こうして、学校も休みがちになってしまい、ポルトガル語があまり必要とされないスーパーマーケットでアルバイトをして生活するようになった。だが、一生ブラジルの田舎町で過ごさなくてはならないのかと考えると将来が不安になり、ユカは時々「死にたい」と思うようになっていった。

ユカにとってブラジルで現状を変えることは難しく「日本に行ってバイトする。日本なら働ける」と考えるようになっていった。ユカは父と相談し、日本の家族のもとへ帰国した。現在は日本でアルバイトを続けながら、大学に進学するか就職するか迷っている。日本の学校で勉強してきたわけではなかったため大学進学は難しい。しかし就職するにしても、満足できる選択肢が見いだせない。

日本でもブラジルでもうまいかなかったと語るケースは、ユカの言葉をかりれば「中途

半端」な状況にある。日本の公立学校とブラジル人学校、ブラジルの公立学校と通ってきたものの、日本語もポルトガル語も十分に習得することができなかった。日本の学校では断片的な学習しかしていなかったため、ブラジルの学校でも勉強についていくことができなかった。ブラジルでの生活が成り立たず、再渡日して再起を図るが、日本でも限られた選択肢しかなく、現在のユカは厳しい状況におかれている。

確かに、ブラジルへの帰国が場当たりのにおこなわれたことに、親の見通しの甘さがあったのかもしれない。ユカと同じような経緯で帰国したチカ³⁹も、親の場当たりの移動の結果、どちらの国にも適応することが難しくなったと語っている。

チ：日本に残ると思っていたので。だから帰国しなければならないというのも現実的ではなかったんです。(中略)日本でもたぶん働かなくちゃいけなかったと思うんですが、ブラジルでもそれは同じで。ブラジルの学校じゃポルトガル語を勉強してもなかなか周囲とうまくいかないっていうか・・・。

チカの場合は日本の公立学校での生活に馴染めず、徐々に不登校になりつつあった。そうした頃に親が帰国を見据えてポルトガル語の家庭教師を雇用した。そしてブラジルに帰国したものの、ブラジルの学校になじめないという。先ほど取り上げたユカの親は、日本滞在時にユカをブラジル人学校へ転入させ、ポルトガル語の使用を促すなど積極的に教育をほどこしてきた。

親も限られた情報と資源で子どもに教育を施すしかない。親から与えられた情報や資源を、子どもたちが充分活用できなかった場合、適応は難しいものとなる。また、ユカがブラジルで「うまくいかなかった」と語るのは、「言葉」や「学力」だけではなく、日本とブラジルにおける日常生活や友人関係の違いによる。日常生活や友人関係の違いからブラジルでの生活に意味を見出すことができず、学校での勉強が疎かになっていったというのはチカにもみられた。

3. 帰国後の適応の難しさ

次に日本での生活に満足していたが、帰国後の適応の困難を語った9事例をみてみよう。9事例の語りは、内容の違いから日本での学校選択の違い（ブラジル人学校グループと公立学校グループ）に特徴付けられる。ブラジル人学校ではブラジル教育がおこなわれているため、帰国後の文化適応に問題が生じにくく、逆に日本の公立学校出身者のほうが帰国後に問題が生じやすいと想定されうるが、ブラジル人学校出身者も、特有の問題を抱えており、ブラジル社会への適応が難しい場合が見られた。そこで、まずはブラジル人学校出身者の事例を、つぎに日本の公立学校出身の子どもたちについてみてみよう。

³⁹ チカ、女性、20歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

ミナミの生活史から⁴⁰

ミナミが日本へ渡ったのは小学校進学時であった。ブラジルで両親が離婚し、母親は生活のため日本へデカセギすることを決めた。ブラジルへの帰国を見据え、母親はミナミをブラジル人学校に入学させた。ブラジル人学校の高額な授業料の支払いは家計的に厳しかったが、子どもにより良い教育を与えたかったからである。ミナミにとってブラジル人学校の勉強は、難しいうえに進度がはやく、ついていくのに苦勞した。それでも先生や友人たちに助けられながら、ブラジル人学校で勉強した。苦勞も多かったが日本での生活は楽しかったと語った。

2008年の経済危機で母親が失職。このままでは、ブラジル人学校への通学はもちろん、生活を続けていけないと考え帰国することになった。帰国したミナミは経済的な理由から公立学校に進学した。しかし、ブラジルの学校が日本と違い面白くないという。ミナミは高校2年生のクラスに編入した。しかしミナミにとってブラジルの公立学校の授業レベルは低く、日本の中学校3年生にあたる基礎学校8年生の内容が教えられていた。日本で全部勉強したことがある内容であり簡単すぎておもしろくなかった。周囲の生徒らも授業を真面目に聞いておらず、教室の雰囲気も好きになれない。

辛かったことは、友人を作ることができず孤立したことであった。学校の同級生は日常の生活や恋愛を話題とし、編入したミナミは話題を共有することができなかった。気を紛らわせようとしても、治安のよくないブラジルでは外出も制限されている。面白くない学校と家の行き来に嫌気し、ミナミはブラジルでの生活にむいていないのではないかと考えるようになっていった。

日本での勉強のおかげで、大学進学を望めばよい大学へ進学できると学校からいわれている。しかし、ミナミはブラジルで生活を続けるつもりはない。日本へ留学生として戻ったほうが良い教育が受けられると考えている。母親は日本の景気が回復すれば再渡日するつもりなので、母と共に日本へと再渡日する計画である。

日本のブラジル人学校出身者で、ブラジルの生活に馴染めないと語る事例は、ここでとりあげたミナミ以外に、ヴァニア⁴¹の事例がある。それぞれ、2008年のサブプライム・ショックによって突然帰国することになった。経済的な理由から帰国せざるをえなかったため、費用がかからない公立学校へと進学している。学校では、日本のブラジル人学校で学んだポルトガル語を駆使し高い成績をおさめている。それにもかかわらず、子どもたちは現状への不満や将来の不安から、ブラジルでの生活を諦めて、現在は再渡日を模索している。

⁴⁰ ミナミ、女性、18歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの公立高校へ、ポルトガル語でインタビュー

⁴¹ ヴァニア、女性、16歳、ブラジル生まれ、日本のブラジル人学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

かれらの語りに共通する不満や不安は、ブラジルの公立学校の学習内容の低さ・学習進度の遅さ、さらに日常を安全に暮らすことができないということである。

ヴァニアは、学習進度のあまりの遅さに「このままブラジルの学校に通っていたら、勉強ができなくなる」と不安を感じ、アキコは、治安の問題から自由に外出できず、いっそう「勉強かすることがない」だけに、ブラジルの公立学校の勉強に不安を感じ「早く帰国して日本で勉強したい」と語っている。

さらに、サブプライム・ショックによって突然帰国したことで、帰国が充分意味づけられておらず、日本の景気次第で再渡日するかもしれないと考えている。なかでも、ミナミは、家族が日本に帰ることを望んでいることもあり、ブラジル滞在が「一時的」なことであると考え、ブラジルでの勉強に身が入らない状況にある。このように、ブラジル人学校出身者でも、帰国後の生活に適応できるわけではない。ブラジル人学校は日本にいる日系ブラジル人を受け入れる教育機関としてのみ存在しているのではなく、ブラジルで生活している子どもたちにとっては「日本でも通える学校がある」といったある種の「よりどころ」としても機能しているのである。こうした子どもたちのリアリティとは、ブラジル人学校を卒業し、親と同じように日本で働くか、ブラジルでの進学を目指すことである。

それでは日本の公立学校出身者の事例ではどうだろうか。日本の公立学校出身者がブラジル社会に適応することを考えたとき、問題となるのはポルトガル語能力である。しかし、日本の公立学校出身者の場合、ポルトガル語能力以外の要素によっても適応が難しくなる場合がある。ここでは、それが顕著に現れる大学進学を前に帰国したセルージオの事例をみてみよう。セルージオは大学進学のためにブラジルへ帰国した。しかし両国の制度の違いや生活環境の違いから挫折してしまった。ユカのように、ブラジルでの生活に馴染めず日本への再帰国を模索し実際に再渡日した。

セルージオの生活史から⁴²

両親を含め親戚が日本で働いていたので、セルージオはブラジルの祖母の元で暮らしていた。両親は日本での生活に満足し、ブラジルへの帰国を取りやめ、小学校入学時にセルージオを日本へ呼んだ。

しかし、セルージオを呼んだ両親の関係が悪くなり、渡日後しばらくして離婚、それぞれ別の相手と再婚した。セルージオは住む場所も定まらず、叔母と母の家を転々とした。来日当初、セルージオは日本語を喋ることが出来なかった。それでも熱心に勉強し日本の学校の勉強についていけるようになった。日本では多くの友達に恵まれた。ブラジル人であることを気にせず打ち解けてくれたことが嬉しかったという。家庭生活が安定しなかったぶん、学校に通うことは楽しかった。

高校3年生になって大学進学を目指し受験勉強に打ち込んだ。しかし、母から金銭面の問

⁴² セルージオ、男性、20歳、ブラジル生まれ、日本で高校まで進学。日本語でインタビュー

題から進学は難しいと言われ落ち込んでいたところ、ブラジルならば無料で進学できるという薦めを受けた。ブラジルのほうが勉強も簡単で生活しやすいという断片的な情報を聞くことがあった。そこで、帰国を望んでいた祖母と共にブラジルへ帰国した。

帰国後、大学受験を試みるが、試験が予想以上に難しく失敗する。近年のブラジルは経済的な急成長に伴い、教育産業が伸長し、受験競争も激しさを増している。セルージェオが望んでいた国立大学進学のためには、ブラジルでも相当の勉強が必要である。ポルトガル語能力の問題もあったが、試験で最も厳しかったのが、ブラジルの地理や歴史科目である。ブラジルでの学校経験がないセルージェオに突破できるような試験ではなかった。

さらに、ブラジルは経済成長に伴って生活用品の価格も上昇傾向にあり、祖母の年金だけで生活することは難しい。やむを得ず就職することを考えたが、ポルトガル語能力の問題でどこも雇ってくれなかった。その他にも「ノリの違うブラジル人」とは友人になれず、ブラジルでの生活は孤独感でいっぱいだった。ブラジルでの生活に期待をすることもあったが、大学進学ができなかったこと、ブラジルの生活に馴染めないことを「失敗」と考えるうち自信を失ってしまった。その後、セルージェオは日本へと帰国し、アルバイトを経て日本で大学進学を果たした。あまりにも簡単に日本の大学進学できたことを「そりゃそうか・・・高校まで勉強してたんだし」と語っている。

ブラジルに帰国した日本での公立学校出身者は、ポルトガル語能力や生活環境の違いから適応の難しさを語る場合が多かった。だが、その点ばかりを強調すると、その他の問題が見逃されてしまう。学校生活の違いについて、ポルトガル語だけでなく、歴史や地理といった特有の科目に関する困難が語られている。

セルージェオ以外にも、例えばサムエル⁴³の場合、日本では公立学校に通っていたが、幼少の頃から両親がポルトガル語を徹底して教え、帰国後は家庭教師をつけて勉強をさせている。帰国したサムエルは、学校のポルトガル語は理解できたという。しかし、歴史や地理といった科目の知識が充分でなかったことで、学校生活に困難を感じている。

セルージェオの事例では問題が更に複合的である。家庭の不和や生活の困窮がありブラジルへの適応を難しくしている。ブラジルの経済成長によって、日本と変わらない生活ができることを肯定的に捉える子どもたちがいる一方で、物価の上昇により生活の豊かさが失われ、日本以上の貧困状況におちいる子どもたちもみられた。

ところで、セルージェオの事例をみると、ブラジルに帰国したことで将来展望をもつことが困難になったが、再渡日したことで、将来の展望をもつことができた子どもたちもいる。以下でも取り上げるが、生活拠点を別の国に移すことで生じた困難や課題を、再移動によって解消しようとするのが、子どもたちにとって選択肢のひとつとなっているのである。より自分にあった教育を求め再移動することは、今回の調査上度々みることができた。

⁴³ サムエル、男性、16歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの私立高校、日本語でインタビュー

4. 帰国がもたらした進学

ここまでは、ブラジルでの適応の難しさを語った事例についてみてきた。次に、日本での生活が上手く行かず、日本社会や学校に「不適応」「不就学状況」にあった子どもたちが、ブラジル帰国後は「適応」できたという事例をみてみよう。本調査では 8 ケースがこれに該当する。アケミ⁴⁴は日本の公立学校に通わなくなり、そのまま家族と同じ工場で働いてきた。ジルベルトもまた中学卒業後、家族とともに働こうとしていた。両者ともに日本での高校進学を考えていなかったと語っている。

アケミの生活史から

アケミが幼少のころ、デカセギが本格化した。続々と周囲の日系人の友人が渡日するようになった。友人が突然いなくなり寂しい思いをした。そして、友人が日本に行くたびに、次は自分かもしれない、自分も日本に行くかもしれないと考えていた。

そして小学校入学時に家族とともに渡日。すぐに公立学校へ通学することになった。日本語での勉強は難しく、学校になじむことができなかった。そこで中学校卒業後、高校には進学せず両親と同じ工場で働き始めた。周囲のブラジル人は中学校を卒業するとすぐに働いていたので、自分も中学校卒業後は働くものと考えていた。

数年間工場で働き、知り合いの紹介で出会ったブラジル人と結婚。すぐに妊娠していることもわかった。母親になることは嬉しかったが「子どもたちも自分と同じく工場で働くのだろうか」、「このまま日本で生活していいのだろうか」と悩みブラジルへ帰国することを考えはじめた。

帰国のきっかけを掴めないでいたが、経済危機の影響による夫の仕事の解雇を期に、ブラジルへ帰国することにした。ブラジルでの生活経験がほとんどなかったため、帰国後の生活と子育てが不安だったという。アケミは、夫の家族が暮らすサンパウロ州奥地の町で生活することにした。ブラジルでの生活は日本に比べれば質素だが充実しているという。思っていた以上に、周囲の親族からの支援があることも心強いという。

しかし日本で生活していた頃に比べると金銭的余裕はなく、夫は親族の仕事を手伝っている状態である。アケミは、子どもたちの将来のためにすこしでも貯蓄したいと考え、仕事を探したが見つけられなかった。求人があったとしても、高校の卒業資格がないために雇ってもらえないのである。

アケミ：日本だと高校卒業しなくても仕事があったけど、こちら卒業してない人も多いし。してたとしても仕事がない。仕事を見つけるのは大変今思うと。(…) こっち(ブラジル)でもちゃんと学校終わってないから。どっちも中途半端になって。今になって何もできな

⁴⁴ アケミ、女性、23 歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの公立高校、日本語でインタビュー

いじゃないですか。今帰ってきてこっちでも勉強しなくちゃいけないし。(…)ブラジルの生活も仕事もわからないし。

そこで、親族からの勧めで、子どもたちを育てながら、高校卒業資格を取得できる補習高校に通うようになった。子育てをしながら勉強できるのは、両親や親戚の支えがあったからである。いまの生活に満足しているが、日本で高校を卒業しておけばよかったという。何の資格をもたないまま帰国したことで「中途半端になっちゃう。(高校卒業資格や技術資格)がないと仕事できないです。できないよ。ちゃんとしたのはできない」からである。

アケミの周囲にもブラジルへ帰国した人は多い。そうした人びとのなかには、日本の景気が良くなればデカセギに行くと話すことがよくある。ブラジルの仕事は厳しくその割に日本のような生活ができるわけではないからである。しかしアケミは子どものために、二度とデカセギをしないと決めている。「行ったりきたりするのでは自分ようになってしまう。ブラジルで育てていきたい」との思いからである。

ジルベルトの生活史から⁴⁵

生活のためにデカセギを決めた家族に連れられ、ジルベルトは6歳で日本へと渡った。両親らは1年で帰国するつもりだったので、ジルベルトを学校に通わせなかった。帰国後の生活を考えたとき、日本の学校に通うことでジルベルトが混乱するのではないかと考えたからである。

1年後、両親の仕事は忙しかったが、ブラジルよりもはるかに良い収入を得ることができるようになっていた。家族全員が日本での生活に満足していたこともあり、日本での永住も考えるようになった。そこで、当初はブラジル人学校に通わせたが、日本で生活すると決めた両親は、ジルベルトを公立小学校に入学させた。

ジルベルトは日本語の勉強をしていなかったため、授業時間は苦痛で勉強も嫌いになっていった。学校を休みながら中学校3年生まで通い、進路を考えなければならなくなった。学力不足から、高校進学は難しいと考えたジルベルトは、父と同じ工場に就職すると決めた。

2008年7月、ジルベルトの家族は夏休みを利用してブラジルへ帰省した。夏休みが明ければ日本へと帰国するつもりだったが、経済危機の影響で、ブラジルにおいて父が失職する。経済状況の今後が見通せない日本での生活が難しいと考え、家族はブラジルに残ることを選択した。家族の生活用品等を整理するために日本へ渡った両親を見送る時、ジルベルトは「必ず持ち帰ってほしいものリスト」を手渡した。

日本へ帰国ができないとわかってから「家族はばらばらだった」という。とりわけまだ幼かった弟や妹は、日本に帰れないことが納得出来なかった。ジルベルトは、自分一人だけなら帰国して生活できるのではないかと考えていたが、「長男の自分だけが帰国するわけにも

⁴⁵ ジルベルト、男性、17歳、ブラジル生まれ、日本の公立、ブラジル人学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

いけない」ので、「ばらばらになった家族」をまとめる決意をした。両親の仕事を率先して手伝い、ブラジルの学校を怖がる弟と妹を連れ、行く必要を感じなかった学校に通った。

ところが、ポルトガル語で勉強すると驚くほど内容が理解できた。進度も日本ほど早くなく、ゆっくり勉強することができた。日本でも家族とポルトガル語で会話していたので、ポルトガル語の授業もわかった。そしてジルベルトは高校に進学することになった。

ジルベルトは「ブラジルのほうが勉強簡単だからラッキーだったよ」「自分の言葉はポルトガル語だった」という。日本で果たせなかった高校進学は、ジルベルトの自信となった。将来はブラジルで高校卒業資格を取得し、日本で就職したいという。「すくなくとも中卒よりかはいい」と語った。

日本における日系ブラジル人の子どもたちを取り巻く生活環境は決して良いものとはいえない。経済的な理由だけでなく、学習の難しさやモデルケースの不在などから、進学をあきらめ劣悪な労働条件のもと就労する子どもたちは少なくない。8ケースは全て「日本にいたら進学できなかった」子どもたちが両国での生活環境の違いや教育制度の違いをうまく活用することで、ブラジル帰国後に高校進学を果たしたという。

特に、ジルベルトとアケミは、経済危機がなければ日本で生活していた。そして高校や大学に進学するのではなく、周囲と同じく就職しようと考えていた。その選択は主体的に選びとったものというより、アケミの言葉をかりれば「それ以外に選択肢がなかった、あるとも思わなかった」からである。それでも、2人にとっては日本で果たすことができなかった高校進学の道を開いた。その背景に前項でみた日本のブラジル人学校出身者との違いがみえる。ブラジルの公立学校の学習レベルの低さや学習進度の遅さは、日本のブラジル人学校出身者の学習意欲を削ぐ結果になったが、逆に日本の学校であり勉強をしてこなかったジルベルトやアケミにとってはちょうどよいものとなり学習意欲が高まったからである。

両者ともに高卒資格を取得することで、中卒資格より就職に繋がりやすいと考えている点で共通している。とはいえ、アケミがいうように、高校卒業資格を持っていたとしてもブラジルで仕事を見つけることは容易でない。以前ならまだしも、ブラジルの高校進学率は近年上昇の一途を辿っているからである。ジルベルトは、高校卒業後、日本へ渡るといふ。しかし、ブラジルで高校卒業資格取得し日本へ渡ったとしても、就職が有利になるかはわからない。いずれにしても、ここで扱った8ケースの学力や家庭の経済状況をみると、高等教育への進学を目指せる状況にある子どもたちはいない。就職する他ないという意味で、子どもたちの進路は限られた状況にあるのかもしれない。ブラジル帰国後の進学は、子どもたちにとってより良い進路を主体的に模索するきっかけになっている。

5. ブラジル帰国後の高い教育達成

それでは最後に、日本とブラジルどちらでも違和感なく生活出来たと語った事例についてみてみよう。本研究で扱うデータの中では、このグループが多くを占め、39事例中17事例が

これに該当する。日本とブラジル,どちらの生活についてもポジティブな回答がなされ,ほぼすべての子どもたちが高等教育進学を将来の目標と語っている。実際に有名私立高校や大学へ進学したケースも少なくない。こうした事例の中から,高等学校進学者や有名私立校進学者について取り上げてみよう。

リカ的生活史から⁴⁶

リカは幼稚園に通っていたころ,両親のデカセギに伴って日本へと渡った。渡日前の生活についてはほとんど覚えていない。両親は日本での滞在を3年間と決めていた。日本での生活が長くなると,ブラジル帰国後の生活に支障があると考えたからである。リカにも3年後は帰国すると伝えていた。日本では「いつか帰国することになる」と思いながら生活していたという。

日本のことを知ってほしいという意向から,リカは公立小学校に入学,3年生まで通った。両親はリカの学校生活が短い期間ならば,日本の学校に馴染み過ぎず,ポルトガル語を忘れることもないだろうと考えていた。学校ではブラジル人という理由でいじめられることもあった。仕事で忙しい両親と生活時間がすれ違い,さびしい思いもした。しかし日本での生活は,ブラジルで体験できないことが多かったので楽しかったという。日本語の勉強にもあまり苦勞を感じず,家庭でも日本語を使うようになっていった。

家族は計画通り3年後にブラジルへ帰国した。両親が驚いたのは,リカが日本語ばかり使っていたからか,ポルトガル語を喋れなくなったことである。心配した母親は,地元私立学校へ入学するまで毎日ポルトガル語を教えた。リカによると「お母さんはとても厳しかった」という。母親はポルトガル語以外の教科についても,独自にテキストを用意し入学後に困らないよう教えた。それでも入学後の勉強は苦勞した。両親はリカのペースで勉強すれば良いと考えていたが,勉強の進捗についてはいつも気にかけていた。「家に帰るといつも勉強のことを聞かれた」という。小学校を卒業する頃には学校にも慣れ,勉強がわかるようになってきた。

リカは勉強を続けられたのは「お母さんがいつもみてくれたから」だと語る。ブラジルの勉強は苦しいものだったが,家族の支えがあることで努力を重ねることができた。高校卒業後,地元の名門大学に進学し,獣医学を専攻している。将来は獣医学が発展しているアメリカか日本への留学を考えている。帰国時,リカにポルトガル語を教えた母は,現在日本語を教えている。ブラジル帰国時のポルトガル語ほど日本語を忘れてしまったわけではないが,難しい単語はわからない。言葉の勉強は大変だが,日本での経験を無駄にしないためにも,改めて日本語を勉強しようと考えている。

アヤ的生活史から⁴⁷

⁴⁶ リカ、女性、20歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

アヤは生後すぐに日本へ渡った。日本語のみで生活し、公立学校に進学した。ブラジルへ帰国したのは小学校卒業時である。中学校入学後、どの部活に入ろうか考えていたとき、両親からブラジルへの帰国を告げられた。

自分がブラジル人であることは知っていた。だからといってブラジルに帰国するとは考えていなかった。アヤの両親も経済的に安定した日本で永住するつもりだった。しかし家族の事情から帰国せざるを得なくなった。アヤはブラジルへ行きたくなかったが、家族を困らせてはいけないという気持ちから帰国に反対しなかった。

帰国時のアヤは、ポルトガル語をほとんど理解することが出来なかった。日本では両親との会話で簡単なポルトガル語を使う以外、日本語で生活していたからである。両親はアヤを心配し、帰国後すぐに家庭教師をつけて勉強させた。両親としては公立学校よりも手厚い教育が期待できる私立学校に進学させたかった。アヤは猛勉強の結果、私立中学へと進学することができた。

学校での勉強は難しかったが、家庭教師と勉強することについていくことができた。両親は家計が厳しいにもかかわらず家庭教師をつけるなど、アヤの教育をなにより優先してくれた。アヤは両親からの期待を感じながら生活することができたので、ブラジルで勉強を続けていくことができたという。高校を卒業し、現在はデザイン系の大学に在籍している。ポルトガル語で喋ることに支障はないが、文章を書いたりするのは今でも苦手で、大学のレポートに苦労しているという。

ブラジルでの生活に慣れてきたころ、アヤは日本のことを忘れようとしていた時期があった。日本へ帰ることができないのだから、日本のことを考えないように「努力していた」という。他方で、母親はアヤに日本語を忘れてはいけないと言って聞かせた。母親が日本語を勉強したほうが良いというのが疎ましく「ブラジルに帰りたかったわけじゃない」「お母さんは自分勝手だと思う」こともあった。しかし大学へ進学し、ポルトガル語での生活が日常になると「日本語の勉強をしたい」気持ちが強くなっていった。

アヤ：やっぱりせっかく日本で育ってきたんだからちゃんと覚えていたいなって思っています。去年から・・・きっかけはないんですけど、日本語を喋れることはいいなと思うときがあるんですよ。誰かと話すときとか、日本で過ごしていた人と話すときと懐かしいなと思うんです

最近、日本語学校の先生の勧めで、日本語検定1級を受験し合格した。日本語検定を合格したことは、アヤにとって勉強の励みになった。また、アヤが日本語を維持するのも、インターネットを通じて日本のテレビドラマをみるうえで「都合が良い」からである。ブラジルのドラマはアヤの趣味にはあわないというのだ。

47 アヤ、女性、28歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの私立高校へ、日本語でインタビュー

アヤ：あと、テレビを見るなら日本のドラマです。そのためにも日本語が必要で。ブラジルのはどこか自分にあわないんですよね。いまは日本のドラマみれるじゃないですか。インターネットとかで。だから普段は日本と関わることが多いですよ

このように日本のテレビ番組などを通じて、言語力はいまでも維持されている。そして日本語学校の先生になろうと考えたこともあるが、日本語教師の給与は低く生活していけないことから諦めたという。このまま日本語を忘れないように努力しながら、ブラジルでの就職活動を頑張りたいと語った。

レアンドルの生活史から⁴⁸

両親のデカセギを理由に、レアンドルは2歳半で日本へと渡った。渡り前のブラジルについては覚えていない。幼稚園を経て小学校3年生まで日本の公立学校に在籍した。運動会や夏祭りなどのイベント、友達と一緒に遊んだことなど、日本の学校のことが一番の思い出である。「楽しかったですね。ブラジルとは違いますからね」というように、レアンドルはブラジルと日本の良さを比較しながら語ることが多い。

小学校3年生を終えるころ、母親の意向でブラジル人学校へと転校することになった。レアンドルは転校したくなかったが、母親からブラジルに帰るための準備だと言われたので納得するほかなかった。ポルトガル語ができなかったため、ブラジル人学校に通うことは嫌だったが、一生懸命勉強を続けた。レアンドルの中学校進学にあわせて、家族はブラジルへと帰国した。

レアンドル：うれしくもなかったんだけど、なんていうの、どんなふうかわからなかったからね。ドキドキはしていたけど、あまりうわーうれしいなって感じでしたね

と語るように、ブラジルの生活がイメージできないという不安はあったが、帰国に驚くことではなかった。ブラジルに帰国後、地元の私立中学校へと入学した。学校生活全般で苦勞することはなかった。ブラジル人学校に3年間通っていたこともあり、ポルトガル語を充分話すことができたからである。強いて言えば「ルールの違いに戸惑う」ことはあったが、ブラジルにはブラジルのやり方があると思えば違和感なく過ごせた。

私立中学を経て、地域で一番の進学校である私立高校へと入学した。学年があがるにつれ勉強は難しくなっていたが、高校進学までは教師である母親が勉強を厳しく教えた。レアンドルは「厳しいくらいが好きなんです」という。レアンドルは自身が勉強について「怠けてしまう」性格であるという。

⁴⁸ レアンドル、男性、18歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校、ブラジル人学校を経て、ブラジルの私立高校へ、日本語でインタビュー

レアンドル：ブラジルの学校はやさしい。日本の学校の厳しいくらいがいい（…）日本のように、物事をきっちりやり遂げること、努力することがブラジルでの生活に役に立っている

そして、将来はサンパウロ州立大学など名門大学へ入学し、医師か薬剤師になるのが目標である。レアンドルは帰国当初から母親の勧めではじめた日本太鼓に熱中している。レアンドルも日本での経験を活かしたかったので、良い機会だと考えていたが、これほど日本太鼓に夢中になるとは思わなかったという。太鼓以外にも英語塾に通っているが「楽しいけど中心ではない。中心は太鼓です」。地元の日本太鼓のグループでリーダーをつとめ、現在は若手日系人グループのまとめ役になった。

さらに、日本人太鼓教師の話していることを深く理解したいと考え、日本語の勉強をはじめた。日本の学校に通っていたが、日本語を充分理解できないことがもどかしいという。通訳を介さず、日本語の抽象的な部分まで理解することが目標である。「（日本語の勉強は）受験に役に立たないですけど、僕にとって大事なんですよ」と語っている。

本節で取り上げた3人の子どもたちは、ブラジルのなかでも比較的難関といわれる学校への進学を果たしている。まず3人の子どもたちに共通しているのが、親の高い教育期待である。リカのケースでは、ブラジル帰国後に勉強を継続できたのは、母親からの高い期待があったからだという。もちろん期待だけでなく、ブラジルでの教育に影響がでないよう比較的早い段階で帰国している。アヤは小学校段階を日本の公立学校で過ごしながらも、ブラジル帰国後に家庭教師をつけてもらうことで勉強の遅れを挽回していった。勉強の遅れを挽回できたのは、親からの期待があったからだという。

このように日本とブラジル両方で適応できたと語るケースでは、親の高い教育期待が共通して見られるとともに、生活の「区切り」や心理的な「切り替え」がしばしば語られている。生活の「区切り」や「切り替え」は、家族の「ブラジルにいつか帰る」「もう日本には帰らない」といった明確な将来展望の影響が大きい。しかし一方で、子どもたちは日本のことを完全に忘れ去ったわけではない。今回取り上げた事例では、ブラジルの生活に慣れていくにしたがって、日本のことを思い出すようになったと語る点が共通している。なかでもレアンドルは熱心で、日本とブラジル両方の良い面を学んでいきたいと語っている。デカセギとして日本に行くつもりはないが、勉強のためなら日本に行きたいという。

「日本語の保持」は、4章で扱った日系ブラジル人の親の教育戦略のひとつである。それは「日本語」を覚えておいたほうが将来の役に立つかもしれないというものから、自らの出自を忘れてほしくないという願いのようなものまで様々な理由からおこなわれる。親の意図や思いが様々あるにしても、日本文化や日本語を勉強することは、ブラジルでの勉強や進学に直接的な意味をもつものではない。それでも、子どもたちは日本の言葉や文化を学び続けることに、なんらかのメリットを見出している。レアンドルの言葉を借りるならば、日本語

と日本文化は「なくてはならないもの」であり、親の期待や意図をこえて、自らの人生や生活に組み込まれていったものである。あるいは、アヤのように「日本のテレビドラマ」を観るために都合の良いものなのである。

6. おわりにーブラジルにおける生活を意味づける子どもたち

本章では、ブラジル帰国後の子どもたちの生活と教育について概観した。帰国した人びとの語りから、現在の暮らし向きに満足していると語る事例と、そうでないと語る事例を見いだすことができる。そしてその理由は様々である。日本の学校に馴染めず、帰国後の学校にも馴染めないといった不適応の連鎖は、学習についていけないことに加えて、友人関係がつかれないこと、言語能力の低さなど、コミュニケーションの困難さとともに語られている。

日本ではうまくいっていたが、ブラジルではうまくいかないという事例について、2つのパターンをみた。まず日本でブラジル教育をうけることができるブラジル人学校出身者である。ブラジル人学校出身者は、ブラジルの教育をうけていることもあり、ブラジルの学校に適応しやすいと考えられがちである。しかし、ブラジルの学校の学習進度や学校生活の違いから、ブラジルでの生活上の困難を語るケースもみられる。結果的にブラジルでの学習意欲が冷却され、その後日本へ再渡日するケースもみられる。わかりやすい事例としては、日本の公立学校で勉強していた子どもが、ブラジルの学校についていけず再渡日し、日本の学校に進学すると語る子どももみられた。「なにかあったときは日本に渡れば良い」と考えているケースも少なくない。

日本での生活の苦しさを語り、ブラジルでの生活のほうがよいと語る事例の特徴の一つが、「日本では進学出来なかったが、ブラジルに帰国後進学できた」というパターンもある。日本において家族と同じように派遣労働者になると考えていた子どもたちが、帰国後に高校進学できたのは、ブラジルの高校が無料であることや、いつでも高校進学をやり直せる補習校制度を活用したからに他ならない。ブラジル教育の「敷居の低さ」を利用することで、子どもたちの適応が促される場合がみられた。

最後に、日本での生活や帰国後の生活に満足語るケースが、今回扱った事例では最も多かった。子どもたちの語りはポジティブで、国際移動が障壁となるというよりも、移動経験が「資源」のように語られている。ブラジルでの生活上の満足語る子どもたちが、当面の目標として語るのが「大学進学」である。

国家間の移動が、子どもたちの適応の障害になるとするならば、移動を「資源」のように語る子どもたちの事例が少なくなると仮定される。しかし、本研究では4事例しか見いだすことができなかつた。なぜ、こうした結果となったのだろうか。第1の理由として、自身の生活を話しやすい子どもたちを調査対象に選択してしまったことで、帰国後の生活が厳しい状況にある子どもたちの話を捉えられていないことが予想される⁴⁹。

⁴⁹ブラジルの教育委員会を経由して調査対象者を求めることや、公立学校在学者を対象に捉えるなど、サンプリングの偏りを取り除くよう工夫したが、充分ではなかつたかもしれない。

第2に、本研究では子どもたちの語りやフィールド調査から作成した生活史を扱っている。子どもたちは現在から過去や未来を語る。こうした「人生の語り」とは、折々の生活状況によって変化する（やまだ 2000）。そして過去の語りは、現在の状況や未来の展望から「意味づけられる」性質をもつ（Gargen 訳書 2004）。したがってブラジルでの生活に満足できない子どもたちは、日本での生活についてもネガティブに語りやすく、ブラジルでの生活に一定程度満足している子どもたちは、日本での生活をポジティブに語りやすい。場合によっては、日本で客観的に厳しい状況にあっても、ブラジルでの生活に満足していれば、日本での生活をポジティブに語る可能性もある（図5-1）。

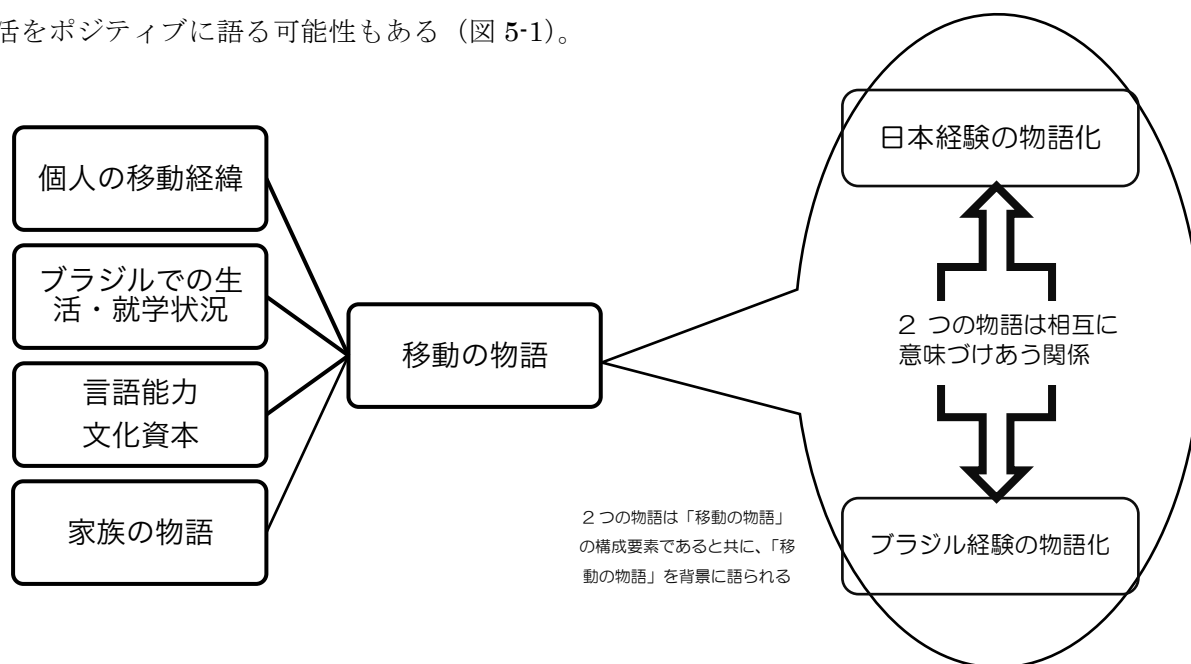


図5-1 「移動の物語」の形成

改めて子どもたちの語りを整理すると「個人の移動経緯」「ブラジルでの生活状況・就学状況」「言語能力・文化資本」「家族の物語」を要素とした「移動の物語」が浮かび上がる⁵⁰。例えば、「日本では親が忙しく働いていたので、孤立していた。突然、親に連れられてブラジルに帰国し、ポルトガル語をブラジル人学校で勉強したので、ブラジルでの学校生活は楽しい。親も日本に帰国するつもりはないので、ブラジルで大学に進学したい。日本での経験は素晴らしい思い出である」といった事例では、移動経験を「個人の移動経緯」「生活状況・修学状況」「家族の物語」などを要素にこれまでの経験を語っている。他方、「日本での経験」「ブラジルでの経験」を語る際、本来は「日本で孤立していた」であるとか「日本のブラジル人学校に通っていたこともあり、日本での経験はほとんどない」といったネガティブに語られることも、「ブラジルでの生活に満足」している子どもたちは「良い経験」として語ることがある。おそらく日本でインタビューすれば、「日本で孤立していた」としてネガティブに語られるだろう事例であることである。

⁵⁰ 子どもたちの語りをカテゴリー化し、KJ法によって整理した。

子どもたちは「客観的事実」のみに基づいて自己を語るのではなく、主観的な経験や「正当化」によって移動の経験を物語化しているのだから、こうした帰結はやや当然すぎる結果なのかもしれない。それでも、子どもたちが過去の日本での経験や現在のブラジルでの経験を「ポジティブに語りがちである」という事実は、子どもたちがブラジルにおいて「ポジティブに過去を振り返り、意味づけるほど」には生活が安定していることを意味する。とりわけ、こうした「過去のポジティブな意味づけ」は、高い進学意欲を有する子どもたちにみられがちである。レアンドルの事例のように「ブラジルで大学に行けそうです。日本での経験も無駄にしません」といった、優等生的な語りこそがその代表例であろう。

そして、「ポジティブに過去を振り返り、意味づけるほど」の生活の安定は、子どもたちの力によるものだけでなく、親がそういった環境を作っていることと深く関係している。それは、第1に、親からの高い教育期待や教育投資である。本研究でも度々触れたことだが、日系ブラジル人の親による高い教育期待は、教育投資や家庭内教育にみられる。親の期待や投資は子どもたちの学習意欲や進学意欲の土台となっている。

第2に、ブラジルの教育状況が子どもたちの進学意欲を高めることになった。そもそもブラジルの教育制度は留年・退学が前提に作られているので、留年・退学者が再チャレンジできる環境がある。また、相対的な学力の低さによって、日本から帰国した子どもたちが編入しやすい状況にある。その結果、日本で高校に進学できなかった子どもたちが、ブラジルで高校に進学することや、日本で大学進学できなかった子どもたちがブラジルでは大学で進学できる場合がある。

要するに、ブラジルには日本に比べれば、夜間学校や補習校が充実していることから進学しやすい状況がある。ただし「進学しやすい状況がある」だけで、子どもたちがブラジルでの進学を望むかは別問題である。そして「進学しやすい状況」は、ポルトガル語能力を有する子どもたちである。ポルトガル語を身につけることができなかった子どもたちにとって大学進学ハードルが高いことには変わりはない。

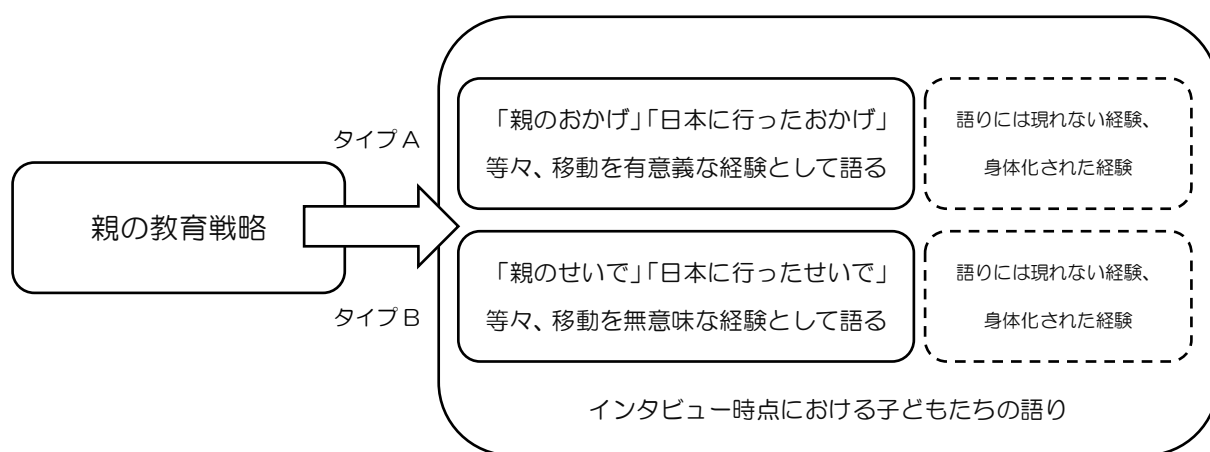
こうした進学に関連して、第3に日本での勉強が「無駄にならない」子どもたちの存在がある。日本でブラジル人学校に通う子どもたちは、ブラジル人学校卒業後にブラジルの学校へと編入するケースが多い。ブラジルへ帰国し、日本のブラジル人学校での勉強を土台とし、高校や大学へと子どもたちは進学していく。その際の障壁は日本のブラジル人学校の学習レベルの高さから、ブラジルでの学習に身が入らないというものである。

それでは子どもたちの移動の物語と親の教育戦略の関係はどのような形になっているのだろうか。ブラジルで高校・大学進学した子どもたちにとって日本とは「昔住んでいた国」「いまでも愛着がある国」としてポジティブに語られる。とりわけ日本への愛着を語る子どもたちは公立学校出身者であり、多くは日本の友人との遊びや体育祭や文化祭といった日本での記憶を胸にひめている。それとともに、ブラジルでも日本文化を受容しようとする。レアンドルの場合は日系人社会に参入することで、日本の太鼓と文字通り格闘している。アドリアナは日本のドラマのDVDを購入して、勉強の息抜きにしているという。子どもたち

にとって日本とは地理的距離は遠いが、心理的距離は無いに等しい。そして、バイリンガルでバイカルチュラルな生き方ができることを喜び、日本へ連れて行ってくれた親への感謝を語るのである。

これらが語りのポジティブサイドであれば、ネガティブサイドも存在している。ブラジルでの生活に不応適や困難を語る子どもたちを中心に、ブラジルでの生活は「一時的」なものであり、日本の不景気が改善した時に、再渡日したいという将来展望が語られる場合もある。「ブラジルでの生活が苦しい。日本のほうが良かった」といった形式での「正当化」である。そして、子どもたちは「日本でアルバイトしながら学校に行く」「ブラジルで高校進学し、日本が安定したら日本で就職すればよい」といった語りとなる。例え日本で親のようなデカセギになろうとも「ブラジルでの生活よりはまし」というのが子どもたちの念頭にある。現状では厳しい状況にある子どもたちが、ブラジルでの苦境に甘んじるだけではなく、場合によっては「バイトでもかまわないから」と再渡日することで、現在の困難を解消しようとしている事例も一部みることができた。それが親世代の厳しい生活状況の再生産だとみることできるが、再渡日という選択肢が開かれていることで、ブラジルでの苦境から抜け出せることを、子どもたちはポジティブに捉えているのである。

もちろん、セルージュオのように数年後には「親の教育のおかげ」といった語りが見られるのも、「親の教育の意味は後からわかる」といった格言のような現実があるからであろう。親の教育の「ありがたみ」を知っているか否かに加えて、いまはその意味がわからず身体化された経験もある。日本の公立学校に通った経験が、数年後に「意味のある経験」として顕在化するからである。



研究対象者の親世代の多くは、ブラジル経済の急速な失調によって、将来の見通しをたてることが難しい 80 年代後半から 90 年代に日本へと渡った。そして 2000 年代にはいり、ブラジルの社会と経済の安定を待って帰国している。4 章で検討したように、ほとんどの日系ブラジル人の親は、ブラジルでは出来なかったかもしれない教育を子どもたちにほどこして

いる。そして、帰国した子どもたちのなかには、日本で身につけた能力を活かしてブラジルでの高い教育達成を目指している場合がある。本章を通じて『移動の物語』が、子どもたちの生活状況や将来展望に影響を相互に与えている」ことがみえてきた。そこで、次章では「移動の物語」と子どもの教育達成の関係を深めることから、子どもたちがどのように将来を展望し、進路を選択していくのかを検討したい。

6章 帰国した子どもたちの進路選択とその要因

1.はじめに

5章で検討したように、生活史データから浮かび上がるのは、親が提供する様々な教育や機会を活用しながら、ブラジルでの生活を子どもたちが選び取ろうとする姿である。そして、子どもたちの選択は、「ブラジル」だけでとどまるのではなく「日本」も視野におこなわれていることがみえてきた。さらにそれは国境を超えた移動が必ずしも子どもたちにとってネガティブな結果をもたらすだけでなく、むしろ越境経験を「資源化（拝野 2012）」するような事例もみられた。その背景には、越境経験が自分にとって有意義であるという「移動の物語」が存在していることもみえてきた。

志水が2000年に論じた日系ブラジル人の「還流」は、1908年に始まるブラジル日本移民の子孫が、ニューカマー外国人となって日本に現れ、その後再度ブラジルへ移動する人々の移動を意味した（志水 2000, pp.33-35）。ブラジルに移動した子どもたちの日本との繋がりを指摘したうえで、「彼らが、日本で経験した事柄と2つのシステム間を移行した体験をポジティブに意味づけ、今後の人生の貴重なリソースとしてもらいたい」（志水 2000, p.35）と結んでいる。前章までの検討で言えば、志水が議論したような移動経験のリソース化は、一部の子どもたちにとってみられる。

ところが、前章で見たように、子どもたちは「ブラジルで生活することを決める」場合もあれば「日本に帰国する」場合もある。子どもたちの「移動の物語」も、日本での経験が背景化しブラジルでの経験が前面化する語りもあれば、ブラジルでの経験が背景化し日本への憧憬や帰国願望が前面化している語もある。こうした子どもたちの進路選択と、「移動の物語」にはいかなる関係があるのだろうか。

前章では「移動の物語」としてひとくくりにしたが、本章では語りの性質の違いに注目したい。これは親の教育戦略の「帰結」の部分であるとともに、進路選択に関する子どもたちの「語り」は、前章で見たような「移動の物語」と関連付けて語られる場合がほとんどである。本章を通じて「移動の物語」が、その後の進路選択にどのような影響を与えているのかを検討しよう。

2 ブラジルへ渡った子どもたちの進路選択

4章で検討したように、親が日本滞在時から移動後に向けて子どもたちの教育に配慮していたとして、子どもたちはその後どのような将来展望を描いていくのだろうか。ファビオ⁵¹が「まさかブラジルが大学卒業しないと普通の職業につけないとは思わなかった。予備校とかあるんですよ」と語るように、ブラジルのメリトクラシーは急速に進行している。今回の調査対象である子どもたちの多くは、ブラジルでの大学進学を目指しているが、それは大

⁵¹ ファビオ、男性、19歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの私立高校へ、日本語でインタビュー

学進学しなければブラジルでも「普通の職業につけない」からである。

1900年に35%だったブラジルの識字率は、今日では約90%となった。これは、近年、義務教育が大きく発展し、2000年にはほぼ全地域において就学率が9割を越えたからである。また、ブラジルの留年率は非常に高かったが、2005年の初等教育における進学率は79.5%となり、留年率は13%、退学率は7.5%まで減少した。また、同じく2005年の中等教育における進学率も73.2%、留年率は11.5%、退学率は15.3である（MEC/INEP, Censo Escolar 2006）。また、ブラジル地理統計院の試算では1998年に6.9%だった大学進学率は2008年に13.9%と上昇している（IBGE 2009）。こうした数字からもわかるように、ブラジルは徐々に高学歴化しているとともに、子どもたちにとってもブラジルに残るためには大学に進学することが当面の目標となる。

ブラジル移動後の子どもたちについては光長・田渕（2002）などいくつかの研究が行われてきた。それらの研究は総じてブラジルでの文化適応や教育達成に関わる諸要素を探り出す研究と言ってよい。しかし5章で検討したように、高いポルトガル語能力を有していてもブラジルでの教育を求めない子どもたちもいれば、乏しい手持ちの知識や経験を駆使してブラジルで大学進学する場合もある。

4章で触れたように、大学進学率が上昇しているブラジルにおいて、ホワイトカラーとしての仕事を得るには大学に進学しなければならなくなった。他方で、ブルーカラーの仕事を得るとしても、最低賃金レベルの仕事を求める人は少なくない。ルーカス⁵²は仕事を得ることの難しさについて次のように語っている。

ル：ブラジルで良い仕事につきたいと思ってるわけじゃないけれど、そもそも仕事を求めている人は多い

*：ウン・サラリオ（最低賃金）でも難しい？

ル：そう。日本なら日本人がしたがらない仕事だったら（働くことが）難しくない

*：あーなるほど。

ル：だから日本帰り（の子どもたち）はみんな学校に行かなきゃと考えるよね。

*：でもルーカスは日本に戻ろうとしてる

ル：そのほうがどう考えても生活しやすいからね。コンビニ行けばバイト雑誌があるし、派遣なら電話すればいい

こうしたルーカスの語りにみられるように、より良い仕事を得るには大学に通わなければならないが、それは「給与が安くても仕事があれば良い」という就労希望者が日本以上に多いことも子どもたちの大学進学熱を高める結果となっている。また、ブラジルでのライフコースを明確に描けない子どもたちにとっては、コンビニでバイト雑誌を見ることや派遣会社

⁵² ルーカス、男性、24歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

に仕事を斡旋するほうが仕事を容易に得ることができると考えている。

そこで、生活史データを再分析することで、子どもたちが移動経験をいかに意味づけブラジルでの将来展望を形成するかを明らかにしたい。そのために 進路選択のグループごとの「移動の物語」に注目する。子どもたちが移動経験を意味づけ正当化する「移動の物語」を抽出し、将来展望・進路選択との関係を検討する。将来展望や進路選択には、子どもたちにとって「どの国で生きていくか」という切実な問題が浮かびあがらせよう。

3. 日本との「切断」の語り

まずはブラジル移動後に大学進学した子どもたちの事例をみてみよう。渡日前、ブラジルの公立学校に通っていたアドリアナ⁵³は、両親のデカセギに付き添い日本へと渡った。家族は数年のうちにブラジルへ移動する予定だったので、日本ではブラジル人学校に進学した。ブラジルの学校での勉強よりも「日本のブラジル人学校の勉強のほうが難しかった」ため、勉強についていくことには苦勞した。中学校卒業時に家族とブラジルへ移動した。親は将来を見据えてアドリアナを私立高校へ進学させた。

*：ブラジルの学校にはすぐに慣れたんだ？

ア：家でもポルトガル語習っていたし。ブラジル人学校にも通っていたので。勉強は楽しいです（中略）いまは教育学部で勉強しています。日本でいろいろ経験したし、これをいかすには先生になるのがいいと思うんです。

アドリアナのように、医学部⁵⁴、薬学部⁵⁵、工学部⁵⁶へ進学した子どもたちは、高い教育達成を目指すだけでなく経済的な安定についても語る。

それは医学部に進学したヴァニア⁵⁷も同様である。ブラジル人学校出身のヴァニアは、両親のように働きたくはないから、安定した職業につきたいと考えたという。いままでは安定した生活をしているヴァニアだが、もともとはブラジルに帰りたくなかったという。

ヴ：実はブラジルに帰りたくなかった。日本ですべての勉強をしていたので、戻っても勉強できないので帰ることになった。お母さんが妊娠したので。日本では自然に出産するので、ブラジルのほうがいいだろうと戻るようになった。お父さんは戻ったが、母親がブラジルに残った。（出産後）日本に行くと、日本語になるので子供たちのことを考え母は残

⁵³ アドリアナ、女性、25歳、ブラジル生まれ、ブラジル人学校を経て、ブラジルの私立高校へ、日本語でインタビュー

⁵⁴ 事例番号 No.11, No.14, No.34

⁵⁵ 事例番号 No.39

⁵⁶ 事例番号 No.28

⁵⁷ ヴァニア、女性、18歳、ブラジル生まれ、日本のブラジル人学校を経て、ブラジルの私立高校へ、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

った。

そんなヴァニアを家族も応援し、ブラジルでは貯金を切り崩して私立高校へと通わせた。ヴァニアは「いま困ることはなにもありません。サンパウロでいい仕事に就きたい」「日本での経験は役に立ったが、いまでは昔の話。また観光に行きたい」という。日本での経験はヴァニアにとって思い出でとなっていた。

ヴ：友達たちは成績に関しては次の学年にあがれば十分と考えているが、私それでは満足できない。友達の言うことは気にしないことにしている。賢い生徒もいるが、その人たちとはあまり親しくない。友達ともあまり知りあいに居ない。

それでは、日本の公立学校出身者はどうだろうか。日本の公立学校出身者は一様にブラジルの学校と日本の学校の違いを語っている。ファビオのようにブラジルの学校に慣れ、ポルトガル語での勉強に自信をつけたとしても、苦手な科目があるという。

*：得意な教科は？

フ：得意なのは算数と数学ですね。あと理科ならできますね。

*：ならでできる？他の地理とかは難しい？

フ：はい。日本では勉強しなかったことなので。先生たちが本を読むようにというので、本を読むようにしています。

以上のように、しばしば子どもたちが強調するブラジルでの困難に、ナショナルカリキュラムの違いがある。ファビオは地元の大学へと進学したが、いまでもブラジルの地名を聞かれるとわからないことがあるという。

フ：ブラジルと自分は心理的にも勉強的にも距離がありました

ファビオと同じく日本の公立学校に通っていたルアナ⁵⁸の場合は、親の助けを受けてポルトガル語を習熟し、現在は医学部に通っているが、歴史や地理の勉強については「馴染みがなくて理解が大変だった」という。ファビオとルアナも、インタビュー当時は日本への思いを語るがあった。

ル：（日本の学校の方が）でも勉強についてはとてもいい。ブラジルの学校に比べてとてもすごい。私はブラジルで学校に行かなかった。もどって行き始めたけど、くらべものに

⁵⁸ ルアナ、女性、19歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの私立高校へ、日本語でインタビュー

ならない。

しかし、ブラジルでの生活が長くなるとともに、進学先が明確になるにつれ「生きる場所はブラジル（ファビオ）」「日本にはデカセギとして帰らない（アドリアナ）」など日本での経験との「切断」を語るようになった。ファビオはブラジルとの距離を語っていたが、いまでは日本との距離を語る。ルアナは大学進学が明確化すると、過去の語りとは一転してブラジルでの将来展望を語るようになった。

*：生きる場所はブラジル

フ：そうですね。大学まで行くことになるわけですからね

*：昔はブラジルとの距離を話してたよね

フ：そうでしたっけ？ああ、でもそうかも。いまじゃ日本との距離を感じますよね。こうして日本語で話していても。将来とか考えるとやっぱり。

*：以前は日本に帰りたいと話していたよね？

ル：そうだね。でもブラジルでの生活も長くなったし、大学があるからね

*：そうなんだ。それはどうして？

ル：ブラジルに慣れてきたことが一番だと思うね。

*：慣れてきたから。日本はひとまずってこと

ル：そうだね。ブラジルで頑張るしかないよね

こうした日本との「切断」の語りは、ブラジルで就職した4事例にもみられる。ブラジル人学校に通っていたタカシ⁵⁹、ヘジナルド⁶⁰、日本の公立学校に通っていたホーザ⁶¹、チカ⁶²は「日本へ帰らない」という点において大学進学者と類似している。ブラジルへ移動した年齢に違いがあるが、アケミとチカはブラジルで公立学校に通い卒業後すぐに就職した。タカシとヘジナルドは、ブラジル移動後すぐに就職している。日本でも親と同じように工場で働く予定であった。帰国後に進学するよりも、親と一緒に働けばいいと考えたという。現在、タカシは水道局の下請け会社で仕事をしている。

⁵⁹ タカシ、男性、17歳、ブラジル生まれ、日本のブラジル人学校を経て、ブラジルで就職、日本語でインタビュー

⁶⁰ ヘジナルド、男性、22歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルで就職、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

⁶¹ アケミ、女性、24歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

⁶² チカ、女性、20歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

*：日本に帰ることは考えてないの？
タ：もうこっちに帰ってきたわけだし
*：日本語もできるんだからもったいない
タ：いや、こっちにきてピリオドがついたんだよ

タカシが語る「ピリオド」とは、大学進学者と同様に日本を「断ち切る」ことであり、ブラジルでの永住を決意することとつながっている。チカも「ブラジルで働くことに決めた。日本は戻る場所ではない」という。チカのように日本の公立学校に通い、当時の経験も良い思い出ばかりであっても、一度日本と「切断」することで、子どもたちは進路選択の「納得」を語る。

*：戻る場所はないか
チ：はい。私は親みたいにはなりたくないです
*：親みたいになってデカセギってこと？
チ：そうです。そのためにブラジルで生きていくことを決めなければならないんです。
*：決めたら楽になった？
チ：そうですね。みんなそうじゃないですか？よし、ここで生きていこうと思えば、そうするしかないし、納得するしかないですね。

以上のように、ブラジルで就職した子どもたちの語りにも、大学進学者と同様の「納得」が見え隠れする。それは「切断」の物語がゆえに進路が選択されたというよりも、相互的なものである。日本に行けないという事実から、子どもたちに「切断」の物語を語らせる。そして「切断」の物語は、子どもたちの進路選択や将来展望を正当化するのである。

4. 日本との「接続」の語り

日本との「切断」を語る子どもたちがいる一方で、日本との「接続」を語る子どもたちもいる。日本との「接続」を語る子どもたちの進路には 2 つのパターンがみられた。ひとつは、ブラジルで不本意ながら進学・就職することであり、もうひとつは再渡日することである。親子の経年データが取得できたのは 5 事例と少なく、なかでも「接続」を語った事例は、大学進学を目的に単身日本へと移動したヨシキ⁶³に限られる。

親のサツキ⁶⁴は、ヨシキを日本ではブラジル人学校に通わせ、ブラジルでは私立学校に進学させた。サツキはブラジルでの大学進学を期待していたという。当時在学していた高校では、学力的にブラジルでの大学進学は間違いないとされていた。

⁶³ ヨシキ、男性、22 歳、ブラジル生まれ、日本のブラジル人学校を経て、ブラジルの私立高校へ、日本語でインタビュー

⁶⁴ サツキ、女性、46 歳、ブラジルで大卒、ポルトガル語でインタビュー（通訳）

サ：日本での貯金を随分使いましたよ。ヨシキは日本で苦勞したし、私もブラジルで大学に進学して欲しかった。私立高校にも通わせてたしねえ・・・

しかし、その後におこなったブラジルでのインタビューで、ヨシキはブラジルで十分な収入が得られる見込みがないこと、生活が不便であること、友人が日本にいることを理由に日本への憧れと大学進学を夢を語っている。

ヨ：日本とブラジルどちらでも生活できる。でもできるというだけで、生活したいのは日本。日本に行くとママを説得しないと。ブラジルでの生活はやってけないよ。

ヨシキが日本行きを目指し独学で日本語の勉強を重ねるのも「ブラジルでの生活は偽り。日本が本当」だからである。そして、サツキは「ヨシキは私の被害者。日本に行きたいなら応援する」と語ってヨシキを日本へ送り出した。その後、2010年の日本でのインタビューで日本での生活を絶賛するヨシキは「コンビニがない生活は考えられない」という。目標は大学進学であり、現在のところ、サツキが紹介した派遣社員の仕事をしながら進学資金を貯蓄中である。

マルセロ⁶⁵は日本で公立学校に通っていた。ブラジル移動後の生活で苦勞するとわかっていたので、親はポルトガル語の勉強をさせていた。日本で暮らしていても『大学』に進学できない「工場で働くしかない」と考えていたので、渡伯すれば「大学に進学できるかもしれない」と期待していた。ブラジルに移動した2009年のインタビューではポジティブな将来展望を語っている。

*：先生の話はわかるけど授業についていけない？算数は？

マ：苦手。やり方が日本と違う。

*：歴史とか地理、社会は？

マ：全く（わからない）。

*：どの教科の授業はついていけるの？

マ：英語はわかる。大学に行きたい、行けると思うけど

「大学へ行きたい」と語ったマルセロは、ポルトガル語での会話に困難を感じず英語など一部の授業はついていくことができたが、地歴分野など日本とは異なるカリキュラムにおいて太刀打ちできず自信を失っていった。そして、努力をしても大学に進学できないばかりか、仕事が見つけられないという不安から、ブラジルで生活する意味を問い直すようになった。

⁶⁵ マルセロ、男性、18歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの私立高校へ、日本語でインタビュー

*：行こうと思えばどんな大学にでも行けるんじゃないの？

マ：そうですけど、やっぱり公立なら授業料ないし。中途半端なところに行くなら日本の大学に行きたいじゃないですか。

2010年頃のマルセロの心の支えは、日本の参考書とアニメだった。そんなマルセロを不憫に思った家族は、マルセロを連れて再渡日することにした。2012年の日本でのインタビューでは、マルセロは日本でアルバイトをしながら就職するか、大学に進学するか「迷っているのですが、ブラジルで選ぶよりかはましだと思う」と語っている。

*：ブラジルよりかまし？

マ：でしょ。日本でもブラジルでもバイトじゃないですか。大学いければいいけど、そうじゃなければね。それなら給料が良いだけじゃなくて、過ごしやすいほうを選ぶでしょ。

*：でもどうやって？旅行会社？

マ：旅行会社？

*：ほらデカセギの

マ：あー。いまはそのままバイトサイトとかみてるよ。それで日本で大学に行ってもいいし

ブラジルで学習・進学上の障壁を感じたとき、子どもたちはブラジルに残るか、それとも日本に行くかの選択に迫られる。日本との繋がりを維持する子どもたちのなかには、不本意ながらブラジルで進学した場合⁶⁶や就職した場合⁶⁷がある。「もっと日本で勉強したかった」「ブラジルにこなければよかった」「日本にいれば進学できた」といったように、渡伯をネガティブに意味付け再渡日を模索する場合がある。

子どもたちにとって、日本はそれほど「遠い国」ではない。インターネットや消費文化によって「接続」されているのであり、安価な航空券によって帰ろうと思えば帰れる場所だからである。最後に、日本では中学校卒業後に就職したため、高校へは進学しなかったルーカス⁶⁸の事例を見てみよう。

ル：(ブラジルの学校で)ポルトガル語で勉強すると驚くほど内容が理解できた。進度も日本ほど早くなく、ゆっくり勉強することができた。ブラジルのほうが勉強簡単だからラッキーだったよ。成績も良いよ。ちゃんと毎日学校にいくとか、日本じゃなかった

⁶⁶ 事例番号 No.15, No.23, No.38

⁶⁷ 事例番号 No.25

⁶⁸ ルーカス、男性、24歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

2008年のインタビューでは、ブラジルに適応しつつあるルーカスの姿をみることができた。しかし、2010年になるとルーカスは日本へ再移動したいと語り始める。ブラジルで高校を卒業したことで「中卒よりはいい仕事に日本で就ける」と見込んだからである。ルーカスはブラジル移動後も、日本の友人らとインターネットを通じて連絡をとりあっていた。

ル：FaceBookとかみてる写真がアップされてるし、羨ましいんですよ

*：そうなんだ

ル：みんな写真とか見せてくれるんですよ。羨ましいですよ。俺も日本で働いて車を買ってドライブに行きたい。

*：ブラジルでもいいじゃん

ル：でも日本がいいよ。

*：車が手に入るから？部品とか

ル：それもあるけど、仲間がいるってのがさ。分かりあえるから

*：せっかくブラジルで高校行ったのに？

ル：うん。でも嬉しいよな。日本に行けば大学は無理でも専門行けるし

*：へー

ル：日本とつながってるからね。引っ張られるんだよね

ルーカスによると渡日しても選びうる進路は少ないが「ブラジルでも大学に進学できなければどのみち働かなくてはいけない。(中略) どうせ働くことになるならブラジルよりか日本のほうがいい」という。そしてインターネットを通じて支えてくれた友人らは「かけがえのない関係」であり、彼らとともに生活することが重要だと考え、ルーカスは2011年に日本へと再移動した。そして現在、ルーカスは東海地方を転々としながらアルバイトや短期派遣の仕事をしている。

5. 移動をめぐる2つの物語と子どもたちの生存戦術

子どもたちはブラジル移動後の生活において、日本での経験を「物語化」し意味づけていく。本章では、子どもたちの物語をその性質ごとに日本との「切断」と「接続」の物語に大別した。前章で見たように、子どもたちの語りに影響を与えた諸要素は、「個人の移動経緯」「ブラジルでの生活・就学状況」「言語能力・文化資本」「家族の物語」に影響を受けながら形作られている。日本との「切断」や「接続」は日本での客観的な生活状況だけを反映して語られるのではない。あるいは親の教育戦略だけで形成されるわけでもない。あくまで、ブラジルでの生活経験や生活状況から形成される「移動の物語」と徐々に明確化する「将来展望」「進路選択」が相互に関連する中で形成される語りである。

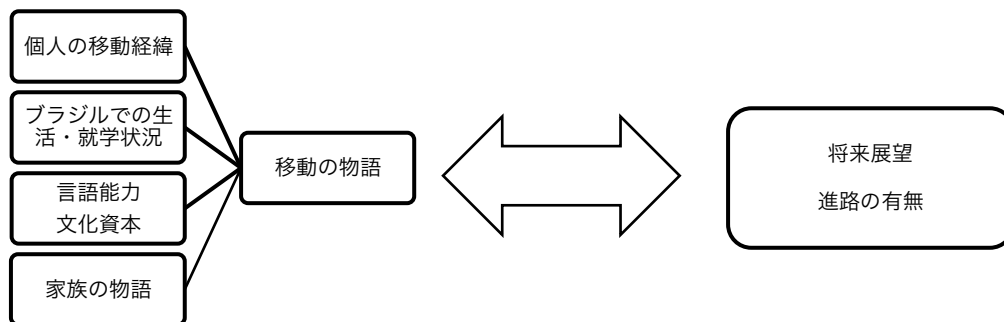


図 6-1 子どもの移動の物語と将来展望の関係

早々に将来展望が決まれば、移動の物語は「切断」されがちになる。将来展望が決まらなければ未練のように日本との「接続」が語られる。この「移動の物語」は子どもたちの将来展望を形作る最大の要素となるが、それと同時に将来展望や具体的な進路の有無は、「移動の物語」の正当性を担保する材料でもある（図 6-1）。重要なのは「どちらか」ではなく、ブラジルでの滞在が長期化するなかで、相互に影響を与え合いながら形成されていくということである。

そして、子どもたちの進路選択と将来展望は、「移動の物語」との関係を踏まえて 4 つのグループに整理できる。第一に大学への進学を目指すか、目指さないかである。そして第二に、大学進学の見込みとなり得る展望を得ることができるかどうかである。日系ブラジル人の子どもたちに特徴的なのは、さらなる選択肢が存在している点である。それは第三に、日本へ再移動して大学へと進学することであり、第四に日本で就職することである。日本との「接続」を語る子どもたちにとって、日本からブラジルへの移動は否応のないものとして経験され、常に再考の対象となり続けている。場合によっては、ブラジルで大学進学しても日本への繋がりを語り続ける場合もある。いずれにしても「移動の物語」と将来展望は、相互に影響しながら、子どもたちのライフコースの形成に強い影響を与えている（図 6-2）。

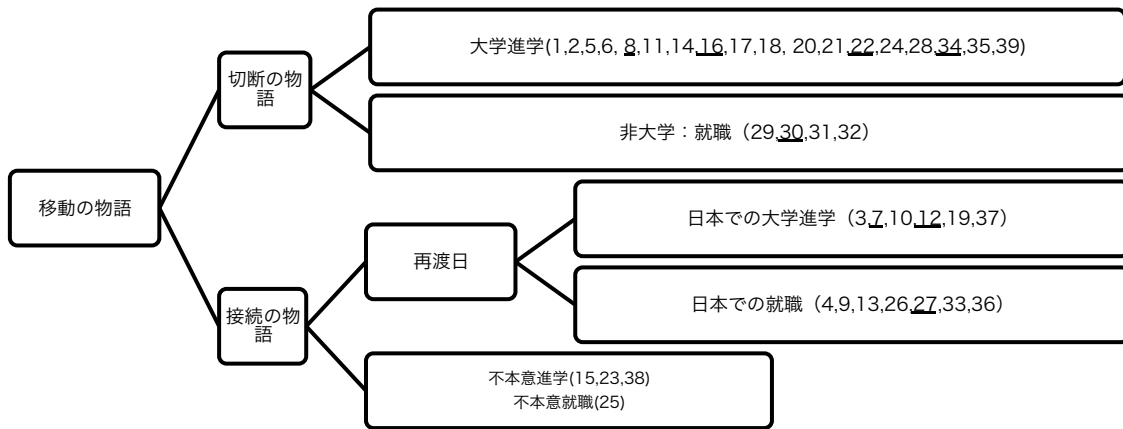


図 6-2 ブラジルへ移動した子どもたちの進路選択⁶⁹

ここで前章の議論を踏まえあらためて強調したいのは、「移動の物語」を形成し自己を正当化することは、一部の子どもたちにとって、ブラジルでの生活を生き抜くための生存戦略でもある。タカシの場合は「日本にはいけない。諦めるしかない」といった物語を内面化し、日本への郷愁を「断ち切る」ことでブラジルでの生活を直視しようとしている。アドリアナのように、日本を過去の経験と語る子どもたちにとって、日本からブラジルへの移動は、文字通りの「移動」に近似したものである。そうであっても、日本での経験を良き思い出にすることを通じて、ブラジルでの成功を夢見ているのである。

他方で、ヨシキのように、一貫して日本での生活を求めるケースでは、ブラジルへの移動を再考・後悔し続けている。ブラジルでの成功を夢見たマルセロは、日本に帰ろうと決心すると「日本での生活が素晴らしかった。ブラジルは仕事もないし、勉強のレベルも低い」というように、日本への再移動を正当化している。いずれの事例においても、ブラジルでの生活への困難や不満をやり過ごすために日本との「接続」の物語が援用されている。

*：あえて聞きたいんだけど、ブラジルでうまくいってたらいまみたいな（日本に行きたい）話をした？

ル：そりゃしないですよ（笑）。ブラジルでうまくいかないわけで、それなら日本って話になるんじゃないですかね。ブラジルでうまくいかないじゃないですか。それでネットとかで（日本の）友達検索して。そしたら、やっぱりここじゃなあ・・・って思うんです

⁶⁹ 進路の希望も含む。下線は経済危機での帰国者。こうして概観すると「経済危機で帰国したから、日本での生活が懐かしく、日本に帰りたい」というわけではない。また経済危機で帰国しても4人の子どもたちが大学進学を希望している。

よね。

*：どっちか選ばなきゃいけない？

ル：体はひとつじゃないですか。それに日本の友達と生活するには日本じゃないと

日本への再移動を語る子どもたちは、ブラジルでの生活に適應できる、適應できないに関わらず日本を目指しているが、総じて「ブラジルよりはまし」という表現で再渡日を語る。それは親世代と同じく「ブラジルより『まし』な場所」を求めての移動であり、ブラジルへの移動が子どもたちのなかで「ピリオド」となり得ていないことを意味する。親世代との違いは「日本での経験」をすでに有している点であろう。「選ばなければ大学に行ける」と語るマルセロや「意外と仕事はあるもの」と語るルーカスは、日本の高等教育の現状や、日本社会の就労環境を自覚したうえで日本へと移動していくのである。子どもたちは必ずしも高い教育達成や地位達成を目指しているわけではない。10代から20代にかけて子どもたちは様々な将来展望を語るが、各個人のユニークさとはうらはらに、親のように「デカセギ」として生きることは望まらず、「妥当な進学先」や「妥当な仕事」を得ることが目的であるという点については共通している。

このような議論をふまえると、子どもたちが自らの生活経験を背景として、進路選択における困難さを見通そうとする姿が浮かび上がる。それはあくまでも「見通し」であり、客観的な指標に基づいたものではないが、子どもたちは大学進学や就労に関して共通した「困難さ」を語っている。ここではそれを「競合条件」と呼びたい。以下の図は、子どもたちの語りから浮かび上がる教育達成と地位達成における「競合条件」をまとめたものである。図6-3は教育達成についてまとめた。



図 6-3 子どもたちの語りにみる教育達成の競合条件

日本においてもブラジルにおいても国立大学に進学しようと思えば、それなりの選抜や競争を勝ち抜かなくてはならない。進学希望者の多さや学力的な難易度が競合条件となる。日本においては日本人と、ブラジルにおいてはブラジル人と競合することになるが、本研究を通じてみると、ブラジル人学校出身者を中心にブラジルの最難関大学に進学している子どもたちも見られる。それはブラジル人学校や親から与えられたさまざまな教育資源を活用することで、ブラジル人との競合を勝ち抜くことができたからである。

他方で、子どもたちが「どのような形でも高等教育を受けたい」と考えたとき、進学熱が高まるブラジルにおいては、一般のブラジル人と競合することになる。ブラジルでは国立大学の学費は無料だが私立大学の学費は高く働きながら進学するのが一般的である。そうになると、子どもたちにとっては大学進学とアルバイト確保という2つの課題に向きあわなくてはならない。不本意ではあるがブラジルの私立大学に進学したユウヤ⁷⁰は次のように語る。

*：大学に進学できたから良かったとは考えないのですか？

ユ：大学に通えたことは幸運だったと思います。それでもブラジルの国立は難しかったです。ブラジルの大学のことは知ってますか？

*：少し通ったことがあります

ユ：ならわかると思いますが、とにかくブラジルの大学はピンキリなんです。通ってる人も多い。そして、ほとんどの人は働きながら通うことになりますよね。するとアルバイトを探さなくちゃいけない。学費も高いので、毎日必死です。通うのも大変です。

*：なるほど

ユ：それなら日本でも同じじゃないか、と思うことがあります

*：日本でも同じようにバイトしながら通うことになるから？

ユ：そうですね。そしてそのほうが給料もいいだろうし。進学しなければよかった・・・と思うことがあります。ブラジルの大学の実情が良くわかってなかったのです。

ユウヤは日本のブラジル人学校で高校からブラジルの公立高校に編入し、ブラジルの大学に進学した。当初は、ブラジルで大学に進学できたことを幸運だったと考えていた。ユウヤはブラジルの国立大学に進学することはできなかったが、日本でも一流大学に進学できたとも考えてはいない。それでも昼間はスーパーでアルバイトをし、夜間は大学に通う生活に疲れを感じているという。「妥当な進学先」をみつけるのなら、ブラジルで苦勞するよりも日本で苦勞すれば良かったと語る。

それでは就勞についてはどうだろうか（図 6-4）。子どもたちの語りから浮かび上がるのは、ホワイトカラー系の職種に就勞する場合は、日本においてもブラジルにおいても難しい

⁷⁰ ユウヤ、男性、22歳、ブラジル生まれ、日本の公立学校、ブラジル人学校を経て、ブラジルの公立高校へ、日本語でインタビュー

ということである。ブラジルでもいわゆるオフィスビルで働くような仕事や事務系の仕事に就くためには高等教育を経るとというのが基本的な条件となる。もちろん、これらの仕事への就労希望者は多い。逆に、ブルーカラー系の仕事をしようとしたとき、ブラジルでは「最低賃金でも働く」という人は少なくない。日本では仕事を選ばなければ就労できるというのが子どもたちの見立てである。

	日本	ブラジル
ホワイトカラー就労	競争条件が多い	競争条件が多い
ブルーカラー系就労	競争条件が少ない	競争条件が多い

図 6-4 子どもたちの語りにみるの就労に関する競争条件

こうして図示することで浮かび上がるのは「妥当な進学」「妥当な就職」を考えた場合、競争する条件を減らし日本への再移動を目指すことが、子どもたちにとっては積極的な意義を有することになる。ここで留意しておきたいのは、先ほどあつかったユウヤのように、ブラジルに大学進学をしても「日本に行きたい」と語る子どもたちが一定数存在していることである。ポルトガル語を喋れたとしても、日本では進学できなかった高校に進学できたとしても、その後の生活を考えたとき、相対的に生活条件が良い日本に妥当な生活を求めることは、必ずしもブラジルでの生活での挫折や文化適応の失敗というだけでないとい。むしろ自らの将来を考えたとき、競争条件の少ない社会において生きることを目指すことは積極的な生存戦術でもある。

繰り返しになるが、全ての子どもたちが親のように「デカセギ」として日本に行きたいと考えているわけではない。「デカセギ」は文字通りブラジルへの帰国が念頭にある。少なくとも、ブラジルに帰国した子どもたちが再渡日を語る時、それは日本での永住が念頭にある。そしていつかは「日本に行く」という希望があるからこそ、ブラジルでの生活をやり過

ごすことができているのである。

6. おわりに

デカセギ型の親は、日本滞在時からブラジル移動に向けてなんらかの教育を与えようとしていた。子どもたちをみると、日本からブラジルへの移動を経て、大学進学する場合もあれば、親の期待とは違った進路を選択する場合もある。親の教育期待や教育投資だけが、子どもたちの移動後の進路選択を規定しているわけではない。子どもたちの経験において、国際移動がもつインパクトは極めて大きいのである。

本章では、子どもたちの語りから「移動の物語」を析出した。子どもたちにとって、「移動の物語」とは、日本からブラジルへの移動を意味付け正当化するための手段である。そして本研究では「移動の物語」をそのストーリーから「切断」の物語と「接続」の物語の2つに整理した。

この「移動の物語」は子どもたちにとって進路選択や将来展望を形成していくための材料というだけでなく、ブラジルでの苦労や困難を乗り越えるための生存戦略としての意味を有している。「切断」の物語は、日本への郷愁を断ち切らざるをえない状況において構築されていく。「接続」の物語は、例えばインターネットを通じて日本に繋がることで日々の困難を和らげることや、「いつかは日本に行く」という将来見通しのなかで語られている。いずれも、ブラジルを生き抜くにあたり、自らの過去の人生を意義付け、正当化するために語られている。

志水（2000）が指摘したように、ブラジルに移動した子どもたちの生活世界は、ミクロな教室レベルから生活の細部まで日本と繋がっている。志水が想定していたのは、子どもたちが日本での経験を発揮することで、ブラジルでより良い生活を模索することである。そうした側面はあるにしても、ブラジルでの積極性は日本との「切断」を語る場合において顕著に見られ、日本との「接続」を語る子どもたちはブラジルでの生活への諦めを語りがちである。

こうした結果は、人々の国際移動が加速していくなか「いかなる国でも生活できる」ケースもあれば「いずれかの国」を選ばなければ生活が困難となるケースが存在していることを示唆する。少なくともブラジルに移動した子どもたちの多くは「いずれかの国」を選択しなければその後の生活が困難なものとなる。トランスナショナルな社会空間を子どもたちは生きているが、少なくとも将来の居住地については「ブラジル」か「日本」を選ばなければならない。

日系ブラジル人はグローバルな世界で国際移動を行う人々の一例であるかもしれないが、英語を積極的に運用し世界中どこでも生活できる人々とは全く違った性質を帯びている。本章では「競合条件」という言葉で子どもたちの「地位達成」や「教育達成」の難しさを表そうとした。しかし、例えば日本語やポルトガル語、日本での卒業証書やブラジルでの卒業証書が全世界的に通用する技能や資格であれば、ここでの議論は違ったものとなったかもしれない。すなわち、日本とブラジルで身につけた技能や資格を援用して別の国で生きること

も選択肢になり得るからである。

競合する条件が少ない日本に渡ろうとする子どもたちを客観的に見れば、親世代の日本において相対的に低い社会的地位の再生産と捉えることもできる。とはいえ、日本との「接続」を語る子どもたちが、必ずしもブラジルで暗澹と生活しているわけではない。例えば、インターネットを駆使して日本との繋がりを持続させ続けることは、子どもたちの日本語能力を涵養しブラジルでの苦勞をやわらげているからである。志水の研究から約 10 年経過したが、この間の技術革新はインターネットの発達と航空網の整備を促した。そして、地理的に最も離れた日本とブラジルは、心理的にも身体的にも「近い」ものとなった。ブラジルの片田舎でスマートフォンを片手に、Twitter や Facebook を駆使して、日本人との交友関係を広げていくのも、当面はブラジルで生活する他ない子どもたちの生存戦略なのである。

そして、日本へ再移動した子どもたちは、日本社会での安定した生活を模索している。学歴や言語だけでなく、日本への憧憬、社会関係、安い航空券を元手として再渡日することについて「これでよかった。日本で生活出来て満足だ（ルーカス）」と語る。「日本に行けば外国人として工場で働ける（ルーカス）」や「選ばなければ大学に入れる（マルセロ）」と語る子どもたちの再移動もまた、グローバルな状況を活用した積極的でしたたかな生存戦略として捉えることが出来よう。そして、これはあくまでもブラジルに帰国した子どもたちの「再渡日」であり、年月の変化を経ることで、再び子どもたちがブラジルへと渡ることも充分考えられる。

7章 日本と「接続」する子どもたちのトランスナショナルな生存戦術

1. はじめに

国家間を移動する子どもたちにとって、最も困難なことは「将来展望」を設定し難いということであろう。そのため、移民の子どもたちは「人生設計は固定的ではなく長期的でもなく、連続的で『機会を利用する』ごとに焦点づけられている（プライズ,2008,p.77）」と指摘されることもある。子どもたちは自らの選択ではないにせよ、与えられた環境と資源を活用して移動経験を意味付けながら生き抜くほかない。こうした移動経験の意味付けと語りを、前章では「切断」と「接続」の物語と名付けた。

子どもたちが「切断」を語らざるをえないのも、進路を「いずれかの国」において選択しなければならないという切迫した状況に後押しされていることもみえてきた。他方で、現在もなお日本との「接続」を語り、いつかは日本で生活することを希望する子どもたちの存在も指摘した。特に、子どもたちの「接続」の物語を支えているのがインターネットの存在である。インターネットは、移民の出身国と移動先国の繋がりを密なものとし、情報や文化の同時的な受容を可能なものとしている。例えば、インターネットを通じて、国境を超えて家族と連絡を取りあうことや（Wilding 2006）、宗教的な関係を維持することは、過去のそれと比べて容易なものとなっている（Mcauliffe 2007）。また、インターネットは、物理的な世界だけでなく仮想上の世界を提供することで、移民らにとっての新しい社会関係を生み出す「場」となっている（Pangakos and Horst 2006）。

経済成長著しいブラジルにおいて、インターネットの普及は急速に進み、少なくとも本研究が赴いた全ての地域で WiFi によるネット回線の利用が可能となっている。したがって、インターネットでやりとりできる範囲に限れば、ブラジルでも日本と同程度の受容が可能となる。ブラジルにおける日本移民が、日本の文化をブラジルで受容していたように、移民らの移動前、移動後の文化の継続・継承は必ずしも移民の現代的な特徴ではないにしても、インターネットの登場により、移民の母国との繋がりは密なものとなっている。

本研究で扱う子どもたちも、インターネットを通じて最新の日本の情報を得るだけでなく、日本人や日本で生活する日系ブラジル人との交流を続けている。日本との「接続」を語る子どもたちは、ブラジルでの生活の困難や難しさから日本との繋がりをネガティブに語るばかりでなく、日本で生活するチャンスを得るために積極的に繋がりをもとうとしている。したがって、インターネットや SNS を利用することで、日本に繋がり続けることは、一見するとブラジル社会への不適応のように見えるが、子どもたちの積極的な生存戦術としても捉えることができる。ある意味で、トランスナショナルな社会空間を使いこなすことで子どもたちはグローバル化した社会をうまく生き抜こうとしているのである。

生存戦術を明らかにすることは、客体的に描かれがちな子どもたちの主体性を描くためのポイントでもある。セルトーは人びとの日常実践における「戦略」性と「戦術」性に注意

せよという。特に、「戦術」とは「これといってなにか固有のものがあるわけでもなく」、自分で選び取ったわけでもない空間で「なんとかやっけていかざるをえない」行動のことである(セルトー1987 pp.101-102)。「強者/権力者」によって行使されがちな「戦略」は、「弱者」を押さえ込み自らの秩序や規範を維持しようとする。しかし、人々は日常的な「戦術」を通じて、構造的に規定されがちな日常乗り越えようとする。こうした視点を強調するのも、親の移動の従属変数として描かれがちな子どもたちが、さまざまな「機会を利用する」ことで日々を生き抜いているからである。

こうした議論を通じて検討したいのは、子どもたちがトランスナショナルな社会空間を援用して行使する生存戦術と、額賀(2013)が指摘するような「グローバル型能力」との比較である。額賀はアメリカ在住の日本人家族を研究対象とし、子どもたちが「日本人であることのアイデンティティ」を柔軟に活用することに加えて、「グローバル型能力」を形成している。グローバル化能力とは「子どもたちがエスニック境界を交渉し、「日本人であること」を実践する行動」からみえてくるという。そして「グローバル型能力」は「順応力(=フレキシビリティ)」と「社交力(ソーシャビリティ)」によって形成される。「順応力」は「状況に応じて言語や態度、行動を切り替えたり、2つ(以上)の文化をまぜあわせたりすることで、居心地の良い関係性や空間を確保する能力」と定義される。「社交力」は「エスニック境界を匠に操作して自集団のメンバーとも、他集団のメンバーとも親しく対等な立場で交流する能力」と定義される(額賀 2013 pp.14-15)。

「グローバル型能力」から考えた時、ブラジルとの「切断」を語る子どもたちはブラジルでの「ローカルな能力」に特化している。それでは、ブラジルとの「接続」を語る子どもたちは、ブラジル社会で生活しながら、日本との繋がり有しており、比較的どちらかといえば特に日本との「接続」を語る子どもたちは、「グローバルな能力」を有しているといえるかもしれない。子どもたちの生存戦術が、グローバル化した社会を生き抜くための能力といえるものなのか。そこで本章では、子どもたちの生存戦術に注目することから、これらの疑問を考えていきたい。

2. ブラジルの片田舎での生活

本章で扱う事例の多くが、パラナ州ロンドリーナ市から訳 100km ほど離れたアサイという町で収集した事例である。アサイは、ブラジル拓殖組合によってパラナ州に 1932 年設置された。当初この移住地はトレスバラス移住地という地名で呼ばれたが、日本的な響きをもつアサイという名前に改称された。当時の人口は 10,000 人だったが 3,000 人以上の日本人がここに入植している(進藤 1983)。

表 1-4 アサイの子どもたちの概要

名前(年齢)	来日-就学前	教育経歴(初等、中等)	使用言語	将来展望	使用しているICT技術	趣味	友人関係	備考
ミカ(18)	日本生まれ-保育園(日本)	ブラジル人学校(1年生~高2)-帰国-公立高校卒業	日本語/ポルトガル語	ブラジル	FaceBook(ブラジル)	ジャニーズ・ドラマ	ブラジル人と交流	アニメ系のオタクというよりも、ジャニーズや芸能人・ドラマが好き。アニメオタクとは一線がある
ジュン(18)	6歳	ブラジル人学校(1年生~7年生)-帰国-基本教育学校(8年生)-高校卒業	ポルトガル語	ブラジル	FaceBook(ブラジル)		日系人・ブラジル人どちらも交流があるが「オタク」文化ではない	日系人とも友人関係にあるが、文化を通じたものではない
マルタ(18)	3歳	ブラジル人学校(1年生~7年生)-帰国-私立基本教育学校(7年生~8年生)-私立高校卒業	日本語/ポルトガル語	ブラジル	FaceBook(ブラジル)	漫画	ブラジル人	現在はデザイナーになりたいと考え、勉強を続けている。
ケイ(15)	2歳	ブラジル人学校(1年生~5年生)-帰国-基本教育学校(5年生~8年生)-私立高校在学中	日本語/ポルトガル語	ブラジル	FaceBook(ブラジル)		日系人・ブラジル人	日系人とも友人関係にあるが、文化を通じたものではない。スポーツが好きで、ブラジル人と交友関係にある
チアキ(16)	日本生まれ	公立小学校(日本)(1年生~5年生)-帰国-基本教育学校(5年生~卒業)-高校在学中	日本語/ポルトガル語	ブラジル、大学進学	FaceBook(日本・ブラジル)	KPOP・アニメ・ドラマ・漫画	アサイの廣女子グループ	日本のみなが受験生になると、連絡を取らなくなってきた
サツキ(14)	3歳	ブラジル人学校(1年生)-公立小学校(日本)(2年生~4年生)-帰国-基本教育学校(5年生~8年生)-高校在学中	日本語/ポルトガル語	日本、日本の大学	FaceBook(日本)	アニメ・声優	アサイの廣女子グループ	来年には日本にいるのだから「割りきって」日本のことをしている。日本では声優になりたい
トモ(19)	0歳	公立小学校(日本)卒業-帰国-基本教育学校(8年生~9年生)-高校卒業	日本語/ポルトガル語	日本、日本の専門学校	FaceBook(ブラジル)、MIXI(日本)、LINE(日本)、Twitter(日本)	アニメ・ドラマ・漫画・ゲーム	アサイの廣女子グループ	一貫した「アニヲタ」。デザイン事務所で働きながら日本人とも交流し、プレゼントを交換したりしている。「日本の文化を愛好し、いつかは日本に行きたい典型」
アリス(14)	0歳-保育園(日本)	公立小学校(日本)(1年生~3年生)-帰国-基本教育学校(4年生~8年生)-高校在学中	日本語/ポルトガル語	ブラジル、大学進学	FaceBook(ブラジル)	アニメ・ドラマ・KPOP	アサイの廣女子グループ	日本でも家でドラマをみていた→ブラジルでも継続して視聴する。日本語を覚えるために日本でも読書をしていった。非常に真面目。日本の文化に支えられながら、ブラジルで生きる典型
ユキナ(14)	12歳	小学校(1年生~6年生)-来日-ブラジル人学校(1年間)-帰国-基本教育学校-高校在学中	日本語/ポルトガル語	ブラジル	FaceBook(ブラジル)	KPOP・アニメ・ドラマ	アサイの廣女子グループ	日系人とはサブカル。ブラジル人とはダンスの話。
ナナミ(19)	日本生まれ	公立小学校(日本)(1年生~6年生)-公立中学校(日本)(1年生)-ブラジル人学校*(5年生)-帰国-基本教育学校*(5年生)-再来日-就労(派遣:工場)-帰国-高校在学中	日本語/ポルトガル語	日本、日本の大学	FaceBook(日本・ブラジル)、MIXI(日本)	少年漫画	一人でいたい	漫画は好きだがアニメはあまり好きじゃない。いまでも日本から持ち込んだ漫画を繰り返し読んでいる。
モモコ(18)	0歳	公立小学校(日本)(1年生~6年生途中)-ブラジル人学校*(5年生)-帰国-基本教育学校*(5年生)-再来日-就労(派遣:工場)-帰国-高校在学中	日本語/ポルトガル語	ブラジル	FaceBook(ブラジル)、MIXI(日本)	KPOP・アニメ・ドラマ・漫画	アサイの廣女子グループ	自分が勉強に向いていないとわかっているため、勉強は手を抜いて、ブラジルでの生活を満喫しようとしている。

アサイやバストスは、日本から居住者を呼び寄せるのではなく、サンパウロ州を中心に自営農者や小作農業従事者を集めた。1929年の世界恐慌の影響から、コーヒー価格が下落、サンパウロはコーヒー作付けの制限政策を推し進めており、コーヒー農業者と自立し始めていた日本移民らは経済的な打撃を被ることになった。そこで、経営者らはコーヒー以外の農業を行うか、農業形態を変えるか、もしくは新天地を目指すか選択せざるを得なくなった。アサ

イは新天地を求めたサンパウロの農業従事者を受け入れる中で発展していく。ただし多くの日本移民の歴史を飾る出来事はサンパウロを舞台としたこと、ブラジル拓殖組合が設置した移住地としては小規模だったことから、移民史としては日陰の移住地である。

本章では帰国した子どもたちの事例のうち、2010年～2013年に収集したパラナ州のアサイ町で収集したデータを扱う。3,4,5章で扱ってきた基本データと違い、本データの特徴は継続的にインタビューデータを収集できた事例群であることにある。また、それぞれ累計すると4時間から最大で20時間近くのインタビューを実施できた。以下で説明するように、アサイは中心部に舗装された目抜き通りがあり、そこから町が広がっている。広がっているといっても、5～6ブロック前後の小さな町である。そのため、子どもたちは互いに顔見知りとなっている。インタビューデータは町のレストランや日本語学校、町に一件だけのホテルで行った。今回は子どもたちのデータを分析の対象とするが、アサイの教育委員会や学校教員、日系人協会、日本語学校といった諸機関にもインタビューを行っている。インタビューデータのうち、ミカ、アリサ、チアキ、トモ、については両親へのインタビューを行っている。

日本語学校「あゆみ」で日本語を教える2世のヨシエ先生によると、アサイの場合、農業経済から工業化への切り替えが遅れたことで、比較的日本移民だけのコミュニティが維持されてきたという。アサイの主要産業はコーヒーから綿花、そして製造と推移していくが、多くの日系人は都市近郊農業に切り替えたため、1次産業主体の経済生活が成り立っていた。1次産業から2次・3次産業への切り替えは2世から3世にかけて生じ、都市への人口流出は1960年～1970年頃にみられるようになった。また、日本の国策移住地であったことから、戦中以降、日本人比率を下げるために多数のブラジル人が流入し、2世以降の家族構成における日系人同士の婚姻比率は低くなり、1世が引退をはじめると堰を切ったように日系人コミュニティの活動が「薄まった」という。

ヨシエ先生も「自分の母国はブラジルだと思います。ブラジルで生きていくものだと思っていましたので。そういう意味では、日本への気持ちは両親とは違いますよね。日本語の環境で育ちましたが、それでも日本をブラジルのように思えない」「いりくんでいると思います。私は日本語の家で育ちました。ですが、日本はすでに遠い国で、親もブラジルで生きると決めていたので」という。こうした語りは、日本人移民が多数集住した移住地では多数聞くことができる。移民第2世の典型的な語りである。こうした「2世」の典型的な語りが、「3世」になるとさらに典型化する。ブラジル社会へと統合され、そのエスニック・アイデンティティが「日系ブラジル人」もしくは「ブラジル人」へと変化する。

しかし、時代の変化が、日本移民の境遇をいっそう複雑なものとしていく。ブラジルは軍政から民政への移行期の債務の不履行からデフォルトに追い込まれ、インフレの抑制に失敗する。アサイに限っていえば、綿花の価格下落を通じて冷えきった農業経済にとって、大規模農業企業の参入による小規模農家の淘汰に対応できなかった。経済不況と産業構造の変化は瞬く間にアサイから仕事を奪った。農業従事者だった日本移民・日系人のなかには切迫し

た生活状況から日本のデカセギに活路を見出す者が現れた。当時の様子を、ヨシエ⁷¹先生は次のように話す。

ヨ：80年代から徐々に日本へ渡る人が増えました。何度もお見送りをしました。何十組も日本へと行きました。

*：旅行会社ですか？

ヨ：サンパウロの会社を通じて。それも最初は実家に戻るついでとか・・・そういう理由だった。それが大勢、日本に。デカセギが（給与が）いいってわかってきたんですね。ロンドリーナから、時々「働きに行かないか」という人もいたんですよ。ちょうど不況だったんですね。

*：農家の方ですよ

ヨ：アサイからもう少し、田舎の方にみなさん土地をもってたんです。でも駄目だったんですね。

*：それで

ヨ：みなさんときどき帰ってきたりしてたんですよ。お金がある人はロンドリーナに出ましたね。

*：なるほど

ヨ：先生（＝筆者）も知っての通り、2008年頃からたくさんの方が帰って来たと。子どもたちも。私たちはびっくりしました。

*：レダ先生もおっしゃってましたね

ヨ：みんな私より日本語が上手なの（笑）だからポルトガル語を教えることになったんですね

アサイには日本移民として町として「日本語」や「日本文化」が息づいている。商店や通りが日本人の名前であることや日本式の寺院もある。日本移民の共助組合もある。町の入口には巨大な鳥居が鎮座している。最近ではブラジル育ちの日系三世が「日本の城」を模した博物館を建築している。いわゆる日本移民の末裔らが日本的な文化を残している一方で、デカセギマネーが還流し、日本式的美容院や商店もみかけるようになった。アサイは日本移民とその末裔が形作る日系文化と、デカセギから帰国した人々が形作り日系文化が交錯した町である。

ここで確認しておきたいのは、日本移民における「祖国」とは日本のことであり、「母国」としてのブラジルとの別が存在していたことである。本章で紹介する子どもたちの祖父世代は日本に郷愁を覚え、二世である親世代の「母国」はブラジルとなる。日系ブラジル人の子どもたちが「帰国」したのはそうした「いりくんだ」土地なのである。微妙な言い回しが続くが、こうした議論を踏まえるのも、ブラジル日本移民とニューカマー外国人として

⁷¹ ヨシエ、女性、42歳、ブラジルで大卒、日本語でインタビュー

の日系ブラジル人の微細な繋がりを示すためである。

*：子どもたちは日本移民二世と似ていると感じられますか？

ヨ：似ていると思います。少し違いますけどね。両親と私は日本語で話します。周囲のブラジル人とはブラジル語です。こうした日系人は多いと思います。ですが日本人だと思っているわけではありません。

子どもたちも同じでしょうね。自分が日本人だとは思っていないでしょう。でもブラジル人かと言われると難しいですね。私よりも日本を知っている子どもたちですから。でも先生（筆者）は日本人ですよ。先生と子どもたちはやはり違いますよね。

ヨシエ先生がいう「少しの違い」とはいったいどのような違いなのだろうか。そしてそれは、以下でも見ていくように、日本育ちの子どもたちのトランスナショナルな生存戦略の現代的な様相を際立たせるものである。

3. 日本との繋がりを維持する意味

さて、まずはこのアサイという片田舎において子どもたちがどのように日本との繋がりを維持しているかについて見ていきたい。ロンドリーナ生まれのアリサ⁷²は生後すぐに両親とともに日本へと渡った。日本の保育園へと入学。小学校 3 年生まで日本で過ごした。日本での教育経験に関してあまりいい思い出はないという。

ア：私は・・・（日本での教育経験については）悪い思い出しか・・・4 歳以上からは憶えてますけど、日本の保育園には行って、すごくいじめられてたんですよ。

*：いじめられてたんですね

ア：ブラジル人で肌の色とか、日本語が話せなかったこととか。すごく仲間はずれにされたり。友達になりたくないとか、一緒にそばにいたくないとか。学校から出て行けとか。本当にゴミみたいにされて。そして、給食のときも、なんか、私はいつも 30 回くらい嘔んでから食べるんですが、日本人ははやく食べて、給食とか食べて、そして先生いつもおこってはやく食べなさいとか。はやく食べて息ができなかったこともあったし、本当にいろいろいじめられた。

学校には馴染めなかったが、友人関係には恵まれ「私のクラスが絶対また日本に帰ってきてねとってくれて。でももう 4 年も 5 年もたって忘れてるよねと思って手紙を書いたら、みんなが待ってるからって返事があって」嬉しかったという。

両親は静岡県の子の部品工場で働いていた。家族はアリサにいつかブラジルに帰ると話

⁷² アリサ、女性、14 歳、日本の公立小学校を経て、ブラジルの公立中学校へ、日本語でインタビュー

していた。経済危機の影響で父親がリストラされてしまい仕事を失う。そして、日本で仕事を探す父親とともに生活するか、母親と姉弟とともにブラジルに帰るか選ぶことになり、ブラジルに帰国することを選んだ。その時は涙が止まらなかったが、母親や姉弟と暮らすべきだと思ったという。

日本ではブラジルを「南国」としてイメージしていたが、帰国したのは内陸部の田舎であった。家庭内でポルトガル語を使用していたこともあり、ブラジルでの生活や学習に困難を感じることは少なかったが、趣味や振る舞いの不一致から、ブラジル人の友人をつくるのが難しかった。日本にいた頃からブラジル人の姿を想像して、帰国後に向けた「イメージトレーニング」をしていた。ブラジルでは本当の「ブラジル人」になれると思っていると「お前はブラジル人じゃない」と言われてショックを受けたという。日本では顔立ちでイジメられたが、ブラジルでは顔がおなじなのに振る舞いがブラジル人ではないということでイジメられたのである。

ア：私はみためはブラジル人じゃないですか。だから周りも新しいブラジル人が増えたなって感じだったと思うんです。でも思ったら実は日本から帰ってきたから日本が大好きと言って。でブラジル人がお前はブラジル人じゃない。日本に帰れとか言われたな。俺達といっしょにいるなとか。よく言われたな。ブラジル人の顔があるのに日本が好きというのはおかしいとか変とかバカみたいとか。

それでもブラジルでの生活が軌道に乗ったと思いはじめたのは「たくさんの日本帰りの友達に恵まれたから」であるという。趣味は Kpop。同じようブラジルに帰国したブラジル人青年に紹介されて熱を上げている。

ア：Kpop はねえ、シンドンが好きなんですよー

*：シンドン。人気だもんね

ア：シンドンほんとかっこいいんですよ。ああ・・・もうほんとにスーパージュニオンの隅っこにいるんですけど、そこにしかみてない。ほんとにかっこよくて。ノートにシンドンの写真貼ってます。後ろにもね

アリサは、ブラジルの国立大学の医学部を目指して勉強中である。日本の「1リットルの涙」というドラマをみて医者に憧れたという。祖母が医療ミスで亡くなり、祖父が心臓病で亡くなり、より良い医者になりたいと思った。ブラジルの医学部への入学を目指して勉強を続けている。ブラジルでの生活は厳しく、日本に帰りたいと泣き叫ぶこともあったが、同じように日本から戻ってきた子どもたちに支えられ、現在は医学部を目指すまでになった。ヨシエ先生が言うところの「勉強しすぎて熱が出る子」だという。両親からは、勉強をし過ぎて怒られることがある。勉強を愛しすぎて、文房具と寝ることもある。「少し変わってると思

ます」という。

次に見るチアキ⁷³の事例は、アリサと違って日本における「悪い思い出」はない。1998年に生まれたチアキは、日本の公立学校 5 年生まで通った。2010 年に帰国、学年を落として初等 5 年生からやり直し、現在は高校に通っている。ブラジルの勉強は難しく成績は悪いが、ブラジルの大学に進学したいと考えている。ブラジルで生活しているが、普段の生活は日本文化一色である。

日本の学校には様々な懐かしい思い出がある。トイレのドアを閉める時に別の子の指を巻き込んでしまったことがあった。そのことで先生に厳しく叱られたこと。3 年生のころ、窓から外に向けて雑巾を絞ってこちらも先生に叱られた。それでも「先生は厳しかったが優しくかった」という。勉強はたくさんしたが「成績はまあまあ」だった。

ブラジルへの帰国は、一週間程前に突然告げられた。両親の話によると、病気がちの祖母の看病をするため、急いで引っ越しの準備をしたという。これまでブラジルに帰るという話はなかったのでもとても驚いた。しかし泣く暇も、怒る暇もなく帰国することになった。ブラジルの第一印象は「最悪」だった。先ほどのアリサの事例と同じく、ブラジルは「海が広がり、椰子の木があって・・・」というイメージがあったが、実際のブラジルは赤土と砂煙に包まれたボロボロの町であった。また、ポルトガル語は両親の会話を聞くぐらいだったので、言葉がわからないため勉強がには苦勞した。勉強より辛いと語るのが、ブラジル人からのからかいやイタズラである。

チ：お気に入り（の文房具）を盗まれたりするんですよ

*：珍しいものね

チ：いやそうですけど。だから持って行かないようにしました

*：そうなんだ。でも使わなきゃね

チ：そういうのは、同じような（日本から帰国した）子とで

そこで、日本語学校「あゆみ」に通って、ポルトガル語を教えてもらった。そこにはチアキのように帰国していた子どもたちも多く、一緒に勉強しているうちに友だちが増え、勉強もできるようになった。日本のかっこいいキャラが出てくるアニメが好きで、あこがれがあるという。その他にも、日本語学校の友人から教えてもらった KPOP が好きで、アリサと一緒によく聞く。近隣の大きな街で行われる日本関連のイベントに参加して、なぜか流行している KPOP のダンスをみるのが楽しみのひとつである。「明日ママがいない」というドラマが好きで繰り返し泣いてしまうという。チアキは自分のことを「テレビっ子」というが、テレビを見るのは日本のドラマが中心で、ブラジルのテレビなどをほとんどみていないという。

⁷³ チアキ、女性、16 歳、日本の公立小学校を経て、ブラジルの公立中学校へ、日本語でインタビュー

*：ブラジルのは（テレビとかはみないの）？

チ：テレビとかはね

*：あーでもあんまり

チ：やー日本のも見れるしなあ

*：日本語力もあまり落ちてないよね？

チ：どうでしょう。友だちがいるので話していると覚える

*：そうかあ

チ：ネットの友だちもいるので

*：あーなるほど。Skype とかで？

チ：そうですね。知り合った人とかと

ネットで知り合った日本人とアニメについて話すことで全く日本語能力が落ちていない。母親からも「日本語じゃなくてブラジル語で話さない」と注意されている。好きな漫画は「ワンピース」や「ハンターハンター」といった少年雑誌系である。手に入らない漫画は Amazon 等,デジタルブックをダウンロードしている。

*：漫画は手に入らない

チ：ダウンロードしてます。本を買うより安くつくし

*：うん

チ：でも欲しいものがなくて。そういうときは日本からとか。日本で買いたいなあという気持ちになります

アニメ・漫画好きのチアキだが,Kpop や日本のドラマも愛好し,アサイの友人らと「共有」している。ブラジルの友人とは Facebook で連絡を取り合い,日本の友人とは LINE で連絡を取り合っている。使う「ツール」の違いを意識しないと,なかなか連絡が取れないのが実情であるという。

チ：こっちは Facebook とかだね。日本だと LINE だけど。こっちは部活かもないし。自由だし。厳しくないね。時差があるから Facebook とかもできないしね。

ブラジルの友人もいるが「同い年なのにブラジル人は大人っぽいというか。考え方が違う」し「好きなものも違うし,歌とかも違う」。休日は,「同じように好きな日系人がいるから,お互いの家でアニメ見たり Kpop を聞いたり」しながら生活している。

*：ブラジルに馴染めてないんじゃないの？

チ：そうかな？楽しんでるよ
 ＊：でも、ブラジルのテレビとかは見ないんでしょ？
 チ：え、先生は日本でテレビ見る？
 ＊：あんまりみないなあ・・・
 チ：それとおなじことだよ。それはそれ。これはこれ

日本文化はブラジルでの苦勞を緩和させるためのより抛であり、必ずしもブラジルでの生活を阻害するものではないという。チアキはブラジルでの生活をうまく「こなす」ために、家では日本文化を愛好しているのである。

表 7-1 はアサイに住む子どもたちが、「趣味はなんですか？」「いま最も好きなものはなんですか」「大事なものはなんですか？」といった質問に対する答えのうち、日本のサブカルチャーに関する内容を一覧にした。

表 7-1 ブラジル人の子どもたちが ICT を通じて受容する日本のサブカルチャー

芸能	ドラマや芸能人の追っかけ。お笑い番組。日本のテレビ会社の海外配信をインターネットを通じて視聴している。近年、チャンネル数も豊富になった。
音楽	日本の POP カルチャー。KPOP。ジャニーズ。AKB48。
小説	純文学だけでなくエンタメ系、ライトノベル。
アニメ	深夜アニメを中心のいわゆるオタク系。少年漫画（ワンピース、ナルト）。日本のアニメ会社の海外配信をネットで視聴している。
漫画	少年漫画（ジャンプ、サンデー）。同人業界や萌系グループ。ボーイズラブ（BL）など。現物が入手できない場合でも、電子書籍やダウンロードサイトを通じて入手する。
ゲーム	ブラウザゲームを中心としたネットゲーム。PS3 などハードゲームでは日本語版を愛好。その他日本人との通信対戦や共同攻略。攻略情報やデータの共有。

AKB48 や Kpop といった、比較的メジャーなものから、同人誌やボーイズラブといった、いわゆる「オタク」とされる文化まで、子どもたちが幅広く日本のサブカルチャーを受容していることがわかる。その背景には、スマートフォンの爆発的な普及に牽引されて、若者のサブカルチャーの大部分がインターネット上でやり取りする事が可能になったからである。それでは、こうした日本との「つながり」はアサイの子どもたちにとっていかなる意味を有するのだろうか。

4. トランスナショナルな空間での繋がり子どもたち

前節で取り上げた、アリサとチアキは日本で言うところの「オタク」であり、自らも「オタク」と自称している。「オタク」という語源には諸説あるが、一般的には字面通り「お宅知ってる？」と尋ねることにある。「オタク」同士は、同じ趣味を互いに紹介しあい交流をする。それどころか相手よりも知っていること、相手より深く知っていることに価値がある。アリ

サとチアキの語りにもあったように、アサイの町でもこの「オタク知ってる」が飛び交っている。表 7-1 は子どもたちの語りの中に現れてきた日本とコミュニケーションする際に援用される ICT 技術の一覧である。

表 7-1 日本とのコミュニケーションに利用される ICT 技術

Facebook を中心とする SNS	日本の情報収集・友人らの動向確認。家族・親類との連絡。
LINE・Skype などの通話ツール	知り合い中心の親密な関係の維持。家族・親類との連絡。
Twitter や匿名掲示板	日本の情報収集・匿名による日本人/ブラジル人とのコミュニケーション。

子どもたちは、主にインターネットに由来する ICT 技術を活用することで、日本との繋がりを維持し続けている。そしてそれは先述したように、ブラジルでの辛さを乗り越えるための言わば「緩衝材」のようなものである。「緩衝材」は、例えばブラジル日本移民の一世が、ブラジルで日本の小説を読むことや、日本の歌謡曲を聞くことの現代版のようにもみえる。本節ではこの「緩衝材」の現代的な特質を描きたい。そこには、トランスナショナルな空間を援用することで、柔軟に生き抜こうとする子どもたちの生存戦術がみられる。

(1) サブカルチャーの同時的受容

1995 年生まれのモモコ⁷⁴は、デカセギ中の母親がブラジルに一時帰国して出生、すぐに日本へと渡った。保育園、公立学校と通い、帰国直前にブラジル人学校へと通った。日本で生活していたころから、はっきりと「自分はブラジル人」と考えていたので、いつかはブラジルに帰るだろうと思っていた。ブラジル人学校に転校したときは「いよいよだな」と察した。

ブラジル人学校の勉強はよくわからなかったもので、ナナミと一緒にポルトガル語を話せない友達と授業を抜けだしていたという。日本の学校では友達があまりできなかったもので、勉強が出来ない友だちができたことが嬉しかった。授業をサボりすぎて、しばしば校長先生に呼び出されて怒られた。ブラジル人学校ではポルトガル語を勉強したが全くついていけず、姉や友人と共にサボってばかりだった。

*：(ブラジル人学校の) クラスの人数とか (覚えてますか?)

モ：覚えてないなあ・・・サボりすぎた (笑)

*：学校は好きだったの?

モ：あんまりー

*：先生は?

⁷⁴ モモコ、女性、18 歳、日本の公立小学校、ブラジル人学校を経て、ブラジルの公立中学校へ、日本語でインタビュー

モ：好きじゃなかったな

*：なんかお友達ともあまり遊べなかったんだって

モ：勉強とかはともかくなんですけど、遊びとかは厳しくて

*：へー

モ：普通の日本人とは違ったし、ブラジル人ともちがったかな

ブラジル帰国後は学年を下げて、アサイの公立学校に入学した。しかし「でも友だちがで
きなくて。話せないし。学年を下げたからまわりは年下」ということもあり、なかなか友人
には恵まれなかった。ここでモモコがいう「話せない」というのは、話題がないということ
である。サボりがちだったブラジル人学校ではあったが、ポルトガル語についてはモモコの
力になっていた。

その後、モモコはブラジルでの学校になじめないまま、再び日本へ渡り、弁当工場と自動車
働いた。学校とは違い、給料が出ることで「仕事はじめて知り合いが増えて。お化粧品を覚え
て、服を買って。友達とですね」「普通の女の子って感じになりました」。それでもブラジル
に戻ったのは工場で働くことが嫌になったからだという。

モ：うん。（日本で）働きながら、ブラジルに帰って勉強したいと思いました

*：働いてたからかー

モ：そうですね。工場は嫌だなあと思い始めてました。

*：うん。それでブラジルに戻って大学みたいな

モ：そうですね

ブラジルの大学へと進学し、イラストレーターとして働きたいと考えている。ただし現在
もブラジル人の友人は少なく、もっぱら同じように日本から帰国した青年らとの付き合いが
中心である。ブラジル人の友人にあわせて会話をするのはあっても、心から通じあえるよ
うな瞬間はない。

モ：うん。なんか話しづらいんですよ

*：いわゆるブラジル人と？

モ：そう

*：へー

モ：話も合わないし

*：みんなに話してるの？

モ：なんだろうなあ・・・アイドルとかかな

*：お、それじゃあ、あうじゃん

モ：あ、でもそれブラジルのアイドルですよ

例えばブラジルのアイドルが着る洋服はモモコの趣味ではない。着たい洋服は日本のものだが、ブラジルで生活している手に入らない。アサイの生活ではオシャレができるわけではないが、日本から持ち帰った服を着回すことで工夫している。姉のナナミとは違って、将来はブラジルで大学に進学すると決めている。ブラジル人としてブラジルで仕事を見つけて生活したいという。大学ではイラストレーターになるための勉強をしている。アリサやチアキ、サツキと仲がよく、マンガの貸し借りをしている。男性同士の熱い友情や「男性同士の恋愛もの」が大好きで「うちら腐女子グループなんですよね」という。ブラジルでの生活を楽しむ一方で、モモコは「ブラジルに来たことを後悔しても仕方がない」という。

*：選べない？

モ：でしょう？でも選べないなりに楽しんでるんですよ

*：ブラジルで

モ：そ。友達もいるしね

モモコは自分の人生を「選べなかった」と語る。少なくともブラジルに望んできたわけではないからである。そこで、モモコは選べないなりにブラジルでの生活に楽しみを見出そうとしている。支えとなっているのが、同じ境遇で日本へと戻ってきた子どもたちである。モモコと同じような境遇にあるサツキ⁷⁵は、友人の存在があるからこそブラジルで生きていけると語る。サツキは2009年の経済危機で失職した父親と共に帰国した。現在も母親は日本で働いている。父親は日本で仕事が見つからないことにはずいぶんショックを受けていたが、ブラジルで事業を始めたので帰国した。母はサツキの中学校の卒業式にブラジルへと一時帰国したが、すぐに日本へと戻っていった。サツキがブラジル帰国後困ったことは「ポルトガル語」ではなく友人作りだったという。ブラジルの生活に馴染むことができたのは、日本帰りの仲間たちだった。

小学校5年生に進学しようとしていた頃、突然「一ヶ月後に帰ることになった」と言われ、慌ただしく帰国の準備をした。母親と日本に残ることも選べたが、ブラジルにいる高齢の祖父母のことも気になったので父親と帰国することにした。父親は現在ブラジルで不動産業を営んでいる。事業を安定化させるため父親はブラジルで事業を運営し、母親は日本の工場でも働いて家族に仕送りを続けている。

日本がいまでも懐かしいという。カレーとポッキー、アイスといった食べ物が懐かしい。日本の学校も楽しかった。運動会、音楽会とブラジルにないイベントが多く思い出に残っている。両親も学校の行事には積極的に参加してくれた。ただし勉強の成績は良かったわけではない。国語が苦手だった。日本に帰国したくてたまらなかったが、それでもブラジルで

⁷⁵ サツキ、女性、14歳、日本のブラジル人学校、公立小学校を経てブラジルの公立中学校へ、日本語でインタビュー

生活できるようになったのは「同好の友」がいたからである。

サ：町が小さいですから。みんなで教えあうんです

*：そうかあ。

サ：チアキやユキナですねえ。みんな

*：そうなんだ

サ：日本人だけの、ブラジル人もいるけどグループを作るんです

*：グループ

サ：グループの歌もあるんです。ダンスもありますよ

*：そうなの（笑）どんな名前なの？

サ：腐女子フレンドです（笑）

*：腐女子！

サ：ええ（笑）

*：それでそういう漫画とか交換するの？

サ：するんですよ

*：へ一本とか、漫画とか？

サ：ええ。本とか漫画はないですけど、データを。物自体はないけどデータを

*：いいの見たよって？

サ：そうそう。「お前に貸してあげる。みてね、みてね」みたいな

サツキと同じくユキナもこの「腐女子フレンド」で日本帰りのブラジル人青年と交流を深めている。そして友人関係を作るための「ネタ」が、インターネットで受容できるサブカルチャーなのである。そしてこの「同好の友」は、日本で日本の公立学校に通っていた子どもたちばかりではない。現在ではグループの輪を広げ、ブラジル人学校出身の友人やブラジル育ちの友人も加入している。

例えば、ブラジル人学校出身のユキナ⁷⁶のように、ほとんど日本語がわからない子どもたちも参加し、ポルトガル語が得意な子どもは日本語を、日本語が得意な子どもはポルトガル語を教えてもらうことで「ウィン-ウイン」の関係となっている。

*：さっきサツキにも聞いたけど、グループにはいつて？

ユ：はい。チアキとかもですね。ブラジル人もいますけど日系人が中心です

*：腐女子フレンド（笑）

ユ：はい（笑）

*：そこで漫画とかを交換して。紹介して

⁷⁶ ユキナ、女性、14歳、日本のブラジル人学校を経て、ブラジルの公立中学校へ、ポルトガル語でインタビュー

ユ：そうですね。でも例えばポルトガル語しかできない子にはみんなが内容を教えて

*：へーいろんな情報とかも？

ユ：はい。日本から帰った子には、例えばブラジルの情報とかも

*：あー助け合う

ユ：そうですね

*：日本語は難しいものね

ユ：だから教えあうと助かるんです

ユキナはブラジル人学校に通っていたので、日本社会との接点は少ない。それでも、日本のテレビやアニメをみていたので、日本の文化に親しみが有る。サツキとモモコのように日本文化にのめり込むようなことはないが、友人らを介して日本の文化に触れあっていきたいと考えている。前章で議論した分類でいえば、ユキナはすでに日本社会との「切断」を語り、ブラジルで生きていくと決めている。そうしたユキナはアサイの子どもたちが熱心に日本文化を受容する理由を以下のように表現している。

ユ：浦島太郎にならないためです

*：浦島太郎？

ユ：日本童話です。みんな浦島太郎になりたくないから熱心なの。いつ帰るかわからないし

*：もどって友達と話せなくなるから

ユ：そうです

以上のように、アサイの子どもたちは互いに日本の文化を紹介しあうだけでなく、その情報を「リアルタイム」に日本から取り入れることで、インターネット上に限れば、日本と変わらない生活を行うことができている。そしてそれが日本から帰国した子どもたち同士を繋げる切っ掛けとなっているのである。アサイの子どもたちにとって、サブカルチャーはブラジル社会に軟着陸するまでの心の支えでもある。日本と繋がることを「緩衝材」にする戦術である。また、子どもたちが日本との「リアルタイム」を追求するのも、単純な好みに留まらず、「いつ日本に戻っても」以前の友達と交友関係を続けていくためにも行われている。

(2) ネットワーク上の空間を通じた「居場所」づくり

前項では、インターネットを通じて日本の最新のサブカルチャーを「輸入」し、それを媒介として子どもたちが繋がりあう様子を描いた。このネットワーク上の空間は場所を選ばないという点に特質がある。そしてその利用法のひとつに、日本と瞬時に連絡できるというものがある。1996年生まれのマルタ⁷⁷は、1999年に日本へと渡った。鈴鹿のブラジル人学校

⁷⁷ マルタ、女性、18歳、日本のブラジル人学校を経て、ブラジルの公立中学校へ、ぼると

に通っていたが,親の教育方針から日本語の勉強もしていた。現在もポルトガル語には苦手意識があるというが,学校での成績は非常に良かった。

マ:(日本では) ブラジル語学校あったじゃん?EAS ってところ?でも日本語しかしゃべれなかった。先生とはポルトガル語でしゃべってたけど,友達とは日本語。

*: そうだったんだ。それでこっち戻ってきて,ポルトガル語で授業しても

マ: わかんない

*: じゃあ成績はあんまりよくなかった?

マ: こっちのは,前より縮んだね

*: そのあとはずっと成績まあまあみたいな感じ?

マ: まあまあいって,高校行ったら点数が上がった。ていうか点数が 95 まで上がった

*: なんでそんなに上がったの?

マ: 前より簡単になってたから。高校の勉強が,前日本でやってた勉強と同じだったから,わかりやすかった

現在は昼間アルバイトをしながら,夜間はロンドリーナの私立大学に 1 時間程度かけてバスで通学している。そのため,ブラジル在住の友人とはもっぱらインターネットを使って情報交換をしている。マルタはブラジルの大学に通っており友人も多い。普段はポルトガル語で生活をしている。語りの上ではブラジル社会インターネット上では日本語とポルトガル語を使用している。FaceBook もカタカナでマルタと自分を表記し,日本の若者の間で流行している「自撮り」写真を日本語とポルトガル語のコメントと共にアップロードしている。

*: 趣味は何?

マ: 絵かくこと。絵かいて,深夜に日本の友達と話して。

*: 向こうのEASで友達になった子?まだ話すんだ

マ: うん,話す

*: 話すときは何語で

マ: たまにむこうから英語,たまにポルトガル語,たまに日本語

*: どんなツールを使うのFaceBook?

マ: 日本の子とはLINE。ブラジルのことはFaceBookかな

*: そうなんだ,そういう情報は誰が教えてくれるの?

マ: なんとなくかな。あとはトモだよ。あの子,日本のことのもすごく詳しいもの

これらの SNS ツールを利用して,マルタはブラジル人だけでなく,日本在住のブラジル人

ガル語でインタビュー (通訳)

の友人や日本人とも交流している。その際、細かい点であるが、ブラジル人とインターネット空間で交流するときは FaceBook を、日本人と交流する場合には LINE を利用するといった、交流ツールの別が存在している。国ごとに流行のツールに違いがあるため、日本人とは日本での流行りを、ブラジルではブラジルでの流行りを利用している。そしてインターネット上で「日本人」のように振る舞うことや、日本人の友人と交流することに、ブラジル人との交流では得られない安心感があるという。

*：安心感があるというのはどういうことですか？

マ：ブラジルで困ることは段々となくなってきたかな。日本に帰りたと思うことはあったけど、ブラジルで大学に行くことになったので。それでも FaceBook で日本の知り合いと交流すると、ブラジルでの悩んでいることが小さいことのように思う。

*：交流はブラジル人学校の友人ですか？

マ：そう。でもそれだけじゃなくて、友達の友達とかで広がっていった。

*：そうなんだ

マ：うん。で、そういう繋がりがあるからいざとなれば日本にも行けるし、どうにかなるかなって。安心するんだよね。

*：それは言葉が通じるからですか？

マ：それはあると思うけど、別にそれならポルトガル語でも。日本との繋がりが楽なんだと思う。

ブラジルの大学や友人ではなく、インターネット上の日本の友達との世界がマルタにとっては居場所なのである。それは日本語を使用できるということだけでなく、行こうと思えば日本で生活することができるという、言わば「保険」のようなものである。

マルタと同じように、インターネット上での日本との関係を「居場所」として捉えているのがトモである。生後すぐに日本へ渡ったトモ⁷⁸は、日本の公立小学校卒業後、ブラジルへと渡った。その後、中学、高校と卒業し、現在はデザイン事務所でアルバイトをしている。日本では両親が忙しく働いていたこともあり、一人で親の帰りを待つことが多かった。

*：じゃあ一人で親御さん帰るの待ってた？

ト：テレビ見たり宿題したり、ゲーム漫画。そのあたり。絵を描いたりね。日本にいたときは携帯がなくて、そういうのはいっさい。ネットも4年生のころだから。動画見るくらいはしたかな。

ブラジル帰国後は「コンビニ」のない生活に戸惑うこととなった。トモからすれば「な

⁷⁸ トモ、女性、19歳、日本の公立小学校を経て、ブラジルの公立中学校へ、日本語でインタビュー

にもない」ブラジルでの生活は辛く苦しいものとなった。また編入したブラジルの公立学校では、ポルトガル語の授業に全くついていくことができず、母親が通訳をしてくれた。その後、同じようにブラジルに帰国してきた仲間とともに、日本語学校「みのり」でポルトガル語を勉強するようになった。

ト：想像するしかないけど。でも私には日本語学校があって、先生や友達もいるし。そういう意味で幸せものだし、ほんとうに良かった。田舎だからかもしれないけどね

日本語学校で仲間をつくることで、徐々にブラジルの生活に慣れていった。トモは日本語だけでなく、漫画を描くこともできた。そのため、多くの子どもたちから「あれを描いて欲しい」「これを描いて欲しい」と慕われ「センパイ」と呼ばれるようになった。トモは「いまは日本の文化をすぐ輸入できるからね」という。もちろんそれは「現物」というのではなく、インターネットで手に入る範囲内のサブカルチャーである。そのため漫画という「現物」を作り出すことができるトモは皆からの憧れなのである。

ト：日本人の真似というよりかは、そのままネットとかからもってくるんだよね

*：オタク文化を？

ト：そうだね。アニメとか漫画はデータでやりとりできるし

*：最近はすごいよね。アニメも速い

ト：日本の放送とそうかわらないしね

*：あれ字幕とかどうしてるのかな・・・

ト：ねえ。私もだけど漫画を描いたり、アニメに字幕つけたり日本のなにかを使って、なにかすることが好きな子は多いよ。

*：それをみんなで共有して

ト：うん。みんなであれみたこれ見たって。沢山知っていると得意げになって紹介して。っていうか、こっちの子だけじゃなくてFacebookとかtwitter使えば日本人と交流もできるわけで

*：へー

ト：日本から来た子は左も右もわからないから。集まれる場所があればいいと思って。

そして、日本語学校「みのり」のヨシエ先生とともに、日本から帰国した子どもたちのグループをつくりはじめた。先ほど取り上げたオタクグループもそのひとつである。本来はポルトガル語の勉強や日本語の勉強のためのグループのつもりが、意図せずオタクグループへと広がっていったという。

こうして、日系人グループのなかでは「センパイ」と慕われているが、ブラジル社会においては劣等感を感じることが多い。日本と違い学校に行くにしてもアルバイトをしなければ

ならないが、仕事の仕方がわからず怒られることもある。学校でもブラジル人の同級生とは会話が合わない。日本の文化ばかりを愛好するトモに対して、「日本語を忘れなければ成績が向上しない」と口酸っぱく話す教師もいたという。勉強も難しく大学受験にも失敗した。そうした状況にあって、ブラジルでの生活が苦しいと感じつつも「仲間」がいることで、うまくやり過ごしている。ポルトガル語の小説や日本の小説はハードルが高いが、アニメや漫画を通じて友人関係を広げていったのも、トモの好みというだけでなく、誰もが関わりやすいメディアだったからである。相対的に高度な言語的なコミュニケーションは難しくとも、「絵」や「音」「映像」といった言語的ではない部分を通じてなら、ブラジル人とも話ができたといいう。

ト：アニメのいいところはね、手軽で楽しくてネットで手に入る。それにブラジル人も好き。いい話のネタになるんだよね。そして日本人も好き。日本人ともこのネタで喋れるでしょ？

トモ自身は日本人との交流にあたっては、「ブラジル在住のブラジル人」であることを隠しているという。当然、交流相手の日本人は「日本語を話す、日本在住の、日本人」と考えている。そのためブラジル人であることを悟られないように、例えば写真をアップロードするときには「猫の写真ならここがブラジルであることがバレない」ようにするなど細心の注意を払う。そして自身の境遇については、仲が良くなった人に明かす。

ト：勉強になると、ポルトガル語と日本語どちらかで勉強するわけだけど、それなら日本語が
いいのね。ポルトガル語だとまずはネガティブな気持ちになってしまうんだよね。

*：うん

ト：それにね、心は日本人だから

*：日本人

ト：twitter とかでも日本人と会話するじゃないですか。で仲良くなって、実は外国人なんですっていうと驚くねだいたい

*：そりゃね

ト：普段は匿名だからね

*：そうだよ

ト：でもまあそれ抜きでも仲良くしてくれる人も多いわけで

以上のように、子どもたちはインターネット空間を活用することで、日本と旧友や知り合いと連絡をとりあうだけでなく、逆に自分の所在を隠しながら、場合によっては日本に住む日本人のように日本人との交流を楽しむ。インターネット空間を巧みに活用することで、自分の居心地の良い場所を作り出しているのである。

ト：日本人にブラジルに住んでるブラジル人だからっていったらどうなると思う？
*：外国人だねっていわれるだろうね
ト：そう。もうそんなの日本で慣れてるから（笑）姿や性別を隠せば「日本語」ってだけで仲良く慣れるでしょう。バイト情報とか大学情報とかも教えてくれたりさ。
*：ずっと隠してるの？
ト：仲の良い人には教えるよ。クリスマスにはプレゼントの交換もするし
*：へー
ト：やっぱりブラジルだから。ブラジルでなんとかしながら、やってくわけ

もちろん子どもたちの生活は日本ではなくブラジルであり、その状況は非常に厳しいものでもある。上述したように、トモは日系ブラジル人同士や、インターネット上の日本人とのコミュニティのなかにおいては、イラストレーターとして尊敬を集める。しかし一歩ブラジル社会に出たときは、言葉の難しさや習慣への馴染みの薄さから劣等感があるという。実際は日本に戻りたくとも戻れない子どもたちにとって、インターネット上の友達はある切実な「つながり」でもあり、ネット空間での交流は「居場所」なのである。

5. 変わりゆく移動の物語

ここまで見てきたように、帰国した子どもたちは日系人同士の自助グループを形成することに加えて、インターネットを通じて日本の情報を得ることや、SNS サイトを通じて日本人と交流することでブラジルでの生活を乗り切ろうとしている。それは日常生活をブラジル社会で過ごしながら、自宅や友人同士で愛好する日本のサブカルチャーを「緩衝材」として活用している。日本人とのインターネットでの交流は「居場所づくり」とも言い得るものである。1人を除けば、本章で扱う子どもたちは日本、なんらかの形で日本と「接続」し続けることで、ブラジルでの生活を乗り切ろうとしている。

日本との繋がりを「緩衝材」や「居場所」としていくなかで、子どもたちの日本との「接続」の物語も維持されている。それでも「乗り切る」と表現したように、徐々にブラジルでの生活に慣れていくことで、子どもたちの移動の物語が変化していく。先ほど見たマルタは日本の帰国を夢見ながら大学に進学しているが、徐々に日本との「接続」の物語から「切断」を語るようになっていく。2008年のインタビューでは「はやく日本に帰りたい」と語っていたが、2012年のインタビューではブラジルに残る可能性を語っている。

マ：（将来は日本に）住みたい。普通に仕事したり、休みの日はどっか行ったり。でもうちは、たぶん15年くらいはこっから出られないんだよね
*：なんで？
マ：大学の払わなくちゃいけないから

*：授業のお金はすごい高いの

マ：結構高いかな。一か月に日本のお金だったら1万くらい、ちがうもった。2万8000円くらい。こっちの1か月の給料くらい

*：大変だね

マ：まだ大学にいただけで50ヘアル3か月に1回払って。卒業したら全部払わなくちゃいけない。大学まで行っちゃってるしね。

「大学に進学すれば残るしかない」というように、高額な学費を支払わなければならない。そして大学を卒業すればブラジルで就職する可能性も見えてくる。前章で議論した「競合条件」に対して有利に臨むことができることから、「ブラジルでもいいかもしれない」と思うようになった。こうした移動の物語の変容についてはトモも語っている。

*：(アサイのグループは)2008年,2009年ごろ(に帰国した)の子が中心になるの？

ト：そうだね。大学に行く子もいるけど、いまでもみんなが集まってさ

*：アサイって田舎なのに、なんでそんなにアニメ好きかわからないやん

ト：ああそれね(笑)田舎だから暇だし、みんなでこう紹介しあって、それを楽しんでるのがいいんだよね。そういうものだと思うなあ

*：うん。面白いよねえ

ト：携帯があればいまはなんでもね

*：へー・・・

ト：そうだね

*：でもみんな帰国した頃は悩んでたよね。2009年に話を聞いたときはそういうことばかり

ト：うん。鬱ぎ込んでいた時期はあったよ。みんなね。2010年頃はそうだったけど、なんだかんだでみんな誰かにつながって、それで乗り越えてきたと思う。ブラジルが嫌だと話していても、まあなんとかここまではきたね(中略 将来どうするかは)大学とかが大きいと思うよ。まずはね。あとは仕事とか。でも人それぞれで。アサイならではの部分もあって。例えばアサイなら友達を作れるじゃないですか。でも大きな街だと難しいというか意味が無いというか。

*：みんなで仲良くできることのほうがいいか

ト：だから日本に帰るだけじゃない選択があるという子も増えてきたね

2009年にはじめてインタビューしたトモは、ブラジルの学校に馴染めずふさぎ込んでいた。その後の経過は先述したとおりで、時間が経過するに連れ日系人グループをつくりブラジルでの生活に馴染んでいった。ただし、マルタが大学に進学する一方で、トモは大学に進学することが出来なかった。そのため「競合条件」を考えたとき、非大卒のトモにとってブラ

ジルで望みにかなう仕事を得ることは難しい。そこで、大学に進学するためには日本に渡ることが近道となる。トモがそれでもブラジルで生活しているのは、トモの両親がブラジルでの永住を決めているからである。2010年にインタビューしたトモの母親であるカオリさんは、娘の考えが「甘い」という。

カ：娘は日本に行けばどうにかなるといいます。先生（筆者）、本当なんですか。私たちは日本で苦勞しました。そして一緒に生活することを望んでいます。トモちゃんが日本が好きなのは理解できますが、甘いのではないかと思います。

トモの両親はデカセギを終え、ブラジル帰国後は日本移民である祖父母の農地を引き継いだ。慣れない農園運営に苦勞しながらも、家族で過ごせる時間を大切にしているという。トモも日本で両親が忙しく働いていたことを知っているので、一緒に日本に行けるとは考えていない。

ト：日本に一人で行けるとは思ってないですよ。でも気がついたら留学生のサイトとか見るんですよ。私は帰国子女とかにはならないですよ。それって損だな

しかし 2013年のインタビューでは、母親のカオリ⁷⁹さんもトモも日本に行く予定であるという。日本の大学進学にめどが立ったわけではないが、ブラジルでアルバイトをしながら日本の参考書を取り寄せ勉強しているトモに、両親が日本への渡航を許した。

カ：根負けしました。それに日本の景気も良くなっているのも、もしトモちゃんが困ることがあれば私も日本に行くことが出来ます。いまは日本で住んでいる親戚にお願いする予定です。

ブラジルに帰国し家族での永住が「家族の物語」であった。しかしトモが日本との繋がりを維持し続け、家族が根負けするほど日本への渡航を訴えたとき、一家での永住という「家族の物語」を変容させていった（図 7-1）。そしてトモは日本への渡航に向けての準備を進めている。日本で生活する友人らに日本渡航を告げ、インターネットでアルバイトサイトを検索して日本での仕事を探している。まずは日本での生活を安定させ大学進学を目指すという。

⁷⁹ カオリ、女性、NA、ブラジルの高校卒、日本語でインタビュー

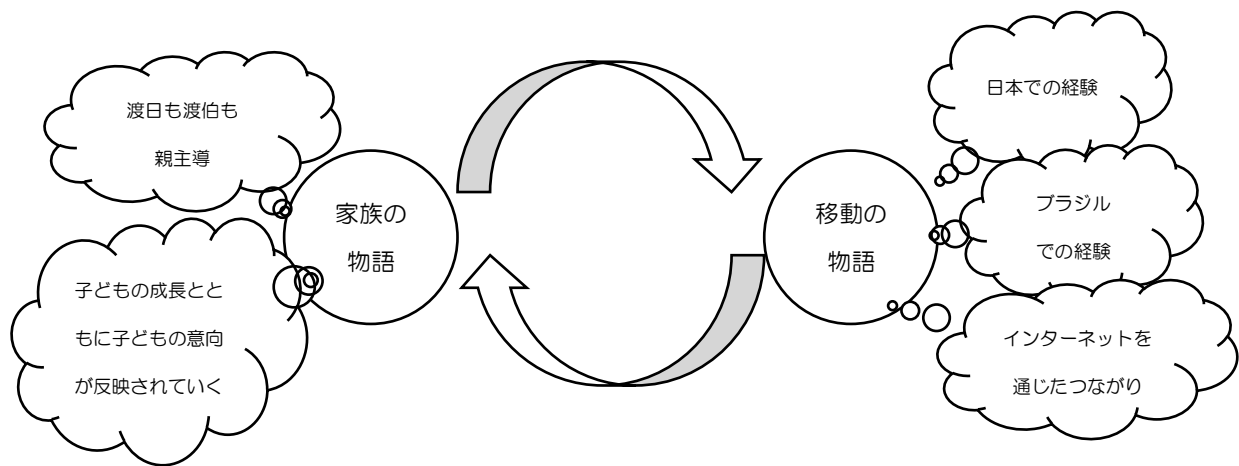


図 7-1 家族の物語と移動の物語の相互関係

以上のように、日本との「接続」を語りがちなマルタとトモであるが、大学進学を契機に、マルタは日本との「切断」を語るようになった。他方で、トモは日本との「接続」を語るだけでなく、実際に日本渡航へと結びつけようとしている。いずれも日本と「接続」することから、ブラジルでの生活の困難を乗り越え、新しい進路を選択しようとしている。それとともに、新しい移動の物語を語ろうとしているのである。

そしてこの移動の物語は、家族の物語をも変革していく。当初、親主導で形作られた「ブラジルに帰国し永住する」といった家族の物語が、日本の景気安定や、子どもの意向に影響されゆさぶられ変容する。その背景には「デカセギによって子どもを振り回した」という親にとっての負い目もある。

ただし、その物語の変容は例えば「子どもと一緒に家族で再移住」であるとか「子どもだけが日本に留学する」だけでなく「永住を決めた子どもとブラジルで生きていく」など様々なパターンが考えられる。こうした変動は、ブラジルでの生活が不安定な家族ほど生じることになる。日本にいけばいよりも安定した生活があるかもしれないという期待は、子どもたちだけでなく親にもあるからである。

6. おわりに

アサイは日本移民由来のごく小さな地方都市であるが「オタク」の語源そのままに、子どもたちは相互に日本のサブカルチャーを紹介する姿を描いてきた。その特質のひとつとして本章で強調したのが、日本の若者文化を「そのまま」ブラジルで享受していることである。

子どもたちは「日本での流行りもの」を媒介として、帰国した子どもたちの同好集団を形成する。さらに、ブラジル人を含めた「集まり」を作ることで、ブラジル社会に居心地の良い「場」をつくりあげている。こうした「リアル」な場所だけでなくネットワーク上でも子

どもたちは繋がり合っている。図 7-1 は子どもたちの社会関係を図示したものである。

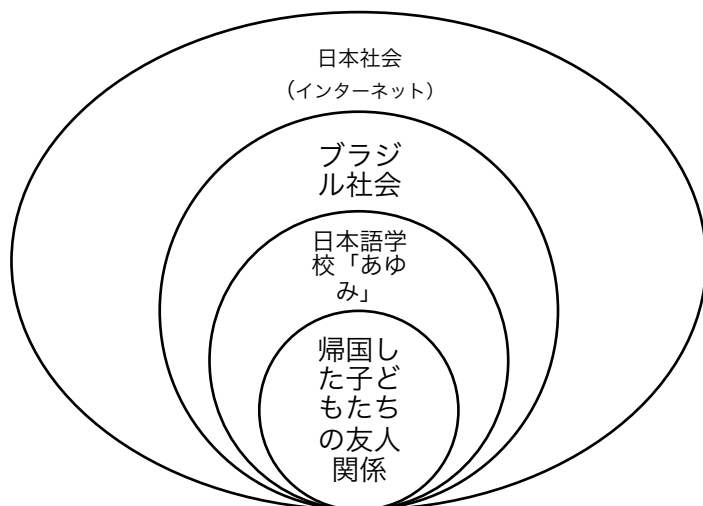


図 7-2 帰国した子どもたちの語りから見えるトランスナショナルな社会空間

帰国した子どもたちは子どもたち同士での友人関係を大事にしている。それは同じような境遇を生きぬく戦友のようなものである。アサイにおいて子どもたちを結びつけたのは、日本移民の遺産「日本語学校」である。子どもたちはここで日本語ではなくポルトガル語を学んでいる。大局的にみれば「日本語話者」が激増したことで、日本語学校にとっても利点がある。そして子どもたちを包むのがブラジル社会である。ブラジル社会が子どもたちの「主戦場」となるわけだが、そこに一人で立ち向かうのではなく、「仲間とともに」子どもたちは立ち向かっている。そのために日本のサブカルチャーが、友人関係を構築するため切っ掛けになることや、一時の「癒やし」としての効果をもつ。最後に日本社会である。ここでいう日本社会とはインターネットで関われる範囲内を意味する。子どもたちが日本社会に繋がり続けるのも「日本に行きたい・帰りたい」というものから、「趣味」まで様々である。共通しているのは、特にサブカルチャーを通じて日本人ともブラジル人とも交流していることである。それは子どもたちにとってはブラジル社会から逃避するための「居場所」でもある。

「居場所」であることにくわえて、日本との繋がり子どもたちの「武器」でもある。一部の子供たちは、日本語を自由に操り最新の日本の文化にも熟知している。仮に日本に帰国すれば、こうした日本に関する知識は「円滑な社会復帰」の足がかりにもなり得る。また、サツキやチアキなど、ブラジルでの生活の苦しさや難しさを軽減するための拠り所として「日本での流行りもの」を位置づけている。このように、子どもたちにとって日本の繋がりとは、未知の場所での生活をうまくやりくりする生存戦術のための資源なのである。

それでは、子どもたちは額賀（2013）が指摘するような「グローバル型能力」を身につけ

ていると言いえるのであろうか。ここまで記述してきたように、子どもたちはブラジル社会に身をおき、日系ブラジル人として生活している。インターネット上の世界では自らの出自を曖昧にし、日本人を自称することもある。自らのエスニシティを扱い分けるという意味での「社交力」や、ブラジルの学校ではブラジル人と表面上は付き合うことができるという意味での「順応力」を身につけているといえる。日系人同士の自助グループや日本からやってきた筆者の前で「ブラジル人との違い」を語る時、子どもたちはブラジル人と帰国した日系ブラジル人というエスニック境界を自らの都合によって操作しようとする。

ただし、エスニック境界を操作するといっても、ブラジルの学校においては可能な限り目立たないように生活し、インターネットでは日本人として振る舞うといったものであり、ブラジル社会において自らを際立たせるためではない。エスニック境界を操作するのも、自分にとって居心地の良い空間を作り出すための戦術としてである。これは順応の側面においても際立つ。子どもたちの多くはブラジルでの滞在年数が長くなるにつれ、ポルトガル語能力を高め、大学進学を目指そうとしている。そしてマルタのように大学に進学できれば、日本に移動するのではなくブラジルで生活することを目指そうとする。言語や振る舞い、態度を都合によって切り替えながらも、結果的には「ローカルな能力」に特化しようというものである。これはトモの場合も同様である。彼女は苦勞しながらもブラジルの学校に通うことやアルバイトを通じてブラジル社会に一定程度溶け込んでいく。他方で、日本人と交流するときにはブラジル人である素振りを見せないようにする。順応力も社交力も有しているように見えるが、彼女が求めているのは日本で大学するための「ローカルな能力」である。

額賀は日本に帰国したグローバル化能力を有する子どもたちが、その能力を発揮することで、日本の学校文化を変革していく姿を描き出している。しかし、本研究で扱った子どもたちの語りや子どもたちが通う学校での様子を見聞きする限りにおいて、子どもたちはブラジルの学校文化を変革するというよりかは、そこに埋没しようとしている。ブラジルにおける日本語や日本のサブカルチャーは、「話のネタ」という程度のコミュニケーションの材料になることはあっても象徴的価値を有するものではない。教師や周囲の友人から求められるのは「ローカル型能力」である。日本語教室の「あゆみ」やインターネット上で発揮される「グローバル型能力」は、「ローカルな適応」を求める社会空間においては「自らをうまくコントロールし、目立たないようにする。目立つのは別の場所」というような生存戦略として際立つ。それは額賀が指摘するように「グローバル型能力」を育て評価するような状況が、ブラジルにおいては芽吹いていないからなのかもしれない。

もともと、ローカルに適応するというのも、ブラジルでいきるか日本で生きるかを考えなければならぬ子どもたちの境遇にも影響されている。子どもたちはバイカルチュラルであるが、日本におけるポルトガル語やブラジル人としての振る舞いが評価されにくいように、ブラジルにおいても日本語や日本的な振る舞いが評価されないからである。

本章で扱った事例の年齢は10代後半から20代前半であり、全員がブラジルでの居住歴が10年未満である。居住歴が長くなれば、今後はゆるやかにブラジル文化へと統合されていく

のかもしれない。日本文化を日本と「リアルタイム」に受容し、消費することができたとしても「ブラジルで生きていく」しかないという現実についても語られている。「ブラジルで生きていくためには大学に行かなくてはならない」等々、前章でとりあげたように、子どもたちは自身の将来の展望や進路の状況を念頭に「移動の物語」を構築する。そして、自らの状況を位置づけるなかで「日本文化」と「ブラジル文化」を選択的に志向、愛好している。したがって、本章での事例は「一時的な語り」である可能性は充分ある。トモやマルタは 20 代前半にかけて自らの進路を決めていった。ブラジルに残ることを選択することもあれば、日本への渡航を選ぶこともある。以上のように、移動の物語は生活上の諸条件の変化に影響されながら変容していく。そしてそれは、移動の物語が「渡航した地で骨を埋める」というようなものでもなければ、家族の従属変数として渡航先で適応するしかないといった旧来の移民像とは違った物語として語られているのである。

終章

本研究は、人々の国際移動と教育に関する諸課題を、日本からブラジルへと帰国した日系ブラジル人の生活史をもとに検討してきた。まずは本研究で取り扱った内容について振り返っておきたい。

1章では、本研究の課題を明らかにするために、欧米を中心とするグローバリゼーション論やトランスナショナリズム研究を概観した。ICT技術の発展や安価な航空券の出現、国家観の結びつきの強まりを背景に、国家の枠組みを超えた人々の繋がりが拡大した。移民らの繋がりは「送出国」と「受入国」といった分かりやすい二分法では語れない、「トランスナショナルな社会空間」を形成していくことになる。本研究でも子どもたちが度々言及することになる Facebook や Skype、インターネットサイトなどは、サイバー空間に生じた、トランスナショナルな社会空間である。ブラジルに帰国した家族は現代的な特質を有する社会空間をうまく活用しながら、日本の情報を入手し友人関係を維持しようとしている。

他方、我が国における在日外国人と教育は戦後の在日コリアンに関する研究によって先鞭がつけられ、1990年の入管法改正を前後してニューカマー外国人に関する研究が隆盛していくが、教育社会学研究はあくまでも「日本で生活する外国人」を対象としたものであった⁸⁰。「定住化」する外国人に対する教育研究の意義は揺るぎないにしても、人々の国際移動についてはあまり注目されてこなかった。我が国においても、諸外国との関係強化を通じた国際企業の誘致や外国人留学生、研修生、国際難民の受け入れが議論されているところだが、外国にルーツをもつ親と子どもの増加が予測される以上、当然ながら在日外国人と教育研究の役目は大きなものとなっていく。そこで本研究のような「移動と教育」という視点は、外国人を対象とする教育を考える上でも重要となろう。

本研究が対象とする日系ブラジル人は、日本の移民史のなかでもユニークな特徴を有する。2章では、日系ブラジル人がどのような理由で日本へと渡り、そしてブラジルへと戻ることになったのかを、歴史をたどることから検討した。具体的には、日系ブラジル人の前史である「ブラジル日本移民」、ニューカマー外国人として日本にやってきた「日系ブラジル人」。そして、日本からブラジルへ戻ることになった人々を扱った。本章で明らかにしたかったのは、この100年間の日本とブラジルの移動の歴史において、人々が翻弄され続けてきたということである。

日本からブラジルへの移民は、日本国内の経済不況打開のためであり、ブラジルでの労働力不足解消のために行われた。その後、日本のバブル期の労働力不足解消と、ブラジルの経済不況から日系ブラジル人が日本へと渡った。そして世界的な経済危機による派遣切りによって多くの日系ブラジル人が帰国することになった。こうした移動は、「国際移動」を一定程度保障する「移民割当」や「定住ビザ」といった法制度や時の政治によって保証された

⁸⁰ 唯一の例外は、在日朝鮮人の祖国帰国に関する教育実践、研究であろう。しかしこうした研究の系譜はニューカマー外国人の研究に引き継がれたわけではない。

ものであった。しかし、日本移民や日系ブラジル人は「流動性の高さ」ゆえに翻弄され、搾取されてきた。

日系ブラジル人の「流動性」は、日系ブラジル人自身も理解していることである。すなわち「デカセギ」として日本へ渡った以上、いつかはブラジルへと帰国する。その際、子どもたちの教育をどのように行うかが課題となる。そこで3章では、日本からブラジルへの移動を支える「ブラジル人学校」に注目した。浜松にあるブラジル人学校での調査データをもとに、いかなる教育をブラジル人学校が行っているのかを明らかにした。

4章では帰国した日系ブラジル人の家族の教育戦略を検討した。本章では日系ブラジル人の親による「帰国を念頭とする教育」を明らかにした。それは日系ブラジル人が「教育熱心」であるというだけでなく、デカセギ労働者として日本で生活しており「子どもたちを同じようなデカセギにしたくない」という願いに支えられていた。もちろん、ブラジルに帰国した親へのインタビューであるから、親は自身の行動を正当化し、自分にとって答えやすいことを語ったと捉えることができるかもしれない。また親へのインタビューはスノーボール型にインタビュー対象を募ったこともあり、偏りがあったことも否めない。それでも先行研究が指摘するような「親の身勝手なデカセギと、被害者としての子ども」といった構図とは違った結果が導かれた。

5章では、帰国した子どもたちをブラジルでの暮らし向きに対する質問の答から4つのグループに分類し、代表的な生活史データを記載した。親のデカセギに伴って日本へ渡り、ブラジルへと帰国した子どもたちが、ブラジルでの生活を比較的ポジティブに捉えているということが明らかになった。それは一般的に語られがちな「移動することによって苦勞する子どもたち」というだけでなく、親から与えられた資源を援用しながら、例えば大学進学を目指すといった積極的なものである。もちろん、ブラジルでの生活における苦難を語る子どもたちもいる。その多くが日本への再渡日を語っている。旧来は移住先国で苦勞しながら生きていくほかなかった移民らではあるが、移動によって状況を打開しようとする姿が見受けられる。ところが、ポルトガル語を自在に扱い、学校での生活にも満足しているにもかかわらず日本を目指す子どもたちも見られた。子どもたちは言語能力や生活状況といった客観的な状況だけでなく、主観的な「ブラジルへの移動」への意味付けから現在の状況を語っている。そこで、子どもたちの語りを整理すると「個人の移動経緯」「ブラジルでの生活状況・就学状況」「言語能力・文化資本」「家族の物語」を要素とした「移動の物語」が浮かび上がってきた。子どもたちの移動後の生活の安定を左右するのは、「言語能力」「生活の安定」といった諸条件をポーカーゲームのように揃えるだけではない。局面ごとの勝ち負けではなく、前後の流れや局面を自身がどのように評価するかといった生活の全体性に対する評価も重要なのである。こうした「移動の物語」は、国際移動が子どもたちの生活や教育に与えるインパクトの大きさゆえにその重要性がある。

そこで6章では、子どもたちの「移動の物語」を分析することから帰国後の進路選択とその要因について検討した。ここでいう「進路選択」とはブラジルでの学校進学だけでなく、

日本への再移動と就職といった幅広い意味での子どもたちの選択を意味する。日本との「切断」を語る子どもたちはすでにブラジルで「大学進学」するなど、人生の方針がおおよそ決まっている子どもたちが多かった。日本との「接続」を語る子どもたちは、例えばブラジルでの大学進学が決まっていたとしても、日本との繋がりを強調し、場合によっては日本へ再渡航することになった。

日本との繋がりを「切断」しブラジル社会で生きていこうとする子どもたちの多くは、帰国後の生活に満足していると語る。逆に日本との「接続」を語る子どもたちは、ブラジルでの生き辛さを語りがちである。こうした側面だけを見れば、日本から帰国した子どもたちがブラジルで「不適應」を起こしていると考えられるかもしれない。しかし「生存戦術」という観点から子どもたちの語りを捉え直したとき、日本との「接続」を語る子どもたちのたくましさも浮かび上がってくる。すなわち、大学に進学するにしても就職するにしても、日本での生活したほうが競合する条件は少ないと子どもたちが考えているからである。そして実際に日本へ渡り自身にとって満足できる生活をおくっている。

「移動の物語」と「将来展望」は相互に影響を与え合いながら、時に「接続」を語り、時に「切断」が語られる。おそらくブラジルの在住期間が長引くことで物語は「切断」へと水路付けられていくと思われるが、トランスナショナルな社会空間を通じて流入する日本の情報の影響から、将来も「接続」を語り続ける青年らが出てくるのかもしれない。

7章では、パラナ州アサイ町という小さな田舎町に帰国した子どもたちを事例に、日本と繋がり続ける子どもたちの「トランスナショナルな生存戦略」を探った。Kpopや漫画、FaceBookといった日本の若者文化を、子どもたちがブラジルで日本と「同時的」に消費することで、ブラジルでの生活を乗り切ろうとしている。子どもたちの語りを通じて見えてくるのは、日本のサブカルチャーを「緩衝材」としながらブラジルでのカルチャーショックに向きあおうとする姿や、日本人とのインターネット上の交流を「居場所」として捉えていることである。共通しているのは、サブカルチャーを通じて日本人ともブラジル人とも交流していることである。

そしてそれは、子どもたちの「武器」でもある。日本語を自由に操り最新の日本の文化にも熟知している。それは仮に日本に帰国すれば、日本での「円滑な社会復帰」にもなり得るだろうし、ブラジルにおいては「日本文化を愛好するブラジル人」との交流の材料となる。これらは額賀（2013）が指摘するような「グローバル型能力」の「順応力」や「社交力」のようにも見えるが、子どもたちはブラジルの学校現場を生き抜くなかで、「ローカルな能力」や「ローカルな適應」をめざす点に特質があった。

移動する人々の教育戦略

1990年を前後して、ブラジルからやってきた日系ブラジル人は、「ニューカマー外国人」として受け入れられた。日系ブラジル人は「顔の见えない」存在であると言われることがあった（梶田・丹野・樋口 2005）。ブローカーに斡旋されて日本にやってきた日系人は住

む場所や仕事が与えられたために、日本の地域社会との交流も気迫で「顔が見えない」というのである。また、それは日系ブラジル人が自らを「デカセギ」として日本で生活していると自己規定しているがゆえに、日本社会と関わる必要を感じていなかったことにもよる。これまでは、日系ブラジル人の親が子どもたちの教育にあまり熱心でなく、いつか帰るという「暫定的な態度」が課題視されることもあった（宮島 2003）。日系ブラジル人の暫定的な態度は、ニューカマー外国人研究がはじまった当初より指摘されており（駒井 1995, 駒井 1998）、移民定住化に向けた研究課題であった。

しかし、日本のニューカマー研究が「外国人の受け入れ」と「外国人の定住化」を前提とするあまり、人の国際移動を研究視点に入れることが遅れてしまったともいえる。小井戸（2005）はグローバル化とトランスナショナルな社会空間の誕生が、単純な送出国と受入国という関係を変えつつあると指摘したが、まさに日系ブラジル人はその好例である。日系ブラジル人の就労状況の厳しさについては、度々言及されてきたのであり、そうした事情を日系ブラジル人たちはブラジルにいたころから「知っている」。だとすれば、日本での生活の厳しさを念頭に移動する人々もいるはずである。

本研究は、ニューカマー外国人の教育研究の金字塔的存在である志水・清水（2001）の研究を「移動する人々と教育」という観点から扱い直したものである。志水らはニューカマー外国人流入の初期から研究を進めてきた。そして、ニューカマー外国人は移住理由や生活状況から、様々な「家族の物語」を有するとした。日系ブラジル人の場合は、デカセギゆえの「一時性」に特徴がある。日本においては「一時性」ゆえに明確な戦略を打ち出しにくいとされた家族であるが、実際にブラジルに帰国した親にインタビューをおこなうと全く違った様相をみせることとなった。その結果、親が高い「計画性」や「戦略性」を有していることを明らかにした。計画性があるからこそ帰国しているのであり、帰国した人々を対象としなければ計画性が語られることはないからである。

本研究の第一の知見は、ニューカマー外国人を対象とした研究を行う際に、かれらが「トランスナショナルな社会空間」を生活している人々であるということを念頭に分析しなければならないことを示唆したことである。そうでなければブラジル人学校に子どもを通わせることが「セグリゲーション」を助長するように見えるし、ポルトガル語を教えることが「暫定的態度」に見えてしまうからである。

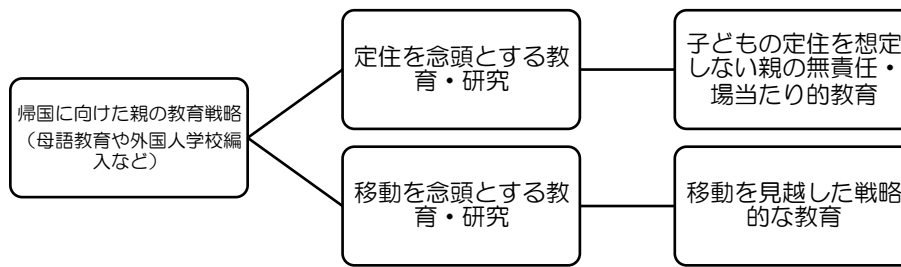


図 8-1 研究視点による教育戦略の見え方の違い

志水ら（2001）は「家族の物語」と「親の教育戦略」が子どもの学業達成を規定するとした。日系ブラジル人は、いつか帰国するかもしれない一時性ゆえに、親は日本での教育達成を望まないの、子どもたちも熱心に勉強しないといたストーリーを有する。こうしたストーリーの言わば逆バージョンを本研究では浮かび上がらせた。4章で扱ったように、高い「計画性」をもつ日系ブラジル人の場合は、当初からブラジル帰国を念頭に子どもたちに教育を施し、ブラジル帰国後の大学進学を子どもに期待している。そして6章で検討したように、子どもたちもその期待に応じてブラジルで大学に進学する、といった典型的なストーリーラインを有する。

こうした議論は改めて考えると常識的な結果と言えるかもしれない。なぜなら海外で子どもを育てるという行為は、親にとっては負担の大きい事柄であろう。そのため、なんらかの将来展望や予測、保険のようなものを講じることになる。もちろん、経済的な困窮からのデカセギと昼夜を問わない就労が家族関係に与えた影響は大きかったに違いない。さらに言えば、日本社会から排斥されればされるほど、行政や学校でのサポートが受けられないのだから、家族は子どもたちの教育に明確な戦略が必要となる。

こうした議論は、志水ら（2001）の研究と矛盾したものではない。すなわち、日本の日系ブラジル人にとっても、行政や学校のサポートが受けられない以上、親は独自の教育戦略を講じるしかない。ただし、ブラジルで生まれ育った親にとって、日本とブラジルを比べたとき、ブラジルのほうがより具体的な教育を思い浮かべられるという点でその差があるかもしれない。親も親族関係や友人、インターネットやブラジルの雑誌などからブラジルの情報を得ることができるが、日本においてこれらの教育情報を得ることは困難だからである。教育戦略の「具体性」という観点においては、帰国した日系ブラジル人のほうがより明確な教育戦略を行うことになる。

したがって、本研究の第2の知見は、日系ブラジル人の親は日本においてなんらかの教育戦略を講じてきたが、日本においてその戦略の効果が見えにくく、ブラジルにおいて戦略の効果が見えやすいというものである。教育戦略の「具体性」は、親の教育観や学歴だけでなく、移民としての境遇や受入状況によっても左右される。そしてその戦略の是非が「親の取り組み不足」「親の場当たりの教育」として個人化されがちであるという点である。

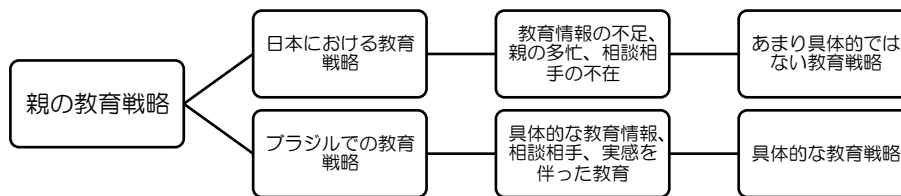


図 8-2 教育戦略の具体性

教育戦略の帰結

5 章や 6 章でみたように、親の教育戦略が一定程度ブラジルにおいて効果を発揮することで、一部の子どもたちは大学進学を勝ち取っている。ところが、ポルトガル語能力が高くブラジルの大学に進学したとしても日本に帰りたいたと語る子どもたちもいれば、親が様々な教育投資を行ったにも関わらずブラジルでの生活に意味を見出せない子どもたちも一定数存在する。

移動経験が人々の生活全般を変動させるも存在論的なものであるとすれば (Hage 2005), 子どもたちにとっても移動のインパクトは非常に大きい。したがって親の教育戦略が子どもの教育達成に直接繋がるというだけでなく、その関係性を明らかにしなければならない。「家族の物語」を内面化する子どもたちは、自らの経験を再考することで個人の物語を構築していく。本研究では、「家族の物語」「親の教育戦略」その後の生活状況に影響されながら子どもたちが、自らの国際移動を意味づけ物語化する過程を分析した。そして子どもたち個人の語りを「移動の物語」とした。

ポルテスとランバート (2014) の研究では、2 世の社会適応には子どもたちが位置づく社会的な編入様式が重要であると指摘している。こうした客観的状況だけが子どもたちの教育達成を規定するわけではない。将来を展望するにしても進路を選択するにしても、子どもたちは「日本」と「ブラジル」かの選択肢が存在している。どちらの選択肢を選ぶにしても、その選択には個人が納得できる形で移動を捉えることが必要になる。子どもたちの生活世界の水準では、個々の能力や明確な将来展望だけでなく、「移動の物語」もまた子どもたちの進路形成に影響を与えているからである。

どれだけ親が教育を与えたとしても、それを意味あるものとして捉えられない子どもたちもいる。5 章でみたように、親が帰国に向けて多額の費用をかけてブラジル人学校に通わせたことで、ブラジル帰国後の生活がうまくいったとしても、日本に帰国したいと語る子どもたちもいる。ブラジルでの生活をポジティブに捉える「移動の物語」であれば、子どもたちはブラジルでの永住をめざす。逆にブラジルでの生活をネガティブに捉える「移動の物語」

であれば、子どもたちは日本を目指すかもしれない。実際、子どもたちはブラジル帰国後、ブラジルに永住するだけでなく、ふたたび再渡日する場合もある。ブラジルで大きな失敗をすれば、「移動の物語」は揺らぎ、日本を目指す語りになるかもしれない。この揺らぎは自ら国際移動を自ら選んだわけではなく、親に連れられて移動した子どもたちだからこそ、その移動を自身の状況から正当化して語る必要があったために生じている。

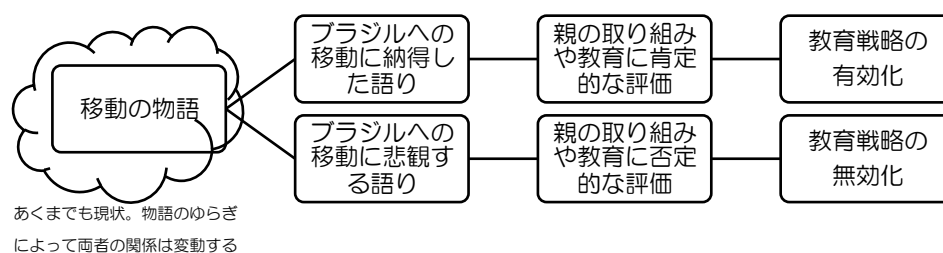


図 8-3 移動の物語と教育戦略の関係

いずれにしても、本研究の結果からは、ニューカマー研究が近年取り組もうとしている 2 世代目研究において、「家族の物語」と「個人の物語」が一致するわけではないことを示唆する。むしろ家族の物語と個人の物語がダイナミックに交差することで、多様な人生を設計していく点に移民研究の醍醐味があるように思われる。

トランスナショナルな生存戦術

また個人に焦点化した「移動の物語」を分析していくことで、ブラジルから日本に「接続」し続ける子どもたちの存在が浮かび上がってきた。これはインターネットなどを通じて子どもたちが日本と繋がり続けることで語られるものである。旧来の移民研究などにおいても、移民らは母国の文化を移住先国で維持・継承しようと努力をしてきた。日本移民では日本語だけでなく、文化活動や生活規範に至るまで日本人として生きようとしてきた人々がいる（前山 1982）。こうした人々の多大な努力を一部で軽々と乗り越えようとしているのが、現代の移民らの特徴である。少なくともインターネットを通じてやり取りできるサブカルチャーを中心に、子どもたちはブラジルでそれを受容し消費し続けることができる。

トランスナショナリズム研究は「二つの生活を生きることが出来る人々が、時にバイリンガルとして、異なる文化のあいだを容易に移動し、二つの国を故郷とし、二つの国の両方において経済的、政治的、文化的な関心を追求する人々が増加」している現状を捉え、「どちらかの国」だけでなく「どちらの国でも」あるいは「どちらでもない場所」で生きる人々が増加しているといった現状認識から進められてきた（Portes 1997）。そして、国境を超え 2 つ以上の文化圏を生きることは「二重の認識枠組み（Guarnizo1997）」を有するようになる。子どもたちは日本とブラジルを念頭としながら自らの生活を選びとっていくのである。

トランスナショナルな社会空間によって、子どもたちは日本と関係し続けることができる。そのことは、ブラジルでの生活に不適應を生じさせることがあるかもしれない。本研究でも一部、不適應の連鎖から日本へ再移動する子どもたちを紹介した。他方で、日本との繋がりを巧みに利用することで、ブラジルでの苦勞や困難を乗り越えようとする子どもたちの姿も描いた。現代移民の苦境についてプライズは「人生設計は固定的ではなく長期的でもなく、連続的で『機会を利用する』ごとに焦点づけられている（プライズ,2008,p.77）」と指摘している。トランスナショナルな社会空間を生きる子どもたちは、本研究で扱ったように時に仮想空間をも巧みに活用することで、ブラジルでの生活の辛さや困難を乗り越えている。こうしたトランスナショナルな生存戦略は、日本で生活する移民らにも援用できるような議論であろう。

本研究では「移動がネガティブな結果を生じさせる」といった単純なイメージを払拭するような事例を取り扱うことが多かった。子どもたちは、直接的には「ブラジル人学校」「親の教育投資」「学校選択」といった資源や、インターネットを通じて社会関係を維持・構築することでブラジルでの苦境を乗り越えようとしている。また、日本との「接続」を語る子どもたちのしたたかな生存戦術も本研究からは浮かび上がってきた。

それはブラジルや日本で高い教育達成や相対的に良い就職を得るためには、様々な能力や努力、そして大学入試をはじめとする他者との競争と選抜をくぐり抜けなければならない。繰り返しになるが、ブラジルで大学に進学しエリートコースに乗った子どもたちもいる一方で、日本になれば「選ばなければ大学に進学できる」「選ばなければ仕事がある」という語りもみられた。競合する他者との競争を避け「妥当な大学に進学」し「妥当な仕事をみつける」という将来展望も、ブラジルで生活をせざるを得ない子どもたちが行使する生存戦術の一つなのである。

ただし、子どもたちの生存戦術を全て肯定できるかといえ、いくつかの議論の余地がある。例えば、日本とブラジルを移動するといっても、グローバルエリートが世界をまたにかけて仕事をする姿に比べ、「どちらか」に限定されている。グローバリゼーションの進展は全ての人々に均一に資源を配分するというよりも、全世界的な富の偏りのほうが課題であるとされる（サッセン 1992）。国際的に移動したとしても限られた資源や就労機会しか与えられない人々が数多く存在する。こうして、移民はどの社会においても社会的には排除された状況に追いやられがちである。グローバリゼーションは世界的レベルでの地位構造の再編という側面も有しており、往々にしてそれは資本力によって階層化される。6章で検討したように、子どもたちが日本へ渡ろうとするのも「ブラジルよりましな生活」があるからである。そのましな生活が世界的な資本再編に組み込まれることで、日系ブラジル人のデカセギのように社会的な権利が保障されない状況に陥ることも想像される。

次に、子どもたちが身につけた能力とはどのようなものなのだろうか。江淵（1998）は「トランスナショナルコミュニティの形成は、異文化の“移植過程”であると同時にまた、しばしば現地文化との交流・相互作用による新しい文化の生成過程でもある。こうした文化

的過程ないし状況」を「トランスカルチュラルリズム (transculturalism)」と定義した (江淵 1998 p.24)。額賀 (2013) はトランスナショナルな社会空間を生きるための能力を「グローバル化能力」と定義し「順応力 (=フレキシビリティ)」と「社交力 (ソーシャビリティ)」によって形成されるとした。こうしたグローバル型能力を有する子どもたちが日本の教育現場を変容する姿を描いている。

日本とブラジル両方を視野に入れるという意味において、本研究で扱った日系ブラジル人の子どもたちは、トランスナショナルな社会空間を生きているといえる。また、日本とブラジルの文化や社会状況を認識し、そこで生きていくための「順応力」や「社交力」を有している。しかし、同じトランスナショナルな社会空間を生きる移民と言っても、高い英語力を有し、様々な国で標準化されるような振る舞いを身につけたグローバルな人材との違いも鮮明である。「世界的レベルでの地位構造の再編」において劣位に位置づけられる世界では、グローバルに標準化された振る舞いや、場合によっては英語能力さえ評価されない場合がある。これは、日本におけるポルトガル語やブラジルにおける日本語の象徴的価値が低いということとも関連している。したがって「グローバル型能力」や「二重の認識枠組み」を身につけたとしても、それが「ローカルな能力」を求める生活世界においては評価されないということになる。子どもたちが「妥当な大学進学」や「妥当な就職」を求めるようになるのも、グローバル化した世界において再編される地位構造の劣位に置かれる人々の生存戦略なのである。

過去のブラジル日本移民はブラジルにおける奴隷の代替労働力であった。その後、ブラジルで高い地位・学歴を得た人々はブラジルのエリート層に食い込んでいくが、一部の日本人・日系ブラジル人は生活の厳しさから、日本へと「デカセギ」することになった。そして、日系ブラジル人は日本において労働市場の劣位に位置づけられてきた経緯がある。親が「子どもに自分たちと同じようなデカセギになってほしくない」と願う一方で、一部の子どもたちは「仕事がなければ日本にバイトで行けばいい」「ブラジルで大学に行けなければデカセギすればいい」と語っている。親は限られた資源を動員して「戦略」を企図し、子どもたちは厳しい状況を生きぬく「戦術」を編み出しているが、それは「高い戦略性」や「巧みな戦術」を行使しなければ生きにくい現状が存在しているからに他ならない。

そもそも「戦術」を行使するのも、子どもたちが大きな障壁によって能力の発揮を阻まれ「限られた選択肢」から将来を選ぶしかない状況にあるからである。その障壁のひとつが「国家」である。「ブラジルで大学進学」する子どもたちは「日本とブラジル」という選択肢を考えただけで「ブラジル」を選んだというよりも、ブラジルで生きるしかないため「ブラジルで大学進学」するからである。また、経済危機で帰国した3世の子どもたちにはビザが発行しにくいといった事情もある。子どもたちは「どちらも選べるが、ブラジルを選んだ」というのではなく「どちらかしか選べない」状況にある。

こうして、子どもたちの「グローバル型能力」が「ローカル化」しがちなのも、子どもたちにとっては自身の利益を最大化する戦術なのである。日本で身につけた能力がブラジルに

において高く評価されるような状況にあれば事情はまた違ったものとなっていたらう。それは日本においてブラジルで身につけた能力が高く評価されることになれば、といった議論とも通じる。仮にそのような社会であれば、子どもたちは両国での経験が無駄にすることなく移動することができる。もちろんそうした社会は夢物語なのかもしれないが、少なくとも英語偏重の教育だけではない教育を行うことができれば、子どもたちの「ローカル化」する戦術も違ったものとなっていたはずである（図 8-5）。こうした議論は親の教育戦略に関する議論ともかさなる。親が移動を念頭に行使する教育戦略について、日本の学校は対応できていない。ポルトガル語教育、ブラジルのカリキュラム、進級制度や学校状況についても日本の学校現場は無関心のままである。5章や6章でみたように子どもたちの生活上の困難さは、ポルトガル語能力だけでなくブラジルの地理・歴史を知らない、文化や生活習慣がわからないなど様々である。ブラジルで生き抜くための文化資本やハビトゥスを日本の学校現場で身につけるとまでは言わなくとも、移動を念頭とする教育は日本の多文化教育を推進するためにも重要な指針とならう。

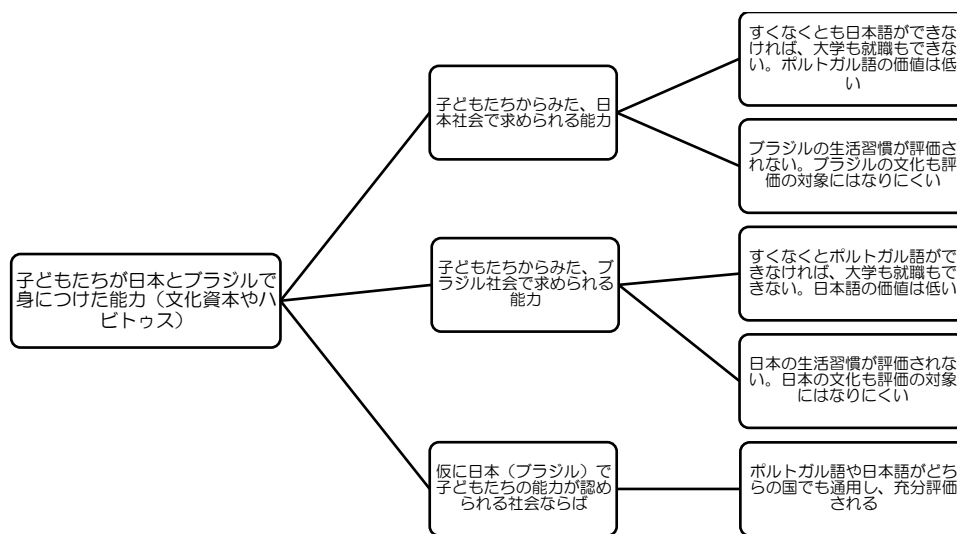


図 8-4 子どもたちの能力がローカル化する要因

もちろん移動の経験を資源としている子どもたちは、おそらく今後も日本とブラジルの架け橋となっていくことであろう。ブラジルの好景気にあわせて進出した日系企業の取次を、日本帰りの子どもたちが担っている。ある日本の大手企業は「日本の仕事の仕方や振る舞いがわかっているから重宝する」という。他方でそれが日系ブラジル人を安く雇用し、駐在員のコストを減らすためであるから、それを新たな経済的搾取として議論する必要もある。

それでも、ブラジルでの様々な再チャレンジを帰国した親や子どもたちは歓迎している。

子どもたちの状況の厳しさはあるにしても、子どもたちの能力は日本と繋がることで維持されることもあれば向上することもあるように思われる。それはブラジルから日本に繋がり続けることでなく、日本からもブラジルとつながろうとすることで一層強固なものになるのではないだろうか。

本研究の課題

最後に本研究の課題を指摘しておきたい。まず、本研究は「日本から帰国した親と子どもたち」のみを扱ってきた。それだけでは、真の意味で日系ブラジル人の全体像に迫れるわけではない。現在もなお日本で生活する人々や、ブラジルから再移動してきた子どもたちにも光を当てるのが、今後は必要になってくると思われる。

また研究対象の多くが、ブラジルでの滞在歴が数年とであり、こうした人々に対して「現在の生活」や「将来の展望」を聞いたとしても明確に返答することは難しかったであろう。さらに、海外調査ということも有りインフォーマントの偏りが拭い切れない。インタビュー対象者の多くをスノーボールサンプリングで集めたことまおり、「話せる人」だけが話した可能性がある。もちろんブラジルの教育省や教育委員会と連携して、インフォーマントを探した事もあったが、「見つけきれなかった」というのが現状である。

併せて、本研究の多くがサンパウロ州やパラナ州の奥地でおこなったインタビューデータを使用している。その理由は、日系ブラジル人の多くが奥地に帰国したことや、日系ブラジル人社会が残存していること、地理的・経済的な状況を把握しやすかったからである。

ところで、最近の調査では、ブラジルの経済成長にあわせて、日本企業がブラジルに進出しており、自動車工場・部品メーカーを中心に、現地工場を設立していることがみえてきた。その際、職員として採用されたのが日本での生活経験を有する日系ブラジル人である。就職バブルとも言える現在のブラジルではあるが、実際は現地採用で給料を安く抑えられている。また最近の日本経済の「復調」を背景に、日本への「再デカセギ」がみられるとも聞いている。こうした事情を踏まえた研究を進めていかなければならないと考えている。

また、人々の「戦略」は必ずしも「意識していること」だけではない。インタビューでは答えられなかったが「実は家でポルトガル語でした」という事例もあっただろう。筆者自身の研究枠組みの甘さから、特に無意図的な「戦略」の多くが、本研究では扱えないままとなっている。この課題は、容易に解決することは出来ないが、意図的に語られた「物語」だとして分析することには、それなりの意味があるとも考えている。いずれにしてもこれらの課題については、長期的な聞きとりや生活史の蓄積によって改善していきたい。

参考文献

- 阿久澤真理,1995,「教室の中の多民族化,多文化化をどう受け止めるか」,藤原孝章編『外国人労働者問題と多文化教育』明石書店.
- Alba, R. D., Waters, M. C. 2011, *The next generation - immigrant youth in a comparative perspective*. New York University Press.
- 天野正治,村田翼夫, 2000,『多文化共生社会の教育』玉川大学出版部.
- アンドウ ゼンパチ,1956,『ブラジル史』,河出書房新社.
- 青柳郁太郎,1941,『ブラジルに於ける 日本人発展史 上』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会.
- 青柳まちこ, 1995, 『「エスニック」とは何か — エスニシティ基本論文選』 新泉社.
- Appadurai, A., 2006, *Fear of Small Numbers: An Essay on the Geography of Anger*, Duke University Press. (=2010. 藤倉達郎訳『グローバリゼーションと暴力—マイノリティの恐怖』世界思想社) .
- 有水博,1995,「戦前日本の対伯外交」日本ブラジル交流史編纂委員会編『日本ブラジル交流史』日本ブラジル修好 100 周年記念事業組織委員会.
- 有末賢,2011,『生活史宣言 — ライフヒストリーの社会学』慶應義塾大学出版会.
- 浅川和幸,2009,「ブラジル人労働者の労働と社会関係」小内透編『講座トランスナショナルな移動と定住第 1 巻—一定住化する在日ブラジル人と地域社会 在日ブラジル人の労働と生活』御茶の水書房.
- Bauman, Z. 1998, *Globalization - the human consequence*. Columbia University Pres. (=2010. 沢田眞治, 中井愛子訳『グローバリゼーション — 人間への影響』法政大学出版局) .
- Basch, L. and Glick Schiller and Szanton-Blanc, 1992, *Towards a Transnational Perspective on Migration: Race Class Ethnicity and Nationalism Reconsidered*, New York Academy of Sciences.
- Basch, L. and Glick Schiller and Szanton-Blanc, 1993. *Nations Unbound - Transnational Projects, Postcolonial Predicaments and Deterritorialized Nation-States*. Routledge.
- Beck, U. 1997, *Was ist Globalisierung? - Irrtümer des Globalismus--Antworten auf Globalisierung*. Suhrkamp Verlag. (= 2005, 木前利秋, 中村健吾訳 『グローバル化の社会学 — グローバリズムの誤謬グローバル化への応答』 国文社) .
- Beck, U. 2002, *Macht und Gegenmacht im globalen Zeitalter : neue weltpolitische Ökonomie*. Suhrkamp Verlag. (= 2008, 島村賢一訳『ナショナリズムの超克 : グローバル時代の世界政治経済学』 NTT 出版) .
- Bourdieu, P. and Wacquant, L. J. D. 1992, *Réponses - pour une anthropologie reflexive An invitation to reflexive sociology*. Le Seuil. (= 2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソ

- シオロジーへの招待 ―ブルデュー,社会学を語る』 藤原書店) .
- ブラジル日本移民 70 年史編纂委員会,1980,『ブラジル日本移民 70 年史』 ブラジル日本文化協会.
- ブラジル日本移民 80 年史編纂委員会,1991,『ブラジル日本移民八十年史』 ブラジル日本文化協会.
- ブラジル日本移民史料館・ブラジル日本移民百周年記念協会百年史編纂委員会,2007,『目でみるブラジル日本移民の百年』 風響社.
- ブラジル日系人実態調査委員会,1964,『ブラジルの日本移民 記述編』 東京大学出版会.
- Brettell, C. and Hollifield, J. F. 2008, *Migration theory - talking across disciplines*. Routledge.
- Castles, S. and Miller, M. J., 2009, *The age of migration - international population movements in the modern world*. The Guilford Press. (= 2011, 関根政美, 関根薫訳『国際移民の時代』 名古屋大学出版会) .
- Certeau, M. 1980, *L'invention du quotidien, tome 1 - Arts de faire*. Gallimard. (= 1987, 山田登世子訳『日常実践のポイエティック』 国文社) .
- Cohen, R. 2006, *Migration and its enemies - global capital, migrant labour and the nation-state*. Ashgate.
- Cohen, R. 1999, *Global diasporas - an introduction*. Routledge. (=2012, 駒井洋訳『グローバル・ディアスポラ』 明石書店) .
- Cohen, R. and Kennedy, P. 2000, *Global sociology*. NYU Pres. (= 2003, 山之内靖, 伊藤茂訳『グローバル・ソシオロジー』 平凡社) .
- 江淵一公編著,1998,『トランスカルチュラリズムの研究』 明石書店.
- 江原裕美,2010,『国際移動と教育：東アジアと欧米諸国の国際移民をめぐる現状と課題』 明石書店.
- 江原武一,1999,『多文化教育の国際比較：エスニシティへの教育の対応』 玉川大学出版部.
- Ellwood, W. 2001, *The no-nonsense guide to globalization*. New Internationalist. (= 2003, 渡辺雅男, 姉齒暁訳『グローバリゼーションとはなにか』 こぶし書房) .
- Gergen, K.J. 1994, *An Invitation to Social Construction*. SAGE. (=2004, 永田素彦・深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践』 ナカニシヤ出版)
- Guarnizo, L. E. 1997. "The Emergence of Transnational Social Formations - Social Transformation and the Mirage of Return Migration among Dominican Transmigrants." *Identities* 4 (2) pp.281-322.
- Guarnizo, L. E. and Smith, P. M. 1998, *Transnationalism from Below* Special Issue Comparative Urban and Community Research, Vol.6.
- Global Commission on International Migration, 2005, *Migration in An Interconnected World: New Directions for Action*, Report of The Global Commission on International

Migration.

- Hage, G. 2005. "A Not Multi-Sited Ethnography of a Not So Imagined Community", *Anthropological Theory*. Vol.5 No.4 pp.463-475.
- 拝野寿美子,2009,『ブラジル人学校の子どもたちー「日本かブラジルか」を超えて』ナカニシヤ出版.
- 拝野寿美子, 2011,「在日ブラジル人の子どもたちの教育とブラジル人学校」三田三千代編『グローバル化の中で生きるとはー日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』上智大学出版, pp.141-183.
- 拝野寿美子, 2013,「ブラジル人学校の生き残り戦略ーリーマンショックと東日本大震災を経てー」『神奈川大学心理・教育研究論集』 Vol. 33, pp. 39-47.
- 半田知雄,1969,『移民の生活の歴史：ブラジル日系人の歩んだ道』サンパウロ人文科学研究所.
- ハヤシザキカズヒコ,山ノ内裕子,山本晃輔, 2013,「トランスマイグランドとしての日系ブラジル人ーブラジルに戻った人びとの教育戦略に着目して」志水宏吉,山本ベバリーアン,鍛冶致,ハヤシザキカズヒコ編, 2013,『「往還する人々」の教育戦略ーグローバル社会を生きる家族と公教育の課題』明石書店, pp.206-267.
- ハタノ, リリアン・テルミ, 2005,「在日ブラジル学校の現状からみる課題」世界人権問題研究センター『研究紀要』13号, pp.117-149.
- ハタノ, リリアン・テルミ, 2008,「外国人学校・民族学校:社会正義を考えるー日本におけるブラジル学校の事例を通して」,立命館言語文化研究, Vol. 19, No. 4.
- 服部あさこ,2009,『マイノリティ女性のアイデンティティ戦略ー「母親性」の役割』専修大学出版局.
- Held, D., 2005, *Debating Globalization*. Polity. (=2007, 猪口孝訳『論争グローバルゼーションー新自由主義対社会民主主義』岩波書店).
- Held, D. and McGrew, A. G. and Goldblatt, D. Perraton, J. 1999, *Global Transformations Global Transformations Politics, Economics, and Culture*. tanford University Pres. (=2006, 古城利明, 白井久和, 滝田賢治, 星野智訳『グローバル・トランスフォーメーションズ：政治・経済・文化』中央大学出版部).
- 樋口直人,2001,「ブラジル・パラナ州における日系人労働者斡旋組織」『徳島大学社会科学研究』(14)：69-90.
- 樋口直人, 2002,「国際移民におけるメゾレベルの位置づけ:マクロ・ミクロモデルをこえて」『社会学評論』Vol. 52, No. 4, pp. 558-571.
- 樋口直人,2005a,「デカセギと移民理論」梶田孝道・丹野清人・樋口直人著『顔の見えない定住化ー日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.
- 樋口直人,2005b,「ブラジルから日本への移住システム」梶田孝道・丹野清人・樋口直人著『顔の見えない定住化ー日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学

出版会.

樋口直人, 2006, 「国際社会学の第2ラウンドにむけて」『社会学評論』Vol. 57, No. 3, pp. 634-648.

樋口直人, 2010, 「経済危機と在日ブラジル人—なにが大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622, pp.50-66.

広崎純子, 2007, 「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択—支援活動の取り組みを通じての変容過程」『教育社会学研究』80, pp.227-245.

広田康生, 2003, 『エスニシティと都市』 有信堂高文社.

広田康生, 町村敬志, 田嶋淳子, 渡戸一郎, 2006, 『先端都市社会学の地平』 ハーベスト社.

藤原法子, 2008, 『トランスローカル・コミュニティ—越境する子ども・家族・女性／エスニック・スクール』 ハーベスト社.

福岡安則, 金明秀, 1997, 『在日韓国人青年の生活と意識』 東京大学出版会.

伊ヶ崎暁生, 1972, 「在日朝鮮人の教育弾圧と日本の教育」『国民の教育権と教育政策』 青木書店, pp.210-223.

尹健次, 1987, 「教育の危機と自民族中心主義—教育におけるアジア・第三世界の剥奪」『異質との共存—戦後日本の教育・指導・民族論』 岩波書店, pp.91-121.

尹健次, 1990, 「戦後教育における『民族』の問題—『国民教育論』の展開と関連して」『孤絶の歴史意識—日本国家と日本人』 岩波書店, pp.51-86.

乾美紀, 2007, 「インドシナ難民定住者の高校へのアクセスに関する研究—ニューカマー進学・学習支援の日米比較調査より」人間環境学研究 5(1)pp.39-44.

入江寅次, 1981, 『邦人海外発展史 上下巻』 原書房.

石井由香, 1998, 『エスニック関係と人の国際移動—現代マレーシアの華人の選択』 国際書院.

石原邦雄, 2003, 『現代中国家族の変容と適応戦略』 ナカニシヤ出版.

イシカワ, エウニセ・アケミ, 2005, 「家族は子どもの教育にどうかかわるか—出稼ぎ型ライフスタイルと親の悩み」 宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題』 東京大学出版会, pp.77-96.

岩本廣美, 2006, 「日本におけるブラジル人学校の展開と児童・生徒の就学状況：群馬県邑楽郡大泉町の事例を中心に」『新地理—日本地理教育学会会誌』Vol. 54, No. 3, pp. 33-49.

若槻泰雄, 鈴木讓二著, 1975, 『海外移住政策史論』 福村書店.

伊豫谷登士翁, 1992, 『変貌する世界都市—都市と人のグローバリゼーション』 有斐閣.

伊豫谷登士翁, 2012, 『移動という経験—日本における「移民」研究の課題』 有信堂高文社.

鍛冶致, 2000, 「中国帰国生徒と高校進学」 蘭信三編『中国帰国者の生活世界』 行路社.

鍛冶致, 2007, 「中国出身生徒の進路規定要因—大阪の中国帰国生徒を中心に」『教育社会学研究』 80, pp.331-349.

- 鍛冶致,大曲由起子,高谷幸,2013,「1995年と2000年の国勢調査に見る外国人の教育:外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『大阪成蹊大学マネジメント学部紀要』 Vol.10, No.1, pp.159-183.
- 梶田孝道,1998,「凝縮された移住サイクルー日系人にみる『デカセギ』の変容」『比較文明』 (14) : 51-65.
- 梶田孝道,2000,『国際化とアイデンティティ』 ミネルヴァ書房.
- 梶田孝道, 宮島喬,2001,『国際化する日本社会』 東京大学出版会.
- 梶田孝道,2004,『新・国際社会学』 名古屋大学出版会.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人,2004,『顔の见えない定住化:日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』 名古屋大学出版会.
- 梶田正巳・松本一子・加賀沢泰明 編著,1997,『外国人児童・生徒と共に学ぶ学校づくり』 ナカニシヤ出版.
- 韓東賢,2006,『チマ・チョゴリ制服の民族誌:その誕生と朝鮮学校の女性たち』 双風舎.
- 川口直巳・丸井合, 2013,「在日ブラジル人生徒とその保護者の将来計画とはーブラジル人学校での調査からー」『愛知教育大学研究報告. 人文・社会科学編』 Vol. 62, pp. 27-31.
- 香山六郎編,1949,『移民四十年史』 グラフキカ・ブラジレイラ社.
- 萱野稔人,2004,『国家とはなにか』 以文社.
- Khagram, S. and Levitt, P. 2008, *The transnational studies reader - intersections and innovations*. Routledge.
- 木村雅昭,2012,『「グローバリズム」の歴史社会学ーフラット化しない世界』 ミネルヴァ書房.
- 金徳龍,2004,『朝鮮学校の戦後史:1945-1972』 社会評論社.
- 金泰泳,1999,『アイデンティティ・ポリティクスを超えてー在日朝鮮人のエスニシティ』 世界思想社.
- 金兌恩,2006,「公立学校における在日韓国・朝鮮人教育の位置に関する社会学的考察:大阪と京都における「民族学級」の事例から」『京都社会学年報』.
- 金侖貞,2007,『多文化共生教育とアイデンティティ』 明石書店.
- 裘曉蘭, 2012『多文化社会と華僑・華人教育ー多文化教育に向けての再構築と課題』 青山ライフ出版.
- 岸田由美, 1997,「異文化共生教育としての在日韓国・朝鮮人教育ー民族講師と日本人教師との関係を中心にして」 『異文化間教育』 第11号.
- 岸田由美,2003,「在日韓国・朝鮮人教育にみる「公」の境界とその移動」『教育学研究』 70 (3) ,pp.58-69.
- 岸政彦,2012,『同化と他者化ー戦後沖縄の本土就職者たち』 ナカニシヤ出版.
- Kivisto, P. and Faist, T. 2010, *Beyond a border - the causes and consequences of contemporary immigration*. Pine Forge Press.

- Keeley, B. 2009, *International migration - the human face of globalization*. OECD. (= 2010, 濱田久美子訳『よくわかる国際移民 グローバル化の人間の側面』,明石書店) .
- 小林茂子,2009,『「国民国家」日本と移民の軌跡 ー沖縄・フィリピン移民教育史』学文社.
- 小井戸彰宏, 2005, 「グローバル化と越境的社会空間の編成：移民研究におけるトランスナショナル視角の諸問題」『社会学評論』Vol. 56, No. 2, pp. 381-398.
- 児島明,2001a,「ニューカマー受け入れ校における学校文化「境界枠」の変容：公立中学校日本語教師のストラテジーに注目して」教育社会学研究 69, pp.65-83.
- 児島明,2001b,「差異をめぐる教師のストラテジーと学校文化ーニューカマー受け入れ校」『異文化間教育』,第 16 号.
- 児島明,2005,『ニューカマーの子どもと学校文化:日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房.
- 児島明,2008,「在日ブラジル人の若者の進路選択過程--学校からの離脱/就労への水路づけ」『和光大学現代人間学部紀要』No.1,pp.55-71.
- 児島明,2010a,「ニューカマー青年の移行に関する研究ー在日ブラジル人青年の「自立」をめぐる物語を手がかりに」『地域学論集鳥取大学地域学部紀要』Vol.6,pp.283-296.
- 児島明, 2010b, 「国境を越える移動と進路形成ー滞日経験をもつブラジル人青年の生活史分析からー」『地域学論集 鳥取大学地域学部紀要』 Vol. 7, No. 2, pp. 253-282.
- 児島明, 2011,「日系ブラジル人青年のデカセギ経験」『地域学論集 鳥取大学地域学部紀要』Vol. 8, No. 1, pp. 13-38.
- 小島祥美, 2010, 「多文化共生のとびら 経済不況で苦境にあるブラジル学校の実態ー「ブラジル人学校等の準学校法人設立・各種学校認可の課題」研究から」『自治体国際化フォーラム』 Vol. 248, pp. 16-17.
- 小島祥美,中村安秀,横尾明親他,2003,『外国人の子どもの教育環境に関する実態調査ー岐阜県可児市をパイロット地域とした行政・民間団体・研究者による協働研究』,平成 15 年厚生労働科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業.
- 駒井洋,1993,『移民社会日本の構想』 国際書院.
- 駒井洋編,1995 『定住化する外国人』明石書店.
- 駒井洋,1998,『日本の外国人移民』 明石書店.
- 駒井洋,2003,『移民をめぐる自治体の政策と社会運動』 明石書店.
- 駒井洋,2005,『グローバル化時代の日本型多文化共生社会』 明石書店.
- 近藤敦,2010,『多文化共生政策へのアプローチ』 明石書店.
- 小島勝 1997「海外・帰国子女教育の展開」江淵一公編著『異文化間教育研究入門』玉川大学出版
- 小島勝 2008「在任期間の活動と本学会の特長・課題」『異文化間教育学会』第 27 号 pp.32-61.
- 熊崎さとみ, 天野弥生, 2007, 「ブラジルへ帰った子ども達ー日本での滞在・就学経験が帰国後に及ぼす影響と課題」『信州大学人文社会科学研究』No. 1, pp. 37-52.

- 倉石一郎,2001,「マイノリティ教育における<包摂>原理の再検討：1970年前後の大阪市における在日朝鮮人教育をめぐる「言説の交代劇」から」教育社会学研究 69,pp. 43-63.
- 倉石一郎, 2009,『包摂と排除の教育学—戦後日本社会とマイノリティへの視座』生活書院.
- Levitt, P. 2001, *The Transnational Villagers*. University of California Press.
- 馬淵仁編著,2011,『「多文化共生」は可能か—教育における挑戦』勁草書房.
- 前山隆,1982,『移民の日本回帰運動』日本放送出版協会.
- 前山隆,1996『エスニシティとブラジル日系人—文化人類学的研究』御茶の水書房.
- 前山隆,1996,『異邦に「日本」を祀る—ブラジル日系人の宗教とエスニシティ』御茶の水書房.
- 前山隆,2000,『異文化接触とアイデンティティ—ブラジル社会と日系人』御茶の水書房.
- 馬越徹,2000,「日本—社会の多文化化と『永住外国人』子女教育」江原武一編著『多文化教育の国際比較』玉川大学出版部, pp.209-231.
- 牧野篤, 2005,「<外部>の終焉と新たな自我の構想：グローバリゼーションがもたらす教育学研究の課題」『教育学研究』Vol. 72, No. 4, pp. 505-517.
- 丸山浩明,2009,『ブラジル日本移民 一百年の軌跡』明石書店.
- 三田千代子,1995a,「近代日本の海外移民政策」日本ブラジル交流史編纂委員会編 1995『日本ブラジル交流史』日本ブラジル修好 100 周年記念事業組織委員会.
- 三田千代子,1995b,「ブラジルの外国移民政策と日本移民」日本ブラジル交流史編纂委員会編 1995『日本ブラジル交流史』日本ブラジル修好 100 周年記念事業組織委員会.
- 三田千代子,2010,『グローバル化の中で生きるとは：日系ブラジル人のトランスナショナルな暮らし』上智大学出版.
- 光長功人・田淵五十生, 2002,「ブラジル人の子どもたちは,どのようにアイデンティティを変容させるのか? —帰国後の再適応を観察して」『奈良教育大学紀要. 人文・社会科学』Vol. 51, No. 1, pp. 1-16.
- 三浦綾希子,2012,「フィリピン系エスニック教会の教育的役割—世代によるニーズの差異に注目して」『教育社会学研究』90,pp.191-212.
- 宮島喬,1993,『文化的再生産の社会学 — ブルデュー理論からの展開』藤原書店.
- 宮島喬,2003,『共に生きられる日本へ — 外国人施策とその課題』有斐閣.
- 宮島喬・太田晴雄,2004,『外国人の子どもと日本の教育 —不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会.
- 宮島喬 2008,『移民の社会的統合と排除 —問われるフランス的平等』東京大学出版会.
- 宮島喬・杉原名穂子・本田量久,2011,『公正な社会とは —教育,ジェンダー,エスニシティの視点から』人文書院.
- 宮島喬・舩橋晴俊・友枝敏雄・遠藤薫,2012,『グローバリゼーションと社会学—モダニティ・グローバリティ・社会的公正』ミネルヴァ書房.
- 宮尾進,2001,『ボーダレスになる日系人：ブラジルの日系社会論集』サンパウロ人文科

学研究所.

水野一,1995,「戦前期(1894-1941)」日本ブラジル交流史編纂委員会編『日本ブラジル交流史』日本ブラジル修好100周年記念事業組織委員会.

森廣正,1999,『国際労働力移動のグローバル化:外国人定住と政策課題』法政大学出版局.

森幸一,1993,「日本人本邦就労者の事例研究」サンパウロ人文科学研究所編『ブラジルからの日本人本邦就労の実態と日本社会へ及ぼす影響に関する研究』.

森幸一,1995,「ブラジルからの日系人出稼ぎの特徴と推移」渡辺雅子編『出稼ぎ日系ブラジル人(上)論文篇・就労と生活』明石書店.

森幸一,2011,「ブラジル日本移民・日系「研究」の回顧と展望—特に人文・社会科学分野を中心に—」『コンフリクトの人文科学』第3号,pp.203-266.

森本豊富, Nakanishi Don Toshiaki,2006,『越境する民と教育—異郷に育ち地球で学ぶ』あかのみあ書齋院.

森本豊富, 根川幸男,2012,『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向けて』明石書店.

森田京子,2007,『子どもたちのアイデンティティ・ポリティック—ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー』新曜社.

永田稠,1953,『ブラジルに於ける日本人発展史 下』ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会.

中島透・根川幸男,2005,「ブラジルにおける在日経験帰国児童生徒(CAEJ)の日本語環境とモチベーション—ビリチーバ・ミリン市での事例を中心に—」『小出記念日本語教育研究会論文集』第13集 pp.7-20.

中島智子,1994,「在日韓国・朝鮮人のエスニシティと教育—「文化的志向性」と「社会的志向性」の視点から—」『教育学研究』61(3),pp.233-241.

中島智子,1998,『多文化教育—多様性のための教育学』明石書店.

中島智子,2004,「公教育における外国人学校の位置づけに関する試論—私立学校であり民族学校であるということ—」プール学院大学『プール学院大学研究紀要』44号, pp.117-132.

中島葉子,2007,「ニューカマー教育支援のパラドックス—関係の非対称性に着目した事例研究—」『教育社会学研究』80, pp.247-267.

中村浩子,1999,「公教育離脱の選択に見る二つの私事化—インターナショナルスクール選択家庭の事例から—」『教育社会学研究』65, pp.5-23.

中村 清,2007,『国家を越える公教育—世界市民教育の可能性』東洋館出版社.

中野卓,1980,『流浪・開墾・神々』御茶の水書房.

中野卓,1983,『日系女性立川サエの生活史—ハワイの私・日本での私,1889~1981—』御茶の水書房.

中野秀一郎・今津孝次郎,1992,『エスニシティの社会学:日本社会の民族的構成』世界

- 思想社.
- 中野卓,2002,『生活史の研究』 東信堂.
- 中隅哲郎,1991,「戦後移住者時代」日本移民 80 年史編纂委員会『ブラジル日本移民八十年史』トッパン・プレス.
- 日本ブラジル交流史編纂委員会編,1995,『日本ブラジル交流史』日本ブラジル修好 100 周年記念事業組織委員会.
- 日本移民五十年祭委員会,1958,『日本移民五十周年記念かさど丸』日本移民五十周年委員会発行.
- 二宮正人,1995,「日伯修好通商条約締結の経緯」日本ブラジル交流史編纂委員会編 1995『日本ブラジル交流史』日本ブラジル修好 100 周年記念事業組織委員会.
- 野口祐二, 2001, 「臨床のナラティブ」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房.
- 野入直美,2009,「「アメラジアン」という視点」『理論と動態』社会理論・動態研究所編(2)pp.18～39.
- 額賀美紗,2003,「多文化教育における〈公正な教育〉再考ー日米教育実践のエスノグラフィー」『教育社会学研究』73,pp. 65-83.
- 額賀美紗子,2012,『越境する日本人家族と教育ー「グローバル型能力」育成の葛藤』勁草書房.
- Ogbu, J. U. 1978, *Minority Education and Caste - The American System in Cross-Cultural Perspective*. Academic Press.
- Ogbu, J. U. and Simons, H. D. 1999, “Voluntary and Involuntary Minorities - A Cultural-Ecological Theory of School Performance with Some Implications for Education Minority Education and Caste - The American System in Cross-Cultural Perspective”, *Anthropology and Education*, Vol.29, No.2 pp.155-188.
- 大宮知信,1996,『デカセギー逆流する日系ブラジル人』草思社.
- 太田晴雄,1996,「日本語教育と母語教育」宮島喬・梶田孝道編著『外国人労働者から市民へ』有斐閣.
- 太田晴雄,1999,『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- 小内透編,2003,『在日ブラジル人の教育と保育ー群馬県太田市・大泉地区を事例として』明石書店.
- 小内透,2004,『教育と不平等の社会理論：再生産論をこえて』東信堂.
- 小内透,2008a,『ブラジルにおけるデカセギの影響』御茶の水書房.
- 小内透,2008b,『在日ブラジル人の労働と生活』御茶の水書房.
- 小内透,2010,『在日ブラジル人の教育と保育の変容』御茶の水書房.
- 小内透・酒井恵真編著,2001,『日系ブラジル人の定住化と地域社会ー群馬県太田・大泉地区を事例として』御茶の水書房.
- 太田晴雄,1999,『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.

- Portes, A. and Bach, R. L. 1985. *Latin Journey - Cuban and Mexican Immigrants in the United States*. University of California Press.
- Portes, A. and Zhou, M. 1993. "The New Second Generation- Segmented Assimilation and its Variants Among Post-1965 Immigrant Youth," *The Annals of the American Academy of Political and Social Sciences*. (530), pp.74-96.
- Portes, A. 1997. *Globalization from Below - The Rise of Transnational Communities*. Transnational Communities Programme Working Paper Series WPTC-98-01 Princeton University.
- Portes, A. and Rumbaut, R. G. 2001. *Legacies - the story of the immigrant second generation*. University of California Press. (=2014 村井忠政訳『現代アメリカ移民第二世代の研究—移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』).
- Pries, L. Eds, 2001, *New Transnational Social Spaces- International Migration and Transnational Companies in the Early Twenty-First Century*. Routledge.
- 労働省,1990,『労働経済の分析』.
- 斉藤日出治,2009,『グローバル化を超える市民社会 — 社会的個人とヘゲモニー』 新泉社.
- 斎藤ひろみ・佐藤郡衛,2008,『文化間移動をする子どもたちの学び— 教育コミュニティの創造に向けて』 ひつじ書房.
- 齋藤宏志,1960,『ブラジルの日本人』 丸善.
- 坂中英徳,2004,『入管戦記 「在日」 差別,「日系人」 問題,外国人犯罪と,日本の近未来』 講談社.
- 佐久間孝正, 1992, 『イギリスの多文化・多民族教育 —アジア系外国人労働者の生活・文化・宗教』 国土社.
- 佐久間孝正, 2006, 『外国人の子どもの不就学—異文化に開かれた教育とは』 勁草書房.
- 佐久間孝正,2008,「国際人口移動と教育—ニューカマーとの関連で」『教育社会学研究』 82,pp.125-140.
- 佐久間孝正, 2010, 「人の移動にみる日本のグローバリゼーションの特徴と多文化教育の可能性」『応用社会学研究』 Vol. 52, pp. 145-153
- サンパウロ人文科学研究所,1993,『ブラジルからの日系人本邦就労の実態と日系社会に及ぼす影響に関する研究』.
- サンパウロ人文科学研究所・半田 知雄,1995, 『ブラジル日本移民・日系社会史年表』 サンパウロ人文科学研究所.
- サンパウロ人文科学研究所,1996,『ブラジル日本移民・日系社会史年表—半田知雄編著改定増補版』 トッパン・プレス印刷出版会.
- サンパウロ人文科学研究所,2011, 『ブラジル日本移民・日系社会史年表：1996年～2009年』 サンパウロ人文科学研究所.
- 佐藤常蔵,1985,『ブラジル全史』 トッパン・プレス印刷出版会.

- 関口知子,2002,『在日日系ブラジル人の子どもたち —異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』 明石書店.
- 関口知子, 2007, 「在日日系ブラジル家族と第二世代のアイデンティティ形成過程—CCK/TCK の視点から」『家族社会学研究』 Vol. 18, No. 2, pp. 66-80.
- 芝野淳一,2013,「『良き親』であり『良き日本人』であること—中華学校を選択した保護者のナショナルな道徳的規範をめぐるコンフリクト」『コンフリクトの人文学』 5,pp.39-68.
- 渋谷真樹 ,2014,「国際結婚」女性の子育て—移動と言語を中心に—『異文化間教育』 第39号.
- 渋谷真樹 ,2013,「ルーツからルートへ—ニューカマーの子どもたちの今—」『異文化間教育』 第37号.
- 敷田佳子,2013,「国際結婚家庭の教育に関する現状と課題:結婚移住女性に焦点をあてて」『移民政策研究』 5,pp.113-129.
- 志水 宏吉,2000,「裏側のニッポン—日系南米人の出稼ぎと学校教育—」『教育社会学研究』 66, pp.21-38.
- 志水宏吉, 清水睦美, 2001, 『ニューカマーと教育：学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』 明石書店.
- 志水宏吉,2003,「『エイリアン』との遭遇—学校で何が起きているか」駒井洋編著『多文化社会への道』明石書店.
- 志水宏吉編著,2008,『高校を生きるニューカマー—大阪府立高校にみる教育支援』明石書店.
- 志水宏吉編著,2009,『エスニシティと教育』日本図書センター.
- 志水宏吉編,2013,『往還する人々の教育』明石書店,pp.206-267.
- 志水宏吉・中島智子・鍛冶到編著,2014,『日本の外国人学校』明石書店.
- 清水睦美,2004,「学校現場における教育社会学者の臨床的役割の可能性を探る:ニューカマーを支援する学校文化変革の試みを手がかりとして(<特集>教育臨床の社会学)」『教育社会学研究』 74,pp.111-126.
- 清水睦美,2005,『ニューカマーの子どもたち：学校と家族の間（はざま）の日常世界』 勁草書房.
- 清水睦美,2006,「ニューカマーの子どもの青年期:日本の学校と職場における困難さのいくつか(<特集>青年の進路選択と教育学の課題)」教育學研究 73(4),pp.457-469.
- 清水睦美・児島明,2005,『外国人生徒のためのカリキュラム：学校文化の変革の可能性を探る』 嵯峨野書院.
- 趙衛国,2010,『中国系ニューカマー高校生の異文化適応:文化的アイデンティティ形成との関連から』御茶の水書房.
- 田渕六郎, 1999, 「「家族戦略」研究の可能性 —概念上の問題を中心に」『人文学報. 社会福祉学』 Vol. 15, pp. 87-116.
- 竹下修子, 2007, 「ムスリム家族における国境を越えた家族形成—教育戦略に対する社会関

- 係資本の影響を中心にして」『家族社会学研究』 Vol. 18, No. 2, pp. 82-90.
- 田中宏, 1991, 『在日外国人』 岩波書店.
- 谷富夫, 2001, 『民族関係における結合と分離 —社会的メカニズムを解明する』 ミネルヴァ書房.
- 丹野清人, 2007, 『越境する雇用システムと外国人労働者』 東京大学出版会.
- 丹野清人, 2009, 「外国人労働者問題の根源はどこにあるのか」『日本労働研究雑誌』 Vol. 51, No. 6, pp. 27-34.
- 丹野清人, 2012, 『国籍の境界を考える —日本人, 日系人, 在日外国人を隔てる法と社会の壁』 吉田書店.
- 戸井田克己, 2004, 『日本の内なる国際化：日系ニューカマーとわたしたち』 古今書院.
- Tomlinson, John. 1999, *Globalization and culture*. University of Chicago Press (=2000, 片岡信訳『グローバリゼーション：文化帝国主義を超えて』 青土社).
- 恒吉僚子, 1996, 「多文化共存時代の学校文化」堀尾輝久『学校文化という磁場』 pp.210-240.
- 都築くるみ, 1995, 「地方産業都市とエスニシティ—愛知県豊田市 H 団地における日系ブラジル人と地域社会」松本康編『増殖するネットワーク』 勁草書房.
- Vertovec, S. 2009, *Transnationalism*. Routledge. (=2015, 水上徹男, 細萱伸子, 本田量久訳『トランスナショナリズム』 日本評論社)
- Vertovec, S and Wessendorf, S. 2010, *The multiculturalism backlash - European discourses, policies and practices*, Routledge.
- 渡辺雅子, 1994, 『共同研究：出稼ぎ日系ブラジル人・論文編』 明石書店.
- Wallerstein, I. 1983, *Historical Capitalism*. Verso. (=1997, 川北稔訳『史的システムとしての資本主義』 岩波書店) .
- Wallmam, S. 1984, *Eight London Households*. Law Book Co of Australasia. (=1996, 福井正子訳『家庭の三つの資源—時間・情報・アイデンティティ ロンドン下町の8つの家庭』 河出書房新社) .
- 渡戸一郎・井沢泰樹, 2009, 『多民族化社会・日本：「多文化共生」の社会的リアリティを問い直す』 明石書店.
- 渡戸一郎, 広田康生・田嶋 淳子, 2002, 『都市的世界/コミュニティ/エスニシティ —ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』 明石書店.
- 渡戸一郎・川村千鶴子, 2001, 『多文化教育を拓く：マルチカルチュラルな日本の現実のなかで』 明石書店.
- 藪田直子, 2013, 「在日外国人教育の課題と可能性: 「本名を呼び名のる実践」の応用をめぐって」『教育社会学研究』 92, pp.197-218.
- やまだようこ, 2000, 「人生を物語る意味」やまだようこ編『人生を物語る—生成のライフヒストリー』 ミネルヴァ書房 pp. 1-38.
- 山ノ内裕子, 1998, 「日系ブラジル人」とは誰か—在日「日系ブラジル人」をめぐる「戦略」

- と「戦術」江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』明石書店 pp.253-267.
- 山ノ内裕子, 2012, 「国境を越える在日ブラジル人の教育-ブラジル人保護者とブラジル人学校経営者の『戦術』に着目して」森本豊富・根川幸男共編『トランスナショナルな『日系人』の教育・言語・文化-過去から未来に向けて』明石書店, pp.158-169.
- 山本かほり, 2008, 「第二世代の教育達成をめぐる問題-ブラジル人の若者たちの事例から」『愛知県立大学文学部論集. 社会福祉学科編』Vol. 57, pp. 51-73.
- 山本薫子, 2002, 「<帰国/定住>ではなく, 『居場所』を求めて」好井裕明・山田富秋編『実践のフィールドワーク』せりか書房 pp.168-185.
- 山本晃輔, 2014, 「帰国した日系ブラジル人の子どもたちの進路選択-移動の物語に注目して」『教育社会学研究』94.
- 山本晃輔, 山ノ内裕子, 2015a, 「経済危機を乗り越えて」志水宏吉他編『日本の外国人学校-トランスナショナルリティをめぐる教育政策の課題』明石書店, pp.220-225,
- 山本晃輔, 2015b, 「ブラジル人のための学校をつくる」志水宏吉他編『日本の外国人学校-トランスナショナルリティをめぐる教育政策の課題』明石書店, pp.242-256,
- 柳田利夫編, 2002, 『ラテンアメリカの日系人: 国家とエスニシティ』慶應義塾大学出版
- 米山裕・河原典史, 2006, 『日系人の経験と国際移動: 在外日本人・移民の近現代史』人文書院.